明治四十二年一月十五日發行（毎月一回一日發行）

博文館發行



増刊 こゝろの秘密

女學世界

第九巻 第二號


デパートメントストーアー
三越呉服店
和洋巻莨シガー一切
鞄
折鞄
靴
旅行用化粧品入一式
舶来文房具
時計
指輪
寶石類
ブローチ
其他
諸大家ノ繪画陶器漆器
銅器七寶 其他新式ノ日
用食器類一式
呉服
洋服
太物ネル
セル等此
新柄品
香水香油
石鹸白粉
歯磨口紅
傘
履物

女學世界

定期増刊　第九巻第貳號

ふところの秘密目次


ゼム笑し
The Gem
完全無比
懐中良藥
最善最良
口中香錠
笑ふ門にはゼム來たる!!!
○大に祝へ=樂しき新年!!
○大に遊べ=歡しき正月!!
○大に笑へ=嬉しき初春!!
東京市日本橋區馬喰町二丁目
本舗 山崎榮三郎
大阪市東區高麗橋一丁目
支舗 山崎兄弟商會
全國至る處の賣藥化粧品店にあり
主効
◎消化を能くし◎氣分を爽にし◎音聲を美くす○食傷○宿醉○頭痛○眩暈○水傷○喉喝○舟車醉○時候傷
定價
七十五粒入十錢
百六十粒入廿錢
四百卅粒入五十錢
九百粒入一圓
新意匠容器ゼム入廿錢
○目ありて此れを見ざる人ありや?
○鼻ありてゼムの芳香を知らざる人?
○口ありてゼムを味はざる人ありや?
太郎さん!
次郎さん!
花子さん!
此の眼と鼻と口と眉毛とを切り取りて次郎さんは目かくしをして此の大きなゼムの顔に目鼻をおいて御覧なさい
厚紙を裏に貼りて
(切り取り用ゆべし)

銀世界



田中製版所製

恭賀新年

本品は
全國有數の同種類中其の質最も佳良にして又實用に適せるが故に世人の賛辭と需用益々多大なり

本品を以て
赤毛を染むる時は優に半ケ年以上を保つと云ふ奏効禮狀日々到着せり

使用法は
手輕にして實用と安全とを兼備す



女(甲の一)

女(甲の二)

世界無比

最新發明藥

あざ

入墨は廿日 ほくろ そばかす、なまず いぼは拾日目に必ず美麗に除去すること

保險附 新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も**痕跡**を穿さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の**美質**を完うせよ來館者へは山の如き全治者の**感謝狀**及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に**世界唯一**の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なます、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割增し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす）着金即刻小包郵送す

白色特效

ペーアス石鹸

此石鹸は**世界第一等**の眞品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼する特効の一二を揭げん**皮膚を潤澤軟密にし色を白く**し、**粗糙質**を治するは此石鹸獨特の靈効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する內國製の粗惡品と玉瓦混同視すること勿れ（昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ品切中の處今回拾萬個着荷せり）

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

毛の必ず生る確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑大瓶一個を用ゆれば忽ち毛髮着着と發生する特効あること確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉瓦混同視すること勿れ

藥價特別製大瓶貳圓卅錢▲中瓶壹圓廿錢

奏效確證 美容新劑

やせる藥

本劑（藥名ヨードチリン錠ノ）は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり。顏赤くほてり。のぼせ症。卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脫し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

一劑分價送料共參圓廿錢貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢着金即刻送藥す

聲惡しき人又は聲出ぬ方の新福音

美き聲の出る新藥

▲藥名……ウエーヌス

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓拾五錢

▲聲美くしくして…淑女は窈窕たり▲聲麗しくして…男子は威嚴あり▲聲は人格を高尙ならしむる要素なり…謠曲家、演說家、音樂家、藝人は聲音即ち其人の生命なり。發聲藥は古來世に甚だ多し然れども其確効あるものは恐らくは疑はし。獨り此「ウエーヌス」の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり。「ウエーヌス」は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑なり。特別製分を服すれば直に充分なる美聲を發すること確証す。

（ウエーヌス有効感謝狀）……（近着の分）

一筆示し上候先達て私事貴地に於て興行中聲なきため候節あなた樣より結構なる御藥申受け候間其御藥前夜に用ひましたら其翌夜八分通り直り尙又三日目の夜はすみやかに元の通りに全快致し誠に不思議におもひ其まゝ大阪へ歸りました折柄他の太夫竹本廣鶴竹本房七樣兩人共聲ないため候に付直に其御藥二回分づゝあげましたら私同樣に直りました故此御藥は世にまれな御藥にて太夫一同不思議におもひ右兩人より貴所樣へよろしく御禮を申のべくれと私方へ依賴を受ておりまする此御藥に付て私共迄誠に功名致しました誠に〳〵喜び居り候故に今回愚筆を以て御禮申上候 明治四十年七月十日 大阪女義太夫竹本隅照㊞

其他如斯感謝狀は積んで如山も皆大同小異に付略して爰に揭載せず

以上五種 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

（甲の五）

痴遊 伊藤仁太郎君講演

明治元勲 井上侯實傳

目次

⊙緒言⊙御殿山焼打⊙洋行の内命⊙横濱を出帆⊙渡航の苦心⊙倫敦⊙歸朝⊙和議の不調⊙犬武士⊙窮餘の和議⊙意外の遭難⊙高杉の再起⊙兒玉の懺悔

全一册

洋裝四六判
紙數二五二頁
正價參拾五錢
郵税六錢

小山内薫君著

演劇新潮

俳優は讀め！興行主は讀め！好劇家は讀め！

この書は學問の書に非ず、議論の書に非ず、研究の書に非ず。舞臺の組織より俳優の技藝に及び、俳優の技藝より脚本の解剖に及び演劇一切の實際的新思潮を平明なる文章もて叙せる趣味の書なり。

年若き著者が鬱勃たる演劇革新の心願は十數葉の美しき挿畫と共にこの書の紙間に收めらる。

全一册

洋裝四六判總振假名
紙數三百九十頁
正價金五拾五錢
郵税六錢

東京 博文館 本町

女(甲の六)

新輸入 肉體美容料 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女の間に最新流行の發明藥にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

飲んで色白くなる特効新藥 サーサパリラ

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑强なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒、瘡毒リウマチス等の病毒及び男女體内の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の內服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗ろ迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

價壹劑貳圓七拾錢參劑七圓五拾錢五劑拾貳圓也

●らい病根治新劑

藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製拾圓拾錢着金即刻小包密封送る

癩病患者の新福音＝最新發見藥＝（レプロイス）

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多研究を重ね數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始めて完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚說に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絕し生涯永久の榮華を完ふせよ、輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

血塊流下 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑及び以上各藥の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭 根治確證新發見藥

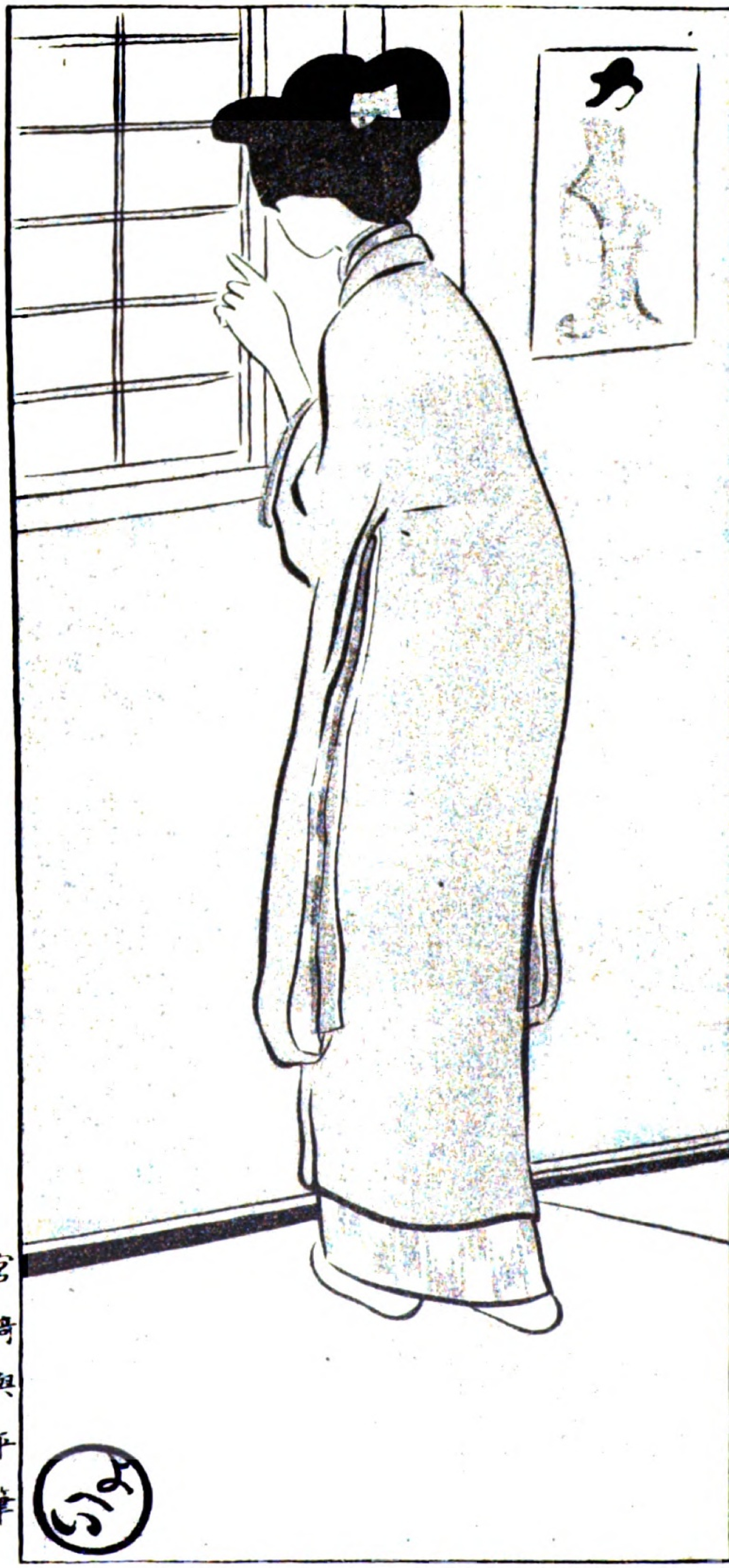
從來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者は速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脫せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば**誓って根治**することを確證す殊に本劑にて一旦全治せば決して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる類藥と異なる處の本劑一種獨特の靈効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌せる病根を斷絕せよ實に不思議の新發見奇劑なり▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲(藥價)輕症根治分藥價送料共六拾錢▲重症根治分同上壹圓貳拾錢▲頑固慢性症根治分同上貳圓參拾錢▲切手代用は必ず二割增しの事▲着金即刻送藥す

以上五藥 專賣元 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**

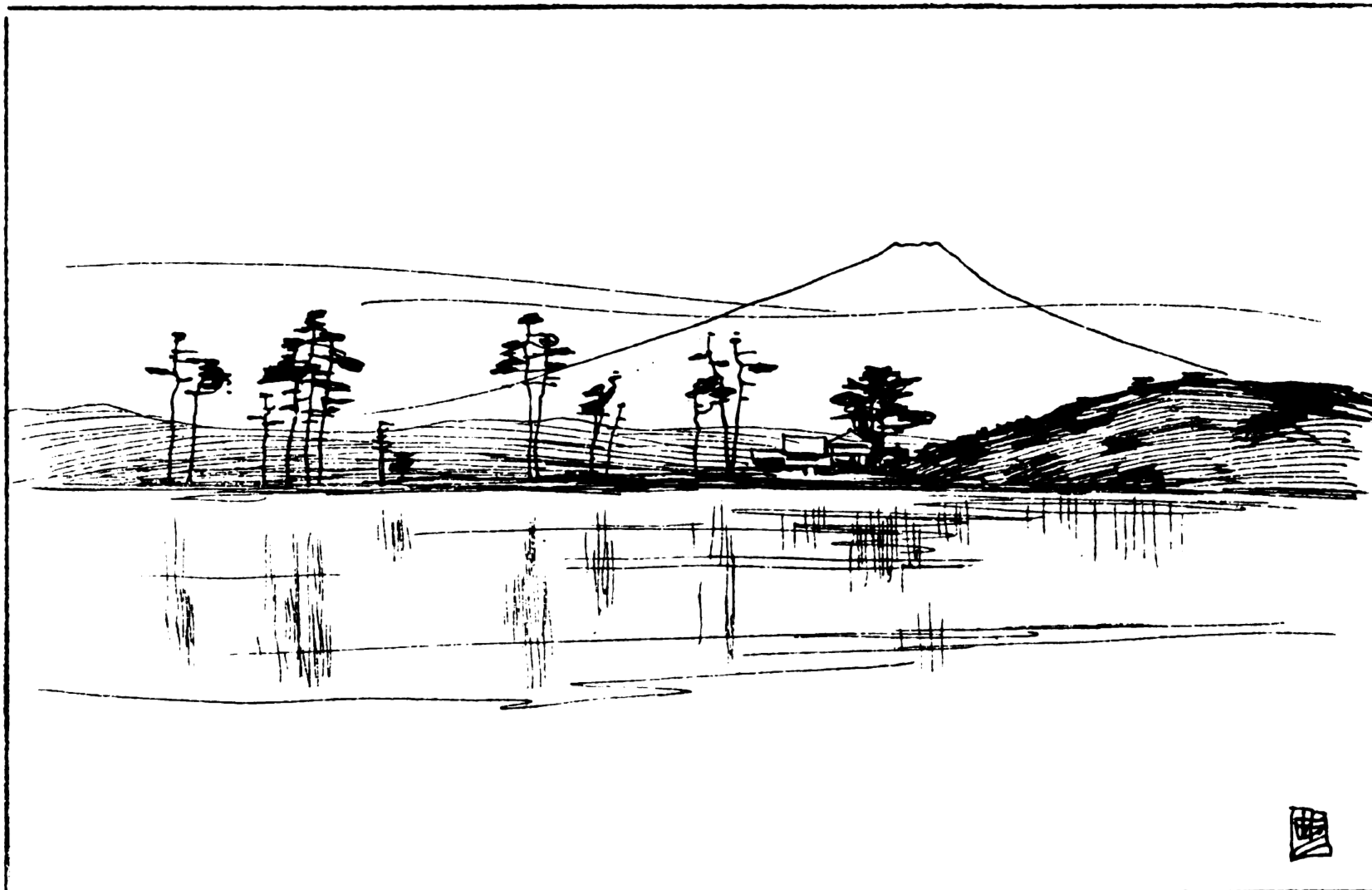

新輸入の樂器
新輸入の樂器
弊店の販賣品目……
山葉オルガン。山葉ピアノ
鈴木ヴァイオリン。鈴木マンドリン
舶來ピアノ。オルガン。ヴァイオリン
樂隊用吹奏樂器。譜面臺各種
オーケストラ、ホーン
新年各種の餘興には最も適當なり賃貸の御需めに應ず
弊店の營業課目……
手風琴。フラジオレット。ハーモニカ各種
各樂器附屬品。和洋音樂書。樂譜用紙
樂器の月賦販賣及賃貸應需
ピアノ。オルガン調律。修繕應需
郵券弐錢御送附あれ目錄進呈
東京市京橋區竹川町十三番地
合資會社
共益商社樂器店
電話新橋五二九●四八八〇番
振替貯金口座一五八〇番

（女 甲の八）

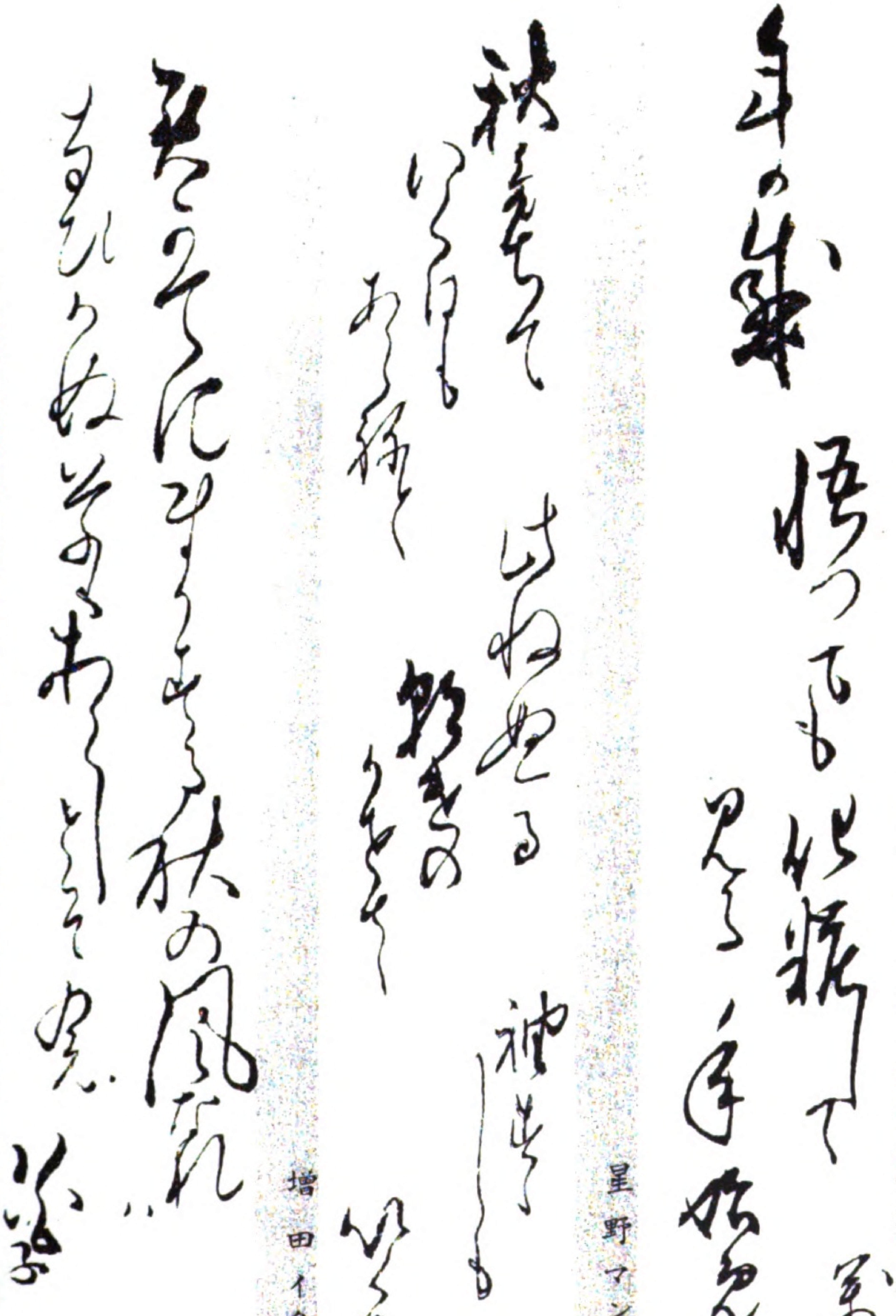
初音



初すかた



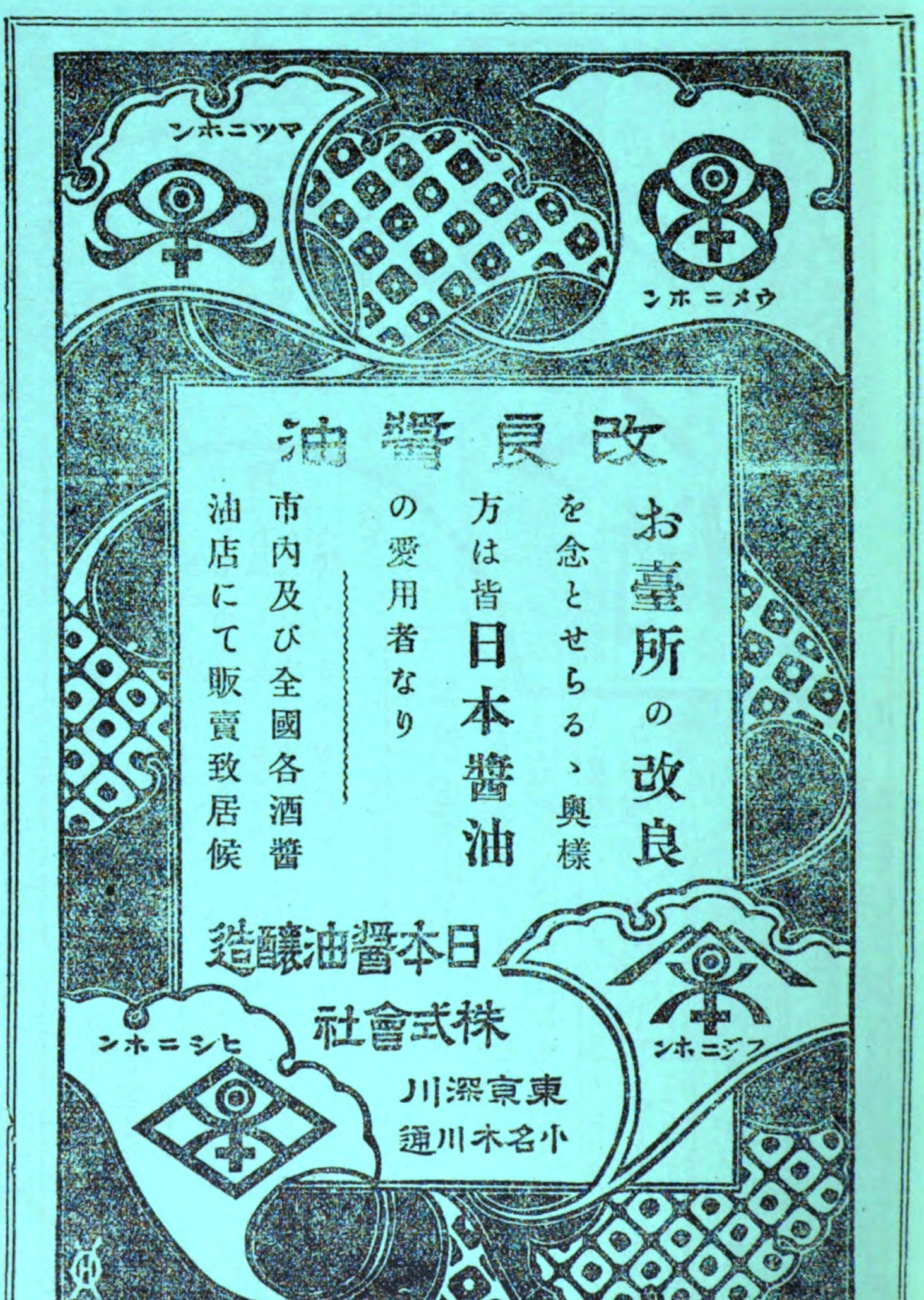
竹久夢二筆



星野マン子

増田イク子

増田花子 十三才


マツニホン
ウメニホン
改良醬油
お臺所の改良
を念とせらるゝ奥様
方は皆日本醬油
の愛用者なり
市内及び全國各酒醬
油店にて販賣致居候
日本醬油釀造
株式會社
東京深川
小名木川通
フジニホン
ヒシニホン

(乙の一)

女(乙の二)

女(乙の三)

英國 ボヅソン、エンドシンプソン會社 特製品

實用浮石鹼

千九百〇八年八月最新輸入品

會社の自慢本品特點

香氣の高きは
本品特點なり
價格の低きは
本品の特點なり
實用に適するは
本品の特點なり
上流界に好評を博すは
會社の自慢とする所也

レックス



論より證據實地御使用を乞ふ

東洋輸入元 東京 ヱスシー

賣捌所は全國到る處の信用アル
舶來小間物店及ビ化粧品店ニ有

ケーバー石鹼

舶來石鹼界の覇王と
稱せらるゝ本品は本
國にて品質に一大改
良を計りし爲め一月
元日より値上げ仕り
從來の直段より

大形壹個に付
五錢増し

小形壹個に付
三錢増し

と相成申候

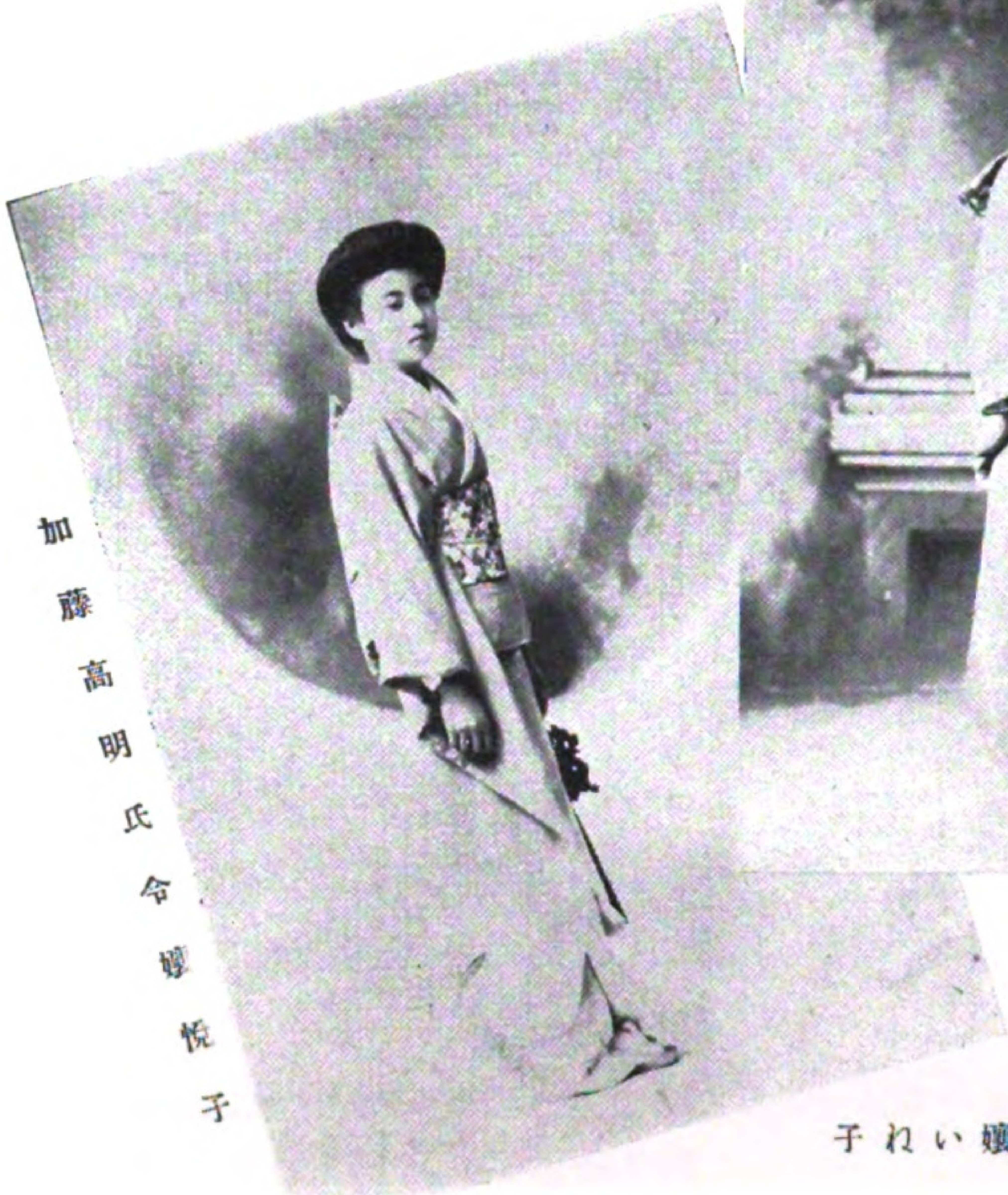
東洋一手代理店 竹間商店

女(乙の四)

北白川宮第一姫君武子女王殿下



名家の令嬢



加藤高明氏令嬢悦子



足立太郎氏令嬢いれ子



日比谷平左衛門氏令嬢つる子

いたづら子の日記



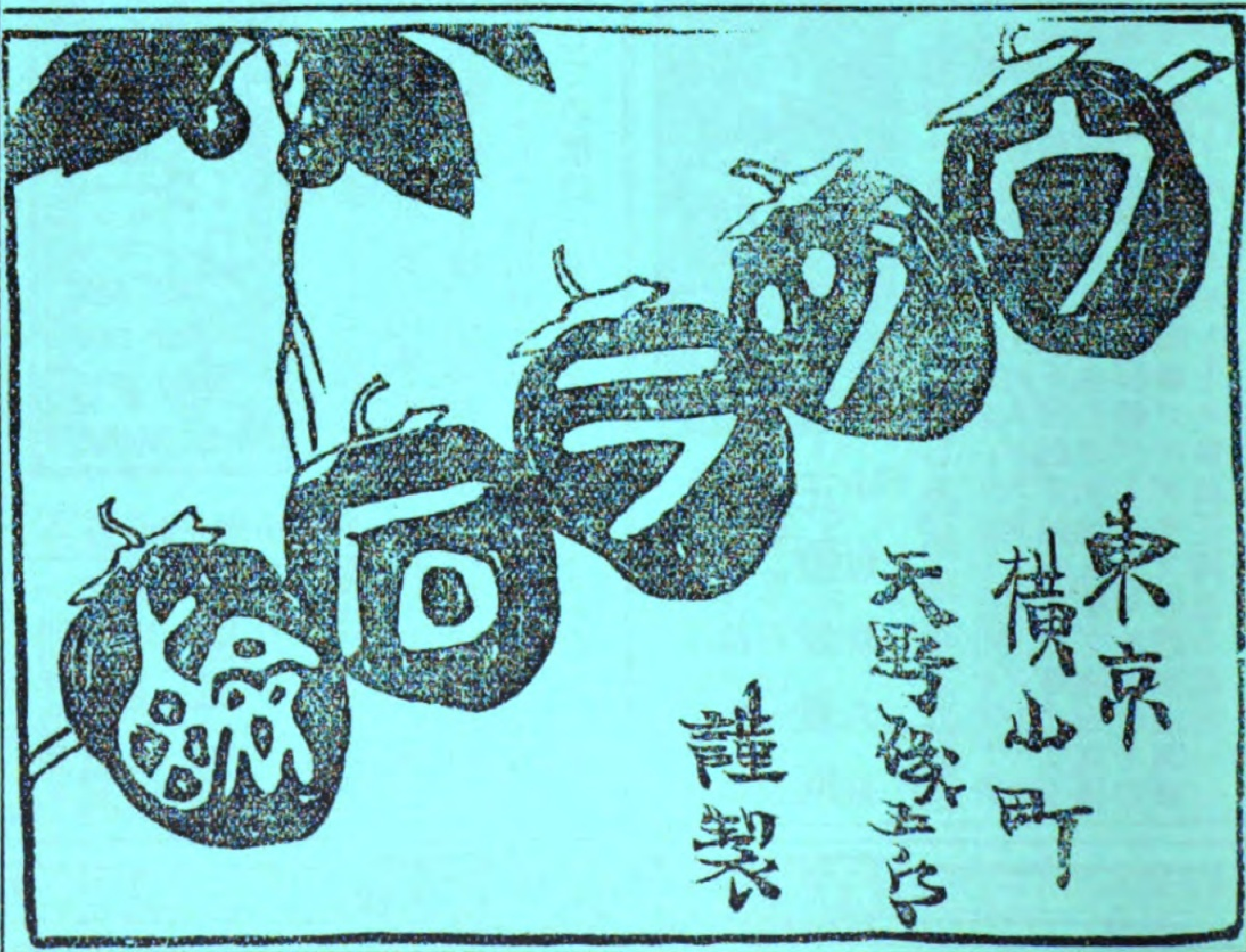
良人の居間



歌川若菜女史筆



於内外博覧會名譽大賞及金銀牌受領
元和二年創業
ヒゲタ印醤油
ヒゲタ印醤油
HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronised by the Imperial Household Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor G. TANAKA Choshi, Chiba-ken, JAPAN
宮内省御用達
千葉縣
田中玄蕃醸造
銚子町



東京横山町
天野源七
謹製

六（丙の一）

學生座右の銘

東京高等師範學校長
孔子祭典會委員長 文學士 嘉納治五郎君序
學習院教授兼東京
高等師範學校講師 文學士 有馬祐政君編

孔子言行錄

時運の推移、社會の趨向は、篤學謹厚なる有馬文學士をして本書を成さしむ、文辭簡潔にして意味深長、眞に大聖の音容に接するの想あり、附するに諸弟子及子思の言行錄を以てし、一々詳密なる註釋を施して立ろに領解せしむ、精神の修養に最上の資料たると共に、文字の習熟に最良の指針なり、此二方面に志ある人は必ず座右に供すべき無比の寶典なり、

全一册

洋装三六判總クロース
美本紙數四百八十頁
口繪孔子尊像子思顏子曾子像
正價金六拾五錢
小包料八錢

前文部次官 澤柳政太郎君序
學習院教授兼東京
高等師範學校講師 有馬祐政君編

孟子言行錄

曩きに孔子言行錄を著はし經書研究上に精神修養上に偉大なる鴻益を學生間に與へたる有馬文學士は是れと同一なる主趣に依り孟子を直譯し且つ解註を加へ題して孟子言行錄として之を公にせり惟ふに孟子は文辭秀逸議論快利誠に千古の大文字なり近時の銷沈せる士氣を作興し冗煩なる文詞を矯正せんには本書の甚だ必要なるを知らん

全一册

洋装三六判總クロース
美本紙數六百九十四頁
口繪聖堂に安置せる孟子肖像
正價金九拾錢
小包料八錢

販賣用電話本局二六二〇番 東京博文館本町 振替口座第二百四十番

女(丙の三)

女(丙の四)

日曜造花講習會



（大阪東區博勞町に在りて片岡錦子女史の新設にかゝる）

新婚の人



第五回内國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

壽美禮おしろい

登錄商標

壽美禮おしろい

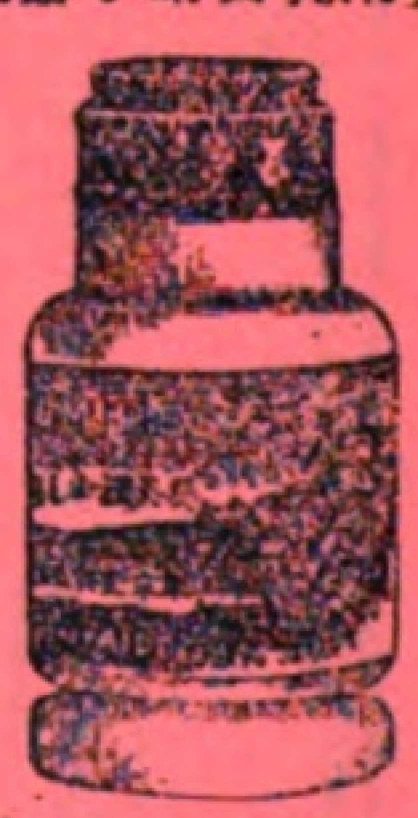
五二會品評會
功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴワイオレツト煉製

錫蓋附乳白硝子器入



壽美禮おしろい

ヴワイオレツト水製

れり製 定價 大壜二十錢 小壜十二錢

水製 定價 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢

玉製 粉製 肉色各種 錫栓附乳白硝子壜入

◎壽美禮白粉

は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顏肌を艶麗ならしめ清々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「菫おしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨むに衞生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す亦東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◎西洋皮膚艶麗劑壽美禮あらひ粉の特性

綠、藍、紅彩蝶番ひ鑵詰入 錢 別製鑵詰 五拾錢 大袋 二錢 小袋 一錢

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美くしくなす◎壽美禮あらひ粉は御髮洗に御用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろし水又は溫湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

登錄商標

西洋白色くなるあらひ劑

SUMIRE
WASHLNG IOWDER

壽美禮あらひ粉



販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

製造本舖 東京東兩國元町(兩國橋際) 壽美禮堂謹製 (電話浪花二七六五番)

(了の一)

最上醤油

キハク印

醸造元

茂木七郎右衛門

千葉縣野田町

電信略號ハク又キハク

東京支店

中野長兵衛

日本橋小網町三丁目

電話浪花百七十七番

内外遊戯二百番

白井規矩郎君輯



本書はエムグレー氏著『内外遊戯二百番』より目下米國に於て盛んに行はれつゝあるものゝ二百を撰出し本邦に適應せざるものは其方法を改めたる者にして以て米國兒童青年の遊戯が如何に改良進歩せられつゝあるかを窺ふに足らん、

目次概要

全一冊

洋装袖珍美本
紙數一九八頁
正價貳拾五錢
郵税四錢

發兌元 博文館 東京本町

料理會の集り



（熊本市白鳥料理會）

世界平和の曙光



英國大使館夜會の假裝にして
右グリーン博士令孃
左マグドナルド大使令孃

女(氏の一)

女(戊の二)

（戌の三）

少女世界 第四卷第二號 增刊

菊判紙數百廿八頁　口繪石版寫眞版趣味甚多

正價金拾錢…………郵稅壹錢

口繪 彩色版「ヴアイオリン」 寫眞版…………八頁

表紙＝太田三郎氏筆



(其の四)

みどり色濃き松の操、霜にも萎れず、雪をも冒して、常磐に榮える松の姿は、實に少女模範とすべきものではありませんか。わけて新年には松かざり歌御會の御題も『雪中の松』と仰せ出されました。かさねぐ〳〵のめでたさに因んだ『松の巻』こそ、新春第一の少女の讀みものです。

おもなる記事を左に掲げますと、先づ第一に、

▲少女對話 お留守番……… 巖谷小波作　久保田金僊畫

△少女小說 肖像畫　長篇の少女小說です、これを讀んで泣かない少女はありますまい。

△少女面會小說　これを讀んで、同情を起さない少女がありますか？

△入學準備心得　各女學校の入學試驗の有樣や、受驗の心得が、委しく記してあります。

△松の操　△リボンの美

△少女笑話　△かるた會

△かるたに勝つ法　かるたの暗誦法、ならべ方、取り方などが、委しく記してあります。

△少女スケッチ　さまぐ〳〵の少女の姿と心とを、目に見るやうに書いた少女小說です。

△少女催眠術　これを讀んで、驚かない少女はない位、ふしぎなお話です。

△松の學問　△梅と竹　△少女の樂み

・その外、おもしろい記事、有益な記事、美しい口繪が、澤山あります。賣り切れぬ中に、早くお讀みなさい。

正月十五日發行

東京本町　博文館發行



理學博士 鶴田賢次君 抄錄

著者曰く凡そ書籍の中、端坐、嚴然として讀むべきものがある、論語の如きが、留うなのであらう。又、身を横たへながら悠々と讀み度い樣なものもある、膝栗毛の如きが、留うなのであらう。本書の如きは、蓋し其中間に位して居る、立ちつゝ讀むも、歩きながら讀むも、可からうと思はれる。ポッケットから出し電車内などで見るにも適せぬでは無い。本書は世—間—並ミの一生涯に就いて叙述したものであるが、其實地、現場を相手取つて、常識を杖と、取組む間に、「イギリス」肌の『暗香を浮動』して居るかと思はれる。嚴かめしき論辯には凝らぬ方である、目—拔キな點は、思ひ出し易いであらう。讀み流しにした所が、心に何か有益な印象を遺すであらう。

自助論の著者 スマイルス翁の自傳

東京日本橋本町三丁目
博文館發行
販賣用電話本局六二〇番
振替口座二番四十番

全一冊洋裝三六判
上製美本紙數三一六頁
正價金四拾五錢
郵稅金六錢



本書概要

第一章 自傳……
第二章 幼き時代……
第三章 學僕、學生、開業醫
第四章 MD新聞編輯、結婚の著述……
第五章 「リーヅ」鐵道會社の專記、操觚と、或る公共事業、自助論と、「ステフェンソン」の傳。……
第六章 南東鐵道會社の書記—「ステフェンソン」傳と、自助論の出版、—工作家列傳。……
第七章 種々の著作、1904年まで。——
第八章 「イタリヤ」旅行。……



女(戊の五)

女子大學講義

會長 日本女子大學校長 成瀨仁藏先生

編輯 日本女子大學校櫻楓會内 女子大學通信教育會

◎**標準** 日本女子大學家政科に準據し平易明解を旨とす

◎**特權** 會員質問懇切解答 修了者に證書を附與し試驗の上卒業證をも交付修了者は會友とし日本女子大學校特に優遇を與ふ

入會金五拾錢 會費一ヶ月五十錢

修業年限 二ヶ年 四拾八冊 會費九圓

會費半年金貳圓七拾錢 一年五圓

四十二年四月講義開始
毎月二回五日廿日發行

月刊雑誌 家庭

◎家庭は女子大學通信教育會機關として發行し講義の効力を理想的ならしむ

四十二年四月初號 毎月一回一日發行 一部定價金十錢 通信教育會員無代

發行所 精美堂
東京市小石川區久堅町百八番地
電話番町九三二
振替口座二八三八

詳細規則申込次第發送入會好季節

大山元帥、東郷大將題、矢吹中將序

如山 千葉長作君著

日本武道教範

▲木版圖解數十個挿入

本書は首に武士道の說を記述し次に劍術の形式と名流とを示し終りに劍法の秘訣を述べて以て日本固有の武道の眞髓を最も明確に說破し一部頹廢せる人士の志氣を挽回せんことを望む。

全一册

洋裝四六判上製
紙數二百七十四頁
正價七拾五錢
郵稅六錢



田村江東君著

活動せる實業界の婦人

正價卅八錢 郵稅八錢

全一册

洋裝菊判紙數二百四十頁
卷頭實業家婦人寫眞版數葉入

内容

△勤勉力行の化身…三枝かれ子△文明の美花…菅川英子△發明家の妻…仁科終子△内願の憂なき婦人…山崎ため子△獨立自尊の標本…篠原よれ子△隱れたる偉勳…川合こう子△黑りボン…伊藤なか子△時計の針の挽ハなき妻…服部まん子△夫婦共勵の醫師…篠田せい子△白牡丹の姉妹…松田八十子大西琴子△寧ろ襤衣を纏はん…桑和錯子△準備敎育を受けし嫁…佐藤獣子△才德兼備の眞妻…龜井まき子△商業敎育の產物…窪成梓子△福德圓滿の內儀…橫田鐵子△商賣繁昌の秘訣…內田とめ子△夜店の女書肆…片桐なか子△實踐躬行の才女…山崎きみ子△白芙蓉…丸茂宗子△此母にして此嫁あり…大橋きよ子△妙齡の女書記…秋山鑑子△中洲の西大后…佐々木賴子△光榮ある襤衣の元祖…茂野蝶子△實業家の理想的婦人…雨宮信子、同てる子

東京 博文館 本町

女(戊の七)

女學部新設

實用女學講義錄 發行

▲本會は中學講義錄の發行に從ふこと既に五ケ年通信教授に於ける甚深の經驗を基礎となし今回更に女學部を新設して『實用女學講義錄』を發行せり。

▲講習期一ケ年半．此間に於いて高等女學校程度の學課は勿論、本邦家庭の事情に照らし女子必須の諸科目を講說し圓滿なる主婦を作る事を目的とす

▲講義錄は每月二回發行とし講師は教育に經驗深き斯道專門の名家のみ也講述極めて平易、總ふり假名の談話體なれば何人も解し難き憂なかる可し。

▲每月女學雜誌『姬百合』を發行して會員に限り每號無料進呈す『姬百合』は現代知名の女子教育家及び專門大家の訓話學說創作及び會員の投稿を掲ぐ

▲會長尾崎行雄親しく本部を監せらる。組織整頓し取扱最も懇切也。且つ會費極めて低廉都會一ケ月の遊學費を以て優に全學科を修了する事を得べし

◉新學期開始＝至急入會者に限り入會金全免すべし◉

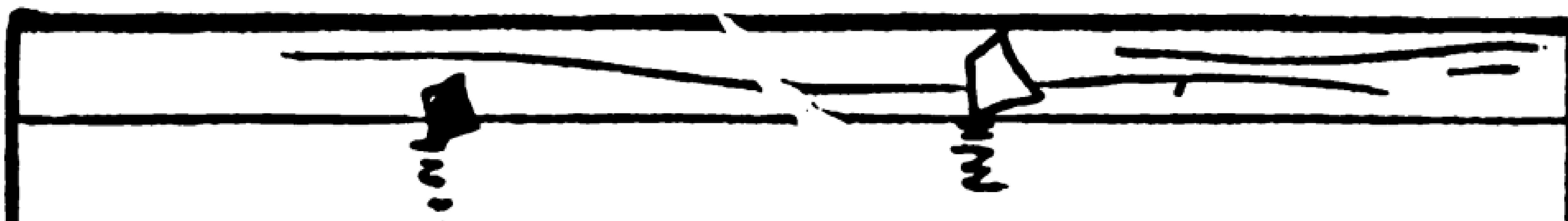
見本つき規則 無料進呈

大日本國民中學會女學部

東京駿河臺

電話本局三千〇四番
振替口座四千二百番

女（戊の八）



こゝろの秘密

千尋の底に埋もれる眞珠の玉は、とこしなへに人に知られずして了るものかとおもひしに、天に運行あり地に變化あり、淵も瀬となる世の習ひ、海床いくたびかところをかへて玉はゆくりなくも魚の腹に入る事あり、かくて漁夫の手に入り、玉人に見出され、研がれ、磨かれ、遂に絶世の美人の胸のほとりに輝きて千萬の人のこゝろに榮華の誇りものとなるためしあり。人もまたこのごとく秘密はとこしへに秘密に終るにはあらじかし。





お正月日記

千代子

一月元旦　水曜日　曇

東天紅とあかつき告ぐる鷄の音も高らかに、やがて出づる朝日と諸共に私は目出度くこゝに明治四十二年を迎へた。

つるべ竿におく劒のやうな霜をしごき乍ら、ふと見下すと、初若水の井の底にくつきり寫した初島田、思はずほゝ笑むと、平打がキラリと光る。

若水やつるべ重げの初島田

と鳥渡自讃して見た。

あゝあのいき／＼とした妙齢の娘達が、高島田になんか結つて包かゝへて裁縫のけいこに通ふのは、可愛らしくて實にいゝ。この子も早くあの樣に成つたらばと、よく私の髪を撫でゝは仰有つた父樣に、今日のこの樣をお目にかけたい。

お雜煮を祝ひ納めてお化粧に約一時間。お召かへに一時間、それもいゝように母樣のおもちやにやつて居たが、お前は餘り背が高いからもう可笑からうと仰有るのを、無理にせがんで帶はやの字にして頂いた。

對のお召に襦袢の衿も白を重ねて、髪は高髷白丈長、すつかり令嬢風につくつたつもり。只この胸に光つて居るブローチが、いくら私だつて貳拾錢なにがしの、ガラス玉入りのでは情ないわ。

やがてさや／＼と勝色裾を白足袋にさばいていよいよお玄關に立出ると、かねて用意の重ね草履がちやんと揃へて置かれてある。これは孝さんの春着を縫つてあげた御褒美に、坂本の叔母さんが下すつたのだから、私には過ぎ物だ。九文何分といふこの足ではくのは耻

かしいやうである。さぞ緋鼻緒が泣くだらう。

お優ちやんはお待兼のあまり霜柱をさくさくと、出かけて來たのに途中で丁度行逢つた。

『あらお早う……まづ明けまして』

『昨年中は失禮ばかり致しました。相變らず……』

今日ばかり双方がショールまで脱つての御挨拶、そして顔見合すやもうおさへ切れぬ笑はうら若い頬にさつと流れる。

番茶も出花と歌はるゝ花十八の春姿を、ましてやこ



れは評判のお優ちやん。あたら初島田に昨夜枕を許ししか、緑の鬢づら少し亂れたが清和源氏の流をくむ、奥床しい笹龍膽の御紋付の小豆色襲で、胸高にしめた帯は金糸の刺繍あるお納戸博多。家の母様は私の緋繻珍を御自慢だが、お優ちやんのゝ方が餘程當世風だ。

『濟まなかつてよ、大變おそくなつて……お待遠さまでしたのね』

『否え、さうでもなかつたわ』

葡萄鼠の絹糸と白の獅子毛とは、つと肩をならべて歩き出す。二人はこれ

から裁縫の先生へ、御年始のお禮に行くのである。雪もやうの空低くたれて身を切るやうな筑波颪し。學校の式から打つれて女生徒達が、各々に頰ッぺたを薔薇や林檎どころぢやなく、紫色にして震へ上つて歸つて來る。もつとも今日はまだ田の氷が、厚く〳〵はりつめて居るもの。

先生のお宅ではお花さんお治さんの先輩を始め、もう拾四五人の下駄がぬぎ散らされてあつた。お互にお定まりの御祝儀を申のべてそれから一同へお屠蘇とお重詰が出た。とお優ちやんは何うしたはずみか、なみなみと受けた手をすべらしてその晴の縮緬の膝へ、ばつたりお屠蘇をぶちまけてしまつた。流石に一座は急に白け渡る。

三々九度のお盃でもしはせまいし、何だつてあんなに震へたのと、歸りに散々弄かつてやつたらば、でも何うしても手がかじけて、お盃なんか持てなかつたんですものと云ふ、その筈よ、お優ちやん。その中指のルビーが自慢でこんな寒いのに、手袋も嵌めなかつたからだわ。

御年始がてら方々遊び歩いて家へ歸つたのはもう四時半過ぎ。

『まあお前、今まで何處を歩きまはつて居たんです。ほんとに身體の毒ではありませんか。まだ御飯も食べないで――』

元日早々母様からお小言頂いた。實はつひ朝の御馳走を過ごし過ぎて、晝餐にはちつとも欲しくなかつたのだが、こう叱られて見ると先刻の――今晩盛んなカルタ會を開きますから、貴女も必とお出遊ばせな。是非、必ずね、と田内さんが、何度も〳〵念をおしてわざ〳〵御門の外までついて來て、お繰り返しなすつたあの事も願ひ難く、獨で氣をもみ乍ら夕飯の時やう〳〵云出すと。

『否、女の子と云ふものは夜分なぞ、無やみに出歩くもんぢやありません。ましてお前には、お父様がないんでせう』

思ひがけなくきつぱり言はれて押し返すべき言もなく

湧き上る悲しさを涙と共にぐつと堪へて、見られまじとランプに面を背けた。けれどまた若しや〳〵と空頼みのお迎ひもとう〳〵來ず、半ば自暴氣味で夜は早く床に入つた。が今頃は興酣で、定めし花々しい勝負を戰かはせて居るのであらうと思ふと、只羨ましくて羨ましくて、許して下さらぬ母樣の口惜しく恨めしく、小さい胸は引むしられるやう。どうしても寢つかれなかつた。あゝ霜冴ゆる極寒。饑に泣く子宿るに家なき人もあまたあるものを。



二日　木曜日　快晴

今日は昨日に引かへてまぶしい程の好いお天氣。鏡のやうにはりつめた、氷のお池には朝日が美しく輝いて、後れ毛を撫づる風さへ和かい。

旗に吹く風もゆたりと御代の春

約束を違へずお優ちやんが誘ひに來えたので、九時頃から藤澤へ出掛た。昨夜は田内さんへ行らしたんでせう。面白かつてと訊くと、點頭て笑つて居る。私は厭な思がした。

電車に乗る。流石は初春の、人みな新らしく美しく見るからに心地よく、車内は高い香水の香や衣擦の音に滿ちつ。やがて藤澤終點で吐き出されて人波の中を、ずん／＼押されて行くと何だかこた／＼飾り立てた初荷が通るし、諸商店では賣初めと云ふので大福引だの景品進上だのと仰々しく、そのまた店は慾にぬけ目のない人間の黒山をなして居る。私もいろ／＼買ひ度い物もあつたのだが、こんな人達と一緒にされては堪らないから止して仕舞た。

お優ちやんに引張られて町を散々歩きまはつた末、樂隊で客をよんでる勸工場に這入て見る。

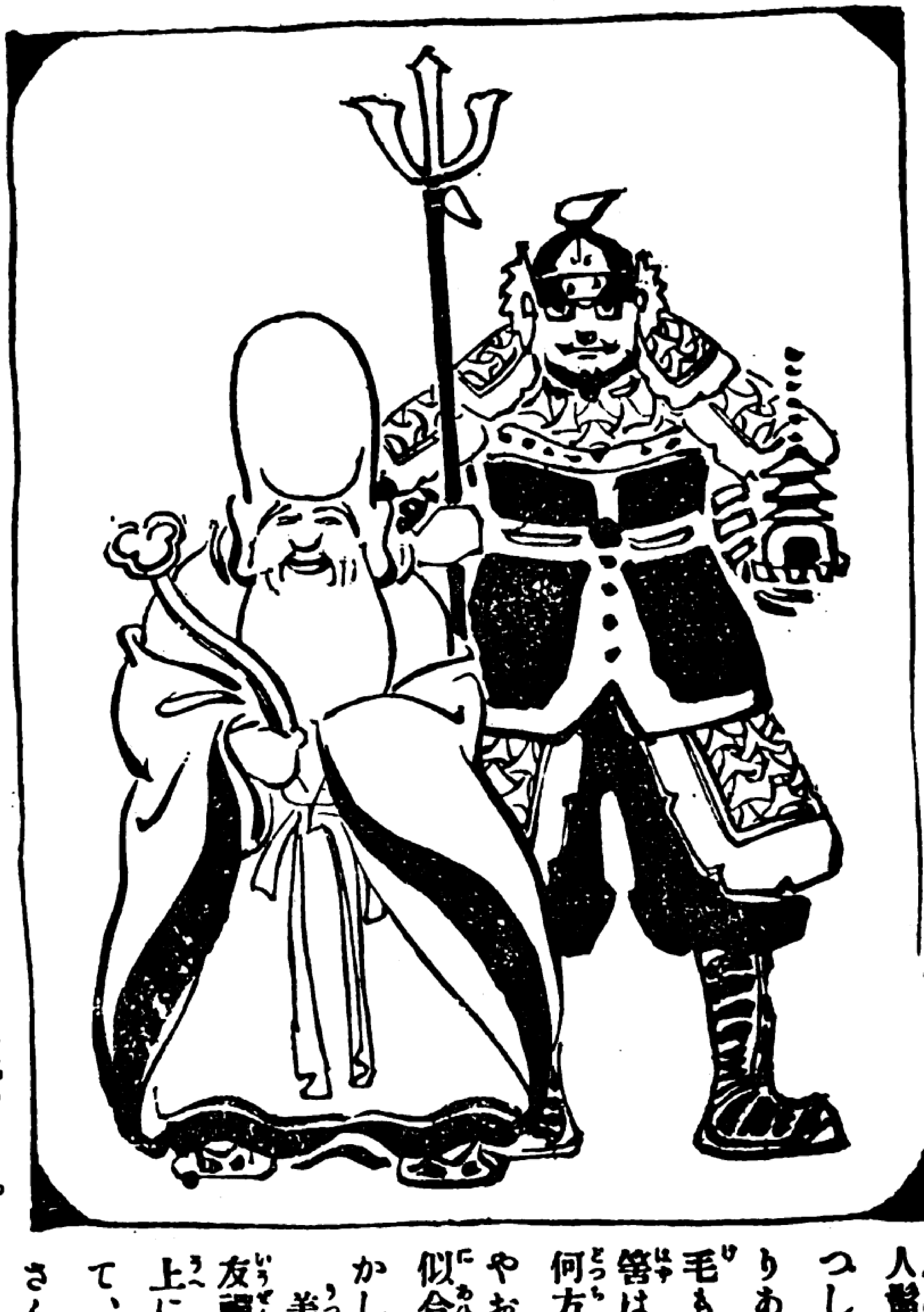
こゝでも五十錢以上の買物には福引をひかせるのださうで、それこそ芋を洗ふやうな混雜。私等は「女學世界」と「女子文壇」を手に入れて早速のがれ出た。ぞろ／＼群をなして押し歩いて居るのはムク／＼した顔にはげる程白粉を塗つて、手織の銘仙や地絹の小紋を着た近在の娘さん達。そんなのゝ中故都ぶりの私等二人はいちじるしく視線を引いて、道行く人はみな振りかへつて呉れる。滿更惡い氣持でもなかつた。

二時過ぎに歸る。下谷の伯父樣と本鄕のきいさんから年始狀を下すつた。此方からも出さねば濟まないが、もう懶くさく何をするのもつまらなくてごろ／＼してると、夕方田内さんからお使ひが來た。云ふまでもなく歌留多のお迎である。私ははつと胸を突いて言ひがひなき涙は、早くもまつ毛を溢れつ。堪らずぶいと緣側へ出て了ふと思掛けなくも、今日は母樣が許して下すつた。まあ夢に夢見る心地と云はうか、夕飯もそこそこ夢中になつて飛んで行くと、夫人はもう玄關に待ち兼ねてゐらして、おゝよくと手を取らぬばかり。

戰は巳に開始されて居た。皆さんに一禮して讓られた座についたが、見ればおなじみの顔は和さんとお優ちやんきり。あとは二分刈、三分刈チツクでピカ／＼

分けたのもあるし、みんな角帽や白絛やそれからあの、まるで蠟燭を打違にしたやうな徽章ねと弄かつて茂さんに怒りつけられた。慶應の帽子やがのつて居さうな頭ばかし。私何だか間が惡くて無やみに顔が熱くなる。がふと氣がつくと向ふの端に例の小野瀨さん冷やかな笑をふくんで意地惡く私を見て笑つて居る。

　可笑しいや、みんな紺絣や紡績の中に只た一人。光つた羽織なんか着て居て——必と男子でクラブ洗粉の愛用者は、小野瀨さんが元祖だらうと思はれるわ。



和さん今日はお久し振で日本髪。水のたるやうな唐人髷に結ふて被居つしやる。もとよりあの御縹緻でお毛もよし惡からう筈はないが、でも何方かと云へば廂やお下げの方がお似合なさる。何故かしら。

　美しいメリンス友禪の座ぶとんの上に小さくなつて、つゝしんで皆さんのお手並を拜見してる振してこんな事思つて居ると、これですつかりお客様もお揃になりましたと、夫人も座におつきに

なる。

さあ私もこれから一方のさいはいを取つて、戰鬪は刻々に激しくなつて來る。私こんな時には夢中になつて了ふ性分だから餘り一生懸命で、何にもよく覺えて居ない。只お優ちやんのペテンと小野瀨さんにいぢめられたのは、口惜しくつて忘れられぬ。其外の皆さんは東京の歌留多會でみがき上げた腕前だもの。鳥なき里の蝙蝠の私なんか、敵しようわけがない。もう散々の大敗北であつた。併し自分より強い相手と戰つて美しく破ぶれたのは、實に嬉しい。負けても名譽だわ。何しろ卑怯未練な振舞が一番駄目だ。潔く勝ち、奇麗に負ける。私はすべてこの主義よ。

一體お優ちやんの口實ではないが歌留多——でも何でもこんな事には矢張り男子が交らなくつちや、不可ないわ。別に氣取の澄ますのと云ふわけぢやないが、双方自づと禮儀を守つてつゝましく美しくゆく。女同士だと餘り遠慮のなさ過ぎる故か、先達お節句の日先生のお宅で、家族合せや指輪送りした折には眞實驚いたつけ。この正しく秩序ある樣を、同輩に見せびらかしてやりたい。あゝ敎育ある人とない人との會合は、こうも違ふものなのであらうか。

かくてこの鬪爭は一時近くまで催ほされたが、なかなかに興はさめず名殘はつきず、かの道信朝臣ならなくもなほ恨めしき朝ぼらけかなの色は誰の顏にもあらはれ乍ら、惜しいこの座を立つた時半か一時か、リーンと鳴つた。

おゝ夜風の寒い事、ショールに埋めた頰もちぎれるばかり。星は寒天にまたゝき、コロンカランと霜と冴ゆる下駄の音は大地にこほりつくやうである。

けれど皆さんに送られて嬉しく歸宅した。

母樣は寒かつたらうつて熱い葛湯をして下さるし、着替の寢衣もあたゝめられて——あゝ勿體ない。今更にお情が身にしみて昨夜の心地を思出すと、ミシミシ慚愧の念が湧く。いろ〳〵お話など申上げて床に入ると二時を打つた。

三日　金曜日　快晴

昨夜の疲れにぐつすり寝入つて朝目の覺めたのはもう七時過ぎ。お情深いお日様はうら〳〵と枕もとまでのぞき込んで被居つしやる。吃驚して飛び起きたがあゝ頭が變だ。今日は精神をぬきさられたやうで何事も手につかず……一種不安なやうな、物悲しいやうな、絶望の淵にしづんだやうな、また何か待つものがあるやうな氣がして、一日心が安まらぬ。眞に夢の様であつた昨夜の名殘がまだ覺めやらぬのであらう。



それにお優ちやんは横濱へ行くと云つてたし、田内さんへも――和さんだけなら宜いけどあんなにお客様がいらつしやるのに、遊びに行くのもきまりが悪い。仕方なし本ばかし讀んで居た。

年始狀は續々來る。年始狀でも暮の中から出したり版にすつたりする人の氣が知れない。あんな物なら貰はなくつても澤山だが幸に私の許へよこすのに、そんな人は決してない。誌上で私の名を見たからつて。

今年から交際をもとめるのもあるし、一二度かりそめの歌留多の席で相見た方が、よく忘れずに下すつたのもある。併し女の方のは一人もなかつた。何、誘惑……何のそんな事が――自分の心さへしつかりして居れや、たとひ何んな人と交はつたつて少しも後めたい事はないわ。が考へて見れば女の癖に――私はあんまり出過ぎてるかしら。

午後からは無理に妹に引張り出されて追羽子をする。

私も去年までは盛にやつたものだが、今年は髮に氣兼をして一度も羽子板持たなかつたら、ちつとも出來ないで餘り落してのみ居るので、姉樣は厭よと、とうどう除者にされた。

あゝ三ケ日も今日でお仕舞だ。鵠沼の松の內はほんの三日きりである。四日には僧主が年始に來るつて早速門松を切り上げて了ふ。何も年中松原の中に住んで居て門松なんか珍らしくもなさゝうだが、でもこれを取り拂はれると急にお正月がにげて行つたやうで、六日年越の七草のと矢張り遊びはするけれど、もう氣がぬけちまつてる。あゝお正月なんて本統につまらない。とは云へ可愛相に私だつてまだ、お正月をつまらながる程の齡ぢやない。つまりお正月そのものがではなく田舍住居のこの境遇がつまらないのだらう。あゝ厭だわ。一體田舍は何處でもかうか知らないが、此地の村の人達つたら見聞はせまし趣味は低し、歌留多なんか見た事もなく追羽子の術一ッ知らず、凧は五月のお節句にあげるものときまつて居るし、外に娛樂の方法もないのでお正月には金錢をかけて、ホッ引とか云ふ賭博に類した事を盛んにする。女も若いしゆも車座に入りみだれて風俗上の害あるはもとより言を待たず、まあ何と品性の卑しいのであらう。裁縫の同輩だつて御多分には漏れぬ。何より證據。この月此頃此村を通つたつて、娘子供の影は見られない。それもその筈。あんな巡査の目を避けて、物置や蠶小屋の薄ぐらい片隅で、例のを夢中になつてやつて居るのである。

これにつけても思出さるゝは嬉しかりし――あゝ浪

音しづかな春の宵、青春の血氣燃ゆるばかりの人々が、笑ひかはした歌留多會——。實に永久の我が紀念とすべき、榮ある一夜であつたのである。

藤田さん森川さん尾瀬さん若山さん。袖振合ふも他生の縁とやら。私は何時までもいつまでも、忘はしません。御身御大切に必ず御成業遊ばせよ。

茂さんと達夫さんへの御返事を書き、夜もお湯に入つて早く寝る。樂しき昨夜に引かへて今夜は隙もる風も冷たく、またゝく燈さへ物悲しい。あゝ明日よりは………………。

衣服を新調する時の心得

◎色の配合　婦人の衣服に就いて最も注意すべきは色の配合なり、之に注意を怠らば可惜数十百金を投じたる新調の美服も調和を失して詰らぬ物となり了るなり、中にも児女等が衣服の如き一層甚だしきを見ることなるが黒人目には多額の費へを要したりと見ゆる衣裳にても、配色の調和を得ざる為め素人目には左程にも見えざる物あり、然るに折角大金を費しながら色の調和を得ざる為め、其美を殺して了うは如何にも不経済なる次第ならずや、左らば如何様なるが美を殺ぐかと云へば、紅地の着物に赤地の帯を締めたるが如きは双方同色なるが故に相殺して引立たず、又上着と下着との色も考へ物なり、殊に気附かずして一番多く誤用され居るものは赤地の帯に朱系色の帯締めを締め居る杯、最も配合の調和を缺き居るなり。衣服なれば同じ梅にても他に方法あるべく児女の物なれば梅の枝を工合能く上に延さば却つて賑かにも見えて趣きも深かるべし是等は其一例なれど其模様に依りて夫れ〴〵の注意を要すると云ふ迄もなし。

◎色の黒い人　人には痩せたるもあり、肥えたるもあり、又丈高きもあれば低きもあり、扨ては色の白き、黒きなど、其人々の體質に依て衣類の好みも異ること勿論なれど、色黒き人が納戸、空色其他之に類似せる地色の衣類を用ゐんか、其顔の黒さは一層際立ちて黒く見ゆるものなり、此は其著しきものなり。

◎丈の低い人　丈低き人に格子縞は不適當なり、強ひて之を用ゐんならば成るべく格子の竪長なるを用ゐ、帯杯は竹杯の模様のあるタツキリせしを用ふるが宜しかるべし、四角なる格子は其人をして益々丈低く横廣に見するものなり。

◎怒り肩の人　肩怒りたる婦人が縞目の明瞭なる衣類を用ふるは悪しゝ、縞明かなれば怒り肩は彌々怒りて見ゆるものなれば、其縞目の成るべく朧氣なるを選むべきなり。

大滿足に滿足せる若き妻の日記

美江子

何に驚いたのかぐつすり寢込んで居たが急に目がさめた、あゝもう大分あかるい、何時かしらと思ひながら寢返りして、並んでおやすみになつて居らつしやる旦那樣の方を何氣なく振り向くと、白い切れを被せた大きいお枕が疊の上へ投り出されてお姿はない、布團も、はねのけてある、はゞかりへでも行らしたのだらう、と思ひながら無意識に天井を見つめてゐると聞き馴れた旦那樣の咳拂が一つ、お茶の間の方から聞えるオヤ？　とびつくり飛び起きると、お布團の裾の方に、お寢まきと白メリンスのお細帶とが、疊めて置いてある。まあ！　もうおめざめになつたのかしら、ちつとも知らないで今迄寢てしまつて……。あはてゝ紫矢絣りの銘仙のふだん着に着更へて、羽織に片手通しながらいそいでお茶の間へ行くとお火鉢の向ふに、ドテラを召して新聞を見て居らつしやる處。まあ、私寢坊してしまひましたのね、ちつとも存じませんで……と、をとゝひ、初めて結つた髷の鬢も前髮も、少し亂れたのを、かきつけながら云ふと、つと、後ろをお向きになつて、まだ早いんだよ、珍らしく今朝は早く目がさめたから、美江さんに知られない樣にそーつと起きたのさ、と、ニコ〳〵してゐらつしやる。まあ、さうでしたの、濟みませんでしたわね、と柱に掛つてゐる時計を見上げると七時少し前。アラもう七時！　何て寢込んだのでせうと、今更のやうに恥しい。ナアに七時位なら、そんなに寢坊と云ふ事もないさ、と、まだ嫁いで間もなき身とて何かにつけて勞はつて下さる御心のあり難く、「あゝ勿體ない」と、心で拜んだ。

其處へ、お糸が、敷居越しに行儀能く手をついて、お早うございます、奥樣、お湯お取り申しました、と、知らせてくれる。さう、すぐ行くよ、と返事して、鏡臺の上に載せてある朱鷺色の水白粉の瓶持つて湯殿へ行く。手早く顔洗つて、手ぬぐひ堅く絞つて、襟から顔をよくふひていゝ匂ひのする水白粉左の手の掌に受けて、少し水混ぜて薄つすりと襟から顔へつける、何だかスーツとした心持ち、つけたあとを、手ぬぐひで、ピタ〳〵と押へて、姿見の前に立つ、奇麗についた事。羽織の襟の折れてゐないのが映つたので直す。もう一度手拭ひ、ゆすぎ出して竿にかけて急いでお湯殿出る途端、お糸が、お葉書が參りましたと渡す。誰方からしら、と思ふ間もなく、しやれて書いた「美江樣」の字ですぐ、あゝ秋香さんからだと、思はず微笑んだ。ほそい流れに、崩ゆるやうな赤と黄の紅葉散らした美しい繪葉書に、

風の便りに君樣近頃は粋なすゞめ形の御髷のよし、眞紅のお手柄にはやりの簪ざし、さし給へる御姿白き御襟に映えて、いかに〳〵美しうおはすらむ、初々しき若奥樣のスタイル、あゝ早う拜見したきものに候よ、遠からずと申さず明日早速にて參上、目のあたり美しき御

姿、飽かず見参らせ度う、必ずよ、御館に居させ給ひてよ……
昨日の明日といへば今日の事、アヽどうしよう、ほんとうに秋香さんはお人が悪るいわ、それにしても何時の間に誰が御耳へ入れたんでせうお千代さんかしら、お口の悪るい秋香さん、御覧になつたら又必つと何のかんのと御世辞澤山の御批評が大變よけれど、御自分だつてこの節は旦那様の御好みとやらでお髷に計りあげてゐらつしやる癖に……あの方のこの節の粋さつたらないんですもの、必つと又、御召物でもお出來になつたので御吹聴かた〴〵それとなく御越になるに違ひないわ……
誰から？　と葉がき見い〳〵お茶の間へ入つて來る私の姿御覧になつて旦那様がお尋ねになる。秋香さんから……一寸御覧遊ばせ、つて、お手渡しすると、すぐお讀みになつて、フヽヽ美江さんの丸髷は評判と見えるね、いゝさ、お晝までに結ひ直して、思ひ切り美しい處見せて上げるさ、なんて、おからかひになる。まあ、いやです事、と云つたが實は嫌な氣持ちはしない、自分ながら變なもんだと思ふ。



何時もの通り、樂しく御話しながら御飯御一緒にすませるとそろそろお出掛けのお仕度きのふの朝、お出掛けの時、今夜は宴會があるから、おそくなるよと仰しやつたので、お歸りお待ちしながら御存じないうちにハイカラなネクタイこしらへて置いて上げようと思つて、ゆふべ一晩かゝつて、セツセと縫ひ上げた紺縮緬の無地のそれを洋服簞笥の扉に默あツて、ひつかけて置く。柱にかゝつてる長い鏡の前でカラーつけてゐらしたが、ふと、お氣がつかれると、オヤつて仰しや

つて、ツーツとお取りになつて、どうしたんだ？つて仰つしやる、思はずホホと笑つて、お氣に入りまして？ といへば、お手製？ 何時の間にこんな物が出來たの？ サンキユー〳〵つて繰り返して仰しやつて下さる。嬉しくて、唯默つてほゝ笑んだ。眞白のカラーを廻つて格好能く結ばれた紺のネクタイが大變よく、うつツた。私は嬉しかつた。

お玄關に私と、糸と松とでお送り申上て置いてから、松に、お晝までにお千代さんに來て呉れるやうに賴みにやる。おぬぎすてのお召物を、疊んでから、今朝の新聞にザアツと目を通す。あゝ又今朝も長者屋は休載よ、何故面白い小說つて云ふと、斯う始終休みがあるんだらう。某子爵の令息の結婚なんて出てるから、どんなお嫁さんが出來るのしらと思つて讀んだら、まあー あの萩村さんの綾さんだわー 私の二年下でつひ此間まで短かくお袴召して、おさげにしてゐらしたのに、あら、もう高島田——島ぢやない、ぢき髷におなりだらう、何だか可笑しいやうだけれど私だつて……と思つて見たら、あゝやつぱり可笑しいわ。

お勝手の方で、俄かに賑やかな人聲がして、糸の高い笑聲もする。と松の圓い顏が出て、奥樣、お千代さんが參りましたつて云ふ、アラもう？ つて、びつくりすると、ヘイ、恰度出かける處でしたので直ぐ來て貰ひました、と云ふ。さうよかつたわ、ぢやあ、糸に髮道具揃へさせておくれと云つてると、相變らずニコ〳〵したお千代さんが、お早うございますと、叮嚀にお辭儀する。お早うと私も挨拶して、一寸お茶一つついで出すと、まあ奥樣、勿體無いどうも〳〵恐れ入ります、つていひながら受取る。メリンスの座布團敷いて、鏡臺の前にすわる、とすぐお千代さんは白い前かけ胸から掛けて、腰に下げた鋏で一番に根の元結を切る如何でございます、お痛か、ござんせんでしたでせう？ まだお奇麗でございますよつて云ふ。えゝ、思つたより痛かないわ、今日でまだ三日目ね、少し早かつたけど、お客樣があるので……と云ふと、あ、お客樣で？ それでは一生懸命、お千代さんの腕を振つて、おあげ申ませうね、ホ、、、て笑ふ、此節はどんな形がはやるの、木ばりの兩ざしがはやるのつて、話してる内に、もう梳けてしまつて、筋立で前髮や鬢を分ける。私は熱心にお千代さんの手の動くのを見て居る。早い事、もう鬢も髱もつけて仕舞つた。鬢尻りが心持ちつまつて上の方がゆるんで、やゝ一體に下髮の粋な好い格好、前髮は、かなり出てゐるが、癖もなくフックリとよく出てゐると、自分ながら心で褒めた。お手柄はやはり是れにいたして……と云ひかけるのを、さへぎつて、いゝえ、それぢやあないのよ、いゝのがあるの、出すの忘れてたわ、お糸、ゆふべ持て來たの出しておくれ、といふと、いそいで用簞笥の引出開けて持つて來る。態々縫ひにやつた黑地の縮緬に眞紅の糸で麻の葉を繡つたしやれた手柄。これかけて頂戴て渡すと、まあ、何て粋なんでございませう、よろしうございます事、と云ひ乍ら、もうすゝめ形の髷の横からチラリと見える、黑い毛や黑い地の中から眞紅の糸が見えるのが何だか婀娜つぽいと思つた。根には金紙をキユツとかたく短かく結ぶ。どうぞ鬢を……つて鬢櫛に水含ませてお千代さんが渡すのを受けて鬢を解くと、すぐあ

とから筋立の先で、ふくらませて くれる、粗い櫛の歯が立つて、フックリとよくふくらむ。お里の母様が私が此家へ嫁る時、譲つて下すつた本珊瑚の金脚の簪を、心持ち斜めに、さしてくれると、不出來でございますつてお千代さんが一寸お辭儀する、何だかこの前より よく出來た様で嬉しかつた。

晝餐は秋香さんのお話しを樂しみながら一人の淋しいお膳に向ふ。久しく御無沙汰した牛込の家へ、葉書かく。二三日内に思ひがけない姿で伺ひ升。と書いて、讀み直して居ると、ガラ〳〵と御門にお車の入つた音がする、オヤと筆持つた儘、立ち上ると、お廊下傳ひにパタ〳〵糸が駈けて來て、奥様々々、井上様の奥様が……さう？ 秋香さんが？ と私も糸と一緒にあはてゝお玄關へお迎へに出る。式臺に立つてゐらつしやる秋香さんの美しい目と私の目がパツタリ合ふと、お互に、まあ！つて云つたゞけ相變らぬお美しいお姿に見とれてしまふ。秋香さんは又私の髷をヂーツと見てゐらつしやる。まア、どうぞ、待つて〳〵居りましたよ、と申上ると、奇麗な白い歯お見せになつて、有り難うつて笑つて、お召の中コートや白茶のマツフを、糸に渡してゐらつしやる間に私はそれとなく、すつかり今日の新らしい御裝ひを見て仕舞ふ。おぐしは珍らしく今日は銀杏返し、輪の大きい、癖のない多いゝお毛で、見ても氣持ちのいゝ程格好よく鬢も髱も出て居る、又近頃はやりかゝつて來たと云ふ藤色地に白で細かに絞つた鹿しぼりのお襦袢の襟、まあ何ていゝんだらうと思つた。お召物はお下着とお羽織と、三つお揃ひの濡れずみの無地お召し、思ひ切つて抜き衣紋に召して居らつしやる。お下着の褄だけは共布で何かの縫ひのしてあるのがチラツと見えた、何てしぶいおなりだらう。これだけを一寸の間に見てしまつて、先きへ立つてお座敷へお通し申す、固苦しい御挨拶は、ぬきにして膝すりよせていろ〳〵お話する秋香さんは、ほんとによくつてよと何度も私の髷を見上げては賞めて下さる。お世辭もあらうとは思ひ乍ら、賞められて嬉しい氣持もせず今更のやうに髷に手あてゝ見たりする。手柄がいゝでせう？つて私から自慢相に云ふと、えゝ、さつきから見てたの、だけど、これもいゝでせう？つて、お襦袢の襟をお直しになつたお指に、又新らしいリングが光る。もうそれはとうから氣が付いて居りました、といふのは何だか口惜しいやうな氣がして（これも一種の虚榮心かしら）今、初めて氣がついた様にまあ、ほんとにいゝ事、三越？つて伺ふとエーと仰しやり乍ら白羽二重のお袖裏のついたお召の袂から白紙に包んだ物お出しになつて、お揃ひよと私の膝の上にお置きになる。アラつて云つてすぐ拜見すると、いゝと思つて拜見してたお揃ひの絞りの襟、何度も御禮申上て、來月母校の同窓會におそろひにかけて行くお約束して、ソーツと箪笥の上に載せて置く。さてお目にかゝつて見ると、これと云ふとりとまつたお話もない、久しぶりで秋香さんのピアノのメロデイーで唱つて見たが久しく本式に唱はないので、ちつとも聲が出ない。秋香さんは、四時頃お迎ひが來たので、お歸りになる。あとで頂戴した先刻の襟を、着物の上からあてゝ見たりして嬉こんで居ると、内玄關の格子の明く音がする、必つ

と、お歸りだらうと思ひ乍ら飛んで行く、矢張りさうだつた。お歸り遊ばせと申上ると、帽子お渡しになつて、お客樣はもうお歸り？　と仰しやる、えゝ最少し先刻、宜しくと仰しやつてゞしたと申上ながら、おあとについてお茶の間へ入る、早速頂戴した襟お目に掛けると、そんなのが流行るのかい？　て子クタイの上へお戴せになつて、見て僕の子クタイにしちやどうだらうと仰しやつたので糸と散々笑つてしまつた。今日は餘程襟に緣のある日だね、僕は思ひがけなく子クタイが出來たし美江さんも襟が出來たし……と仰しやるので、ほんとにさうですのねえと微笑んだ。夜になつて急に銀座へ行かうッて仰しやッたので、あはてゝお化粧してふだん着の上へ紋お召のコート着てお供する、出かける時送に出た糸と松に、襟でも買つて來てやるつて仰しやつたので又、米が笑つた。

あゝほんとに私は毎日々々面白くて致方が無い、こんな愉快な日は經つて行くのが惜しい樣な氣がする、さう思ふと、尙は日のたつのが早いやうに思へるけども、まさか、そんな事もあるまい、あゝ私は確に「滿足せる妻」だと染々思つた。

さう〳〵、歸りに電車の中で、すぐ前に掛けて居た二人連れの學生が赤坂見附で降る時、聞えよがしに、大いに見せつけられたと云ふもんさ、つて云ひ乍ら笑つて降りた。何だかいやな氣がして、つと、横向くと、突然窓の外からエヘンつて咳拂して行つた、旦那樣は失敬な奴だッて、仰しやつて、而してお笑ひになつた。





敏腕を揮はるゝ若奥樣の日記

節子

西洋料理會

秋の日影麗かに硝子窓を通して、鐵瓶に湯のたぎる音靜かに、子供の室でおもとやの汽車をきしらす音と下女が井戸端で洗濯するのが聞える。昨日からの夫の羽織よう〳〵仕立上て、針を數へて居ると、高野さんから本日料理會があるからとの知らせが來た、使ひのものゝ腰一度折らぬ口上、主人の平常も窺がはれる、私も下女を出す時には、氣を付けてやらう。一度覗いて見ようとおもふた處丁度よい折行く事にした、つひそこだし初對面ではなしと、ほんの羽織を着かへたまゝで。

門内一歩玄關に列んだ履もので矢つ張り例の競進會だなと思つた。

案の通り何んとかお召に何んとか織名も知らぬ結構な丸帶さてはダイヤのブローチ眞珠のリング燦爛として視線の焼點を爭ふ樣物凄しく見えるが、然し一番目に立つたは輝く中の紬縞即ち私しの着物だつたらう。

これでどうしてお料理と見て居る、教師が『サア皆さん』と合圖に皆一樣のクヽリ袖の白裝束左胸のポツケットにノートを挾んで、ヅラリと板の間に下り立ツた、何んだか恰で解剖室へでも行ツたやうに思ツて恐れ入りて座敷から拜見して居る。

野菜の水洗から石炭を入れる迄皆教師が一人でする皆さんはと見ればそこらに來た猫をつかまへて頰ずりして居る方もあれば小指の先でしきりに大前髮の下をポリ〳〵なさる方もあるかと思ふと向の隅には腰掛に

三四人『マア奧樣のお半襟のいゝ色合です事、何所でおとりになりましたの』『イヽーエよくも御座いません、三越ですけれど……こんな物よりあなたのプローチの御立派です事、失禮ですがどちらで』『これは夫が佛國に居りました時、矢張巴里で求めてくれましたがあまり氣にも入りませんの』『さうで御座いませうね、どうしてもあちらのものは違ひますよ私も二ッ三ッ取り寄せましたが寶石は外國からのに限りますね』

　敎師は一人でザク〳〵玉葱を切つて居る。

　ジャ――ッと沸ッた油と野菜を入れたので、皆吃驚して一度にストーヴの傍に寄ッて來る、思ひ出したやうにノートに何か記して仔細らしく一二の質問する。

　御宅で遊ばす時には無くともすむべき一滴の香料の爲めに遠方まで下女を走らし、一度遣つたあとの瓶に栓を忘れて捨て置く方もあるだらうと思つた。

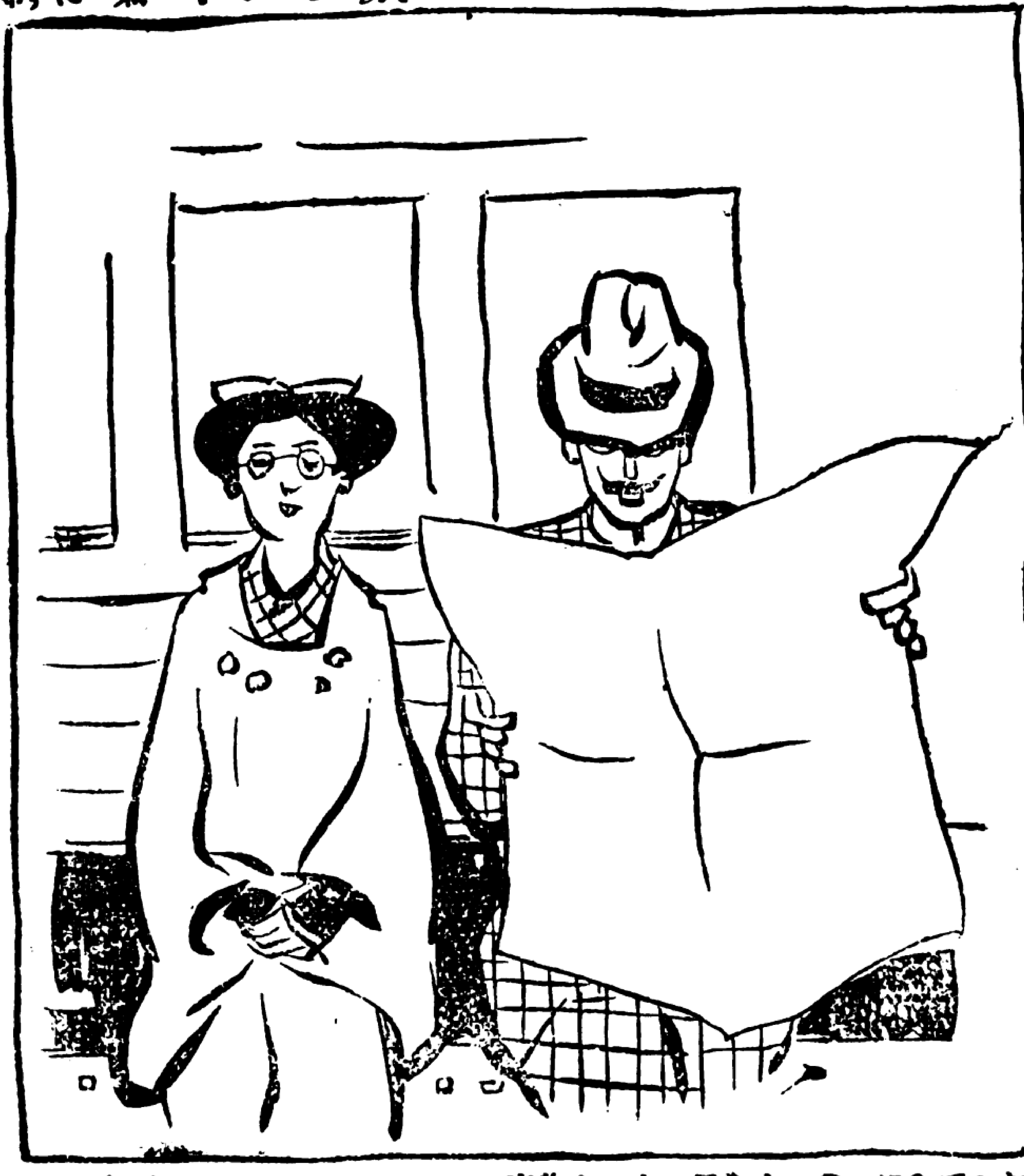
　洗ッたジャガ芋廿個ばかり『どうぞ皮をおむき下さい』と、敎師が出したので猫を抱いた方も髮を撫た方も皆一團になつておむきなさる三十分計りで出來た。人前二個には當らなかッただらう、庖刀には切れ端がクッ付いて、床に一杯散亂した皮を掃き寄せて居る敎師の度量には感心する、恐らく敎へると云ふよりは何何夫人方の來客を楽として居るであらう。

　鍋の中にはパタやら牛乳やら胡椒メリケン粉玉子、其他名もむづかしい香料やらが一々量やらメートルやらに量られて這入る、二三人の方は見て居る事もあるが大抵は又何かの品評の方の御熱心だ、私しは中途で失禮した、門を出ようとすると迎ひは名代の姑の聲、『お花ッ、お湯が沸き立つて居るにまだ火が燃えて居るよ、ソンナ事ぢやあ内の身上は烟となッてしまう――』三時間の料理會よりは私はこの一言で、よい學問をした。

不時の來客

　今日は嫌にぞく〳〵寒い、良人も始めて外套を召す十時頃夫から電話、夕かた四人計り連れて歸るから用意してくれと仰有るので、承知致しましたと氣輕には

答へて置いたものゝ、扨掃除やら支度やら、日は短かいと立あがれば、生憎二郎は朝早いものだから、もう眠いものと見えフンフン云ひながら腰に抱き付いて見れば、又叱り飛ばされもせず、マヽヨ凝かして置いてからと、落付かぬ身を横たへて乳房を含ませ、献立の考。十一時に近い買ものはあるし、髪も束ねたし、氣はハラ〳〵するにゆう〳〵たる二郎



片手を懐に押込み、足をバタン〳〵このいそがしい胸から出る乳を飲んでよくこんな呑氣にかまへられるものだ、急調子のねんねこ歌で、漸く目を眠つたやうだと、身を起せば何んの事、急に思ひ出したやうに吸付いてブラ下つて來る。エッ仕方がない、泣くのを子守の背に移した。

座敷の便所の手拭を更へて、水を入れてと下女に口早に云ひ付けて買

物にゆく、そろ〱時刻臺所も大かた調ふた、潔癖の夫、塵ひとつないやうにと、目を皿にして、不圖玄關にゆけば、大人しいと思つた長女色紙を切りきざみてそこら一杯の七夕祭り、電話がかゝる……もう三人許りふえてはわるいか、己れはどうでもよいから都合してくれないかとの良人の言葉。

　無駄に殘ッても何もかも一杯の豫算で、夫とも五人前、今更困るは知れた事、然し良人から頼むやうに云はれては何んで『出來ません』と答られよう『よろしう御座いますとも、何んとか致します』と勢よく云へば愉快らしく、『ぢやア早く歸るせ』。扨又一思案、丁度昨日見て來たものと思ッたが「バタとスープにて三時間煮る」では如何にも手が付けられない矢ッ張り母が襷がけで敎へて吳れたものが役に立つ。四時が打ッた少なくした火を又起して煮出しのたし前、お肴の不足庖刀、まな板、又臺所で一人舞臺、子供が一度に歸ッて早く御飯との大聲にも氣が引ける、今度の炭は一度消したのでも一寸は付かない七輪バタ〱、電鈴の音ツレお客樣、座敷は揃つたが臺所はまだ足らぬもの計り、御酒の催促お手がなる。雨がポツ〱ツレ洗濯物二郎が泣いて歸るア、私も淚が出さうだ。

　十二時皆さんお歸りあとは大水の引越臺所は杯盤の山。子供は皆寢てしまう良人は御機嫌がよい『今日は御苦勞だッたな』と、終日の私の疲れも皆この一言で忘れてしまッたばかりか、先にせわしいとおもつた事さへ耻かしい。下女も嘸ねむからうと寢かしてしまひ一人ポツ〱御膳の淸ぶきをする。深更の風も夫の暖かき言葉で別に寒くも感じない一時半終る。戸締りを見て火を消して、可愛ゆき二郎に添寢すれば、時雨はいよ〱降りまさッて、落葉を打ち明日は又いかに梢の淋しい事であらう。

無類！飛切の快筆、三年の溜飲一時に下る心地す、定めしこの奧樣敏腕家でゐらつしやいませう。

許婚の嫁の日記

直子



某月三日

昨日親友の秀子樣の御病氣を御見舞した身が、今日は床の内の身となつた、多分日熱を引き込んだのだらう。昨夜から熱が烈かつた。氷嚢から漏れた雫が頬を傳はつたので目が醒めた時は恰度九時。裏の銀杏の木で蟬の聲が喧しかつた。折から誰か來客があつた。そつと御母樣を手招きして、誰方？と訊けば久子樣の御父樣だよさてはと胸が躍いた、夏夜着の袖の中へ、御なつかしい舅樣と嘗いて見た、久子樣といふのは私より二つ年少の同窓の友で、半年前に約婚した人の愛妹なのである。久子樣の兄樣が東京で御修業の事は嘗て聞いては居たけれど、見た事とては無い。まして其人と結婚しようなんて夢にも思ふ處では無かつた。學校時代に友の誰彼が寄り合ふての話題に、戯れ乍らも私の未來は醫者の妻よ私は軍人が好いわそれより實業家の妻になつて働いて見たいなどが出た時私はよくまあ怎麽事が、恥かしくも無くて、仰有られたものよと思つた位で、自分の結婚問題なんかに思ひ及ぶ事は遠かつた。恰度去年私が學校を卒業た四月のこと、久子樣の兄樣は遠大の希望を抱いて遠く北米の地に渡らるゝとの事を耳にした。それきり絶えて御消息は知らなかつた。尤も御出發の前日だつたといふ日に彼方が久子樣の兄樣だと意識して、お見受申した事はある。

十二月の事であつた御懇意の吉井樣がお見えになつて、私の兩親と何か密談してお歸りになつた、聞けば私を其久子樣の兄樣の妻にとのことであつた。母樣から御前の意中は？と訊ねられた時の私の驚ろき方と困り方といつたら無かつた。何故彼時はあんなに狼狽たん

だらう。何程考へて見ても結婚しようなんて思はなんだ。第一私は結婚の第一要素?の美貌を欠き、婚資を持たず、學なく才無くして如何して良人を滿足させることが出來よう、終生の慰藉者として伴つては下さるまい、嫁つて破鏡の悲みを見るよりは獨つて居ても圓い方がましかも知れぬ。何にしたつて私の樣な女を妻にする人が五十年の兇年と云ふものなんだらう。到底不可能だ。と決心して母樣に私は未だ嫁く資格は持ちませんからと答た。

五十日の後米國から吉井樣の許へ屆いた親書は、美貌に憧れたは過去の時代だ、只終生變らぬ熱烈の愛情が大切だ、澤山な嫁入道具を鼻に掛け才學を振廻して將に敷かれちや行り切れぬ。自分とても一寒の勞働者に過ぎぬ、希くは前途の峻坂を共に相携へて越える覺悟があるならば、終生を共にして與れるやうに斡旋を願ひ度いとの事であつたとか。茲に私も身を捧げて此人を助けようと誓つたので話は直に整つた。それが今から半年前の事で、以來只鑑的に夫妻の契を結んで居る、思へば友の花江樣は逃げ出したといふその嫌な會見の幕はあの筒袖に前掛がけで働いて居た時に濟で居つたのだ。

今日お舅樣が御來訪の要は、結婚の式は本人が歸國の後に改めてするとして兎に角此休暇中に、許婚の式だけ行つて置き度い、實は吉井樣から御談申し上る筈だけれど數日來御病氣故私が代つて來ましたと御氣輕な處が嬉しく思はれた。

同十日

病氣は輕症であつて昨日今日もう全快になつた。弟の末雄が朝顔の蔓を悉皆切つて了たとかでお父樣に叱られて泣いて居つた時、「郵便!」と勇ましい聲がした。受信れば嬉しや夫からの便。中は活溌な文字で、此船で歸國る隣村の某君に、お前の處を訪ねて貰ふべく賴んで置いた。逢うて僕の消息を聞け。

夫から自分の結婚は實は妹の久子が月下氷人なんだから、記念として金指環を同氏に托して送た、さあるべき妻には反て何物をも送らざる心の内を察せられよ

と認めてあつた、私だつて女だのに、お察のない羨ましがらせを仰有ると、鳥渡よくない心が萌したのが我作ら恥かしく思はれた。私が金の指環を何にしよう嵌める柄ぢや無いんだのに……………。

貰つたよりは妹に送つたと聞かされた方が餘程嬉しい小姑への御心づくしを喜ぶ旨と今度御兩親の許へ參る事になつた事など細々と認めて寢る。

十三日

夫の在さぬ我終つべきの家に今日は初めての見參。何だか急に悲しいやら嬉しいやら恥かしいやらで行くのが嫌やになつたと言へば母様がお前本當なら一生に一度といふ恥かしい時なんだ今は相手の人が居られないんだもの末だ末だ好いと云ふものさと言はれて見ればさうかも知れぬ。

永々御養育の御恩を受けまして……とは改めて御挨拶申上ますよ今日は只鳥渡往て參りますと許りに實家を出た。お姑様には初對面である質朴さうなお姑様、おゝなを子かね好う來てお呉れだ本當に私は待ち焦れて居りましたよと双の御眼に慈愛の露る





へ宿つて居つた。私は嬉しさなつかしさが一時に胸に込み上げて、飛びつきたい位であつた。親子姉妹近親の盃も濟んだ、今頃夫は如何遊して被居るだらう。夜は人々も散つて家内限となつた。裏の無花果に身を寄て遠く北米の空を偲んで、無量の感を抱いた時、何とはなしに寂しい氣に襲はれたので急々家に這入つた。床についてからお姑樣からなつかしい夫の上の昔語りや行末の事、遠く韓國に行つて被居る義兄樣の事。嫂樣と仰有る方が情には疎い方でお姑樣が御病氣の折五日も十日も病室を見舞はれなかつた事、御實家へ往て一ヶ月も遊で來なすつた事などの御物語を聞いた。此時私は身をつくして御舅姑の御心をお慰め申上ようと覺悟した。お風邪の爲とて姑樣は一しきり咳き給ふたお背中撫で參らせつゝ途切れ途切れのお話を聞た、何時かお話が止んだ時微な鼾のお聲のみ漏れた、御寢衣の胸を好う直して上げて撫る手を止めた、此時許り嬉しい思に滿された事は嘗て味つた覺はない。時計は最早一時を報じた前の小川のせゝらぎと時刻を告ぐる秒の音が聞えるのみで思は彌ゝ深くなつた。

十四日

常より早く目醒めた其筈今日は家が違うんだもの、實家に居れば御飯を終てから氣に入た樣に緩くり髮を結げるのが常なんだけれど、今日は周圍の形勢を見乍ら手早く結上る。隣家だけへとお姑樣に伴はれてお顏出した。向隣の中村樣といふに私と同じ年頃の鶴代樣と仰有る方がおありなすつて、頭髮の先から爪の下迄見上げ見下ろして輕蔑むが如くであつたのが苦痛かつた。鶴代樣といへば「女學世界」によく見える、秀方女史の描かれた美人といつた風な鳥渡得難い美しい處がある、何程私が己惚れて見ても遠く及ぶ處では無い、お家柄なら御綺麗ならほんに御不足のない此方を如何してお嫁に貰はなかつたらう。何やら氣に掛つてたまらない。話の序に『鶴代樣つて眞實にお美しう被居いますのね』と申上たら顏は美くても心は惡いよ不品行で浮名を流したんだものとお姑樣が仰有つた。聞けばお氣の毒な思もされた。裏の柿の木を無邪氣に久子樣が

叩き始めた。お舅様は接木が大功を奏したとて大喜びお姑様はこれもお前達の子供に澤山やり度くての丹精なんだよと嫣笑されて姉妹を御覧遊ばさる。久子様は一心に叩くオヤ落ちたアレ溝に早く荒井様（私の姓）急に又「姉様」と呼び改たのも可笑しかつた。

眞實に久子様私が貴孃の姉様になるなんて不思議でしたわね斯うと知つたら學校時代にもつとお行儀を謹しむんでしたにねェ、、、。

寫眞帳の一頁に私の好きな五分刈の書生姿、視れば中學時代の夫であつた。何時であつたか實家の兄様に襟が少し高過ぎますねと申上げたら馬鹿いへお前の夫の見ておやりと夫の寫眞をつき出された。これは場所柄で仕方がありませんさと言つたら、非常に庇護ねと笑はれた事があつた。

郷に入つては郷に随へで高襟は止むを得んとは夫から聞かされて居るが、昔は矢張り頭髪などお分けなさるのはお嫌ひであつたかしら、人知れず暫し寫眞を熟と視た。

今夜も亦お姑様から嫂様のお噂聞つた。實家が有福な農家で殊に一人娘であるだけに着物の數など不明ぬ程に持つて嫁たらうとお姑様は何の氣無しに仰有つたけれど年若い私の胸は抉らるゝ思ひで有た。

僕は貧乏が大好きだから決してそれを氣にして呉れるなと夫の言葉に力を得ては居るものゝ打續いた實家の不幸が今更恨めしく思はれた、せめて四五年前の我家の經濟が維持されて居つたなら、四季折々の着物位に肩身の狹い思ひも無かつたらうに……。嗚呼這麽つまらぬ心遣ひを儲けるなら、寧そ婚約なんか承諾せなかつた方が益しだつたかしら、思ひは千々に亂れ眼は彌ゝ冴えた。時に心の一隅で叫び聲がした、確聖書にあつたと思ふ、狐は穴あり空の鳥は巣ありされど人の子は枕する處なしと。奮然憂ふる處が何あらう。燃ゆる眞心を心に着て老ひ行く末の御舅姑をいたはり夫を助けて立つて見せよう。



小間使の書いた小姑奥様の日記

こほろぎ

好い按排に日が出て來た。日さへ當れば女部屋は冬知らずだ。仲働のお信さんが「奥様はきつとおできになつたんだよ」と今日は是でもう三度云つた。「お察しがいゝよ、所帶くづしは違つたもんさ」とお留さんが窓の下でぢやぶ〳〵洗濯しながらどなる。

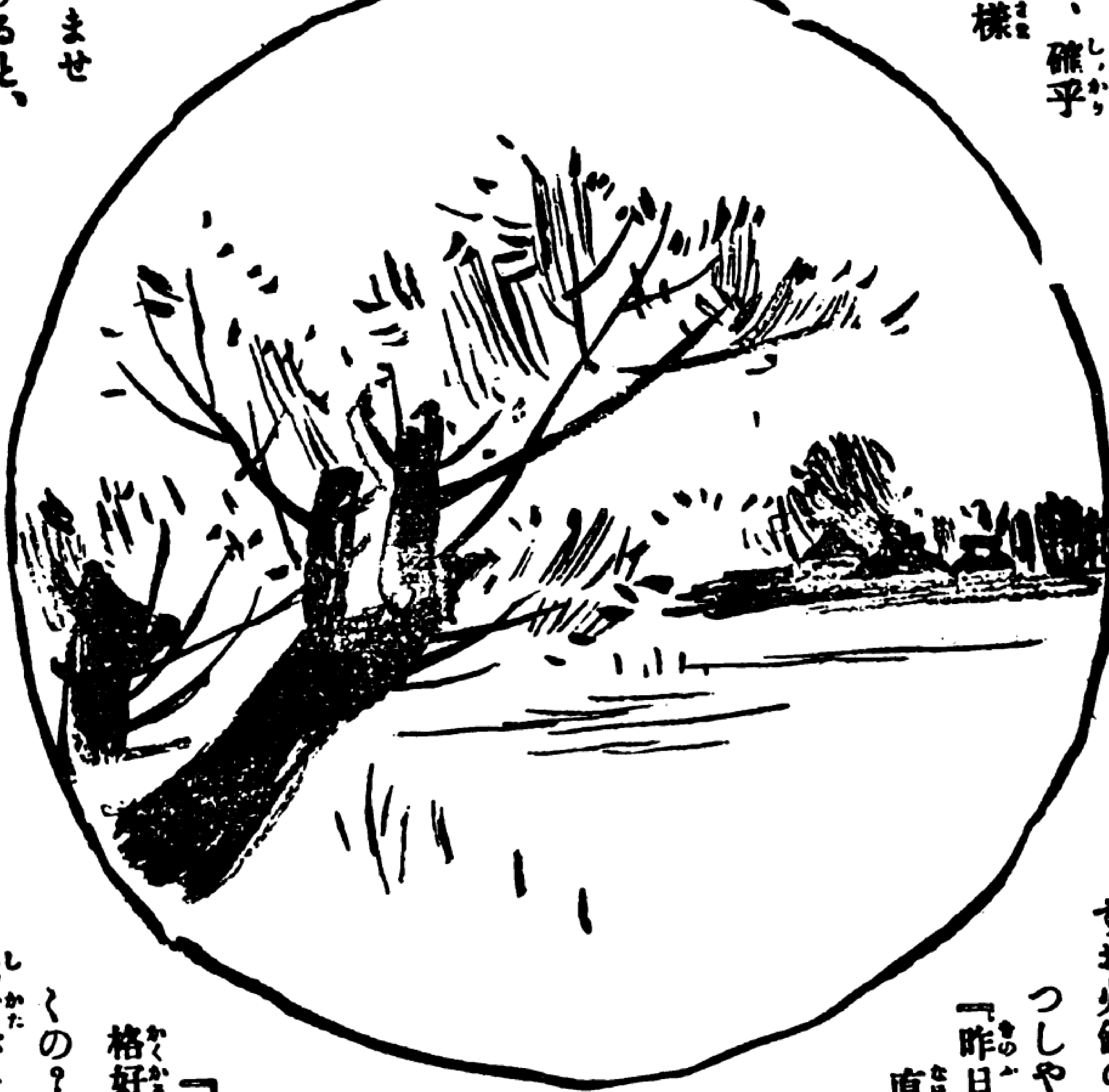
奥様はほんとに如何遊したんだらう、お信さんの云ふ樣なのならいゝけれども私は又、餘り御心配遊すんでヒステリーとかいふ彼病におなり遊したんだらうと思ふ。此節は兎角ぶら〳〵遊して御飯も召上つたり召上らなかつたり、何を遊すのも御面倒らしいし、もう彼是晝餐になるのに未だお起ならない。先刻魚屋の來た時、何に致しませうとお吟樣に伺つたら、『私は知らないよ奥樣に伺つて御覽』と仰るから徐とお部屋の障子を明て見たら、彼方向になつて泣てゐらしつた。

御妊娠でゞもあれば猶更の事お吟樣が「私は姑代りだ取締だ」と始終云つてゐらつしやるんだから斯いふ時にこそ能くお世話しておあげになればいゝのに、それに一度お嫁きになつてお子樣も二人とかお持ちになつたのだから、大にそこいらの御同情とかゞ有さうなもんだ。それでも此節は旦那樣が全然諦めて何にも仰らないからまだいゝけれど、私の上りたての樣に三日にあげず御兄妹喧嘩を遊す樣では奉公人だつて勤め難い。そりやお吟樣だつて能くお氣は附し私達には些も惡い方ではないんだけれど——、忙しい時には餘計な金も氣を附て下さるし、臺所なども手傳つて下さるもんだからお信さんなどは最負して、「是だけの大家を切

つて廻すのだものあの位確平してゐなくつちや」と云ふけれど——、確平にもよりけりだわ。おや奥様がお起なつた様だ。

往つて見るとちやんとお召を召着て、こはれたお髪をピンで留直してゐらつしやる。「如何で御座います？」と伺ふと、「どうもねえ」とぺたりと坐つて、指輪の脱さうな細いお指で櫻紙を四五枚剝してお鼻おかみになる。

「お午飯にお粥でも拵へませうか」とお床を疊みかけると、お吟様が、「幸、幸や！」



急いでお茶の間へ往くとお吟様は相變らずお火鉢の傍で縹色絹を繼でゐらつしやる。

「昨日頼んだ糸織の裾はもう直つたかい？」

「あ、つひまだ——」

叱られるかと思つてびくびくしてゐると、

「さう、急ぎはしないけれどね」

ほつとして起たうとすると、「あ一寸一寸」と仰る。何の御用かと思へば、

「あの、お前の髪は面白い格好だねえ、どういふ風に卷くの？」

爲方がないから前掛を捩つて、斯う

して斯してとお目に懸てゐると、奧樣がぱたり〳〵とお床を上てゐらつしやる音が聞える。

『大變い〻よハイカラだわ、私も今度然いふ風に結つておくれな』

お吟樣のお髮上は閉口する、黒くて多いお髮だけれども何分酷いちゞれで——。いはゞもう後家樣なのだから好い加減にしてお置になればい〻のに、やつぱり奧樣に負けない氣でおめかしになるんだもの。

あ奧樣が出ていらしつた。又何か當擦りを仰らなければい〻が——と思つてゐると、

『おやお目覺、お早うございます』

『どうも毎日ぐづ〳〵して居りまして』と奧樣は大儀さうに膝をお突きになる。

お手水を汲らうと思ふと又『一寸〳〵』爲方がない

『あのねえ、あの——毎日來る魚安の男ねえあれ何ていふの？』

『源——源さん〳〵と呼つて居ります』

『ふうん、キザな奴だねえ魚屋のくせに髮なんか分けて』

奧樣がお湯殿でバケツをカラ〳〵さしてゐらつしやる、お信さんがお湯を汲て上ればい〻のに、あの人は仕事に掛るとお尻が重くて仕方がない。此寒いのに板の間へ坐つてお水をお使ひになつちや堪らないわ。お吟樣は私を起せまいと思つて、やれお前は肥つてゐて羨しいの、やれお隣の西洋館が空いたのと滿らない事をお話しかけになる。

辛と切脱てお湯殿へ往つて見ると、もうお化粧室でお髮を解してゐらつしやる。

『お私が結ませう』と云ふと、『い〻え』と仰るから、

『ぢやお癖直しのお湯を』と申上たがそれも要らないと仰つてぐる〳〵卷にしてお了ひになつた。此節どうして斯不性におなりになつたのだらう、どうもヒスの字ぢやないかと思ふ。今朝も旦那樣がお出がけに、

『寢るのは構はないが然ものを食はんぢや困るねえ、何處が病いんだか森田に診て貰つたらよかろう』と旦那樣だつてどんなにか御心配だらう懇々と仰るのに、

お顔を夜具に埋めてかぶりばつかり振つてゐらしつた。『診て貰ふのが嫌なら容態で藥だけも貰つたら』と仰るとお信さんが傍から例の『おできになつた』を振舞して、『めつたなお藥は召上らない方が宜うございます』など〻餘計な事を云ふのだもの旦那樣だつて變なお顔をしてゐらしつたわ。私は此方で極りが惡かつたから、お洗濯に遣るおシャツを持つて密と出ると、お吟樣が懷手をしてお緣側をぶら〳〵してゐらしつたつけ、あのお目で私をぢろりと見て



すた〳〵お座敷の方へ去つてお了ひになつた。まさか立聽してゐらしつたんぢやあるまいが——、變な方だ。

奥樣にはお午飯にお粥を拵つて差上たが、梅干で輕く一碗召上つたぎり、お好な照燒にもお手がつかない

お吟樣はお箸を擱くと直又向直つてせつせと繼物をお始めになる。奥樣はだるさうに見てゐらしつたが、

『よく御精が出ますねえ』と苦しさうな笑顏をお作りになる。

『え〻斯して丹精でも爲なくつちや居候は追

付ませんもの、知らないうちに三越からコートが出來てくる樣な御身分とは違ひますからねえ」

そんな事を仰らなくてもいゝぢやないか、三棹の簞笥に一ぱいあるお召を御自分の勝手で召さないんぢやないか。

さつさと片附て私の方も御飯にしたが、何だか心配な樣で怖い樣で胸に閊へる。

お茶の間では時々お吟樣が何か仰る。奥樣のはお義理の樣なお笑聲よりしか聞えない。

「あゝしてお冷えになるよりお寐つた方がいゝのに」とお信さんも呟いてゐるけれども、流石にお吟樣の前で申上る程の勇氣はないと見える。

御飯を終つて、奥樣のお部屋をお掃除して、後へお床を展て置かうかどうしようかと考へてゐるとお机の上の寫眞帖が目に附く。度々拜見したのだが一寸開て見る氣になつた。初の方はお實家樣の御兩親やお兄樣方。それからお友達のは皆樣立派なお服裝だけれども御容色は當家の奥樣が一番いゝ。お島田で黒のお振袖を召て旦那樣と御一緒に寫つてゐらつしやるのは幾度拜見しても飽きない事。旦那樣もお立派だ事。日々の御洋服より斯したお袴姿は又お立派だ。意地の惡いもんでお吟樣は些も似てゐらつしやらない。おや一枚珍らしいのが挿入つた。まあ活潑さうな可愛いお孃樣、此手に持つてゐらつしやるのは何とか云つたけねえ、ヲケ、ケット――、とか何とか西洋の球投のお道具だわ、私も一度こんな風をして寫して見たい。お袴を裾高に穿て柴折戸につかまつて一寸考へた樣な風が何てまあ――、あら、いやだ！　是や奥樣だわ、まあ然思へばよく似てゐらつしやるが御風がまるで――、いつ頃のだらう、お十――七位かしら、まあ、あんな温淑い奥樣がこんな女學生さんだつたのかしら、お！　さうさう斯な事しちやゐられない、早くお吟樣のお据直しを爲なくつちや。

午後から又風が出た。私はお据直しお信さんは旦那樣のお羽織、お留さんは八頭の皮を剝ながらあーあッと欠伸をしてゐる。お茶の間は日當が惡くて寒いのだ

からお吟様は御自分のお部屋で遊せばいゝのに、日當を云つたら當家ぢや女部屋が一等だ、背中はぽか〳〵するし、餘り森としてゐて眠くなりさうだ。

「お信さん何か芝居のお話し爲なくつて？」

「うん芝居も此節は観ないから種がないや」と首を振り振りマチを附てゐる。「ぢやお留さん」といふと、「私だつて知らないわ、あ面白い唄敎へて上ようか」と可笑なラッパ節を低聲で唄ひ出す。「白い手巾は出齒隱し黒い眼鏡はやぶ隱し」叱！ とお信さんが矢庭に尺度で打つた。何をするんだらうと私迄あつけに取られてゐると、「解らない人達だねえ」とお茶の間へ指示してお留さんをぐつと睨む。「あッ」とお留さんは出した舌を急に引込めない。私も辛と解つた。するとお茶の間で「誰だい」さあ如何しようと誰も返事する者がない

「巧いねえ誰だい？」あはゝゝゝとお留さんは笑出して了つた。お吟様は遂々出ていらしつた。懐手して障子に凭れながら、

「留には美聲だねえ、何か習つたんだらう長唄でも」

先いゝ御機嫌で安心した。

「お吟様留は常磐津が巧いんでございます」とお信さんが云ふと、「あゝ嘘でございます」とか何とか急に陽氣になつた來た。奥様はと覗くとお茶の間にはゐらつしやらない。

「さうかい豪氣だねえ、何がおはこ？ 嘘だよ知つてるよ、私も習ふなら常磐津か長唄だねえ、あの齒の浮く様なバイオリンなんぞプウ〳〵やる人は氣が知れないと思ふよ」

「全くでございますよお吟様、留なんざあれを聴くと頭痛がして參ります」と常磐津の先生調子に乘つて大きな聲を出す。此人のは惡意で云ふのぢやないが、神經家の奥様がお聞になつたらどんなお氣持だらう。お吟様は大滿足で、

「留は却々話せるねえ、ねえ信どんなもんだらうバイオリンの名人が子持になつたら」

私は氣が小いから胸がどき〳〵して其場にゐられない。便所へ起つた序に奥様のお部屋へ往つて見ると、

お羽織だけ脫でお床の上にごろりとなつてゐらつしやる。あゝ私が先刻展て置ばよかつた。

何だか樣子を見に來た樣で極りが惡いから、

『お火はございますか』と伺ふと、

『お火は不要よ、大變賑かねえ』と今朝から見れば幾分かお顏色がよくなつた、が依然何にも喰べたくないと仰る。

『でも何か召上りましなお好なものを。あ水菓子なんぞは如何でございませう』

『あゝ水菓子ならいゝわねえ、蜜柑か何か』

まあいゝ按排だ。丁度昨日會社の加瀨さんが大きな果物の籠をお持參になつたから、あれを開ませうかと伺ふと、

『あれは不可の。お吟さんが何家かへお進物にすると云つてゐらしつたから』

お進物に――？　必然嘘だ。お吟樣にはお友達もないし、何處へも持つていらつしやる處は有りやしないもの。あんなに又お外出にならない方もない。あゝして始終お在宅で、繼物や臺所の世話ばかりしてゐらつしやるもんだから、奧樣だつて御自分ばかりお出步きになる譯にもいかず、さうかつてお家にゐらつしつてもお吟樣といふ小姑があつて、何から何迄遊すんだから却て手持無沙汰で、旦那樣と餘りお話し遊しても御機嫌が惡いし、何にもお張合といふものがないもんだから、遂々こんな御病氣が發て了つたのだ。

『だつて奧樣其進物とやらは何日の事だか解りませんし、さう云つちや何でございますけれども、實際の處お吟樣より奧樣の方がお大事な方なのでございますもの、かまや致しませんわ』私にも似合はない隨分思切つた事を云つた。然し女部屋で皆が騷いでゐるから大丈夫聞えやしない。

『幸も少し私のお仲間で陰辨慶だねえ』と奧樣が珍らしく心からお笑ひになつた。

蜜柑のお問題は遂々立消になつて、

『お前仕事は今何してゐるの？』

『あのお吟樣のお直し物を』

「ぢや早く爲てお出な、よう、叱られるといけないから」
私は『奥樣赤ちやんがお出來になるんでございますか』と餘程口迄出かゝつたが、どうしても極りが惡くて云へない。
あゝ掛花活の寒菊がすつかり枯れて了つた。今迄こんな事はなかつたに、奥樣のはやつぱり御病氣に違ひない。
『何をそんなに考へてゐるの？』と仰るから、
『別に何にも――、奥樣早くお癒り遊ばせな』といふとあゝ惡い事をした。もう一ぱいお淚を溜てゐらつしやる。改つて御免遊ばせなどゝ云ふと猶惡いからお夜具をよくお掛け申て、消る樣に出て來て了つた。



知らん顔して女部屋へ來ると、私の仕事をお吟樣が急いで舊の位置へお置きになつた。お信さんが妙に笑ひながら、
「クシヤミが出やしなかつて？」といふから『何故』と訊くとお吟樣が、
『今お前の事をほめてゐたんだよ、色が白くてハイカラで美い女だつて』
何て云はれたつて私なんざ怖かないわ、お氣に入らなきやお暇をとるばかりの事だよ。

寒氣に對する子供の衛生

ずつと世間を見渡したところ富豪や貴族の子女が纎弱にして貧民の子女が比較的强壯なることは今更申すまでもない、何故に攝生上に不足なき上流社會の子女が纎弱にして、生活上に無頓着な下層社會の子女が强壯であるかと申すと之れは全く子供が習慣上より來る抵抗力の强弱如何に因るものである、此處が即ち親々の注意を要するところである元來富豪の子供が一般に纎弱のは之れを一口に評すれば餘り親々が可愛がり過ぎるからである即ち大切にし過ぎ可愛がり過ぎるが故に抵抗力が段々と弱くなつて來るのである夫れ故に氣候變換の時季や、口に馴れざる飮食物若しくは些々たる運動等に依りて風を引いたり、胃腸を傷ひたり、或は非常に疲勞するのは、之れ全く上流社會の子女が平生の習慣上より身體の纎弱に陷り、凡て外圍の事物に抵抗力が弱いからである。之れに反して貧民の子供が攝生の不完全なるに拘はらず、比較的强壯なるは平生の攝生習慣が、能く諸種の外圍に耐るの抵抗力が强いからである。

以上の定義は今日醫學上に於て既に爭ふ可からざる定論であるから上流社會の家庭に於ても今日にては餘程此點に注意する樣になつたが尙古來の習慣上此弊害に氣のつかない家庭は隨分澤山あるやうだ。

今こゝに一二の例をのべると上流社會の家庭は、朝餐前子女の洗面に溫湯を用ゆるのが慣例であるが是れは是非冷水に改めれば不可ない、冷水は獨り洗面のみに限らず、口中までも能く冷水で含嗽すれば、寒氣に對する抵抗力は漸次强固になつて、滅多に風邪などには罹らぬ樣になる、風邪は百病の基といふ位であるから能く此點に注意せねばならぬ殊に衣服の如きは平生厚着の癖を附けると偶々薄着の節寒氣に對する抵抗力が非常に弱くなるから秋冷の頃より薄着に慣らすが最も必要である、然るに上流社會の家庭は寒氣も未だ甚しからざる頃より、夫れ襟卷、夫れ手袋と、餘り防寒の方にのみ注意を傾ぐので、之れが却つて身體の抵抗力を弱くするのである、又夜具の如きも。餘り澤山に着せると、子供は却つて暑さに耐へかねて夜具を跳飛して之れが爲め風邪を引くことがあるから、此點には餘程注意せねばならない。



賑はしき一家の日記

美穂のまつ

△十一月廿九日

毎日々々よく御天氣のつゞく事……北風強くほこりが煙のやうに、幾度拭ても机上が眞白くなる、きのふ活けた水仙がまた葉が離れて、なほして居ると、松が待ちにまつた「女學世界」を持て來た……開けて寫眞を見ると嬉しい實枝の宮樣が御出になる、裏には、山本さんと加藤さんが、まあ富子さんの昔變らす御美しいこと……今日は上野の演奏會前から行くつもりで嫂樣と仕度したけれど餘り風がひどいからと母樣に止められてしまつて殘念ながら裁縫に取かゝつた、せめて終曲だけでも、タンフオイゼルが、折角切符も有るのだもの、考へ〳〵三時になつてしまつた、休暇時間が來たのだ、急いで片付けて茶室へ行たら父樣はもう御出になつた、お八つは中華と昨日青森から來た林檎……兄樣も御入來、是で甘黨の味方が二人、山なす城は大分落ちた、今度は果物と手を出しかける、流石の父樣も御笑になる『よくいけるね』兄樣平氣なもので二つ三つ召上る、……四時半のタイムが鳴た、婆やが玄關で何か言てる、と思たら正二さん(從兄)が國の別家の兄さんを連れて來たのだ、サア久方ぶりといふので父樣が大もてなし……私が生れて始めて會ふのだから何だか變で仕方がない、陰で聽くより見た方が餘程立派な人だ、此人の口に逢ては知事も事務官も玉なしである、何ば學務委員で教育視察に來たからつて、そんなに大風呂敷擴げずともよささうなものと噂に聞いた大ぼら先生も顔を見ると一しほ可笑しくてたまらない、丁度御酒肴が出たからよい機に次へ逃げ出した、兄樣と嫂樣と正二さんと食後しきりと御話しが面白さう、

ませかへしに仲間入りした、此所もまた獨自慢の盤ガヲ揃ひ、今こそと日頃の恨みを逃べてやつた、嫂様も加勢して『ほんとに美穂さんのいふ通りね……御話しばかりは日本中でも實地は一哩先も見せて下さいませんくせにね……』『これあ一本やられた』と頭かきかき四圍見まはして『此間新調の金屛風の式紙に未だ何も書いてないので、何故書かぬか』といふから『まだ先生に御頼しなかつた』といふと『ぢやあ僕が書きませう』（十一月廿九日夜從兄攻擊紀念）と大笑ひした風がまるで鬚達摩のやうで是でも最高學府のスカーラーかと思ふと滑稽でならない、次弟はもう法學士で自分は未究々して居るのかと思ふとかはいさうだ……九時頃大氣焔で二人共歸られた。

△三十日

昨夜正二さんが玉川を非常にほめて居たから行かぬかと嫂様が仰しやる、私が兄様に道筋を伺ふと『未青山方面から行かぬから知らぬ』といはれる、では一緒に行て下さいと願へば『馬鹿いへ……晦日ぢやないか……』随分亂暴な……未に學生口調が脱ないでこまつて仕まふ、淑夫さんなんか學生でも實にやさしい……嫂様は脊で笑てゐらしやる……仕方がないから自分で玉電へ問合せたら、青山終點でい丶といつたから嫂様に申上た……却々御裝飾が長いから、私か着物換へてもまだ御髪が出來ない……婆やにも仕度させて御辨當も出來た……十一時やつと、出掛けになると、兄様『今から行てどうする？歸りは明日になるよ……』斯いはれて見ると始めての處ではあり女連れではあり、氣味が悪い……嫂様が止めようと……婆やが參りませう、何方にしたらい丶かと、母様に伺ふ……では氣休めに日比谷？植物園にしたら、と嫂様のいふやうに小石川にする……婆やが足が遲いから手を引いてやつた……涙をこぼして喜んだ……植物園は四季折々眺めがい丶、枯野の景……初冬の池……浮島……理科の人らしいのが十人ばかりちらほら見えた、山の上の亭で御菓子を食べながら、平原一覗の中……實に仙境！原町の精一さんはよく來るさうだが、此邊に憩ふのであらう……

歸途小石川終點で柳川さんに逢た、あした學校で淑夫さんに言告る事であらう、家に入たら電燈がついて居た『まア……御歸り』とは、いつもやさしい母様……晩食の卓を圍て居る時三田の長崎さん(從兄)が來た……野球談に繪葉書持て……やはり東京チームが一等だ、皆老將軍だもの……長崎さん口角泡を飛して說明して居る、デヴロー云云……父様絕えず笑てゐらつしやる……上野に友を送るとてボートのチャン(長崎)はソヽクサ歸て行た……明日は此邊の大掃除だから何地へか逃げ出さうと嫂様と評議して寢に就いた……十時、晝のやうな月あかし。



△十二月一日

朔日故例のミルクとパンはならぬと、小豆飯に三つ物付膳に坐つた、何だか美味しくない……外はパタパタ始てゐる、仕度も早々代々木の松本さんへ嫂様と逃げ出した……義叔母様に笑はれた、美穗さん來年は？いゝ御嫁さんですよ十九て云へばオホ……又相變らず冷かしが出た……宗ちゃんは大きくなつた六つだもの其筈……私は此代

代木といふ處が大好きなので、基さんと約束しては散步するのが樂しみだ……さういへば彼の人は此頃麻布(本宅)にばかり居ると見えて少しも逢はない、姉樣が御產後どうかしら？……何日か電話かけたきりだけど……今日一寸池田(基さんの居られた)の許へ寄て見ようかしら……よそう〱また彼處のお爺が基さんをほめ立てゝうるさくていやだ……嫂樣とずつと山谷の方から角筈の方へ出て一日野外散策をして……夕方歸て來たら、もうちやんと卓の飾も整つてゐる、南天と葉牡丹が生々挿されてあるし……我々は何となく呑氣らしくて可笑しく顏見合せて笑て了つた……今夜は皆の骨折祝ひで、茶わんむしとフライの御馳走だ……食後は義叔母樣から戴いた翁堂の餡餅を出して兄樣大恐悅……やがて鬪球が始まつて父樣と兄樣は御目が皿のやうに、母樣は御下手で私が三度つゞけて勝た非常にくたびれて、臥床に入たら、目が冴えてこまるから「女學世界」を讀出した。

△十二月二日

朝からこんなよい日はないからと嫂樣六郷上りへ散步に行かうといはれたので髮を結ひかけたら宗ちやんが遊びに來た……一緖に連れてもいゝが淺草の方がよからうとて兄樣が連れていらしつた……まるで御子のやうに見える……嫂樣今日はずつと、ちゞみに、コート召してマダムに結て金のピン一つさして橫むきになられた容子は何ともいへない、私の理想の佳人……どうして斯高尙なのかしら、そして溫順しい麗しい心の方……母樣はいつも叱言の際には好い標本に御出しになる位……二人で四時頃紅葉と蔦の御土產持てかへつて來たら父樣が「大變早かつた」と迎へて下さつた……兄樣も五時半に歸て來られ、長崎さんが來る、夜は大勢で種々の御話しが出る、歌留多を戰す、更くるを忘れる程賑しい、雪隱へ行かうとしたら窓から淸い光が流れ込でゐる、あゝ何とよい月!!

△十二月三日

とく起きて見れば鏡の前に一片……なつけき筆の跡！袂に急ぎ入れて朝浴して二階に走せ昇り……クロー

ヴマーとフォーケッドミーナットがひらりと落ちた、こんなもの贈られてどうなる事―尊い清い黒字が一番忘れ難いもの……實に淑夫さんは友情が厚い……精一さんの病氣?を心配しきつて居られるのだ……私がいつぞや夏子さんのいたつきを悲しむだやうなものだけど……今の世得難い事ですわ……今日は先生(佛語)の處はやめにせう、頭が重くてたまらないから……春の手傳して空拭かけた……もう十一時、新潟から熟柿が來たとてお初が來た……お辰さんが居たら嘸喜ぶだらうに……讀書をしても何だか或一物に氣を奪はれて居る、私も餘程愚かになつた、先にはもつと確りして居たのに……斯して秋も暮れてしまつた私の大好きな……四時半吉田さんが來られた親類に婚禮があるので相談?……御酒が出たまたお長いかしら?正二さん(從兄)が大藏省の歸りに寄た、兄様と話して食事もなさらず歸られた、……私は徒然凌ぎに「英語世界」を讀む却々面白い、殊に初學欄は親切な教へやうでむかしを繰返す心地がした……吉田さんは大分まはつたと見えて御壓な事……御挨拶もまだしないが此處を去るのがつらいのですもの……十日のお月は我南窓に玉と照輝いて……群星は瞳こらして瞰つてゐる……幾多の悲劇……幾多の歴史を、絶えず、變らず見知つてゐるのは此月より他に何者があるでせう?

△十二月四日

心地すぐれず、玻璃越しの日は一ぱいさすけれども天井の柾目の數をして茫として居ると婆やがガタピシ盆栽に水やりに來た少し遲いと此目に逢ふから羽織引掛けて湯殿へ行た……寒氣がするから浴はよさう、換衣して居ると臺所で笑たり跳ねたりするのが聞える、何かと思たら高濱から脊くびが來たのださうで、さゝいな事によく騒ぐ者達だ……今日は床飾りを變へるのだそして母様が玉章の冬枯を御持ちになつた、一生懸命に柱を拭てピカ〳〵にして置物は鳩ので何時見ても可愛らしい……紺屋が來たさうで、春着の色をきめてやらねばならない、葡萄もよし、空色もよい、總てゐると嫂様が空色にしなさいと仰有つたから、それに

きめてやる、いざ机に向ふとチリン〳〵リ、、ンと電話の鈴が耳に入る、ハッと立ち上つたが、あゝ懸る筈はない此方から明日金本さんへかける約束なのだ、おひる迄英佛をさらつて、後から父樣の御召一枚だけ綿入れて……大至急思出して、鈴川さんの手紙を見る、やはり金曜午後三時までに……そんなら今朝、白茶のリボンにすればよかつたのに……まあ何でもいゝわ…………着物だけ大縞にせう……帶はこれで澤山だ、華紋の被布引羽おつて、スタ〳〵出かけると、廊下で嫂樣にぶつかつた、ひさしがくづれて心配……嫂樣クスクス笑て『美いさんホ……鈴川さんが先刻から御仕度はまだかつて待てゐらつしつてよ……』とひんまがつたいもんを直して下さる、此處に嫂樣の有難味がいよ〳〵深くなつた『いよう出來ましたね……』とカラー直してお鬚をひねりながら、出て來られた風采は上つてる…………英國式に顔を日毎にするつて精一さんを惡くいはれた其人は、やつぱりさうらしいわ、チックで一本々々ヒゲブラシユになぞかけて……中折帽も男らしい、ステッキ持ちなほしてヂヤ行て參ります、どうして斯う同じ從兄の中でもいろ〳〵なのかしら、鈴川のは叔父樣がいゝからね……銀座へ行て三枝へ寄てマッフを買ふのに見てもらつた、秋一さんも皮の手袋を買た、すつと新橋から土橋へ入つて日比谷を廻て家まで送て與れた、いくらとめても中井(淑夫の家)へ行くからとて歸た、嫂樣の鴨料理お椀に、すき燒、炒鳥……食後、例の青森みやげ、嫂樣のお琴……久々の松竹梅……此間ワクチルで眞佐喜さんのを聽いたが相變ずお手がよくア、まはると思ふ……ヴアイオリンは少々お恥しいわけ……今夜は地藏樣の緣日、家の前まで賑かだ、表二階から見ませうと嫂樣とソット、外から見えぬやうにながめる、出るわ〳〵町孃、長屋娘……寒のに厚化粧で御苦勞樣……といらぬお世話、お化けのやうねえと嫂樣にいへば、たしなめられて笑ひこけるのを袖に包むだクサメ一つお風召してはと下へ降りた……庭とは名のみ猫の額ほど、立木は多く霜枯れて銀杏の木はまるばうさんに、其上へ、瑠璃色の空に凍たやうなお月が……思はず嫂樣と手を握つた……。



私の胸に秘めたる三年間

苔の花

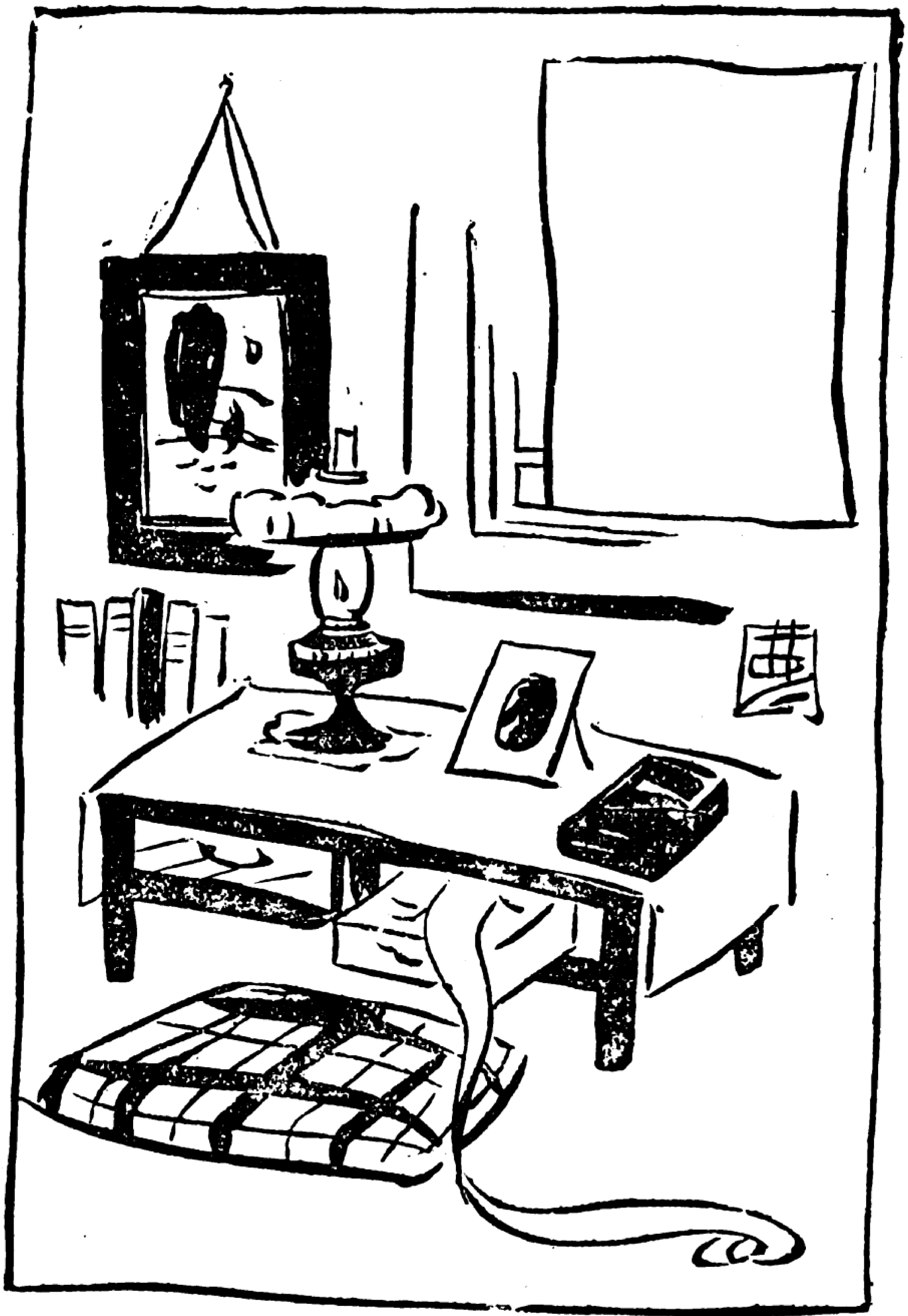
十一月廿九日　今朝は大層霜がひどい。お部屋の屋根もお湯殿の屋根も、まるで雪がふつた樣。道理で明方から、足が冷えてねられなかつた。お祖父樣は、もう、御庭で、銀杏の葉の、御掃除『まあ御祖父樣、此さむいに、お風を召しますよ』といへば、何是位のことでとなか〳〵お達者なもの、ほんとうに、お祖父樣のこと考へると私など何故かうも弱いのであらう。いまの若さで潤子さんの弱蟲にもあきれてしまう。とは、いつも叔父樣の御言葉、それでも今日は、どうしたものか、例の持病も起らない。おほかた、叔父樣の御藥が、きいたのであらう。御陰樣でどうもと、御禮をいへば叔父樣、笑ひながら「當り前さ、僕の藥に、きゝめのないものなんかありはしない、其代り藥價は特別だからよ」とおつしやる。あゝあんなところなど、ほんとうに、お母樣そつくりだわ。お晝前、靜ちやんを抱いて、御庭で遊んでゐると御座敷には、何だか御客樣があるらしい。春やに、きけば村長さんと、保險會社の御醫者樣だといふ。どんなお方であらうと、用もないに、御座敷の前を、二度ばかり、村長さんは、例の眼の飛び出した人で、あれも御病氣のせいだときけば、何だか御氣の毒である。いま一人の御醫者樣といふは髮にチックとやら、眼には金ぶちと、まばゆい許りに飾つてはゐらつしやれど、その御眼元と、御口元とにいひしれぬ、いやしさが、ほの見えてよい、御つもりの、指環まで一層下品らしく、一見、氣障なといふ感じは禁じ得ない。あれが、私の旦那樣であつたらば、

否あんなところへ嫁つたらば、オヽいやだ緣起でもない、私は外交官の奧樣になるのだもの、東京の叔母樣が、どんなにでもして心配してやるとおつしやつたつけ。どうしても、外交官の奧樣になりたいわ。さうして昨日もみた、あの雜誌の口繪の樣に、華美な洋裝で、自動車にのつて、花の都の巴里やロンドンの市中を今日は夜會、明日は園遊會と、スケーチングやワルツの舞に妙をえて、天晴、交際社會の花と、うたはれたい。さうして、旦那樣はあくまで、おやさしくつて、しかも、一種冒しがたい威嚴があつて、素性は何でもかまはない樣なものゝ、矢張り平民よりか士族の方がいゝわ。それで、次男か三男で、大學卒業で、結婚してから一ヶ年位は、日本でつとめてほしい。あゝそんな處へ嫁きたいものだ。それも、いま直ぐでなく、一二年はお母樣のお側にゐて、それからがいゝわ、今直ぐでは、絕對にいけないといふこともないけれど、少しは、どうもお母樣や、妹などの側で樂しく暮してみたい。そんなことといつてると齡ばかりとつて、婚期をはづして、いゝところへは嫁かれなくなると、叔母樣はおしやれど、私の身にもなつてみれば、十二の齡から親とは名ばかりの、他人の中で育てられ、現在うみの御兩親や、血を分けた兄妹はありながら、其溫い味は知らないのだもの、漸く危い虎口を逃れて來た私、あのやさしいお母樣の、御袖の下で少しは息をさせて頂きたい。それから緣あつて、外交官の奧樣となるとしても私に、それだけの資格が、あるかどうか、松江の學校にゐる時代から、級中でのいんじゆん者と指され、人の前では、ものもいへないといふ私、どうして、どうして、華々しい交際が出來ようか、又、かりに出來るとしても、私の爲には矢張り苦痛である、苦痛を忍んでまで、そんな位置にたつ必要が何處にある、まあ、情ない、私の心はいつか虛榮のとりことなつてゐた。そんな高い地位になりたいといふも、只在學中、馬鹿にせられた友達、さては先生方、今一つは、勿體ないけれど、出て來た家の養父母に「潤子さんは、まあ、あんなに立派になつて、うらやましい」と其一言がきゝ

たいばかりではないか。エヽ、つまらぬ。

ふと、我に返れば、いつの間にかお客樣はお歸りになつたらしい。午後お隣の峯吉さんが、此度入營するとのことで、腰折一つ。

あな雄
雄しいのち捧げて國の爲つくさんとてのけふの門出や
香しきほまれの花を身につけて



是ではどうも、此地方には適せぬ。生きてかへる樣によまなくてはと、お祖父樣が、おつしやるけれども軍人となる以上は、命はないものと思はなければなど、理屈をいつてはみたものの、結局、私が敗けて詠み直すことになつた

　とくかへりませたらちねの前へ

いそぎ短册に認めて贈つた。

十一月卅日　御座敷の御掃除をすましたらば、もう十時、まあ、此頃のお日の短いこと、少し寢坊をすれば直ぐ正午になつてしまふ。十一月も今日でをはり、あと一ヶ月で、また齢をとるのかと心細くなつてきた。御庭を見れば、もう鶯が飛んでゐる、向ふの垣根に遊んでゐるのは、四十からしい、家の内にゐてあんな鳥がみられるとは、まるで、昔話にある樣な、矢張り此地へ來たお陰、神樣の御惠とやらであらう。

　鄙ちやんが泣き出した。叔母樣は、居らつしやらないかしら、またおしめがぬれたのであらう。『いま更へて上げますよ』と、急いでいつて見れば、一人で足をバタバタしてないて居る、いま〳〵と、すかしながら、替りのおしめを、たてよこと重ねて、早速あてかへる、自分ながらをかしい、わづか二三ヶ月の間に、おしめのあて方はもとより、抱き方、すかし方、一々すつかり覺えて、昨日今日では叔母樣よりは、私の方が卻つて上手だといふ樣になつた、お陰で他日母となつた曉にはどんなに仕合するか知れない。之もおけいこだからと御親切に叔母樣がさせて下さるのを、氣のむしやくしやする時などは、あゝいやだ、自分の子でもないものをなどゝ、勿體ない、叔母樣を、うらんだこともあつたが、考へてみると、みんな私の爲、叔母樣のお心盡しであつた。御恩を忘れてはすまない。やがて私もこんな可愛い子を、持つ樣になつたらば、あゝしてかうしてと思はず微笑した。見れば鄙ちやんも何かをかしいのか、頻りに聲をたてゝ笑つてゐるので私も夢中になつてあやしてると、俄に背中を押したものがある。いま少しのことで鄙ちやんの頭を、打つところであつた。誰かと思つて振返つたら、おいたの芳ちやんが得意な顏をして立つて居る。『アラ、芳ちやんあぶないではありませんか、もう、お止しなさいよ』といへば『馬鹿やい』となほ打つ『およしなさい』の十度もくり返した揚句、遂に堪忍袋の緒がきれて、『お戸棚へ入れますよ』の、おどし文句で御縁側まで、追かけて泣かせ

た。まあ大人氣ない、私としたことがと、思つたがもはやあとのまつり。なぜ、こんなに短氣になつたであらう。自分ながら不思議である。二年前敎への庭に下りたつて、頑是ない兒童を一すぢの道に導いてゐたその頃は、數ある先生の其内で、一番やさしい先生と慕はれて居た私。「あまりやさし過ぎる、叱る時にはやはり叱つて貰はなくては兒童の爲にならない」とは、其當時、校長樣からの御言葉。それに背く心とては、露ほどもなかつたけれども、さりとて、叱るといふことはどうしても可愛さうで、如何なる場合でも、大聲一つあげたことのない私、其私が、けふ此頃のすね樣はどうであらう。罪もない從弟に對して毎日の小言。わるいと知りつゝ、なほやさしかつた昔にかへることが、どうしても出來ない。よくもこんな、かたくな者になつたことゝ、愛想がつきる。

夕食後、お部屋へいつてみる。お祖父樣、相變らず作詩に熱中してゐらつしやる。床の懸物が變つた。

無數破台海口連　　兩間横斷火輪船
何時直破西洋浪　　日旆高飜但士川

とある、きけばお祖父樣のお師匠樣ださうな、わづか五十年後の今日、テームス川はさておき、世界到るところ、日旆が高く飜つてゐようとはさすがの先生、夢にだも思ひ及ばなかつたであらう。既往五十年間の變遷は、また格別であつた。さて未來の五十年は、どう變つてゆくであらうか。世のうつりかはりと人の身の上ほど、分らぬ者はない。其分らない世の中に、分らない人間が分らないことに頭をつかふ。實に馬鹿々々しい。まあ、そんな分らぬことはよして、えんぎ直しに歌でも、よんで置かう。

夜もすから枕にひゞく木枯の
　　遠ざかり行く有明の空

千代かけて籬に匂ふ霜の花
　　秋のかたみの色香ゆかしき

十二月一日　あんなにいゝお天氣であつたに、ほんとうに此頃の樣に分らないことはない、久振の雨で、植木のためにはいゝかしらないけれど、あゝ陰氣くさ

いこと。おまけに、晩方から風までそへて……。思ひ起せば丁度十年の昔、今月今日、空模様さへも、丁度こんな晩であつた、養父様に連れられて、なつかしい家をふりかへり、ふり返り、しかも心には、一種いふに云はれぬ、うれしい希望をもつて出ていつた其私、十年後の今日、湘南のさすらひなどゝは、實に思ひもよらなかつた。『美しい装に、珍らしい食物、潤子さんは幸福者よ、運のいゝ人よ』と知る人毎に、うらやまれて、淺ましや、自分まで目前の美衣、美食に滿足して、面白をかしく、其日々々を送るも束の間、やがて、樂しい春秋を、めぐり〳〵て、十五の春を迎へた。ああ其十五、十五、他所の孃様達には、到底想像もつかない悲しい煩して、その十五の春に初まりて、廿有二の今日此春まで、どんなに、此小さい胸をいためたであらう。

年老ひ給ひし、養父様のあらうことか、あるまいことか、御無理な御注文、きくもいまはしい、御言葉の數々、初めのほどは、たゞおそろしさの、子供心に、前後の考もなく大聲あげて、養母様の御膝に、泣きついたもいくたび、かくて、うき年も、いつか暮れて、うれしや翌年の春から、松江なる學び舎に、物習ふ身となつた。おそろしい、三度目の夏休も、いつか送つて、あくる乙巳年は十九の春、悲しい別と共に、粗末ながら、錦を故郷にかざつて、再び、みだれた家庭の一員となつた。あゝ、其後のことは、かくも涙の種。三年の間お情あつい先生方に、薫陶せられた御陰で、少しは人の道、わきまへる様になつては、さすがに恩ある養父様の耻さらさんも心苦しく、ひたすら心の紐、かたうしめて、出來うる限りの孝養、何ごとも此胸一つに秘めて、現在うみの御父様、御母様にさへ、明かされない、身の不運、苦しい内にもいつかはと、時をまつたも矢張り、はかない願に過ぎなかつた。

去年の秋よりは、火の手は、ます〳〵盛に、もえ上り、最早人目も何もあらばこそ、全力かけての、結目も、いまや底まで燒きつくさん勢。アゝ、どうしても私は、運が拙いのだ。此上は、一時もはやう身に障り

のない内に人は恩義しらずといはゞいへ。せめては、いつくしみ深かつた、養母樣への申譯にと、弱い心にも遂に意を決して、思ひ出多い故里をあとに、逃れ出た。時はことしの春、花のさかり、四月の初頃であつた。事情を知らない、世の人は日頃の衣食、身分不相應であつた。それ丈に恩を知らぬ、義をわきまへぬ、人でなしと、あらゆる、嘲罵のしもと、うたるゝ、私の心の中、口惜しいとも殘念なとも、いつそ、此胸打ちあけてと思はぬ日とてはなけれども、かくては、折角の辛抱も水の泡、私の心さへ正しければと、ぢつと、涙をのんでゐるつらさ、國を出てから、かれこれとよしあし繁き、浪花津や、古き都の八重櫻、四條、五條の橋も超え、城で名にもつ名古屋より塵の都の東京にさまよいあるいた、その果は、人目いぶせき五月雨の朝より、こゝ湘南の片ほとり、荒浪よする袖が浦邊にわびしい、朝夕を過す身となつた。御情厚い、叔父樣叔母樣、さては御慈愛深いお祖父樣や可愛い芳ちやん靜ちやんなどに、なぐさめられて、何一つ不自由もなく、明暮笑の内に送つてゆく私、決して何も不足はないけれど、……、あゝ、思ふまい、思ふまい、見ればいつの間にやら、袖はびつしより。いくら思ふたとてなる樣にしかならないのだもの。

雨は、いつか止んだらしい。あたりは、森として、風の音さへも聞こえない。時計をみれば、もう、十二時過、アゝねませう、ねませう、ねていゝ夢でも見ませう。

はゞかりにとて、たつて、雨戸のあはひから、大空をのぞめば、雨後の月物すごく、憂を含んで……折しも、寂寞を破つた、寒衛の聲、浪の音に、絶えつ、續きつ、一聲、また一聲。



火災に就て主婦の心得

まア火事を出したと云ふ場合に之を防ぐのは餘程平素の覺悟を要することである、昔からの習慣として我國の者は何によりも先づ水の在る處に駈付け、水を持つて來ると云ふ念が咄嗟の間にも浮んで來て、其他の器具で消止めると云ふとには一寸考へ及ばない、從つて彼の消火器のやうな便利なものを傍に備へて置きながら、之を使ふことを忘れて、井戸端に駈付けると云ふやうな例が卻々多い、斯ることは平素から氣を附け、火急の場合にも沈着いて有用の利器を使用するやうに、豫て練習しておきたいものである、又火には何でも水さへ掛ければ宜いと云ふ譯には行かないから、何の火には水を掛て宜いとか惡いとか云ふことも常に研究して、火防上相當の準備をしなければならぬ、先づ水道があるならば其水を利用する方法、消火器の設備、其他殺火粉などの用意は平素から好く研究して置き、揮發性の發火即ち水より重量の輕い火であつたら、水を注ぐことは禁じなければならぬ。例へば石油、エーテル、アルコール等は窒息方法を取られねばならぬ、それ故窒息の材料も常に考へて置いて、之を敏捷に應用すると云ふ覺悟と習慣とを充分に養つて置かなければならぬ、好く此家は煉瓦と鐵骨とで建築した家故、火事には大丈夫だなどゝ云つて安心して居る人があるが、嘗に云つたやうに常に我々の眼の及ばぬ處から火の起る例が珍しくないのであるから、決して油斷は出來ない、殊に煉瓦や鐵骨の家が燃え出した場合には、非常に困難で、木材の家の樣に容易く消すことの出來ないのみならず、其害も亦た甚しいのであるから、一般の人は先づ家の建築の如何に拘らず、火事はあるものと考へて居らなければならぬ、さて然らば其の監督の方法はどうかといふのにこれとて決して六かしいことではない只周密なる注意を實行すると否とにあるが、例へば煙突の裝置を好くし、掃除を怠らず、破損した箇所には早く修繕を加へるとか、火を燃した後は注意して見廻るとか、火氣の附近に燃燒物は置かないとか云ふやうな、平素から物の始末を丁寧にするだけの事で、敢て具體的に斯うして那あしてなど云ふ必要はないのである。それから又一つ元來火の便利と利益あることは今更ら申すまでもない、我々人類が今日斯くの如き發達を遂げたのも火のお蔭と云つて差支ない位であるが、併し又火にはそれに伴ふ危險の甚だ恐るべきものゝある事を幼き折から家庭に於てよく訓へ戒めおく事である。（消防機關士某氏談）



初子の日記

若き母

△一月三十日＝好天氣、今日はお七夜無論私のよ、私は當月廿四日生れたの、私子お母樣のポン〳〵へ一寸忘れものして來たものだから、お父樣少々ものたりないお顏して居らしつた、けれど、廿四日は聯隊中でお父樣の中隊が一番射擊の成績が好つて兵士一同も特別の御賞品戴いたもの故、初子は目出度子だと大變ほめて下すつた、私生れた時お頭が長かつたのよ、お母樣が福祿壽の樣だと、心配して居らしつたけれど、もうすつかりなほつてよ、私其日は非常に疲れたものだから、お乳も吞ます、チンチして居たら、母樣が頻りと。ツンボちやないか、メクラちやないかつて、心配ばかりして居らつしやる、お父樣は暇さへあれば私の顏お覗きなさるの、でも、私まだ、メ、が見えないから、大してうるさくはないのよ。

母樣はまだ、お子ンチだから、家事を何かとお世話下さる、米良の叔母樣も私を、孫の樣に可愛がつて下さるの、御親切な、おば樣で子、お父樣お母樣も、非常に感謝して居らつしやる、十月の間に隨分、方々のおば樣が、いらしつてよ、そして、私のお顏覗いては、マア、お可愛らしい、お子つて仰しやるの！、ほんとうかしら？。母樣のお乳は、今日から吞みはじめたの母樣氣分に、障るからつて、吞ませて下さらなかつたけれど、江森さん（產婆）が、今のうちから、吞ませなければ母樣のお乳召上らなく成ますと云はれたのでやつと御承知遊ばしたの、お父樣が、困つた母樣だねえと、仰しやつたワ。私の初子と云ふ名は、また、私が、母樣のポン〳〵に居る時分、韓國に被居つしやるお祖父樣が、男子だつたら一郎、女子だつたら初子が

よからうと、云ふておよこし遊ばしたの、私忘れものしたから、一郎になれなかつたのよ。

△二月六日――今日は二七夜お父様は相替らず顔ばかり覗きに、いらつしやる、此頃は舐められるには少々ヘイコウ―。午後大矢さん(看護婦)に、おぶうつかはせてもらつた時、丁度よいお湯加減だつたから、つひ、い〻氣もちで、おたらひの中へシ〻ウしちやつたの、大矢さん、大まごつきで面白かつた驚かしついでに、タオルの中へも、澤山してやつたら、皆が笑つたの。

△二月七日――私はまだ、目が見えない爲か、晝と夜と間違へて、いつでも、晝はよくネンネして、夜になると、大きな目々あけて、むづかるの、昨夜も大分、大矢さんを困らせてお氣の毒樣だつたワネ、其かはり、晝間は温和しくネンネして上るワ。午後例によつて、大矢さんに、おぶう、つかはせて貰つてたら、八百屋が御用き〻に來たから、秤を借て、か〻つて見たら八百八十目あつてよ、まだ、ポッチリネ、けれど我々赤ん坊仲間では、少ない方ではないさうよ。

△二月廿五日――早やお宮參りの日になつたワ折から好天氣で幸、お父様が、讃岐の天候はあてにならないからと仰しやるので、午前中に、米良の叔母様に抱つこして戴いてお車に乘つて八幡樣へお參りの歸り、中澤樣、友近樣、中津海樣へ、およりして、犬はりこをいくつも戴いて歸つた。

△同二十六日――東京から大きな荷物がとゞいた、母樣、何だらうつて早速おあけなすつたら、悦ばしい事、私のおひな樣が澤山に…………。

△三月十三日――生後五十日、よいお天氣、お父様今日はお暇だつて、隊から午前中にお歸り遊ばした、丁度幸お留守番願つて、午後一時の汽車で母様と豐やと多度津の大野樣へ出かけた、行がけ、寫眞とるつて石川へよつたけれど、私今日、午前に眠られなかつたからねむくつて、眠くつて、母様が頻と目をいぢつたり、ポッペタつゝいたり遊ばしたさうだけれど、どうしても目々が、あかなかつたの、到頭汽車の時間が來たの

で、寫さす。大野樣では、叔母樣も、香樣も、お不在。しかたがないから、お暇して歸りがけ丁度よく多度津の停車塲で叔母樣や、香樣や、安原樣の叔母樣にお目にかゝつた、香樣は私より一つ姉樣だから流石



に、おじぎお上手よ、安原樣にも私より十日程早く坊チヤンがお生れ遊ばしたさうだ、けれど、おなくなり遊ばしたのですつて、お丈夫だつたら丁度私と同じ位だのにねえ。歸りも又、石川へよつて、

今度は兎に角寫したけれど、夕方だから、よく、とれないかもしれない四時歸宅。

△三月三十一日――寫眞が出來てよ、母樣大變をかしいつて……週番中のお父樣にも、從卒にもたせて、お目にかけにやつたら、あまり感心しないと、母樣へお手紙およこし遊ばした今日は晦日なので母樣ソロバンをパチクリ。

△四月二十六日――私は抱つこが一番好よ、お乳は三時間目に、極めて居るけれど、それまで、またれないのよ。今日東京のお祖母樣から小包が二つとゞいた、母樣と豊と、早速あけはじめたの――一つからは、お船の花いけで、あつたけれど、一つには、私のおもちやが、いくつもはいつてた、母樣おもちや棚へ飾つて下さる。

△同月廿七日――母樣に抱つこして、恰樣へ行と中隊の、そばで週番中の、お父樣にお目にかゝつた、お連があつたから、抱つこして戴けなかつたの、恰樣のお孃チャン、キーキがおわるくつて、チンチして居らしつた、私歸りに、お庭に咲いてる美しい大輪の椿いただいて、歸つて、昨日の、お船へ母樣にさして戴だいたの、そし母樣だつこして、ケーケーチーとおつしやつて、見せて下すつた、私赤々できれいだつたから、ウックシと云つて笑つたら、母樣が大層御機嫌ねえと、嬉しさうに、頬ずりして下すつた。

△同廿八日――今日はお父樣週番あけで、お歸り遊ばすのだけれど、二三日前からの檢閲が今日は愈々おしまいで、夕方から、慰勞會が有から、遲くおなり遊ばすのですつて。

　お父樣十二時になつても、お歸りがないのよ、私はもうとうから母樣のおひざで、チンチしてしまつた、大方二次會だらうつて母樣獨言云ふてゐらしつた、但し私ウッ、で、きいたのだから、間違つたら母樣御めんなチャイ。

△五月二日――月日の經のは早いもの、早や百日になつてよお晝には、父樣母樣と同じ樣に、おせんにむかつて(但し私は豊やに抱かれて)おはし揃へしたの、午

後紀念のお寫眞とりに行、今日は温和しく寫してよ、體重一貫四百目。

△六月十八日＝非常に御無沙汰しちまつたワチ、百日の寫眞、もうとつくに出來たのよ、此度は、よくとれたつて、父様も母様もほめて下さつた、東京のお祖母様にも、お送りしたら、大變可愛らしいから、見たいつて……、やつぱり母様だワチ、自分の子をほめられると、悦しいと見えて、私のお頭なでゝ、喜こんでゐらつしやる。私はもう此頃おもゆや、ソップ少しづゝ戴だくのよ、牛乳は、午前午後に一合づゝ體重一貫六百目。

△七月二十三日＝暑くなつた事、其筈チ、先おとゝいから土用なのですものねえ、私は寒中生れだから、暑さが却々こたへるのよ、母様も私を抱くのを暑苦しいとみえて、寢臺にねかさう、ねかさうとなさるの、けれど、コンマ以下とは云へ、私だつて同じ人間ですもの、ヂンヂばかりするの、暑苦しくていやだから、たゝをこねたら到頭、母様抱つこしてお乳のませて下すつた、其うちウト〱して居たら何だかお頭が晴々して、氣もちがよくなつたからフイと顔あげて、見たら、白いお衣着た男が光るもので私のおつむを撫て居るの、アラ〱〱私ウト〱してる間に坊子にされてしまつた。

△七月二十六日＝お父様私の事、坊子、坊子つておよびなさるけれど、私初子だワチそして父様毛の伸るまで、散歩に連れて行かないと仰つしやるの酷いワ、私が勝手に、坊子になつたのでもないのに。私けふ、お座布團の上に一人抛つとかれて淋しかつたから、アーアーッてあばれてたらお疊の上へコロッと落たの、非常に面白かつたからねかされると、コロゲて遊ぶのよ、ハイハイして見ようと思ふけれど、まだ、ため、がつかりねえ八月十日、二百日けさめゝが、さめたら、もう母様おつきさして見えなかつたから、私お布團からコロガリ出て、お疊の上に、おツ、ウしちまつたの、おべゝへもつけたワ、アラ笑つちやイヤ……。午後二百日の紀念に寫眞とりに行、但し今日は父様母様御一

緒!。寫す時、例の赤ん坊中間のイワユル、だゝをこねて、皆をてこずらしたら、寫眞屋のおばあさんや技師が頻と手風琴ならして、私をあやすの、遂面白いので、つり込まれて居たら、技師が『へいよろしゆうムいます』手風琴ばつたりやむ、アラ私、だまされちやつた。

△八月廿一日――今朝は早く目々がさめたから、いつもの通り牛乳で、お手水つかつてから、母樣にだかれて、夕べつぼみを數へておいた、お裏の朝顏見にいつたらアラまだ、かき根の外に、一つ咲いてるワ、あまり美しいからお父樣に、お目にかけませうヂつて母樣花をつむで、コップにおさし遊ばしたの。私もほしくなつて、取らうとしたら、私フイと、ハイ〳〵が出來たの、私嬉しくつて、母樣が順々と花を遠くなさるのを、逐つて行つたら到頭とゞいて、此所初子大得意の體。



△十月十三日――大へん怠けつちまつたワヂ、私は怠けるつもりぢやないのだけれど、代筆する、母樣が怠けるのよ、一ヶ月半位でせう……?私其間に非常におりこうになつてよ、ハイ〳〵は無論上達したけれど、九月末頃からは自由に、お机や、お障子につかまつて、たつちが出來るのよ、私嬉しくつて仕樣がない、お目にかゝる、おば樣たちもホンにお丈夫なお子樣と仰しやるが全く、私生れて風一つ引いた事ないのですものヂやつぱり父樣や、母樣が常々營養によく氣をつけて下さるおかげなのねえ。

感ぜし儘しるせし女の日記

一宮きよ

○十二月一日。今洋燈の下で筆を取ると、日記帳の十二月と云ふ字が妙に身に泌みて憐に見える、もう殘る頁も僅に二十枚足らず、アヽ今年もかくして暮れるのかと思ふと何とはなしに物足らぬ様な、名殘惜しい様な感がする。

　それはさうと今日は何かあつたつけ……さう〳〵武藤さんが見えた。指を折つて見ると早いもの、お互に學校で別れてから半年になる、それにあの方は別に變つても居られぬ、梅鼠の羽織に大きう前髪をとつた廂に結つてらるゝ様子は前よりも上品に見えた。

　久々の事なので色々話がはずんで聞けば清井さんは二ケ月程前にお嫁入なすつたし、松田様は獨立するとて今は幼稚園の保姆をしてらるゝとか、アヽ學校の寄宿舎で罪なう笑ひ合つた友達は學校を出ると直ぐ此通り、まして、こゝ五年十年と經てばお互にどの様に變る事やら……

　武藤さんは一年後れだが來年の春は女子大學へ入學せられる相だ、それで妾にも行かないかと勸められて種々其話が出る、「それに貴女なんかあんなにお出來なさつたんだから今廢すのは惜しいわ」などゝあのお口にはうつかりすれば釣り込まれ相。妾とて滿更嫌な道ではなし人が八ケ間しく云へば何かなし行つて見たくも思ふが、何を云ふもお父様も無い身、此學校を卒業させて頂いた丈でもお母様の並大抵の事では無かつたのに況して此上大學へ等と……アヽ濟みませんと妾は妾の心を嘲つた。

　昔と異ひ今の世は女とて固より高等な學問も要りま

せう、そして學資豊な人は行くのが結構でせう、而しどれ丈の人が、之と云ふ目的もなく唯世間が持囃す聲にかられ、淺墓な女の虚榮心を満たす爲にのみ、成らぬ算段をして最高の教育を受けるだらうか。

吁、これ計ではない、一寸新聞に女優の事が書いてあつたのを讀んで女優になり度なり、一寸女子の獨立と云ふ聲を聞いて獨立がしたくなる人がどれ丈あらう妾は負け惜ではないがそんなに迄して最高の教育など受けたいとは思はぬ、輕跳な世の流に憧憬れるよりはむしろ保守と云はれても良いから昔の女子の内氣な而も確りした處のあるのを慕はしう思ふ。

オヤ〳〵昔の女を慕ふ女がこんな生意氣な事を書いて……もうお母樣も寢られた樣子、今夜は何だか頭が重いからもう寢よう。

○十二月二日。今朝は何時になう早う眼が醒めたのでその儘に起きる。庭へ出ると未だ夜が明けて居ない、一面に霧が降りてボンヤリと門際に常夜燈が照る、もう起きて居るのかお隣で下駄の音がする。

オヽ寒い。並べてある薔薇の鉢に白いのは霜だつた。

今日は日が昇ると十二月とは思へぬ暖かさ、小春日とでも云ふのであらう、空は眞青に晴れて柔い日影は縁先に、雀がチヽと鳴きながら樋の中でカサ〳〵と時時葉片を落すのもしほらしい、

まあ今日は何から手に着け樣かしら。ア、あの羽織を片附けてと、今日あたり買物に出ねばならぬ、あの讀みさしの平家をも讀みたい、お湯へも行かなきやならん、オヽ忙がはしい事、それに十二月と云ふんだもの氣がせいて氣がせいて、……何故かう用事が多いのだらう。——お母樣があんな風で洗濯をして居られると正可默つて見て居る理にも行かず、かと思ふと靑物屋が來るので手を拭き〳〵荷を見てお蕪を買ひ勝手元へ置くと、直後から洗濯屋の用きゝが來ると云ふ調子。とう〳〵終日轉手古舞をして暮らしたが、夕飯を頂いて後漸うホツト息をつく。一日の雜誌が來て居るのに開いて見ると何時もの樣に貴婦人方や學生の寫眞が出

て居る、と云ふて案外美しい方も少ない様だ、婦人服の廣告は、先用が無いとして、シンガーミシンは女學生用として十八圓のを賣り出して居る、迚も妾達は買ふ事は出來ぬが一通り讀んで見ると巧く女の心を誘ふ様に書いてあつて終には自分迄一寸欲しい樣な氣になる。何處かの指環の廣告が出て居る、寶石入二十圓以



上と書いてある。ア、世間も隨分贅澤になつた。ラスキンの「塵の倫理」に「昔から英國の女が寶石を削る金丈で近傍の海の岩を削つて居たら今頃は危險な港や海峽は跡を斷つて居たらうに」とあつたのを思出す。が而し妾が若しこんな物を買つてもらへる身分だつたら如何だらう？　ふと自分の手を見ると、眞赤にあ

れたこんな指に如何して指環など……と何だか情なうなつた。

他様には見せぬから良い樣なもの丶今夜も亦こんな下らぬ事を書いて——もう十時、お母様の床をとつて上げよう。

○十二月三日。今日も續いて好天氣、朝から名古屋の伯父様が來える、聞けば名古屋が面白くないので神戸へ引越す途中だとの事、氣の良い人だのに、氣の毒に「マアこれでよく」と思ふ樣な風をしてられるのは餘り御都合がよくないのであらう。何時もお母様が「繪師程可哀想なものはない」と仰しやるが、ほんとに不遇な美術家程氣の毒なものはない、伯父様等も腕はあるのだから勉強さへすれば隨分安樂に妻子を養ふ事も出來たらうに、一寸金が入れば何も書かないで酒を飲む、伯母様が一言でも言へば狂者の樣に怒つて伯母様を打つ、かと思ふと翌日は終日頭痛で唸つて居られる始終「世間が己の技倆を認めて呉れぬ」と口癖に云つて、所謂成功した美術家を芥の樣に罵る……こんな風だもの慘目なものは伯母様で、聞くと暫らく里へ歸して來たと云つて居られる。何れその今日宅へ、よられたのも良い相談では無からうと思ふ。

三時頃伯父様は歸られたが、妾が自分の居間で編物をして居ると井戸端で話聲がする、一寸窓から覗くとお隣りの奧様、月末に引越して來えたのだから未だよく顏を見ぬが白粉を塗つて赤い物などかけて嫌な方だ御主人は何れ會社へでも出られるのだらう。御自分の風を粧つて居らつしやる割に其子供の樣は……何時も鍵裂から綿が出て縫上は、おりた儘袖は鼻汁でピカピカと光つて、よく皮の儘の柿をかぢつて居る等、家庭の樣が推量られる。

「……まあ此頃の日の短い事は如何でせう、何も出來ないんですもの、それに宅等は用事が多くて多くて………」等と崎山様のお婆様を相手に獨で喋言つて居られる、お米を洗ひに來て居るのが其方はそつち除け、大井様に子が生れたとか、芝居が如何の、何處そこの後家様は、此頃妙に粧して居るとか、まあよく辯の廻

るお方、それは未だしも「宅のはあんな意氣地なしで」等と御亭主の事を他人の前へ曝け出して如何にも自分が居るから家が持つと云はん計りのお口吻、ア、女の慎しむべき事と我身の事の樣に思はれた。

　四時が鳴つても未だ喋舌つて居らつしやるんだよ、別に關係はない事が妙に氣に掛つて、あの喋舌つてる間に、七輪に何かのせてあつてそれが燻つては居ないかしら。若しや晝買つて流し元へ置いたお肴を黑猫が來て密と盗みはせぬか、等と思ふ、すると今に歸つて行つて其を見て吃驚なさる有樣が眼に見える樣で急に可笑しくなる。

　暫くして「お母樣何か下さいな……」と子供の聲、すると「マア此子は……」と如何にも呆れた樣に奥樣の聲がして、「もう直ぐお飯ですよ」と叱られる。「まア御緩り」と是を機にお婆樣が歸ると急に火がついた樣にお米を洗ひ出される。まだ子供がグツ／＼せがんで居るのを「……御飯だと云ふのに、彼方へお行き。お母樣は今忙しいんだよ」と噛みつく樣に云つてお米をかされる音の喧しさたら、米粒が桶の底の木目で粉になりはせぬかと思はれる位。暇の無いと云ふ人には得て自分の知らぬ暇があるもの。妾は我身に引較べ半耻かしう半可笑しう感じた。

○十二月四日。姉樣の處から手紙が來て「宅の赤ん坊が蟲を出して困るから八幡樣へ行つてお襦袢をもらつて來て呉れ」との事。家に居る間は佛や神樣などと頭から信じなかつたあの勝氣な姉樣が母親となるとこんな氣になるものかと可笑しう思ふ。

　人通の多い八瀬街道に沿うて京都の町を離れると野は小春日和だ、比叡は紫色に東に聳えて居て澄み渡つた大空にはチギレ／＼の白雲が飛ぶ、田は大抵刈られて居るがあの殘つて居るのは晩稻であらう、時々ガラガラと鳴子が鳴ると雀の群がパツと飛び立つ。

　八幡樣へ行つて例の小さなお餅を、脊に「奉納。四歳の女」とした赤い襦袢とを頂いて來る。社殿の方から裏へ廻ると目につくは樣々の奉納物、どの親心も變りないと見え、「五歳の女」とか「三歳の男子」とかし

て種々の物が上げてある。中には紅葉の樣な手に墨をつけてペタと名の上に捺してあるのもあつて何となく感が深い。

さて石段を降りて歸らうとして、ふと足元を見ると蓆を布いて老人の女の乞食が居る。まあ此寒いのに袷一枚、可哀想に慄へて居る。ア、此齡になつて養ふものが無いのだらうか何れ行く先も長くはあるまいに、と思ふと何とはなしに涙が湧いた。巾着を出して見ると小使に頂いた五十錢と他に二錢銅貨が二枚あるきり其二錢二つを出してやると吃驚してお叩頭を續け樣にして居る。

妾は其處を行過ぎると何となしにお母樣の事が頭に浮ぶ、お母樣ももう五十幾つだないか、度々の不幸と妾達の教育等にどれ程氣を揉ましたらう、そして妾は其樣に勞はつて上げてるだらうか。暫らく他に離れて居ると流石有難味が分つて、ア、今度お母樣の傍へ行つたら大事にせう等と思ふが偖歸つて顏を見ると心にもない不足の一つも口に出て『妾がこれ程迄に思つて居るのに……』と涙ながらに叱られる事もあるではないか。

こんな事を考へながら野道を步いて歸ると早十二時御飯を頂いてから小包にして襦袢を姉樣の處へ送つた

○十二月五日。晴れつ曇りつして居た朝の空は十時頃から雨となつた。餘りの物淋しさに例の平家を出して讀んで居ると外に郵便の聲がする、出て見ると雨に濡れた封筒には六錢の切手をはつて、急いで書いたらしい名は淸井まさ、と讀まれる。久々の懷しさに周章てゝ封を切ると薄い罫紙に無音の斷りやら結婚の報やら取りませて昔に變らぬ優しさ。未だ行つて二ヶ月にしかならぬが其お宅は餘程嚴し相な樣子、武藤樣から聞けば御主人は齡が十八程も上で元々正子さんも嫌がつて居られたのを義理で遣られたのだとの話だが、溫和しい人だから其樣な事は書いてないが、冬に成るやならずの今頃から慣れぬ水遣で手は荒れて龜裂だらけ、それに氣を遣ふ物だから見る影もなう瘦せたと書いてある、ア、何れ例の姑樣等があるのであらうが、姑とて

一度は嫁に來た事があつて其辛さをも知つて居るべき筈なのに何故嫁に辛く當るものかしら。

溫順で、美しくて、賢こくて、其上財產家の一人娘のあの人、學校に居る間は誰一人羨まぬ者が無かつた人が、まあ痛ましい此樣とは。ほんとに他から見て分らぬものは女の身の上、獨立するとて保姆をしてられる松田樣等にもそれ〳〵人に云はれぬ悲や苦があらう。すると實際妾達の方が幸かも知れぬ、只父の無いのに心僻んで他人よりて反て幸福な事をも不幸な樣に思做して喞つ、亦お母樣が如何かして人並にと成らぬ中からして下さる事をも有難いとは思はぬのみか、此樣に零落せぬ昔の樂さに憧れて居る。噫、妾は何と云う愚者だらう。それに今慕ふ昔が果して不滿のない物だつたらうか、今でこそ日が經つて記憶には其樂しさのみ殘つて居るが其當時は亦それ〳〵相應の辛い事もあつたらう。況して今は零落はしてゝも衣食に追はれる事もないのに、くよ〳〵只自分程不幸な者は無いと思ふとは………

未來でもさうだ、よく妾達は如何な不幸が來るかと恐れるが、若し未だ來ぬ不幸を恐れるならば、亦これより先、どんな幸福が來るかも知れぬと氣を廣く持つてよい理。それに若し未來の事が皆妾達に分れば如何だらう？　幸福は前から知れて居るのだからずつと興が覺めるだらうし、反對に不幸には三倍も四倍も心を痛めずばなるまい。

神樣はうまく此世を作つて下さつた。もう〳〵決して決して不平等は云ふまいと決心した。

二時頃から空が晴れて弱い日影が靜に水溜に映る、今日程氣持の良い日はない、お母樣の手助をして解物をして居ると冬の日は早暮れかゝつて五時のであらう遠くでボーと汽笛が鳴る。





趣味に逐はれて無趣味に暮せし妻の日記

玉露女

十二月一日。また心の日記を書きはじめた。良人は去月末豊橋へ行つて今日はいよ〳〵入營の筈。輜重輸卒に取られて三月の間留守になるのだ。洋行歸りの若手の工學士は今や馬の世話荷車の積み方等を習ふのである。今夜は其第一夜であるから、まあどんな心持がしてお出だらう。櫛目美しく分けてあつた髪を一分がりにし大島の二枚重ねを拜借の軍服に代へて洋食の代りに麥の御飯を頂いた時、定めて良人は微笑したであらう。オヽたゞ微笑んだであらう。

家に居る時は玉突きで大概夜は十一時過ぎに歸るので。時には眠くていやだと思ふ事もあり。こんな事なら留守の方がいつそ世話なしでいゝ。と思つた事もあつたが。一葉さんの仰せし通り、

ある時はありのすさびに憎かりき
なくてぞ人は戀しかりける

淋しい！　淋しい！　片破月は雲間をもれて。信濃町のステーションの汽笛が身に泌む今夜よ。電燈は輝けども。ストーブは暖かなれども、冷く暗い我胸の中……。あゝ夜も更けた!!　門をガラリと大またに石をふんで。『お待遠。』と笑ひながら帽子を渡されるあてもない。

寢ませう。

十二月二日。昨日は大層心細かつたが今日はそんなでもない。私も今月はいよ〳〵お產をしなければなら

ない。此前健兒を產む時も私の氣性として隨分よくこらへましたがいよ〳〵と云ふ刹那の痛みに、我にもなく『アーッ』と云つて。あとで母樣から祖母樣が『そら產れる。』と仰つたらすぐに嬰兒の聲が聞こえた。よく分りましたねと云つたら。『今ひどく苦しんだ聲がしたと仰つた。』と伺つてあゝ耻かしい。と思つた事があつた。今度はどんなに苦しくとも一言も聲などは出しますまい間違つた處で死ぬだけのものだ。

何を恨み何をなげくぞ世の中は
たゞ朝顔の花の上のつゆ

決死の覺悟で立派に產をして見ませう。

產む時は苦しくとも子供が大きい方がいゝ願はくは一日も長くお腹に居て與れるやうに、此前は二十日も早產で。大變育てるのに骨が折れ今でも二十歲前に產だ子供は駄目だ〳〵と云はれる。こんどは何卒丈夫な子にしたいものである。

今日〇〇さんが入らしつた。〇〇さんは良人の弟だから眞面目な人なら私までどんなに幸福だか知れないのに來る時も〳〵お金のおねだりばかり。月々養家から送つて來る學資はさつさと遣つてしまつて無くなれば質まで置く始末。さうしては良人の處へ。寒いのに羽織が無いの。今月の下宿料が無いの。氣分が惡いけれど醫者に拂ふ金がないからかゝれないの。と色々の口實こしらへては取りに來る。今日も『お姉樣二十圓程ありませんか。』と云ふから『まあ丁度無くなつた處なので……こう云ふ時には私が外出出來る體でないのでほんとに困りますわね。』と斷つたら火鉢の前に頭かかへて。太息ついて居たが。やがて歸つておしまひなすつた。良人が出發の前日渡したお金はどうしてしまつたのかしら。

齡は私と同じ齡。ハイカラな髮の分け工合ヤッコ、、とやらの化粧洗粉で顏を洗つて。夏などは襦袢の袖に赤い色さへ見ゆる時がある。チックや香水の匂いやらしく『私男に生れて思ふ存分活動が出來ないのが何より口惜しい。』と云へば『僕女に生れて美しい着物きて遊べないのが一番悲しい。』といつも云ふ。一體いつに

なつたら學校卒業して呉れるのだか。實に〳〵やり切れない。左樣かと云つて私の口からいやな事は云へず行末思ひやられて、私共はいくら働てもあんな弟があつては出世する處ぢやない。とつく〳〵情けなくなつてしまふ。

然し私は無邪氣な書生は好きだ。將來に成績のいゝ、しつかりした學生を養つて仕込んで。子供達の話相手になつてもらひたいと思ふ。日曜日などは其人達を集めて家の者も一緒に薩摩汁とか。とゝろ汁とかに。肉でも燒いて食べさせたら愉快であらう。子供は二人ぎりで澤山だから餘裕があつたら是非さうしたい。

今日は大層書いた、もう十時も過ぎた。

十月五日。今日良人の許から端書が來た。ほんの入營の通知だけで「それからそれへと使役せられ疲勞はげしく萬事詳報の勇氣なし。」とあつた。「それでも雜誌類は轉送せられたし。」と書いてあつた。「送る事は送りますが、體をつかひ過ぎては何にもなりません三月の遲れはあとでどんなにも取り返しが出來ますのに。」と言送つておいた。

國元から誰人か送つて下さつたらうに、今日で五日にもなるに手紙一本下さらぬ。入營當時の有樣やら。今後金品を送る心得やら。知り度い事聞度い事の數々で。毎日其ればかり考へて居る私の心も分らぬ事はあるまいに。いつもながら國の人達のしむけが恨めしい。

と云へばまつ子樣やてる子樣にはいつ御手紙上げても御返事下さらない。はつね樣迄此頃は音信なしになつてしまつた。卒業して送別會をした時には、四十八人許りのクラスメートが。たとへ體は離れても。心は決して變らぬしるしに音信ばかりは絕やすまい。と淚と共にちかつたではないか、それが此頃は同級會の通知しても來る方はきまつて居て。大かたは。「止むを得ぬ差支にて殘念ながら。」とお斷り。女の友達なんか下らないものだ。かうと知つたら男の友達を澤山持つておけばよかつた。いつぞやも名ある文士の某の君を紹介して頂いた時。其お方の袂から出された汗タオルのあんまり汚いのに愛相つかして其後御手紙頂いても其まゝ

にしてしまつたし。理學士の〇〇さんとも御交際しかけて南瓜を召上るのに呆れて今でよそ〳〵しくしてしまつた。何だか世の中がつまらなくてしかたがない。
臺灣の鶴子樣の御手紙に「下女が減つたので下らなく忙しく書物を手にふれずに暮す日もある馬鹿らしさ。」と嘆じてよこしなさつたが成程鶴子樣のやうな人が下女の代りに時を費すのは、寶石の粉をみがき粉に費ふやうなものだらう。私のやうに毎日掃除や針仕事に暮して子供の世話などに。頭をつかつて居る人になつたら。自殺しておしまひなさらねばなるまい。同じ鑛山 否同じ學校から同じ事を修業して出た人間でも私はみがき粉的生活に齢を取つてしまふのである。
十二月七日。毎日何の變りもない生活なので心の日記として書く程の感じも起らないには困つたものだ。あゝこんな平凡な一生はもう飽きてしまつた。またと此世に生れ變れるものなら此次は妖艶人と魅する絶世の美人と生れて。カント。ヘーゲルの學說の異同と。河東。一中の差異とを。同席に論じ得るやうな。しかも男らしい夫を持つて。海に遊び山に上り。齢も取らず病氣もせず。一言詩となり。一動畫となる。美的生活をやつて見たい。「通夜物語」の丁山さんが淸樣に物云ふやうに。「夕だすき」のお今さんが某をあつかふやうに。雨ごひすれば雨になり。風に笑へば風にほふと云ふやうに……。眼の中から指の先までそれ〴〵趣ある人間になつて見たい。とは云ふものゝそれは空想。出來ない相談に過ぎやしない。私は最早此樣な人間に生れついて此樣な境遇に處すべき運命を得て居るのである。ひがみの強い我儘な私はやさしい良人と親切な義母樣との許に可愛いゝ子供を育てながら何不自由なく月日を送つて少なくとも他人の目からは幸福者と見られて居るのである。常に〳〵一種の不滿にかられて人知れず悶へて居るのは。偏に。「自己を捨てゝ人に仕ふる」德義心がない爲である。恥かしい事の極みである。私のやうな人間は死んだつて差支はない。誰も悲しむ者はない、と恨むよりは。まだ私のやうな人間を死んでくれゝばよいと望む人のない事を。感謝して宜

しかつたのだ。

人生僅か五十年一度去つて再かへらず。とは云ひながら、其五十年の間を實際の體は一つで一色の生活しか試みられないでも。私には腦と手がある。腦に想つて、筆を以て樣々な人物に種々な生活がさせられるうれしさよ。よし。今日からは靜かな正直な女房となつて。家事をとゝのへ。暇を得ては。自分が理想とする方面の生活を思ひのまゝに書いて見よう。女優になり度と思つた時は女優を書き。尼になりたくなつたら尼さんを書く。東京に住むで居ながら、深山幽谷を現したり。雨の降る窓の許で、月夜の海岸を作つたりして樂しまれるのは偏に文學の 賜で、つまりは平凡生活に一生を過す私の唯一の生命である。趣味なるかな趣味。人に迷惑をかけぬ限り害を後々に殘さぬ限り思ふ存分自分の趣味に耽りませう。

十二月八日。今夜は大變風が強い。練兵場のほこりが來るので、風が何よりいやでならない。まして健坊は眠てしまふ。女中達は部屋へ引込む。一人で時計のセコンドと。鐵瓶のたぎる音を近く聞いて木枯の音汽笛の聲を遠く聞きながら斯うして居ると隨分下らなく心細くなつて來る。明日からは產の事も氣になるからと云ふので。隱宅から母樣が來て居て下さる事になつた。うれしい事である然 心の日記はもう今夜をお名殘としませう。





榮耀にかゞやく令孃日記

野の花

△廿日、晴れ。

今日は兄樣が觀艦式も終へたので軍艦から一寸御歸宅になる筈。友達を引張つてゆくと有つたから、きつと例の松本中尉かも知れない。母樣も大よろこびで何やかやと臺所でおさしづ、私は午前中に大いそぎで兄樣の御居間を片付けておく。南向で日あたりの極く好い二階の六疊で兄樣が御留守の時にはいつも私が明巢ねらひに出かける處、散らばつて居る雜誌や小說やを本箱に納めて一寸掃出してお床には磯なれと黄菊とを活けた。午後私は髮をマガレツトになほして五吋巾の眞紅のリボンかける。何だか子供らしいと思つたけれど來年はもう十九にもなるから、まさかこんな事もできまい、殘り惜しい今年の中に出來る限り派手にしようと思つた。兄樣のお歸りは二時半頃、お連れは矢張り松本さんとそれからもう一人は國島さんて少尉の方兄樣は少しおやせになつた樣だが相變らず面白い事を云つて、もう玄關先で書生や女中を笑はせてゐらつしやる。私は自分の居間に引込んで須美子さんに手紙かいて居たら小間使の千代が來て若樣が御召だと云ふ。面倒くさいけれど手紙はかきかけの儘で西洋室へゆくドアをあけて入ると兄樣が國島さんに紹介して下すつた。私は長椅子にかけて寫眞帖を見て居ると國島さんが『學校は?』とお訊きになる『學習院を今年出ましたのよ』と申上げると國島さんは『僕の從妹も四年に居ます』とおつしやる。松本中尉はピアノの前でしきりと樂譜をひろげて居らしつたがとう〳〵私に何か彈いて下さいとおつしやる。『存じませんわ、ろくにでき

もしないのに』つて云つたら、不愛想な奴だナアつて兄様に叱られた。しかたが無いからソナチネ一曲弾くスープのお皿の出るのを機會に私は御免かうむつていつもの通り茶の間で御夕飯、御給仕の千代が『若様はおやつれ遊ばしましたね』と云つた。夜は須美子さんへの手紙かき上げて千代に出させる。

△二十一日、はれ。

此頃のお天氣の好く續く事、もう半月から降らないので出歩きには極く都合が好い。ピアノのお稽古日だから米琉の綿入の上に吉野織の袷羽織、鏡臺の前で、前髮をいぢつて居たら、母様が『午後から三越が來る約束だから早く歸つていらつしやいよ』とおつしやる。いつも私がお稽古の歸りにはお友達のお宅へ寄つたり散歩したりしておそく歸るので此の通り信用がなくなつていつでも出がけに念を押される。『エー大丈夫、三越が來るなら今日は休んでも可いワ』と云つたら『マア此の人の現金にも呆れますね』と母様が、私は一寸兄様のお部屋に寄ると雨戸は閉めたまゝ、ガスをつけてまだ床の中。ワザと大げさに『マアどう遊ばしたのさ　もうお晝飯なのに』と云ふと『ゆふべおそかつたからさ、まだひるになんかなるもんか、三枝さんの云ふ事なら二時間は懸値と見ておくせ』つて相變らずお口が惡い。オヤ〳〵こゝでも信用が失せたかと思ふと、をかしくてたまらないのを強ひてこらへて『いゝわ、果報は寢て待てと云ふから、いつ迄でもお寢みあそばせよ』と云つたまゝ出かける。

納所先生の御宅では久し振りで米山さんにお目にかかる、大層お手がお上りになつた様子でワグネルの何だか難しい曲を遊ばしてゐらしつた。家に歸たら丁度三越が來て居て母様がいろ〳〵見て居らつしやる處、麻の葉つなぎの大島絣が私は一番氣に入つたが母様は少し意氣向だから下卑やしないかとおつしやる。番頭は當今は麻の葉が大流行で華族家でさへなか〳〵御用が有ると辯護してくれたので、とう〳〵私の願がお聞き屆けとなる。其下着に裾はクリーム色羽二重が上品だと云ふのでそれと極る。晩御飯のテーブルに向つた

ら兄様がノコ〳〵出てゐらしつたので「オヤもうお眼ざめ？　お早いこと」と云ふと「馬鹿にしてるナア」つてお笑ひになる母様も一寸私の方を御覧遊ばしながら矢つ張りお笑ひになつた。兄様と一緒に御飯たべるのは久し振りなので大層賑やかで樂しかつた。夜は海軍大演習のお話や觀艦式の樣子だの士官次室のお話だのを面白くきかして下すつたのでピアノの復習も忘れて居た。

△二十二日、曇り。



今朝起きた頃パラ〳〵と降りかけたが又止んで灰いろに曇つて居る、女子大學の運動會の招待狀があるから須美子さんでもお誘ひして行つたらと母様がおつしやたが氣が進まないから私は止めとして須美子さんの御宅に『もしやおいで遊ばすならばこれをお持ちになつて』と云つて車夫の三吉に持たして上げる。十時頃髪結のお牧さんを呼びにやつて桃割に結ぶ。午後は番町の伯母様がおいでになつたが頭が重いので一寸お目にか

かつて私は又居間に入つて「こゝろの日記」を讀んで居たら千代が來て『松平樣の御孃樣から御電話で御座います』と云ふ、仲好の歌子さんから何の御話かと思つて電話口に出たら三十分も永話してしまつた、それも別段の要事でもないが二十九日の音樂會にはどんな着物にしませうとか明日の園田家の園遊會にゆくのでお振袖が出來たとか須美子さんが今お島田だとかいふ事だの、それら同じクラスの秋山さんが今度何とかいふ伯爵で法學士の方へお嫁付きになるといふ事も伺つた晩御飯が早くすんだので兄樣が一緒に散歩に行かう。とおつしやるので銘仙のふだん着のまゝにお納戸色紋織の道行を引かけて首にはボーアを卷いてマッフ持つて出る、兄樣は着物も羽織も對の大島紬に紺足袋めして昔ながらの書生サン、此頃の若い方は髮は奇麗にベタリとなで付けてクラブ洗粉でお手水つかふといふ事だが兄樣なんかは二十七にもなり乍らまだ一分苅の坊主頭、でもこれだから海軍の人はサッパリしてゝ私は大好き、それに兄樣はピアノもお上手水彩畫も油畫も能なさる、まだ其の上にお留守が多いから、たまにお歸りの時には誰にでも優しくなさるから將來に奧樣になる方はほんとに幸福だと思ふ。こんな事を考へながら夕暮の人の往來のせはしい町をだまつて歩いて居るとつッと兄樣が『どこに行かうかなア、錦輝館の活動寫眞は見たくないか』とおきゝになつた、『エー此の間も參りましたのよ違つたのならみてもようござんすワでも今夜は銀座に連れてつて頂だいな』つて云つて伊皿子から電車、新橋で降りて、かねて下心のある關口へ入る。入口に立つて店を一わたり見渡すといづれも若い女のほしいと思ふ品ばかり、人目を引く樣にきれいに飾つて有る。私は寶石入の大きなたば櫛がほしかつたけれど兄樣のふところが心配なので眞紅の美人草の花簪と茶色の絹手袋とを買つて頂いて、すぐまた電車で引返す、電車を降りてから家まで三丁程の間でスッカリ身體が冷えてしまつた。うちではまだ父樣は御酒の最中なので其の側で母樣と兄樣と私とは紅茶を呑みながらいろ〳〵のお話。

△二十三日、晴。

お天氣は持ち直したが風がひどい、庭の楓やそのほかの木も常磐木の外は大方落葉してしまつて何となく冬らしい淋しさ、昨夜は髪をこはすまいと心配してよつぽど氣を付けて寢たつもりだけれど起きて見ると左の髷がつぶれかゝりなので、矢張りきのふ結つた千代のきれいなお髪を見るときまりが惡い。今日は私の大好きな樋口一葉さんの十三回忌だから御墓參りしたいと思つて居たが此の風でほこりがひどいので止めて一葉全集よむ、午後から父樣と母樣とは三光町の園田邸の園遊會へお出かけ、兄樣も松本さんへおいでになつたので此の廣い家には私と女中三人と書生と計り淋しいから須美子さんへ電話かけたが、こゝでも御留守なさけないやら悲しいやら、まぎれもするかと思つてお琴を出して名所みやげと吾妻獅子とをさらふ、おさしづ役の母樣が御留守なので臺所へ出て女中相手に晩のお仕度にかゝる、いかのフライをして居たら油がはねて右の藥指やけどする、ロールキャベージ、煮魚なんかは大好評で有つた。夕方御かへりの母樣がお着替なさりながら、今日は松平の歌子さんにも米山さんにも御目にかゝつたら三枝さんによろしくとおつしやつたよ、學習院の方は澤山來てゐらしつた、三枝さんもゆけばようござんしたね』つておつしやる、夜のお茶の時母樣に新形の毛皮とマフが欲いから、いつでも横濱へ連れてつて買つて下さいましなどお願する、母樣は笑つてゐらしつた。少しのどが痛いから風邪でも引いたかと思つて濕布して床に就く、丁度十時。





悔しき事の多き事務員の境遇

うたかた

昨日は例に無い忙しさで今朝は何だか身體が懶く頭痛さへして寢床の離れ難い事夥しい、お母樣も夫れとお察しなすつてか、起しもなさらずそつと臺所の方へお立ちになつた樣子、濟まない事と飛び起きる。會社に勤務の身と成てから彼是三月馴れたやうでも昨日のやうに朝の九時から夕の六時迄しつきり無しの仕事では隨分身體に應へもする、それに此頃では毎日使ひ通しの指頭が大分堅まつて來たやうに思ふのも學生時代庭球で拵へた掌のたこと比べて情けない氣がする。

お母樣と弟と三人で淋しい朝飯を濟ませ、手つ取早く仕度をして『行つて參ります』と手を支くと『若し何だつたら半日位で休ませてお頂き』と優しく仰有るお母樣のお言葉に急に悲しく成て來て、夢中で下駄を突掛け格子を開けて外へ出る、ホツトつく息と共に熱い涙が譯も無しにホロ／＼と溢れる、あゝお父樣がゐらしつたらと何に付けても先胸に浮ぶのは此事計り、現のやうに力の無い足を運んで居ると生憎交番の角で舊の同級生二人にバツタリ出會す。

『矢張り會社の方なの？　隨分學校とは亦違つた興味があるでせうね』と人の心も知らぬげな口振りに、返事もろくに爲ないで居ると今度は二人でやれ來月の文藝會の役割が氣に入らないの今日は郊外寫生があるの昨日は厭な理科が休みで嬉しかつたのと今の身の私に取ては唯いま／＼しい話計りとう／＼我慢爲切れなくなつて『今日は急ぎますから失禮』と變な顏する二人

に構はずサッサと行過て電車に乘ちまう。あゝ、私も此間迄はあの通りの境遇だつたのだ、苦勞と云へば試驗の成績位なもの、華奢な靴に身も輕う長い袂を翻して舞踏の庭球のと騷ぎ廻り文藝會に語學會にと一廉花形役者の積りであつた、それに比べて今の身は如何であらう、僅かの月給を當に毎日變化の無い仕事を繰返し周圍の人に氣を兼ねて計り居る、趣味も無ければ興味も無い、同級だつた人達は私が半途退學して後も絶えず學術に知識に進歩し發達してゐる事であらう、各自輝く前途を靑春燃えるやうな胸に畫き乍ら先生の高い御教に耳を傾けてゐる事であらう。

英語の受持の三上先生がよく『渡邊さんは全く英文學の天才がある、是非女子大學迄お進みなさい』とお世辭か知らねど一度ならず仰有た、其度毎に私の血は騷がずに居られなかつた、そして夢のやうな理想や抱負を抱いて天晴れ自分の未來は第一流の女子英文學者か左も無くば世に時めく外交官の夫人とも成て華やかな交際界に活動して見度いと迄思つて居た。其理想や抱負は今影も形も無い。

洋々海のやうな學びの道の行手を唯一向に漕ぎ分けんと他を顧る餘裕も無かつた私は突然思ひも掛けぬ暴風に遇て舟は覆り茲に美しい空想の夢は破れた。滿腔の不平と煩悶を包んで平凡以下の女事務員にならうとは、偖も悲しい變化ではあふ。

文の林の未だ入口にも達せぬ此淺果敢な知識を以てこんな所に用立てようとは思ひも至らぬ處であつた。思ひ出せば恥かしい、彼日學び舍の往き返りに官衙會社に通勤のまだうら若い女性を見て氣の毒と云ふよりも寧ろ輕侮の念を以て眺めて居たではなかつたか。あゝ今更誰に合せよう顏も無い。

思ひは夫れから夫れへと亂れに亂れて果しもなく人に足を踏れなかつたら危く乘過す處であつた。

急いで下りると向ふから來る同役の柴村さんに遇ふ『昨日は隨分酷しかつたねえ』など話し合乍ら會社の門を入ると『イヨ御兩處お揃ひで』と受付の頓狂聲。先草履と靴替へ髮の亂れを解き上げ衣紋を繕つて事

務室へ入る、時計を見ると八時半、暖爐の前には七八人集まつて雜談の花を咲かせてゐる最中、私が目禮すると皆變に顏を見合せて笑ふ、朝から厭な感じをさせられる。

先づ机を拭き器械の埃を拂つて鉛筆を削る、抽出しの中を形付けようと思つて中の物を出すと奥の方から何だか書た紙片が出る、讀んで見ると『昨日はいゝ人がお休みで御愁傷樣、今日は大丈夫御出勤ですから嘸お嬉しう御座いませう』とある、何と云ふ失敬な人達だらう、昨日のお休みとは秋元樣の事に違ひ無い、まるで此書き振りは秋元樣と私と可笑しな關係でもあるやうだ、冗談をするにも程がある、尤も私は始めから專ら秋元樣の方の係りだから自然他の方より多く物も云ふ、それにあの方は他のタイピストには餘り口をお利きにならないけれど私にはよく御自分の學生時代の事や商業出の方には珍らしいと思ふ程文學などのお話もなさる、他の方とは違つて優しくて威嚴があるから私は本當に紳士らしい方だと敬服してゐる、それ丈けの事が何が可笑しいんだらう、柴村さんや深井さんは私と違つて渡り者のすれつからしだから隨分私などが聞くと耳も塞ぎ度いやうな劣等な冗談を云はれても平氣で却つて一緒に成て戯けてゐるけれど私は一體開けないと云ふのが直ぐ腹が立つ、あんな下等な女達と同樣に見られてゐるかと思へば口惜しい、紙片はすだすだに破いて屑籠へ投げ込む。

追々人が出揃つて來た、支配人の足音と共に急に室內が寂然する、電話の音と給仕の足音が耳に立つて聞え出す。

深井さんの方ではもうコツ〳〵遣つて居る、私の方へはまだ何も來ない。

輕いスリッパの音が聞えてドアが開く、珍らしい秋元樣の和裝、目禮をすると向ふもニッコリお笑ひになる、誰だか妙な咳拂をする、覺えず赤くなつた。

十時頃から徐々仕事が出て來る、又略字澤山の手紙が一枚來てる、此頃では大分吞込めて來たけれど夫れでも短かい文の中に五つ六つ分らない字が有た、濟ん

だのを一通り目を通して居ると何處からか紙つ切れの圍めたのが飛んで來る、柴村さんが此方を向いて笑つて居る、あの人は暇さへあればこんな事許りする人だ、擴げて見ると至急通信と書て、今日の電孝（支配人の事で頭が禿げてるのに孝三といふ名だから）は餘つ程どうかしてる、あの雷樣が今朝から一度も落ちない計りかいやに鬱ぎ込んでゐるもの、こんな時にづるく構へて遣らないぢや損だから十一時半頃食堂へ行て遊ませう。大方こんな事だらうと思た、あの人は此頃深井さんと仲違ひして



居て、私を味方に引入れようとしてるらしい、人はいいのだけれど、口の惡さと云たら社員には片つ端から渾名を付けるし誰の處へでも出しや張ては厭がられて居る、お茶の水の學校に暫らく居たと云ふのが自慢で二言目には夫れが出るから社員の方ではお茶の水だの反齒だから、出齒村だの云て居る、深井さんの方は大分古參で始めは電話掛りだつたのが夜學で英語を勉強してタイピストに成たのださうな、北内も一人殖えるといふ事だが、いゝ人が來ればいゝ。

十一時過給仕が「福田樣がお呼びに成ります」と云つて來た、直ぐ行くと「手が空いてゐるなら讀合せを賴まれて呉れろ」と十二三枚の明細書を出す、讀書では隨分達者と云はれた方の私だけれど十枚目位にはウンザリして了つた。

やつと濟ませて息をつくと『大分參つたらう、でも是計りは他の女ぢや間に合はないからな』と云はれた時は惡い心持もしなかつた。

柴村さんの意に背いて十二時過食堂へ行く、賤しいやうだが全く此時間が待ち兼ねる、食事後は大方皆新聞の引張合だ、時事新報の懸賞美人に電話掛りのお靜さんに似たのが出てるとて大騒ぎ。

頭痛がするので露臺へでも出たらと上つて行くと早や誰か來てゐる後姿が秋元樣らしい、又調戯はれの種と引返さうとすると足音を聞付けなすつたか振り返つて『よござんす、いらつしやい』と仰有る、引返しもならずそこへ出る。

『門跡樣の屋根に鳩が止まつてゐるのが見えますか』と仰有るから『いゝえ私には見えませんわ』と云ふと『僕にも見えない』と云て笑つてゐらつしやる、隨分人の惡い方。

『渡邊さんのお家はどの見當？』『小石川ですから多分あの邊でせう』と指をさすと『ぢやあ僕とは大變方角違ひだ』と仰有る、確か秋元樣は高輪邊と伺つた。『妹が淋しくて困つて居ますから遊びにいらつしやい』とのお言葉、『有難う御座います』とは云たものゝ、今おや身分が違ふもの、到底伺つたつて對等の交際なんぞ

出來やしない、お父様がお出でになる時分なら何も自分を卑下する事などは無かつたのだが、運命とは云へ十八と云へば花なら盛りの大切な娘時代だのに私はこうやつて男子の中に混つて事務を取てるのだもの、どうしたつて貧乏人の娘か阿婆摺れ女としきや思はれはしまい。秋元様だつてさう迄は思つてゐなさらなくとも賤しい身分の女だ位には思て居なさるだらう、あゝつまらない〳〵と思出せば無暗に心持が惡く成て來て居堪らないやうな氣に成り「失禮します」と云ふより早く下りて了ふ、後で惡くはなかつたかしら等思つても見た。

一時頃に皆席に就く、深井さんの仕事を少し助ける支配人は一時にお歸りになつた、後で伺へば奥様が大分お病いとの事、お氣の毒に思ふ、あの方はお怒りになると酷しいけれ共平生はよく物の分つた男らしい方だ、奥様は非常に美しい方と聞つて居る。

急に室内が賑かに成出す。何事かと思へば夫れも其筈、福田様は社用でお出掛け、社長は此間から出張中の留守、煙い人は一人も居ないのだもの。

阿彌陀籤が始まつて電話でお菓子の註文がある。

芝居の話や運動會の相談が持上る、中には澁い顔してる人もあれば、耳を塞ぎ乍ら讀み物をしてる人もあるがそんな事にはお構ひ無し、都々逸なんか唸り出す呑氣な人もあれば、方々の机を廻り歩いて邪魔をする惡戯者もある。

一時間計りで騒ぎも靜まつて後は元の靜肅に復る。私も一頻り忙しく成出す。いつもより今日は早く仕舞ふと云ふので電燈が點ると同時に皆ばた〳〵形付け始める。私達三人は洗面所で顔と手を洗つて下へおりる。二人はまだ方々で油を賣てるのを構はずに私丈け先へ歸る。

外へ出ると冷りした風が熱した頬を撫でゝ實にいゝ心持。此時丈けは心中の不滿も忘れ唯終日の勤務を終つた愉快な感じと云ふやうなものが胸に浮んで居る、これが追々に進化して本當の勤め人根性に成て了ふんだらう、いつそさうなれば何も彼も忘れられていゝか

も知れない等思ふ。

會計の深澤樣と電車に乘合す、邊構はぬ蠻聲で會社の話を仕掛けるから唯さへ人に女事務員と見られるのがいやさに毎日用も無い風呂敷包みを抱へて學校通ひの風をしてる私、片つ端から乘客の耳を塞ぎ度く成る、小川町であの人の下りるのが待遠しいつたらなかつた。

富坂で下りる時ちらと三上先生らしい横顔が目に入つた、飛付くやうな思ひがしたがきまりの悪い方が先に立てとう／＼お目にかゝらなかつた。

柳町で弟のに駄菓子と手帳を買つて、今月の月給が渡つたら、お母樣にいゝ下駄を買て上げようなど以前の私なら考へも付かない事を思ひ乍ら何時しか足は我家の前に來て居た。

空には星が夢のやうにまたゝいて居る。

内を務むる人の役目

米國女醫學校の校長ランドウワー女史頃者人に語つて曰く男子は元是れ外を務むる者、女子は内を務むるものである故に女子には飽日内務の人としてその職責を遺憾なく遂行し得るやうの方針で教育を施されねばならぬ、この愛らしい内務長官の第一に心得て居らればならぬことは料理である、肉汁の加減である、平素夫の健康に注意しつゝある妻は、自身が外部に働て獲得するところの收入よりは、確に多大の收入を獲得するのである、之は都人士の家庭における收入豫算の實驗に徴して殆ど動かぬところである、故に人の妻たるものにして若し生活費として比較的多くの收入を得やうと思ふならば專ら家庭における凡ゆる事物に注意し、冗費の掛らぬやう心懸んことを、予は切に希望するのである、妻は第一に家庭經濟（この經濟なる辭は極て廣義に解釋して貰ひたい）の原理によつて、夫を助け行く内務の長官である、或は時と場合で妻が勞働をせんければならなかつたならば、宜く家の内で試るべしである内務の長官が無暗に外交界へ飛出しては一家の政事が立つ筈はない。

されば女子をして妄りに好奇心や、批評眼を抱かしめるやうに學問をさせるものゝあるに至つては、唯々驚くの外ない、どうか今日の教育家にくれ／＼も女の學者を製造しないやうに心掛けて貰ひたいものである云々。



氣味の惡かつた看護婦の日記

山田豊子

一日

中澤さんが紅屋のどら燒を召上りたいと言ふから淺草まで行つて買つて歸りには四錢で馬車に乘つて來た間もなく院長の診察で大變によくなつたから、この分ならおきられるだらうと言はれた、御歸りがけに體温表のつけ方がよいと褒ていたゞいたが之がはじめて。

夕ぐれの雲が山の後から初まつて空一ぱいに擴がるのゝ早い事、上野の方を見れば日が富士の後にかくれたと見えて、紫になつた富士の頭や、中腹の邊に金糸が飛んで居る、上野の鐘がゴーンとなつたと思つたら製絨所や方々の汽笛がやかましくなり初めた。

『山田さん』と呼ばれて氣がついたら鳥のたゝきがほしいと仰やる上たらよろこんで召上つた、何だか自分の事の樣にうれしかつた。

「こゝろの日記」を捨ちやんが送つてくれたから讀んで居るうちに、十時が打つた、床に入つてから此前の試驗の事や、中澤さんの身分は一體何だらうなぞとつまらぬ事を考へてる内にうと〳〵と寢入つてしまつた。

二日

今朝はしく〳〵降りで陰氣な日、朝から中澤さんの御妹さんが御來になつて、間も無く御歸りになつた。

中澤さんはやせた、骨と皮ばかりになつた手を出して、指環や時計の自慢を初めたが、死神に魅入らうとして居る樣な體でよくこんなのんきな事が出來るもの本當に女は虚榮心の強いものだと思つた、晝御膳もおいしいと召上るし、此分ではほどなく恢復しさうだ、併しやせた肩を動かして息をなさる所を見ると、さう

も思へない、何しろ肋膜だから。

三時頃院長から一寸と呼ばれて院長室に行くと、

「御入り、山田、大變な事が出來たよ」

「何で御座いますか」

「今刑事が來ての話しに、中澤の亭主は盜賊だと云つた」

「へえ、さうですか」

と云ふた切り何とも云へなかつた、室を出樣としたら

「まだあれには云ふなよ」

「はい」

二階に來たが、成程さうかも知れぬ、妹さんは身裝が惡いし、又中澤さんも言葉がきたないし、都新聞をすぐ注文する所を見ると、成上りの人と思つたが、盜賊の御かみさんとは意外であつた昨日戴いた半襟も不正な金で買ふたのか知ら、一たい中澤さんはどうなるんだらう、私にも何か懸り合になるかしら飛んだ人に附いたものだと思つたが仕方がない、夜も何となく淋しくて、中澤さんにも今日は左程親切で無いのを見ると私たちは隨分ひどいと思つた。

床へ入つたつても却々寢られない、蟲でも知らすのか中澤さんが呪されるのだから猶の事寢られない、十一時の荷物列車がゴー／＼音をさせて行くのを半きいた頃、晝のつかれで知らず／＼寢入つた。

四日

一昨日の事は院長が私をかついだのかと思はれるほどあれから何の事もない、朝から晴れ渡つた空には少しの雲も見えず、室中日がさすので、中澤さんの側に居て新聞を讀んで聞かして居ると、下の方に何かどやどや人聲がすると思つたら、階子だんを大勢で上つて來た、障子を開けて入つて來たのは院長と二人の見知らぬ男、刑事であらう。

「お前、中澤光と云ふのか」

と云はれた時に中澤さんは凹んだ目をみはつて、

「はい、何か御用で御座いますか」

「うむ、御前の亭主は神戸で縛つたよ」

と云ふのを聞いたら中澤さんが身體をそらしたから、

氣付けを飮まして。
「何もお前は心配する事は無いよ、あの、金を送つて來たらう」「いゝえ」「うそ言へ、お前と約束はしたらうが濟吉はもうすつかり白狀したのだよ」
と言はれた時、賴みの無い樣なため息をして、
「さうですか四十圓來ました」
「よく言つた入院費は殘して置くからよく治療した方がよい」
其他刑事は色々な事を聞糺して手帳に書き付けて歸つた、熱が出て氷で頭をひやすやら、大變なさわぎ、晝は御膳も上らず晩にソップだけ、心臟が惡くなつたから、要愼しろと云ふからつき切にして居たら、
「あれ程までに」とか「たのめない」とか、譫言をいふて此夜は私は一寸も寢つかなかつた。

五日

朝一寸瀧田さんに代つてもらつて休んでから行つたら、やはり、うは言ばかり、注射して少し落つけて置いたが、夜になつたら、又具合が惡く、妹さんも來て私に手傳つてくれた、たゞでさへ疲れてる所、昨日から一層つかれて、病氣も重つて來て、十時頃又「あれ程」とか「くやしい」とか言つて私と妹さんにつかまつて、まあ、中澤さんは眼を半分開いたまゝ死んでしまつた、中澤さんが死んだと言つたから院長も漸と來るし大騷して、私が床に入つたのが十一時頃、何を考へるひまもなく寢入つた。

六日

朝から人足が來て小さな箱に中澤さんを押し込めて其上に布をかけて持て行つた、まあ中澤さんは不義の金で多少なりと滿足をして、金の爲に殺されて、人足の手にかゝつて、小さな箱に入れられて、終には灰になつてしまふのだ、隨分人間も逆境になつてはひどいものだと思つた、看護婦も心の日記にあつた樣な時はよい役目と思ふが、此樣な時はもう本當にいやになつてしまふ、あの半分開いた目で、瘦た靑い顏が眼に止まつて困るから、晝から神田の伯母の處へ行て、さんざ其麽事を忘れて、捨ちやんと遊んで十時頃歸つた。

結婚後はじめての

年末年頭日記

若葉

おゝ、日が短かい。今晝餐の片附したきりでもう暮れてしまつた。でも、今朝から良人のお正月着を縫ひ上げて、うちの掃除をして、お重づめをこしらへて、かなり澤山用が出來た。隨分くたびれたけれど、また、これから夕御飯をしまつて、買物にいつてきて、お湯にはいつて、今夜のうちに此年の計算もせねばならぬ。

晦日の晩に年始狀かいてカルタとりした寄宿舍住みの去年に比べれば、書生上り〳〵といはれるけれど、これでもよつぽど世話女房になつた。机の前に靜坐して、過去一年間の追懷に耽る暇などありはしない。

お茶菓子と蜜柑と柳箸を買ふつもりで、平常着の上へ古ショールひつかけて神樂坂へ出ると、門松注連飾り古着古靴お餅も數の子も兩側の露店へカンテラつけて賣つて居る。

お正月がきたとてお客樣にだす會席膳一つない不自由勝ちの新世帶、心細くも悲しくも思ふが、それでも四五日前にお餅つかせてお雜煮の用意は出來て居る。夫婦が今日の働き溜りを集めて此處へきて一枚十錢の餅買うて明日の朝祝ずる家もあると思へば、これで己れ富めりとも威張つて居られよう。

坂の終りの處に福壽草と梅の鉢植を澤山ならべて賣つて居る。なに一つお正月の飾りなき床の間にせめてこれでもとあまり價値の高くないのを少し負けてもらつて買ふ事にする。折り柄こゝへきた若い奥樣風の婦人が今自分がいゝ枝ぶりだけれど高いと思つてよしたのを取り上げられると、露店の老爺奥樣の服裝の立派なのを見てとつて、さきに自分に云ふたより十錢高く云ひながらお格安で誠によい枝振でと頭をペコ〳〵下げて居る。

若き奥樣は輕く點頭き云ふがまゝの價とらせてお供

の女中に鉢をもたせ徐かに歩を運ばれた。

どうやら見た事のある妾と歸る途々首かしげて考へて見れば、おゝ、それよ、一ツ下の級で中途退學をして二十歳上の實業家に嫁かれた評判のあつた方だ。學校出たての青年の賣れ行きが惡くて生活難とやらの聲が盛んになつてから、親子ほど齢が違つても二度目でも三度目でも繼子があつても地位や財産のある方に嫁ぐのが流行るさうな。そして繼しいお子様がたは乳母や女中の手に任せて奥様初々しう奇麗にお化粧遊ばし避暑避寒の御旅行や交際場裡にお二方打ちつれ給ふとか。

腕一本で世に立つ初めから貧困に逆境に相助け相慰めてこそ夫婦の眞の情はあるものを云ふがまゝの贅澤させるのが男の働で、顔や姿の外觀の美をもて男子の愛を呼ぶのが女のつとめなら、馬車の内の令夫人も左褄とる妾、遊女も五十歩百歩、などゝいつたら貧乏ものゝ負け惜みとけなされてしまうだらう。こんな事は、まだ此の先き、數十年たまつて辛抱して、せつせと働て、立派な家庭をきづき上げてから云ふことだ。

一月一日

正午零時を以てこの年頭とするならば、自分はまさに、四十一年十二月の計算をなしつゝ新年を迎へたのであるが、それが昨夜、晦日の晩のつもりで一日の朝の五時卅分これでいよ／＼四十二年だ、我が妻としての生涯もこゝに一歳といふ齢を加へたと思ひながらおきる。

水道の栓ねじてジャア／＼と出す水に初若水の風情はなけれど縫ひたての折り目正しき着物きて梅かほる部屋のうちに屠蘇酌み雑煮の箸を取り上げた時は、どこやらに厳粛な清新な意味がこもつて居る様な感じがする。

良人は新年祝賀式にとて出られたあと朝の片つけをしてお客様があつてもまごつかぬ様に用意しておいて今朝はおちついて新聞をよむ。元旦の紙面はなか／＼賑かだ。

附録文藝の中の短篇作者「まつかせ」とは、一緒に「ロ

セッチ」詩を讀んだ上田京子さんの雅號だ。相變らずの才筆、自分なんぞ日一日、糠味噌のなかへはいつて行くのと反對に、どし／＼筆が熟達しられる。羨ましいといつて今更家庭を棄てゝ閨秀作家になる氣もなく、なりたいとてそんな詩才のある自分でもないけれど。

途で逢つたとておひる頃に良人が麹町の兄様をお伴して歸られた。お口取やお酢の物やありつたけならべお屠蘇もちだすと『ホー立派に仕度が出來てるね』つてにこ／＼して居られる。『御主人公臺所へ出馬してやつと成効したのですからな』なんて隨分ひどい、二色玉子を臺所で一生懸命こしらへて居た時、茶の間の長火鉢にかけてあつたお煮豆が焦げ臭いとて、鍋を下してくだすつたきりだのに。

御飯召上るとまだ廻る處があるからつて兄さんはお歸りになつた。晩には骨牌とりでもしよう二人で出かけておいでと外の敷居をまたぎながら仰有る。

夕御飯後自分もまだ麹町へ年始に行かぬから今夜一緒に行かうと勸められた。別に一人で三日か四日頃に上るつもりで居たけれど、兄様もこよと仰有つたからと思つて、すゝめらるゝまゝに行く事にする。

良人は三男で兄さんは長兄、十二の年上で家をなしてから十五年になられる。九段の後、四番町のお宅は十年精勵を積まれての四五年前買ひとられたとかで自分達の樣な借家住居でない。○○と記された瓦斯燈の光り淡く門前のそぎ竹をてらして、まばらな注連飾りが冷たい夜風に戰いで居る。

玄關から上つてお居間の方へ行きかけると女中が出てきてまあどうぞこちらへと強て座敷の方に導く。

十疊の座敷の床の間には折に似合はしき一軸がかゝつて花瓶の松竹梅、三寶の鏡餅贅澤なものはなけれど凡て手おちなき裝飾。

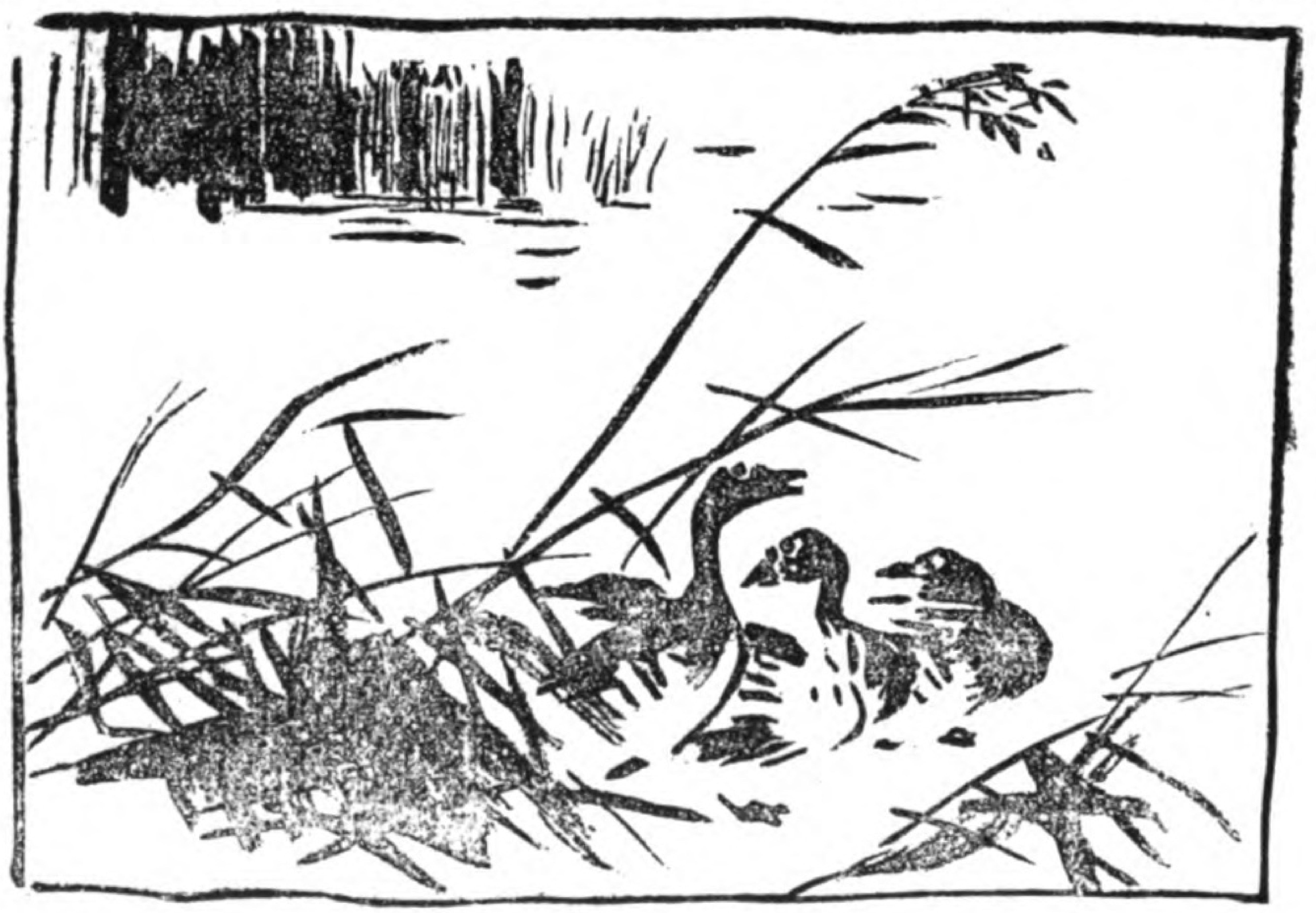
『ヤアよく』と兄さんが出てこられる。火鉢、お茶お菓子などが女中の手で運ばれてから嫂さんは出ていらつした。

一筋亂れぬ丸髷つやゝかに、黑紋付の羽織めしたお姿いつもながら此方の居住居を正しうさせる。

「マアよくこそ。さあづゝとおしきなすつて」と愛想よく新年お目出度う舊年はいろ〳〵の、挨拶がすむとお膳やお屠蘇がすすめられた。十餘年の經驗をつまれた丈けに、自分など學校出たての未熟ものがしたのとちがつてお重詰の取り合せおつゆの加減立派なものだ。

『やはりどうも本物ですな。うちにはまだこんなのがありませんからね』と笑ひながら良人は、朱ぬりに金紋のついたお盃でお屠蘇を受けられる。

『イヽエどう致しまして、大變よくお仕度が出來て居ますつてね、今日はまた御馳走になりましたさうで』と嫂さんは妾の方



へむいて云はれる。

冷かすつもりで仰つたのではないが嫂さんのお手ぎわと比べものにならぬ自己の拙なさを思つて赤くなつた。

總領の春子さんが叔母さん骨牌しませう〳〵と云はれたけれど元日からお二人連れでお氣樂ですねと戯言らしう嫂さんの仰つた一言が氣にかゝつて『遲くなるとうちの用心が惡うございますから』つて早く歸つた。

自分は女學生仲間のサックバランな交際にばかり馴れたせいだか嫂さんはいゝ方だけれどなんだかとり濟ましてゐらつして打ちとけにくいと思ふ。お米が高い月末が苦しいの愚痴もこぼ

しあつて馴れぬ新世帶の苦しさにも同情よせて頂き、兄さんが二十五圓の月給とりから萬の財産を作らるゝ今日までの内助の御苦心もうかゞつて、ほんとの姉樣の樣に叱られたり勵まされたりしたい樣に思ふけれど姉さんはうち向の話などもちだすと『お互樣ですよホホ、』位で話をわきへそらされる。まさかに同情よせたら借金の無心でも云はれるかと心配なさるのであるまいが上手にもてなしてくだすつても人を滿足させようとよりは自分を批難せられぬ樣にとの考がつきまとつて居る樣で互に笑顔もて接した後もなつかしい暖かさはのこらぬ。同郷の一青年が惡口云ふたほど怜悧でケチン坊ではなくなすべき事はしられ、出すべき處へは出されるけれどあまりに古風で嚴格に過ぎらるゝ爲めか何處か冷やかに思へる。

とはいへ貧困に屈せず安逸を貪らず十餘年一日の如く家内の整理に全力を盡して良人にもお子達にも朝に夕に自ら周到な注意を注がれるお心がけは園遊會に派手を盡して人に見かへらるゝを誇とする令夫人や、糠味噌にカビを生して詩集擴げてハイカラがつて居る奥樣と比べものにならぬ。見上げたものだ。自分など見て模範とすべき處が多い。

うちへ歸ると良人はお屠蘇がまはつたかすぐ床にはいつて高いびき。一人おきのこつた家のうちはシンとして鐵瓶の湯が獨沸々と音をたてゝ居る。

これでもう四十二年正月第一日も終りだ。何の、興趣もなき簡單平凡なお正月だけれど、それでもこのさき幾十年せちがらい世のあら波の中に揉まれあふれて行く一生のうちには、今日のこのみすぼらしい佗住居のうちにもさすがに、まだ望み多き青春の血汐通ふこの正月を、なつかしき思ひ出の一ッに數へて日記とり出してはゝゑむ事もあるだらうとこの日記をかきつけておく。



嫂の書いた小姑の日記

露子

十一月七日　今日は土曜日だと思ふと朝の程よりうれしい、しかし、今日が嬉しいのではない、明日の安息日が嬉しいのだ。

午後五時頃中本夫婦來る、お姑さんは下にも置かぬ優待、併し私は少しも嬉しく感じない、感じないのみか不快でたまらぬ。いつか、森さんが『あなたのお家の樣に完全なお家はない』とおひやかしなすつたが、ほんとになせこんな家に嫁たのであらうと、八年の昔を眼前に見る心地がして殘念に思つた、舅姑はいはずもがな、小姑が四人、俚言に『女小姑と春東風やいやだ』といふが、其小姑が三人、男はすつぱりしたものだと聞いてゐたのに、流石、お姑さんのお子で、弟も却々だ、其中でも中本の妹は、口八丁手八丁といふが、口は却々八丁ではきかぬ、一里でも足らぬ、やれうれしや、嫁付いたと思つてゐる處に、一ヶ月に四度も五度も、夫婦連れで泊り込む、泊るもよいが、あてことの鱈腹、厭味の山程、夫といふ味方が出來たと思つて、前よりもひどい。

私が此處に來て、間もない時の事であつた、里に二三日行つて歸らなかつた、處が、夫が尋ねて來てお泊りになつた、サア大變、お姑さんの御立腹、下等社會の者の樣に嫁の後を逐ふていつて泊るなんて、それはそれは、百騎の精兵も當るべからざる勢であつたと、夫が仰しやつたが、それに御自分の娘は……あゝ、厭

だ、月の三分の一は慥に當家に來てゐる、鬼千疋とはよくいつたものだ、昔の人の言葉に嘘はない。

十一月十三日　午前十時頃より日の影失せて、一天曇つて來た、降りになるであらうか、降るのは五月蠅が、いや／＼雨降れかし、結局其方がよいと思つた、午後一時頃より雨天となつた。天も我に同情し給ふかと、いと／＼心強く思つた。お姑さんは『雨になつたから今日は來ないであらう、風でも引いたらいかんから、迚も旦那がよこす氣遣はない、それは／＼大事にするからな』と仰しやつた、特に語尾に力が入つてゐる樣に思はれたは、心のひがみか。

午後五時前、門前に車が止まつた、どなたの御入來かと急ぎ出づれば、いやはや中本御夫婦であつた、停車場から僅三丁足らずの處を車とは、嘸御得意であらう、お舅さんが、お固い人であつたから、家にゐた時分は車などに乘つた事はなかつた。私が初めて親類へ行つた時でさへ、徒歩であつたので、里の兩親が陰で大層腹を立てた。お舅さんは、草葉の蔭で此有樣を、如何に思つてゐらつしやるであらう。

お姑さんのお喜は、雀躍せん迄であつた。夕餐から妹夫婦とお姑さんと三人連で、大通の方へお出になつた、今日は舊曆の十月二十日で、呉服店ではゑびす切といつて大賣出しをしてゐる。十時過風呂敷包の大きなのを二つ持つておかへりになつた。『いゝものがありましたか』といつた、其答が面白い『いゝものはない皆田舍向ばかりで、これは塵紙なんかですよ』と、さても、澤山の塵紙よ。思ひ返せば、私が此家に嫁た年の暮であつた、晝の間は、只ぶら／＼と暮して、夜私共の寢靜つて後、紋付から袴まで、新しく仕立て〻一月一日の式に着飾つて學校にいらしつた。私が『オヤきれいですチ』といつたら、妹が『これは借り物よ』といつた、何でも秘し秘して、ちつとも打解けた風のない妹であつた。姉妹でも末の妹は、心のよい歯痒い位、こらへ性のよいお子で、お姑さんが中本の妹ばかり可愛がつて、末の妹は繼子の樣にしてゐらしつてもちつとも不平がましい素振も見せなかつた、ほんとに

感心なお子であつたが、神樣はよく見てゐらつしやる人格といひ、地位といひ、立派な良人を持つて、都の空で樂しく暮してゐる。

十一月二十一日　小春日和の暖さ、何處へか二泊旅行でもすればよささうだ。

東京の妹から手紙が來た、いつもやさしく千代子の樣子を尋ねて下さる、手紙と一しよに小包を出したと書いてある、ほんに、いぢらしい。中本の妹が東京で增田の妹が郡山なればよいに、來春のお舅さんの一周忌には、必ず逗留する事の出來る樣に、義麿さんに願はねばならぬ、併し、あんな氣分のお子だから、義麿さんに心配して逗留なさらんかも知れん。私の樣なものにでも『姉さん姉さん』と大事にして下すつたもの。

お姑さんが、妹が大尉にいつたから、姉は少佐か中佐でなくては遣らぬと、口癖の樣に仰しやつて、却々お手放しなさらなかつたが、其中に齡はとる、言つて來る先は、次第に惡しくなる、自暴になつてとう〳〵今の處へお嫁付けなすつた、いくら齡とつても、まだよい處もあり相なもの、殊にお舅さんがおなくなりなすつてから、まだ一周忌も濟まぬ内にと思つたが、一家の事は皆お姑さんの御所存通り、私等夫婦は居候同樣だから、何もいふ事は出來ないで今日迄過したなどと思つてゐると、相變らず中本夫婦のお入來『明日と明後日と休が二日續くから、明日の朝來ようかと思つたが、土曜に來る事になつてゐるものだから、落付いてゐられないで又來ました』との事。

妹が『今晩大通に出ませう』と誘ふ、夫は、お伴は御免んだと仰しやる。不得止私一人お供する事になつた、お供とはほんに此事だと思つた。二人は肩々相摩するてふ有樣で、喃々と話しつゝさつ〳〵と行かる、眼中人なきが如し、人が見たら何と思ふであらうと、途中で引返さうかとも思つたが、ならぬ堪忍するが堪忍と二時間餘りお供をして歩いた。

十一月二十二日　相變らずお三人連で、浦留にかきめしを食べにいらしつた、嘸御愉快であらう。私もう

れしい。今日部屋の壁の塗り更へをしたものだから、次の間に寢つた、中本夫婦の寢室と隣り合でいやだが仕方がない。夜中に隣室でお姑さんの聲『炬燵が熱い喜代さん熱くはないかな』『あなた如何ですか』『少し熱い樣だ』と三人の聲がした、はて不思議、夢かあらず現かと暫らく考へたが、夢ではない、嗚呼！　お姑さんもお姑さんだが妹も妹だ、此母にして此子ありと思つた、尙不思議なのは中本の心だ、氏より育といふが、矢張、育ちより氏だと泌々感じた。お舅さんは、天國で如何にいまく\しく此樣を見てゐらつしやるかと思つた。

十一月二十三日　臺所で朝の仕度をしてゐる間に、千代子は目をさまし隣室にいつた。呼びかへして『ねんねしてゐらつしやる時に行くものではないよ』と敎へた。胎兒にさへ敎育の功はあるものを、困つた事だと將來を氣遣つた。

午前十一時前『一寸出て來ますとて、二人手に手を携へて出て行つた、又何處かの料理店に行くのであらう、新婚當時は、後の考もなく、とかく金を浪費するものだが財產もなく、俸給とて多からざる身には、後悔する時が來やしないかと人事ながら案じられる。

東京の妹から小包が届いた。ほんとによく氣のつくお子だ、私は眞似も出來ぬ。お姑さんには眞綿の胴着に風月のおまん、弟にはミット、夫には襟飾と手製の手袋、襟飾は却々振つたもの、手袋の手製が何よりうれしい、千代子には赤の肩掛に人形の玩具、私にはゴム草履、ほんとに見立のいゝ事と思はず口走つた。

お姑さんは、何かと御機嫌がよくない。

三時過妹夫婦歸つた『實の姉であるのに、何もよこさないとは、あんまりだ』とて大立腹、お姑さんとお二人で、散々不平を仰つた、なだめるのに却々骨が折れた。

今晩は珍しくお出かけがない、お姑さんは妹の用達に何處かへいらしつた。お二人で樂しさうに話してゐられる夫婦相和しとは勅語の御趣旨のある處だから、それを兎や角いふではないが、中學時代の男子を持つ家族は、大に注意せんければならぬ、此時代が最危險な時代である、だから我々は弟の前では、餘り睦じくしない、敎育の頭のない人は誠に困る『オヤオヤ大變天狗になりましたネ』と自問自答した。



女教員の日記

ゆき子

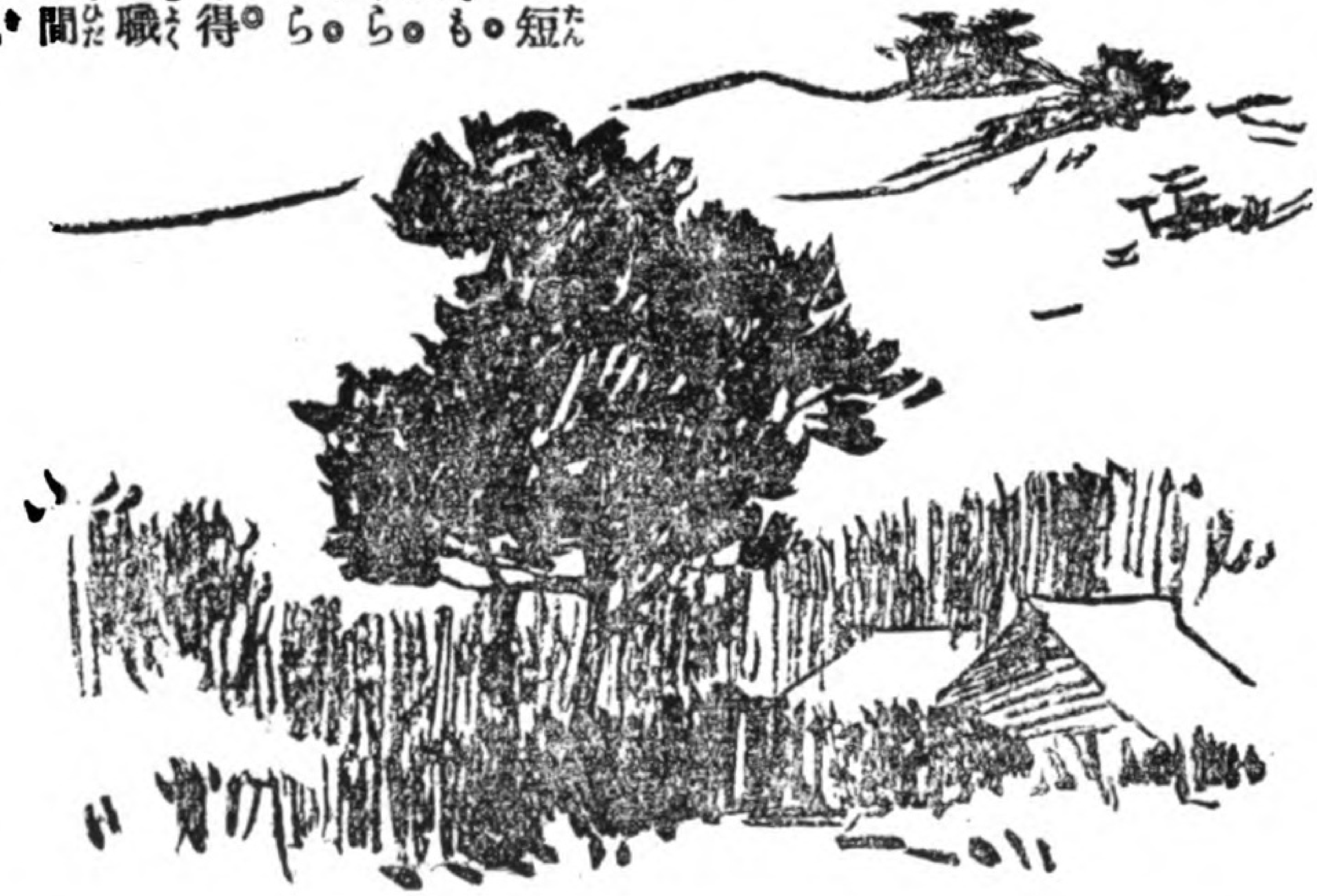
十五日　晴

昨夜「女學世界」に浮かされてとう／＼二時まで更かしたせいか、いつもの六時を知らずに何か夢を見てよい心地で居るところを母上にゆり起されてビックリだから髪も結はずに仕度そこ／＼登校（始業時に先だつ事二分）

地理の時間に校長が廊下を御通り成されて、ガラス越しに暫く此方を御覽成された。まづい教授をどうか見逃して下さる樣と祈つて居ると、其まゝ向ふへ御通り越し御隣りの戸が開いた。先づは安心と胸撫でおろして居ると、今度は此方と隣室との境の戸がガラ／＼と開く。生徒は一齊に後ろを向く。（御隣に竹内さんが居られた時は授業の際を盗んでは此戸を開けてよく無駄話をしたものだが御男子の上野樣と代られてからは用事がないので早や一年餘りも開けた事がないから生徒の怪んだのも無理はない）日頃の訓練が行屆かない故だと覺えず腋の下に冷汗が出た。校長は其の敷居の際に御立ち成されて梅組櫻組を一ト目に御覽成さらうと云ふ一擧兩得の御考へだらう。こちらは鹿兒島縣の復習で『種子が島に就て何か覺えて居ますか』と發問すると『それは德川家光の時に西洋から始めて銃砲が傳はつた所であります』と一生が答へるスルト『ちがひます違ひます』『注意／＼』と各自に叫びつゝ『西洋ではありませんポルトガルです』と云ふがあれば『家光の頃ではありません戰國時代だと思ひます』と注意するもある『西洋もポルトガルも同じ事です』『私は家光の時だとどうしても思ひます』と此處に起ち彼處に手を擧げて甲論乙駁の賑かさ。校長は半白の御鬚を撫でつゝニコ／＼と此の無邪氣なる小娘の大議論に御耳を傾むけ給ふ。どうにか斯うにか曲みなりに授業は終つてホッと息をついた。

今日は職員會の日だが早く歸れたら秀子さんを御訪問したいものと、お隣の松下さんに低聲で『職員會

ありますの？』と伺ふと『どうやら有りさうな臭ひがしますよ休會になればよいのにねえ』とお首を縮められたが此んな身勝手な願は神の納受ましまさう筈もなく悲しや開會との宣告を受けた。今日は珍らしい事に校長が三組も授業を御覽成されたとの事で一々短評を試みられた私のに就ては黒板に略圖がほしかつたと仰せられた。校長は部下の短所や缺點を御注意ある時には何時も其れと露骨に指摘されずに比喩やら諧謔でそれとなしに婉曲に訓戒せられる、常に此の筆法だが頗る妙を得て居られる、それだから十幾人の職員を統御して十餘年の永の月日の間に誰一人不平を鳴らす者もなく和氣



靄々の中に先生々々と慕はれ給ふのである。

五時に會が濟んで歸り途にはもう電燈がついて居た。夜は例に依て母上に新聞を讀んでお聞かせ申たはよいがものゝ廿分許りもたゝぬ内に眠氣がさして果てはレロ〳〵と呂律が調はなくなる『何が何だか薩張り分らぬもう早くお寢み』と母上の御不興を蒙つて直樣お床の中へ入る

十六日　晴

今朝は大分早かつたので山陰道（教員室の机が一列に並んで居て中央には用箱が据へ付けてあるので一方は明るく反對の側は頗る暗いから山陽道山陰道の名がついて居る自分は其の所謂

山陰道の住民なので）では私が先登だつた。其中に女敎員一同への宛てゝ竹内さんから御手紙が來た。待ち兼ねて居たので皆んなが寄つて始業の號鐘も聞こえず嬉しがつて讀んで居ると傍の〇〇老先生が『お友達の御手紙はそんなに樂しいものですかナー、オヤ／＼長いおふみだ事』と仰しやつた。御手紙の内容は、本年は彼地も寒さが未だ左程なく降雪は一度もない事、家持子持ちに成つては身の化粧などに浮身をやつす隙の無い事、スヰートホームの樂しさはほんの當分の事で此頃は何の昧ひも無いこと。來春は子供を連れて歸省する積りで夫れが唯一の樂みで一日千秋の思ひで居る事等がごた／＼と例の流暢に見事な筆蹟で書いてある。なかば以下は銘々へので近い中に結婚を成さる兒玉さんへは未來の將校令夫人たるに缺くべからざる準備は交際術に巧みなるべきこと、西洋料理のたしなみあるべき事等であると例を擧げて御注意があつた。私へは此の前の樣にお話を山の樣に積んでおいて切手代六錢をハマッたりしないでもチョコ／＼再々よこして與れとの事であつたから夫れではと後とも云はず休憩時の隙をねらつては書き／＼して來信に劣らぬ大封にして午後投函して置いた。私が即日に返書をかくなんて實に空前絶後といつてもよい位だ明日はお天氣がちがふかも知れない。

四時に歸つたが途中で〇〇の奥樣が御芝居行なのだらう出遇つた。何といふものか私等には名も分らないリユウ／＼したお召物に更紗の御襲ねで、お羽織はあれが瀧おめしといふのであらうか、半衿は先日私が茜屋の店頭で涎をたらした新柄の珍品たしか三圓近くだつたと思ふ。御自慢の濡れ烏の樣なおぐしに金簪をぴかぴかさせて白魚の樣な御指にも同じなのが二つ三つ輝いて居る。御履物は意氣な空氣草履何から何まで最新流行の粹を凝らせた御裝で近よればプンと得ならぬ香が鼻を撲つ（私は不圖いつかの「女學世界」の『ほこり』といふ繪を想ひ出した）此の方は芝居を見に行かれるのであらうか御身なりを見せに行かれるのであらうか。私にいと應揚な御會釋をたまはつたから私は

身に餘りたる光榮と云つた樣にわざと頭を低く下げて見せた『如何です又らつしやいませんか』と心にも無い事を仰しやる私あんな御世辭大きらひ。

行きすりがひに私は無意識に、（心理の先生は此樣な處へ無意識を使つてはいけないと仰しやつたがつひ無意識に書いたのだから仕方がないわオヤ又違つたオホヽ）自身の身のまはりを見て一寸シヨゲた、洗ひ晒しの双子に日にやけた大島まがひの筒袖羽織。髮の毛は挨にまみれて白髮を欺き、下駄と云へばさし歯のちびくれ『ア、同じ女と生れて』とつかうとした吐息を中止して、イヤ〳〵これが私の身分相應な服裝なのだ綿服は自分の主義だ粗末なれ共自ら額に汗して得たる我が寶だと急に勢づいて痩せ肱を張り反り身になつて家へかへつた。

九時過まで手習をしたが飽きて來たから氣を替へようと洗濯物の銘仙の羽織にしきしをあてる（學校の火鉢の火で焦がして大穴のあいてるのに）例のゾンザイ屋でよい加減にやつゝけて居ると母上がそんなまづい事したらばあれでも先生の御手際かと人に笑はれますよ、こちらへお貸とて御自身が仕直して下さる。成るほどうまいものだ今更では無いが母上は御仕事にひまの要る丈けに御手は立派なものだ。其の子の私がどうして斯う裁縫がまづいのだらう下手だからいやで〳〵たまらない一時間も針を遣ふともう肩がメキ〳〵云ふのだもの自分ながら愛想がつきて仕舞ふ。

私の仕事を母樣がして下さるのにまさか御先へとも云へないのでよんどころなく御傍で新聞を朗讀する、母樣は今樣の小說が太のお嫌ひで小說と新演劇とは亡國の基だとけなされるのが定法だが今晩も其の御持論で氣焔萬丈勢ひあたる可からずだ私が當の敵でも無いものをよい迷惑だ。

十七日　晴

よくもお天氣の續く事しかし今朝は大變に寒むい其の癖だ裏には眞つ白に霜が結んで居るものを、肩掛や手袋をしたいけれども學校から生徒に禁じて居るのおやから私も辛抱せうと思つて一切用ゐない事にして居る

から。

今日は遊戯場監督當番だ生憎の此の北風冷めたく面をうつ中に立つてあちこち廻らねばならぬ、イヤ此れ位の寒さに辟易してどうするものか未だ追々に雪も降る氷もはる耳を切る樣な風も吹き出すのだ此れしきの寒さに弱音を出す樣な者がどうして未來の社會に立つて活動すべき健婦人を教育する事が出來ようぞと、我とわが心を勵まして職責を全うした、しかし實際脚部が冷えてたまらぬ、これが嵩じると又例年の腹痛が起るのだ用心に如くはなし明日からは股引を忘れずにはく事にしよう。

此の中でも子供は實に活潑な者だ、もみぢの樣な手を口にあてゝ暖め／＼しきりに繩とびをして遊んで居る、此所にも彼處にも繩飛びの大流行、いろ／＼面白い曲飛びを遣る、あんな小さな生徒でさへうまく飛ぶのぢやからと試みに仲間入りをして見てもなか／＼いけぬ、徒らに生徒の冷笑を買ふのみであつた。

綴方の時間に繩飛びと云ふ題で作らして見たら、皆おもしろく出來た、此頃は劣等生までが綴方を喜んでする樣に成つてほんとうにうれしい、私が某生の帳を取つて讀み上げる中に『とび損なつてころんで膝から血が出た』と書いた積りなのが血の字の頭のノが落ちて居たから殊更に高聲に『ころんで膝からサラが出ました』と讀んだので一同ドッと大笑ひをした。子供を相手にして居るといろ／＼罪のないをかしい事や面白いことがあつて、憂きも心配も何處へやら。自然と子供化して無邪氣な心に成つて來るア、愉快なる業よ神聖なる天職よ私はいつまでも子供大將でくらしたい。



ふところ寒き 妻の日記

呉竹

十二月五日　晴

相も變らぬ大霜だ、朝の内は指も千切れさうで、つめたいといはふよりむしろ痛いほど、けれど障子に陽のさす頃になると、ぽか〳〵暖かくて、からだ中の血が皆頭へ上る樣だ、そつと細目に開けて見ると、何だか斯う……小春つてのかしら、はてしの知れぬ樣な澄み切つた空が、心地よくまぶしい程、光るでもなく透き通つて居る、二三日氣分が惡かつたので、そこいらあたり新聞やら書物やら、おや〳〵このまあ敷居に、玉がまあ、男ばかりだとほんとうに、まあ、やつときちんとなつた。

久びさに丸髷に結つて見た、夏からずつと束髮だつたのだから、ひとりではどうかと思つたが、案外根もしまるし、格好も好かつた、それからお湯へ行つて、さて鏡に向ふと、妙な物だ、日本髷だと少々おしろいが濃くつても目にたゝぬ、おや紅がもうなくなつたのだつたね、やはり私の樣な陰氣な者には、紅でもさゝぬと引き立た無い、あの亡くなつた兄さんの惡口ぢやないが、冬瓜のおばけの樣でみつともない。

夜、良人が歸つていらして、そりあ自分ぢやゐるまい、乾度髮結ひだよつて、ほんとうになさらない。

十二月八日　曇り

今日の寒さはまた格別、時々ぱら〳〵雨も、北野あたりは雪らしい、二三日よかつたと思つたが、けふはまた心地わるい、何もせず炬燵に這入つて、古切れのつぎ合せ、外はいかにも寒むさうで、荒々しい風が木の枝をもみ合はせて居るばかり、日の目もさゝぬので陰氣な事はなはだしい、考へるでもなく物思ひにしづみながら、針の手を動かしては居るが、ともすれば吐息ばかりがもれて仕樣が無い、ほんとうにまあどうすればよいのか、ろくな思案も浮ばぬ。

此の月も出すべき物を出してしまふと、日々の賄費と其の他の雜費が合せてたつた四圓ばかり、どんなに儉約しくしたつて一日に二十錢平均はでゝゆく、何しろおひるの御辨當のおかずから、夕食の皆のばんさいこれはどうしたつて缺かす譯にはゆかぬ、それだけなら何でも無いが、時には郵便も出すし、湯代もある、石油も此の月は小買より出來ぬのだし、お漬物だつて一時に漬込む事は到底むつかしいから、不經濟とは知りつゝちよい〳〵當座に、大根なり菜なりを漬けてゆかねばならぬ、其れから土曜日なりとも、せめて脂氣の物をと、牛肉なり魚肉なりにする事と定めてあるし水曜と土曜には、何なりとお八ツもせねばならぬ、こんな事こそ廢してしまいたいのだが、折角疲れて歸つていらしても、いつも野菜ばかりぢや何となし物たらぬ樣で、私の役目もすまぬ樣だし、秋雄だつて十六にもなつては居るが、一週に二度ときめるまでは毎日だつたのだが、此の頃ぢやそれで辛棒して居るらしいまた良人でも、月末に私からお目にかける計算書を御覽なさる時は、もうこんな事はせんでもよろしいよ私が何とか云つたつて知らぬ顏をして居れつて眞面目におつしやるが、三四日もするとまた何も無いかなあ、つてな具合、お約束ぢやありませんかと申上げたいが少時の間をぬすんでも、疲れを休め樣と待つて居らしたのに、あんな生計のことなど忘れさして置きたいとつひ、さうですね、とは云つたものゝお菓子のかけ一つあるぢやなし、何か……一寸待つて下さいましよつて、後で困まることは知りつゝ、表へとび出してしまふ、お前は氣が弱わいからと、いつも云はれるが、私にはそんな事ばかりは出來ないんだし、あゝさう〳〵今朝またおすてさんが町費を集めに來たつけ、町の入費だつて月にどうしても何だかかんだかと二圓は出るいくら考へたつて減る物ぢやなからうが、良人の學校に要るばかしでも授業料が三圓に、電車が一圓と五十何錢、そこへ會費だとか、圖書館行きとかを合せてざつと一圓、それにお勤めの方だつて何だとかかだとかのお拂ひが月々二圓は下らぬ、まあそれだけが正眞正

味の費用なんだから、ちよい〳〵の御小遣ひに一圓はとつて置かねばならぬ、とちよつとこれだけでも八圓と五十錢になるんだもの、で收入るのがどれだけかといふと人にきかれては恥かしいが、現給十八圓、しかも本科の正敎員で、他の人をうらむぢや無いが周旋を頼んだ橋口さんが第一氣がきかぬからだ、良人は九州の田舍から出ていらして、こちらには一人のしるべも無い、幸ひ此家の親類で橋口さんが校長をしてゐらしたものだからお頼みしたのだのに、十八圓だけなら、お國に居らしてもこの四月には上る筈だつたわ、それを田舍の學校から來て十八圓たあ上の部ですよ、なんて人をみくびるにも程がある、田舍々々つていふけれども、國に居る時分は京都なんかならずゐぶん小學校でも内外共に完全な物だらうと來てみたら、外觀は成る程立派だが、內部の方とくると校長はじめ頭のある奴は一人も無い、よくあれで勤まる物だつて、良人はいつも呆れて云つて居らしたわ、でも私に取つてみりやあの方も、從兄に當るんだが、良人に對しても恥かしい。

あらまたこんな淺間しい、人の罪にして、つまりはこちらの交渉が足りなかつたからなんだ、致し方も無が、良人とても苦勞はして居らしても、まだ二十五、私らと同じ樣に小さい時から、繼母に仕へてずゐぶんな事も我慢なすつたといふことだが、やつぱりおとうさまが、お氣がしつかりして居らしたために、おちぶれてはゐらしたが、相當の敎育も受けられて、つひここへ御越しなさるまでは、呑氣にひとりで百姓家に下宿などしてゐらしたのだもの。

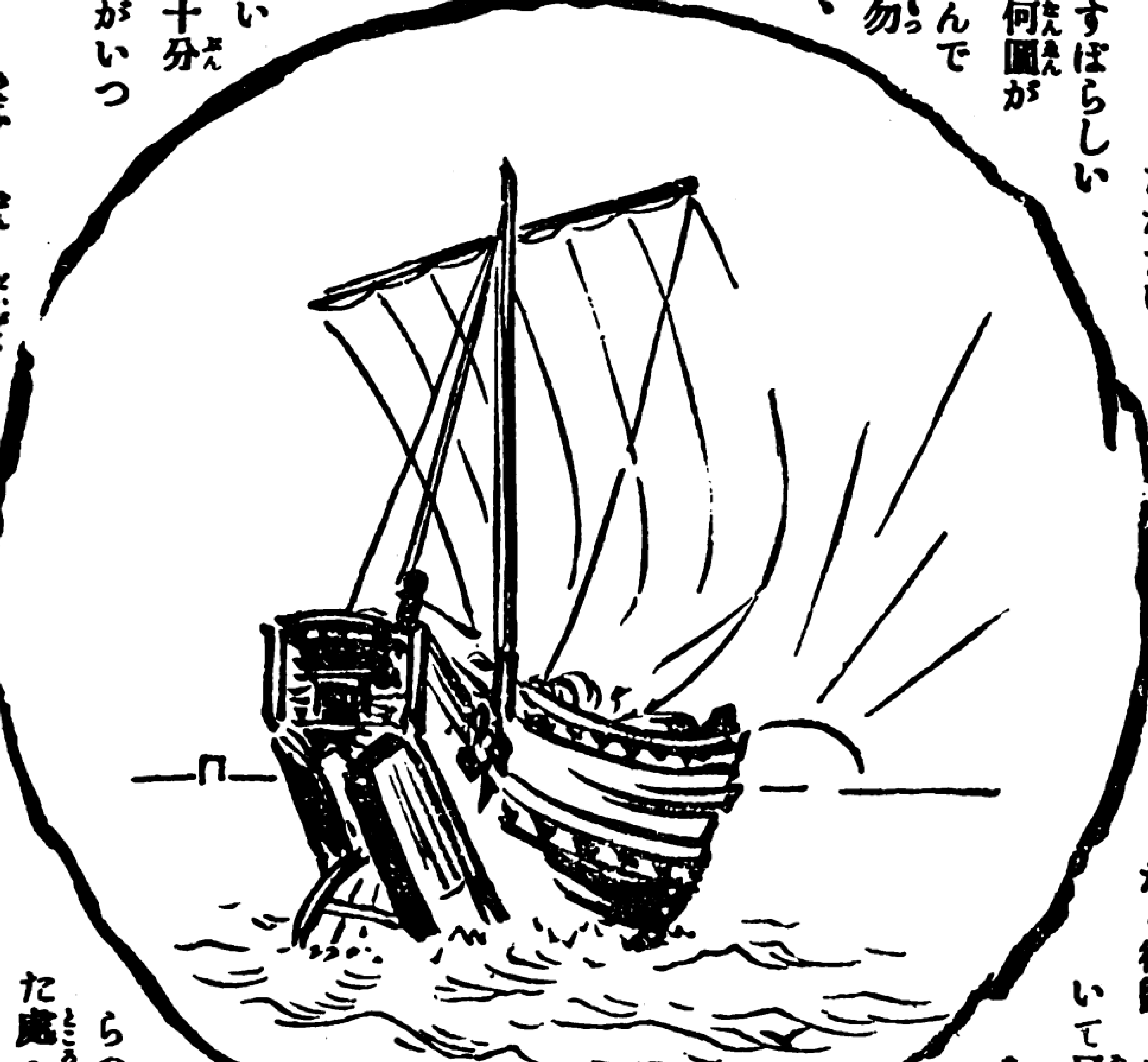
まあ何にした處が十八圓は十八圓だ、二十五日になれば金十八圓也、村上秀夫殿とかいた袋を、會計係から受取つてゐらつしやる、それでも無ければ私らはうゑ死せねばならぬかも知れぬ、これも良人の苦辛のかたまり、何百圓といふ大臣の俸給といへども、その性質に於て、一厘の異ひもない、正當なる勞力に對する報酬だ、大臣といへば最早成功した人で、良人なんかまだその階段を苦しみながら上りつゝあるといふだけ

の別、滿開の花を見るよりもまだかたい蕾の時が、すがたはみすぼらしいが、樂しみは多い、十何圓が不足なら、何百圓とつんでも有難くはなからう、勿體なく戴くべきである、

でもいつもあの袋を出しては毎月の事だが私の顏を見て、隨分苦しいだらう？

今四五年だ學校でも卒つたらね、若いのに可哀相にといつて、あとはちいさい御聲で、いいえちつとも、これで十分ですの、といふのも胸がいつぱいになつて。

さう〳〵何時だつたかも晦日の晩、大學



から御歸りになつて一緒に御飯をいたゞいて居たら、私はなるべく、うつむいて居つたのだけれども、御目に付いたか、どうした？　勘定して居つたんだね？　つて傍に片付けた帳面や算盤を見ては、私をのぞいてゐらつしやる。

あゝすまなかつた、先刻つひ支出が收入より多くなつて差引不足金何錢なんて帳尻になつたものだから、それからそれと考へて居つたらつひ涙が出て來て、少時泣いた處へ、表の戸が開いたのにびつくりして、あはてゝ目を拭いたのだけれど

赤くなつて居つたのだらう。

　ほんとうにあの時はあんなことしてすまなかつた、其れはさうとそれから八圓五十錢もとれば、殘りは九圓五十錢、これに隣の家賃が四圓、これも來年からはせめて一圓なりとも増さねば、他の人は七圓でも安い家だといふが、今住つてる人はもう十何年、殆二十年も居るさうで、四圓といふのは十年ほど前に定めたのださうだ、それに秋雄の食費としてこれも實は足らぬのだが、弟ではあるし、森田から三圓、皆すつかりと〆て……さう十六圓五十錢だ、さあこれだけが私の命。大頭でとび出すのが米屋へ六圓、本屋へ新聞と雜誌ばかりが二圓程、男は兎に角女は新刊の物でも讀まなくちや時代におくれるといろ〳〵御とりなさるから、それからさつきの町の費用が二圓、薪炭醤油が大黑屋へざつと二圓、これだけでもう十二圓になる、と後は四圓五十錢より殘らぬ、この内から賄、雜費（の中に何もかも）到底ゆけ樣が無い、で先月から私も大槪さんの奥樣の世話で、內職を初めたのだが、何を云つてももう八ケ月の身重な體、じつと坐つて三日と續ければすぐ胃が惡くなつてしまふ、また胎兒にもさう運動せぬのは障るだらう、こんな始末で割はよい仕事だが月に此の頃で二圓はむづかしい、でもそれで漸くやり繰りを付けてゆくのだから、止める事は出來ぬ、殊に生れる兒にも一通りの用意は要る、生れてからの萬事の費用も蓄へて置かねばならぬ。

　貯金といへば此家の養母が去年の春歿くなつた時は少しばかりはあつたさうだが、家柄が家柄だから武士は食はねど高楊子とやら、葬式も隨分見苦しくは無かつた。

　それから私ひとり殘つちまつたので、森田の實父が後見となつて、去年一年私ひとりの暮し分、そこへまた此の一月に今の良人を迎へるに付いても、葬式同樣親類や近所の者達は、餘程金もある樣に思つて居るから今の狀態相應にやれば森田の父が疑をうけるばかりだから仕方が無い、世間の體裁にも後はかんからかんとなつてもするだけはせねばならぬ、こんな有樣で父

から良人へ引き渡されたのは、動産といつては公債、債劵が百圓程に、借り主は夜逃げしたといふ、無いも同然な借用證劵が三百圓、それに現金で二百圓ばかりそこへ不動産が地所家屋だけ現價に積りて二千圓程、たつたといつては勿體ないが、つゝまる處やはり僅にこれだけだ、その現金の二百圓も引き受け後、やれ相續税、それ何々税、國から良人のお父様と伯父様が御越しなさる、それに正月から四月まで二人共坐食して居つたし、まだその時分は金の味をしらぬ若い者同士ずゐぶん今の身分からみればぽい／＼と財布の口を開けた、だから今は銀行の通には義理程のたつた五圓、貯金といへばこれだけに、私が十錢廿錢と無理から殘したのが郵便局に一圓程、あゝもしもの事が起ればどうしたらよからう、こんなに困つてる處へぽつかりあの債劵が千圓にでも當ればよいが、十二月のもだめだつた、うちなんか何時になつたつて十圓も當りやしないんだよ、きつと福の神様は赤んべいしてあつちむいてゐらつしやるに違ひ無いわ、ホヽヽヽそんな事を當にするより、かせぐにおひ付く貧乏なしとやら、私らは稼ぎ出す事はむつかしい話しだから、一生懸命出るのをつゝめるより好い工風は無い、何しろ難關は來年の二月だ。

　大阪に居る從姉のみいさんなんかは、八年にもなるのに子供が無いといつて、會ふ度につらがつて居なさるが、ほんとうに私代れるものなら代つて上げてもよいが、まだ來年はたつた二十歳、それにもう母ちやんとならねばならぬ、去年死んだ實家の姉さんなんぞ、二十歳の時はまだ肩上げをしてお茶や御花のお稽古に通つてゐらしつたわ、尤も私よりはずんと小柄だつたけれど、去年まだ達者にしてゐらした時分、二人連れで歩るいて居ると、どうしてもまだ姉さんは十八位で私が二十歳位に見えたさうだ、いけすかないこと、實のところ姉さんは二十五で、私が十八だつたのに、そりやさう見えたかも知れぬ、姉さんは色は白い方だつたし、前髪もふつくりと、着物にした處が私と別段變りは無かつた、色の黒い無雜作なつぐね髪の私と刻ん



だら、その筈だつたらう、あゝけれどその姉さんも去年の年の暮れると共に、ころりと死んでしまはれた、この二十一日が一週忌。

御國ではお父様達がまた法事をなさるだらう、私も此の間お寺に序でがあつたから詣つて下さる樣に頼んで置いたさうだ、それに就いてもまたいくらか物要りだ、どうしたつて今月は年末で、何か不用な品でもあれば道具屋へ拂つてゞも、お金をつくらねば、年は越せぬだらう、年末にどうしようなんと思ふのは今年が初めてだ、ほんとうに去年までは氣樂だつたが。

おや午砲！　早いこと、欲しくも無いがお茶漬でもかき込んで置きませうか。

子の無い妻の悲しい日記

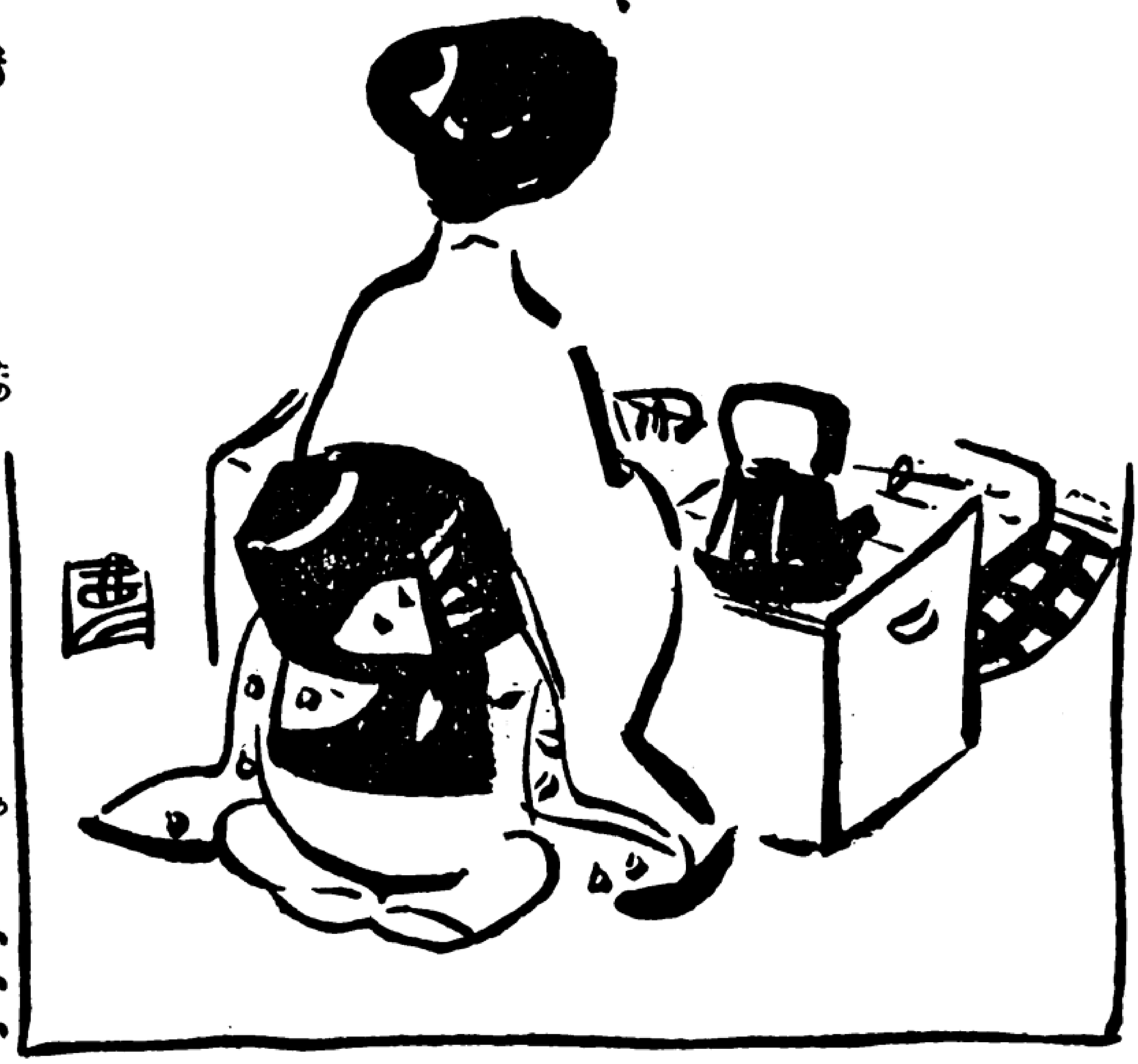
ちどり

○日曜日

朝御飯が濟むと、旦那樣の側にあつた卷煙草に火をつけてふいと茶の間をお出になる。斯ういふ事は今日が初めてといふでもないから、別して氣にも懸けないけれど、せめて日曜日ばかりも食後ゆつくりお話なすつたつてよさゝうなものと思ふにつけ、何となくお恨めしい樣な氣もして續いて立つて障子を明けると、長い緣側をすう〳〵と、もう突當りのお書齋にお這入りになる。庭の櫻は皆葉が落ち盡し、美しかつた紅葉も霜にうら枯れて、今を盛の山茶花さへどんよりした薄日の下には淋しい感がする。

柱に凭掛つたまゝ茫乎お後を見送つてゐると、お書齋から烈しい呼鈴の音！　はつとして急いで戸を明けて「何ぞ御用」と伺へば、「今日は忙しい用事があるから大概の人には不在だといつて呉れ、用があれば呼鈴をならすから」と仰つたぎり又にべもなくお机の方を。此方は「はい」とお答をしたばかり、手持無沙汰に茶の間に歸ると、其所はもう奇麗に片付いてゐて、南部鐵の鐵瓶が勢よく沸つてゐる。私は所在なさに長火鉢のふちに頬杖ついて、無意味に火箸で字を書いてゐると、我知らず涙がはら〳〵と溢れた。あゝ何といふ嫌な生活であらうと染々いやな感がするにつけ、せめて子供でもあつたなら、斯うまでお互の間に蟠りも出來ず、今少しは圓滑に笑ひ合ふ事もあらうにと、例の苦勞が起る。數へればきのふの樣に思ふけれど、もう五年、如何して私には可愛いゝのが授からないのか知ら、自分は決して弱くはないと信じてゐる。何時だつたかの級會の時も、此中で誰が一番子福者でせうといふ話が出て、「あなたは一番よ」などゝ皆樣がおつしやるので、まア隨分ひどい方々だと怒つた事もあつた位、それは〳〵血色もよく肉付だつて豐な方であつたがと見

るともなく自分の手を眺めると、何時の間にか藥指に嵌めてた指輪が中指に移つてゐる。さう思へばおもひなしか手首の邊も餘程やせたかの樣。こんなにもと又してもと胸が一杯になつたので、もう考へますまいと自分で自分の心をまぎらはす樣に譯もなく座敷を歩いて、手當り次第簞笥の上の針箱を開けると、赤に靑に紫にさま/\の小切が澤山這入つてゐる。そして其中には寸にも滿たぬ細長いのもあるに氣がつくと、我知らず淋しくほゝ笑まれた。昔ては、可愛いゝものが「母樣」と膝に甘へて、人形の着物をといふた時は、此樣なものでも用にたとうと、頼まれぬ事を頼みにして、秘めて置いたのであつたと思出すと、今更に級の皆様のお言葉が恨めしいやうな氣がする。



正午御飯は御書齋で召上つたので、一人法師の箸とるのもものの憂いから、早々に下げてしまつた。が扨て何をするといふ勇氣も出ない。仕方なしに庭下駄を履いて臺所口に廻り、婆やが後しまひしてゐるのを見てゐると、お隣との境の四つ目垣の方で、鈴の這入つた木履の音がする。おやと思ふと『そばちやん。』と可愛いゝ聲！『あら文ちやん、早くいらつしやい。』と手招きすると、枝折戸の棧を背延びしてやつと開けてにこ/\と馳て來るのは、今年四つのお文ちやん、乳色に白い圓顏に黒目勝の京人形のや

うな可愛い〻聲、私はこのお子を見る時ばかり少しは憂さを忘れる。『まア何て可愛い〻んだらうねえ、さア抱つこなさい。』と手をとつて抱き上げると、『ほんにお可愛い〻お孃樣。』と濡手を拭き〳〵、婆やも側に寄つて來て、『此方にも此樣な方がおゐんなさると、奧樣のお氣もお引立遊ばすし旦那樣もあゝおむづかしいお顔ばかり遊ばしてゐらつしやらないんでございますけれど……。』といふ。私には如何してももう出來つこはないから、文ちやんでも下さるなら頂きたいと思ふといふと、なんのまだ〳〵お若いのに其樣な御心配がいりますものおやございません。其樣な事でおふさぎに許なつてゐらしつてはお體にお障りになります、それより御氣分をお引立遊ばしませ、其中には屹度可愛い〻方がお出來になりますから、婆やがお受合申しますよ、それこそどんなにお可愛い〻んでせう。早くお抱き申度うございます事。』と何時も元氣のい〻事をいふ。文ちやんは其樣な事は知らないといつたやうに、私に抱かれたま〻縫のある半襟の模樣を『紅い花々ね。』と小い指で突ついてゐる。『そして、お孃さん婆やにも、ちと抱つこ遊ばせ。』と手を出すと、いや〳〵をしながら私の襟に顔を隱して仕舞ふ、私はしかと抱き締ながら『文ちやんはをばちやんとこの子におなりなさいな、可愛いくて〳〵しようがないのだから。』といふと、少し考へる樣な風して、上目づかひに『いや』とかぶりを振る。『どうしていやなの、毎晩斯うして抱つこしてねんねするわ。』といへば、『でも母ちやん泣き〳〵するもの。』ともう涙組む。私は思はず可愛い〻顔にキッスしたが、なぜだか胸がせまつて來た、で涙を婆やに見せまいと、『あ、い〻ものを貸して上げませうね。』と文ちやんを抱き上げて、霜柱をざく〳〵踏みしめながら裏庭の方に廻り、私の居間の縁側に文ちやんを置いたまま『まつてゐらつしやいよ』と奧に這入つた。

曾て旦那樣が、御祖母樣の米壽の御祝宴に一人御歸國なすつた時であつた。御手づからお拵へになつたといふ切細工の狆を、『あやにもやがて坊やが出來ようから、其時は祖母からだと渡して下さい』と仰つて下さ

れたさうな。ほんに目出度此頂戴もの、やがて生れん我子も御祖母様にあやかれかしと大事にしまつて置いたが、今に五年、見る毎に〳〵に却て思ひの種となるばかりか、何時も胸をさゝれる樣な辛い思ひをする。今それを思ひ出したので、デゼールを紙に包んだのにそへてお文ちやんの前に持つて出た。

『叔母ちやんなアに。』と待ち兼てゐたお文ちやんがそれを見た喜！　可愛いゝと抱いたりかゝへたり頰に當てたりして餘念がない、私は側に坐つたまゝそれをじつと見てゐると、何時か心は夢のやうにうつとりなつて、何だか今自分の子のお守をしてゐる樣な心持、あれあんなおいたをしてと思ひながら矢張それが可愛いい、もう〳〵抱締めて頰ずりしてやりたいと、身を起す時、がたりとお書齋の障子のあく音がする。私は急に夢から覺めて我に歸ると、俄にものにおそはれたやうにおびえて、震へる手でお文ちやんを抱上げた。

〇月　曜日

旦那樣の御出勤を玄關までお見送り申上げて居間に歸ると、ほつとして思に沈むのは此頃の習になつてゐる。眞に自分でも不思議な位、一家の主婦なんどいふものは、快活でなくてはならぬとは常々伺つてもゐたし自分でもさう思ふのに、ならう事なら誰もゐない一間に籠つて泣いて泣いて泣き明したい氣がする。

机にもたれて何するといふでもなくガラス越しに庭を見つめてゐると、『まアなんて陰氣な嫌な日でございませう、雪でも降つて參るか知れません。』と內を覗いた婆やは、『おやお火の氣もない所に！　お風を召すちやございませんか。』と內に這入つて、『お手紙が。』と持つて來た郵便を差出す。肉付のいゝお家流の美しいお手は裏を見なくも懷かしい〳〵花子さんからと、封きる間ももどかしく開いて見ると、去る日にやす〳〵御產を遊ばしたさうな、そして御初產の男の御子……。彼地に居た時ならすぐさま上つて抱かして頂くのに、此樣な遠い所に島流同樣な身になつては思つても及ばない、それにしてもまアどんなお顏して？　お父樣にお似か御母樣似か、どちらにお似なすつてもきつと可

愛いゝお子樣にきまつてゐる。お國からはお母樣もおゐつかひにゐらしつてお在だつて、ほんにどんなにかお喜びで『花』『花』と優しくなすつてゐらつしやるだらう、四方八方喜の滿ちてる中にゐらつしやるあの方は、さぞ肩身も廣く、私の樣な淋しい心持は夢にも昧つて御覽になる事はないであらう、あゝ何といふ幸福な方、お氣立のお優しい旦那樣にお仕へして理想のホームを作つてゐらつしやるお樂みは、折々の御手紙にもお羨やましい程だつたのに、其上可愛いゝ〳〵赤樣までお出來になつた今日は、一も二も赤樣の事にばかり笑つて暮してお在であらうと、羨しいにつけしみじみ子のない我身が心細くなる。せめては心の丈を何ぞに籠めて祝つて上げたい。此間藤崎の賣出しに、餘り柄がいゝので求つてきたメレンス友禪、男の子のには丁度よく、餘り紅も多くない。早速縫つて送つて上げ樣かと氣もいそ〳〵と簞笥の抽斗を開けては見たが、あ、花子樣の旦那樣とは主人でもお知合でゐらつしやるのだから、何ぞ立派なお祝をなさるかも知れないのに、一應の御相談も申さずに勝手な眞似しては後で何と仰るやら、折角おもひ立つたこれはこれとして、一寸お話した上でと、お手紙は机にしまつて部屋を出た。

婆やを相手に淋しく晝の御飯を濟した後、餘りうるさいから髮をとかして貰らう。火鉢の側に鏡臺を据へて白の肩懸をすると、婆やは甲斐々々敷襷を懸けて後に廻る。荒い櫛で雲脂をとつて、やがて解し初めるとぞろり〳〵と一櫛毎に拔ける黑髮、『此お若さに何といふ拔け樣なんでせう、秋ぁ過ぎましたに、まア勿體ない程でございますよ。御覽遊ばせ、奧樣。』と櫛の齒から拔きとつたのを一寸まるめて見せる。『ほんにどうしたんだらう。此樣子ぢや後に坊主になつてしまふかも知れない。』といふと、『まアあんな事、餘りおふさぎにばかりなつてゐらつしやるからでございますよ、少しはお琴でも遊ばしてお氣をお晴し遊ばしませ。』と年寄のともすれば心配する。その親切はうれしいけれど、琴を彈いたとて何で心が晴れませう。泣いて〳〵泣き明したなら却て慰められるかもしれないけれど……。

四つに折つて熱いお湯にひたした白い切を前髪の處にじつと當てゝ、扱て荒櫛で解かすとふつくり美しい櫛跡がつく、鏡が湯氣で只一面の朧になつたと思ふと見る／＼消えて行く曇の下から、私の半身がはつきり顯はれる。用もない身の今更らしくそれに見入れば、なんて血色の惡い顔なんでせう、頰も少しこけたが肩の邊は別して細つて見える。勝色の鶉縮緬に今流行の絞りの襟も平常には惜しい位、銘仙の着物に同じ羽織など、女親ばかりの手につゝましく育つた身には、遂ぞ常用着になぞと思つた事もない。だから實家にゐらつしやる姉様が、御手紙毎にお前程仕合せものはないの此度は帯皮の一つも贈れのと御申越になるのも、外部から見ては御無理もない、然し着物や金が何で人の身を仕合せにしよう、成程私は仰る通り、着物も澤山あれば指輪だつて此外にまだ二つ、その上女時計の可愛いゝのもしまつてあ



るけれど、それは只形の上の滿足といふもの、私は何にも一つ買つて頂かなくともいゝから、それよりは此荒野のやうに淋しい／＼心の上に、いさゝかでも温さが得たいと、又例の愚痴に胸を焦してゐると、それをあはれと見たのか、鏡の中の顔も貰ひ泣きをしてゐた。

　四時を打つ。旦那樣もやがてお歸宅と御召を炬燵にかけて置いて、臺所に婆やと夕餉の仕度をする。鯛の潮煮は旦那樣のお好物、その上さわらの照燒に百合の甘煮を添へたが、寒いからお惣菜は薩摩汁ときめた。

　御歸宅は五時二十分前、暖かいお召をお着せ申て長火鉢の側に御座布團を上げると、婆やがお膳を運んで來る。いつにない御機嫌に心嬉しく、お側にゐてお給仕をしながら、今朝來た手紙の事をお話申さうかと思ひ出したが、でも折角愉快に召上つて下さるものを、若し其爲に御心を損じてはと容易に心が決しかねる。然し斯う御機嫌のよい時でもなければと思ひ返して漸くきり出すと『ふむ』と今迄の御元氣にも似ぬ淋しい御返事、あゝとんだ事をと思ふてゐる時、『杉山にも男の子が出來た。』と誰にいふともなくおいひになる。私は胸に針をさゝれる樣な氣がした。『御飯は。』と伺ふと『もうよさう、茶をくれ。』と、それも不味さうに召上つておやめになる。

　一度お書齋にお這入りになつたが、間もなく『一寸出て來るから羽織。』をとお召になる。此お寒さにと思つても、遣瀬ないお胸の淋しさからかと思へば、強ておとめする勇氣もなく、しほ／＼立つて外套をお着せ申す。長い廊下をお後について、ランプ片手に玄關までお見送りすると、冷い外氣は肌をさすやうに襟に寒い。此樣な思ひをおさせ申も皆私に子がないせいと染染果敢なく、今更旦那樣に濟ない樣な感がして、力なくお下駄をなほせば、ステッキをとつてつとお出になる。

　門迄長い敷石を、淋しく照す薄月の影が、行かう雲に曇つたかと思ふと、はら／＼と音もなく霰が降る。そのもの悲しい色の中を、次第々々に遠ざかつていらつしやる御後影、私は見てゐる内に胸が一杯になつて



あゝお痛はしい、いつそ飛んで出てお袖に縋りながら此涙でお詫したいと庭に下立つたが、其時、い、はたと力がぬけて、其儘其處に泣沈んだ。あゝ其儘其處に一身内の血潮も冷えきるまで立ちつくして。



嫁の我儘を苦勞する姑の日記

清子

一日

今朝はいつになく、おたきの方から「お目覺で御座いますかお姑樣」と機嫌をする、おや〱昨夜のお小言、餘程藥になつたと見える、なんだか思做の所爲か目が少し腫れてる樣だ、私が彼の位の事をいつたとて氣にとめて、口惜し泣きに泣くやうなら、未だ良心が殘つて居るのだらう、眞實に家に來た時分は、可愛らしい娘であつたゞ早いこと、もう五年になる、今でも美しいが、芳坊を產まない前は、今の何倍も美しかつた、それに私は近頃の我儘に呆れて、居るせいか、昔の樣に可愛らしいと思はない、いつもよくいふが、貰ふ時は悴よりも、私の方が惚れて、彼娘ならばと悴も同意し夫婦は自然に睦まじくなるからと喜んで貰つた今になつて見ると、あの當時餘り大事にしたもんだから、我儘で手がつけられない樣になつたのだらう、でも二人の仲の好いのは、何によりだ、只願ふ事もう少し世間の嫁の樣にと思ふ、これも私の慾かしら、尤もおたきは十一の春から、繼母に育てられたのだつて、其繼母が又賢いといふのか、何んだかわからないが、無暗に甘く育てたのだ、よく躾して立派な人にしてやらうと思つて、六ケしい事をいへば反つて繼母だから辛いと、いはれる、それよりも、氣儘に育てた方が氣樂でいゝと、いつもいつたさうだ、そんなに野ばなしにして、育つたのだもの、急に改めるのも、隨分骨の折れる事だらう、昨夜だつてほんの少しの事なのだ、私の平常の綿入を作らうと思つて呉服屋へ行つたら、

つひ目にとまつた派手な銘仙、おたきに一反買つて歸つたら、さぞ喜ぶだらうと、自分のものはよくも見たてず、粗末なのを一反求めて、只々おたきが嬉しがるだらうと思つて、大急ぎて歸つた、おたきお土產を買つて來たよと取り出せば、あれまあお姑樣の買つて入らしやるのはいつでもこんな田舍臭いのね、眞實に、十九世紀とか二十世紀とかいひだしたのに、私も呆れて暫く、ものがいへなかつた、側に居た伜が『おたき田舍臭いてどんな臭ひがするか』と、からかひ、私の顏色を見て、今又そんなのが、流行て來たのだよ、太田樣の奥樣が、それによく似た柄のを、着てたが、却々よかつたよと、好い工合にとりなした、私も折角の心盡しが水の泡になつたので、がつかりして仕舞た、眞實にもうおたきのものなんか、間違つたつて買つて、來ませんよ、もう、こり／＼したと、思つただけの事をいつてやつた、おたきの瞳は暫く銘仙の上にとまつて居たが、伜が太田樣の奥樣を、かつぎ出したので急に樣子合が變つて來た、太田樣の奥樣はおたきの最も信じて居るといふよりもむしろ羨ましがつて居る人なので、着物から髮形まで眞似する、其人がといはれたので、急にほしくなつたと見えて、お姑樣、何うも有がたう御座います、つひ思つた通り、我儘をいひまして、お氣持を惡くいたさせました、早速頂いてお正月のに仕立てますよと、嬉しさう、ちやはじめから、然ういへばいゝのにと、伜は笑つて居る、眞實に銘仙は何うでもいゝが、私がこうして見立てゝ買つて來て、どんなに、喜ぶだらうと、思つて待つて居るのに、あんな事をいふのだもの、腹が立つよ、何を買つて來て、やつても、はじめに恥をかゝせるんだよ、其實咽喉の影から手が出る樣にほしくつても、いらないとか、なんとか、いふ、眞實に癖が惡い、矢つ張り、氣儘だからだよ、これから氣を付けなさいと思ひ切つて、小言をいつてやつた、其所爲かしら、考へこんで居ると、火が付いた樣な芳坊の泣聲、母ちやんいや、おばあちやんでなけりやと、却々やめさうにもない、何にをしたといふのだらう、あの泣聲、眞實に芳坊は、一寸で

も私の姿が見えないと、あの通りだよ、芳やおばあちやん此處だよと自分に吃驚する位大きな聲、泣聲ぴつたりやんで、小さな足音ぱた／＼と縁にひゞいて、芳坊の半身が中硝子にあらはれた、その嬉しさうな、顏つき、私はいつの間に飛び出たか、緣側で芳坊を、しつかと、だきしめて居た、何て可愛い、子だらう、この子と、こうして、居ると、世の中の事など少しも、考へられない、只々何となく、うれしい、ぽつと日が當つて來たので、いよ／＼いゝ心持になつてうつとりして居ると、お姑樣御飯で御座い升と、おたきの聲、おやもう晝飯かへ、まあ日の短い事と、三人膳に向つた、午後から芳坊を連れて、中山樣へ遊びに行つた、話は例の嫁にやつてある娘さんの事、何にしろ、姑が氣むづかしくて居られないと、來る度每にいふ、もう少し辛棒して居れと、いつては歸すものゝ、此頃は餘程辛いと見えて、何んだか少し痩せた樣だ、餘り無理させて、病氣にでもなつたらと、兩親とも、その事ばかり、心配して、私の顏見るとその相談どうしたらいいものかと、此話を聞くにつけ、家のおたきなどは、幸福者だ、それでも嫁の身になつたら、私見たいなものでも、鬼の樣に思つて居るかしら、何づれにしても姑はほめられない、何んとかいふと、あの姑では、嫁が辛からうのなんのと皆嫁に同情する、あゝ／＼姑になんかなるものではないと、つく／＼思つた、おや又風が出て來ましたねと、障子細目に開けば、空は一面に鼠色、雨にでもなりさうです事、降り出さぬ内にといつて、歸へつた、夕飯は一ツテーブルを圍つて皆で頂いた、此頃の夜長、芳坊もはやくねたので、針仕事をはじめた、おたきの針はよく動くが、おたきの口もよく動く、新敎育とか何んとかいふ學問をした、人は別なもの、驚く樣に饒舌る、それも此頃になつて、いよ／＼盛んになつた、私がたまに一言二言いふとお姑樣、然う仰有るけれども、學校では、こう習つた、何の本何の雜誌にこう書いて、あつたと、夢中になつて饒舌だす、又はじまつたと私はいつもいゝ加減に聞き流して早く寢む。

二日

今日は朝から曇つて居たが、午頃からとう〱降りだした、なま、あつたかい、いやな天氣、一日家に居て此間張つた紬で胴着をこしらへた、夜は芳坊にいつもの昔話をする、芳坊がねむつてから、直ぐ私も床に入つた。

三日

今朝坂井の娘が學校の行きがけに、手紙を持つて來た、父の命日だから、茶でもあげたいといふのであつたが、雪催しの所爲が腰が痛んで行く氣にならない、正午過まで炬燵に暖まつて居た、三時頃になつたら、もう熾つたので、そろ〱炬燵からぬけ出た、おやおや四時になつたね其內悴も歸つて來た五時少し前、皆で晩餐を終へた、暫してから例の碁客二人見えた、おたきは座布團、火鉢、茶、菓子など運んで、先づこれだけで、いゝと、芳坊の綿入を縫ひはじめた、お座敷では二目置いたとか、三目



置いたとか却々盛んな樣子倅がおたきと呼んで、茶の間へはいつて來た何つも行つて、御馳走になるから、何にか一ッして、くれとの事であつた、おたきはこういふ時こそ、我が腕自慢といつた樣に、勢よく臺所へ行つた、あつてもなくても、いゝ、猫の尻尾の樣な、姑でも、お姑樣、何にをいたしましたらと、相談されれば何んだか嬉れしい樣な氣がするものを。

私は茶の間で仕事をつゞけて居る、暫くすると倅が出て來て、まだですかお母樣も手傳てやつて、下さいとの事、私も臺所へ行つて見る、辨慶の火事見舞よろしくといつた樣子、顏を眞赤にして、お姑樣今日のは火の強かつたのにお砂糖が入り過ぎたもんですから、こげて仕舞ましたと如何にもあはてゝる、私は態と見ぬふりして茶の間へ歸つて居た、やがて、膳は運ばれたらしい座敷でおたきの聲がする、暫して盃も餘程重なつたかと思ふ頃何つも藝者の高橋樣がおうたひになるお聲がする、今夜は實に意外であつた、明日は是非勝負をつけるといつて皆樣お歸りになる、私はおそくもあるしと思つて、膳を下げて手傳ふ、おたき今夜の御馳走は却々上等であつたね、中の煮へないのがあつたよと倅はいつたがおたきは聞えぬやう、さつき、私が來た時、こげたといつた樣であつたが、話がトンチンカン、何れにしても今夜は餘程、お上手な御料理が出來たのに、相違ないと思つた、眞實に今夜の樣な苦勞して料理した事は初めてだと獨りぐづ〳〵つぶやく、こんな時は、皿小鉢の音が又一段高い、おたき隨分いい音がするねと、いつても聞えるのか聞えぬのか、己が料理の失敗せしとて、其樣の事あるべき一と事不出來で濟みませんでしたといへば、それでよきものを、皿小鉢に何の罪がある、それとも手荒くすれば、心持ちよくなるのかしらと呆れて、聞いて居た、倅は少し酒を頂いたので早く床に入る。私も茶の間で一服喫つて居ると、おたきも見えた、もう出來たか、御苦勞であつたねといつても、返辭もしないので、又例の知れ切つた、說教がはじまつた、決して酷くあたる、譯でないから、姑と思はずに、親の話と思つてお聞き、氣

をつけなければならぬといへば私それでも母に小言いはれた事はありませんのと、どこまでも、口を返す、おたきお前の為めを思つていふのだのに、然う惡くとられては誠に困る、いくらいふても、同じ事だから、よく考へて御覧、私も寢むから、お前もお寢みと、床にはいつた、枕には就たが神經が邪魔して、眠る所ではない、いよ〳〵目がさえて日頃胸に疊んだ、種々の思が、こんがらかつた麻糸の樣、おたきさへ我儘を直してやさしくしてくれゝば、何にもいふ事はない、只私位怜悧なものは少なからうといふやうな、顔して居るがね、……おたきも一時は我儘で困つたねと、茶話の種にするやうになつたら、どんなに皆が幸福だらう、私も隨分我儘であつたつて亡くなられた母がよく話したがと、七八年前の事までも、思ひめぐらして居ると柱時計がボン〳〵と打出した、それともなく數ふればはやくも十二時になつたのかと、急に夜着の襟深く首を縮めた。





待つ三日の記

櫻子

今日は十五日もう三日經てば夫は歸て來るのだと思ふと却て艦が出た日より待ち遠いやうに思はれる午前の中に座敷の障子も張り替へてしまッたから又お客樣がいくらあッてもかまはぬ午後からは御約束の菜漬も漬けて置た故に丁度御歸りの時分には漬け加減と是れも安心。

十六日　朝早くから田中の奥樣御來下さる、いつ見ても御美しい事と云ッたら實に貧乏少佐などの家内は夢にでも見る位の御召物から御指環扨は御羽織の紐！紐と申ては流行後れの樣で失禮なれども是れも亦金の鎖！私の樣に東京の地を離れてから最早今年で三年もこんな田舍の軍港に來て居る者ですもの金鎖の流行は雜誌や新聞でまんざら知らぬでもなけれどもまだ〳〵ほん物は見た事もない品第一今此處でほしいと云ッた處で賣る家もない品、まあさうでも思ッて諦らめませう、どうせ男爵中將より御降嫁の奥樣のまねは出來ず又したいと思ふは大まちがひなれど御話の間にも御羽織の金鎖のみ氣にして何ぞ私に問ふてほしき御樣子なれど私もすね者！訊きもしなければ成るたけ見ぬふり別に御用事とてなければ大方あの御紋のしぼりで出て居る御羽織を見せに御來の事と思はれた。

あまりに御世辭のなきも艦長の御奥方又夫の勤めの御禮の心で出ない口からまあ奥樣の御羽織の御立派です事先日一寸「女學世界」で見ました其が唯今流行の絞りの御紋ですかと伺ふとたいそうもない御機嫌にて色色と東京の流行談果ては私にも一寸着て見よとの仰せ御ぬき遊すさわぎいゝ加減に御あしらひ申て御歸しゝた誠にあの奥樣も御里の御自慢さへなくばよい方だのにと跡の茶器など仕末しながら考へた今日は太郎は御

辨當持ッて行た故きぞお腹をすかして歸ッて來る事だらうと思ッてお八ッにカステラを燒て置いたら案の掟歸るとすぐ七切も喰べてしまッた何んだか今日の日記は御降嫁の奥樣の事ばかり又夫に見られたら他人の事ばかりと叱られるかも知れないが是れが女のぐちとまあ我田引水論。

十七日　日本晴れの好天氣明日は夫の歸宅と思へば何となく氣も引き立つ夫の夜具類は殘らず日向に出して置いた。



其れから平常から殊に洗髮のパサパサした束髮が大おすき故に早くお湯をわかして洗ッて居た處に郵便との聲下女の持て來るのを見ると、裏書を見ずとも判る夫の手で、跡洗しまッてから見ればよいのなれども何にやら見ない中は

氣に成るので封を切ッて見れば相變らずに面白い事ばかり明十八日午前十時入港の豫定午後一時半の小蒸汽で上陸するつもり風呂を早くわかして置いてくれ豫ての約束の菜漬は最早上等の頃と樂しんで居る御馳走はたぶん澤山の事と今日より減食して居るとの事いつも御歸りの時にはありもせぬ智惠のありたけ絞り出して御馳走こしらへて置けば番茶の熱いのとお漬物ばかりが御意に入ッて一日懸ッてこしらへた料理はほんのおまじないに箸をつけるばかり故明日は何でもこしらへないで却て艦内では出來ぬ牛肉のすき燒などがよからんと考へついたさう〳〵まだ御約束があッたお汁粉をこしらへて置くつもり故今日の中にあんだけこしらへねばと急で洗ッてしまッて竹に其の用意さした處へ今日は土曜日とて太郎が歸ッて來た父樣からお前にも手紙があると云ふと大喜びよくまあこんなにあの氣の短い人が書たと思ふ程片假名で初めから終りまで一ッ一ッ子供に判る樣に書てある事午飯を濟ませてより丁度髮も干いた故に太郎を連れて明日の待ち受けに花でも變へようと思ッて花屋まで出懸た、もう淋しいと思よ留守番も今夜ぎり海軍故に留守を厭ではとても一月も居れぬなれども唯々一番淋しいと思ふのは夕方四方の山の裾は霞でぼんやりして日は山と海との間に今や一日の勤めをへて歸らんとする時に靜けき波を渡りて軍艦より水雷艇まで君が代の喇叭に合せて軍艦旗を下す其時の喇叭の音！まあ是れ程私を淋しいと思はせる物は又とあらうか嗚呼今頃は我夫も艦上に立ちて軍艦旗に向ひ敬禮すると共に異鄉の山を見異邦の里の夕食の煙たなびく空を見給ひては如何なる思ひやなし給ふと日々に夕暮こそ留守のつらき事の一ッと數へたのに明日に成ッたもう〳〵今日は暮れ行く日をこそ却て望め風よ送れよ喇叭の音。

十八日　早く雨戶開ける音で何となく太郎も樂しみと見えて起きてしまッた八時頃から海岸まで行ては歸り行ては歸りして居た其の間に氣の付かざりし床の懸物替へるやら夫の平常着を重ねて炬燵に懸けて居ると太郎が母樣艦が入ッてよと大聲に呼びたてるので我



にもあらず庭下駄のまゝ海岸まで行て見たこんな處に居たとてあの遠方から判るものではなし早くお風呂の仕度でもと思つて家にはいると八百屋が柿の上等持ッて來たもう終り初物殊に夫の大好物とて持て居たのを皆買ッた今夜は早速士官室の甘黨の人たちはお汁粉退治に御出の事とお椀の箱など出して置きさあ早く御飯を食べておしまいと太郎を呼び味も判らず晝の食事濟ましてしまッたもう汽笛のするのは其れかと時計を見れば何んのまだ十一時半!



妾を持ちし人の妻の日記

櫻澤ちら

芳子さんの春の平常着が縫ひ上つたので、お母様に御目にかけて押をして自分の部屋へ來てホツとすると政やが來て『只今坂谷さんから電話で旦那樣の御出先を伺つて參りました』と云ふ『社の方ですと云はなかつたの?』『左樣申しましたら先程何方へか御出ましになりましたさうで』と訊くと私は胸がどつきりして、云ふにいはれぬ心地になつた。『では心當りを問ひ合せてお通知致しませう』と坂谷さんへ返辭をさせたそれを有體に云へば坂谷さんの爲ではなくむしろ自分が探しあてたいからである。

『奥樣、では萬一おわかりになりましたら鎗屋町の事務處まで御知せを願ひたいと仰有いました』と政やが云つて來た、此方で探すなど〻云はれはせぬかと案じて居た處、丁度あつらひ向きの返事に力を得て、直に電話室へ馳けつけて、帳簿繰る手ももどかしく、そこか、こ〻かと思ふ處は、電報ならば同文々々と書きさうなひとつ言で問ひ合せたが、返事も又紋切り形の、御みえになりませんとの事に顏はもうポツ〳〵とする息がはづむ、手足が震ふ、お母樣や芳子さんの手前さへなければ、家に考へてゐはしない、大概當りはついてゐる、其家へ尋ねて行つて連れだつて歸らうものをつらい、つらい、本當につらい『おわかりになりませんか』と、政が電話室をのぞく、もしや森さんの處かも知れないよと心にもない事を云つてみると『あすこにはたしか電話がない筈で御座りましたつけ』と私をみる目に何となく氣の毒さうな色を浮んでゐるのは、萬一氣どられたのではないかと急に侮辱された樣な氣がして、腹立たしい、悲しい感じが胸にせまる、何時ま

で電話口に立つてゐられないから、騒ぐ心を押しづめて廊下まで來ると、横の杉戸の前に芳子さんが立つてゐて、冷かな笑つた目でヂロリと私の方をみてすぐばたばたと馳け出して居間へ入つてしまつた、私は自分の部屋へ來て小さい籠火鉢のそばに坐つた、考へれば考へる程、最早限りなく涙が湧いて來て、良人にあつたそも〳〵の初めからの事が秋風に飛ぶ雲の樣にさまざまの幻となつて替るがはる心のうちに現はれて來る栂尾さんの園遊會の時、森さんの紹介で初めて言を交してから、今日まで三年間、西洋の小說にある樣な樂しい〳〵未來の夢を草床の上で語り交した事もあれば出でゝは隱るゝ松原の月に惑られて、そゞろあるきを樂んだ折もあつた、其頃はみる物も聞くものも樂しくて、如何して私の樣なたらはぬ者を神樣はかうまで惠み給はるかと怪しんだ位であつた、嗚呼それも今は夢の夢！忘れもせぬ去年の三月十五日、愈五月の初旬頃式をあげると決定つた時、克己さんは何時にない物思はしげな顔で、

「千良さんに少し話さなければならない事がある、後でと小聲で云はれたのが妙に氣になつて幾度も問ひかけては遂聞きたくない樣な恐ろしい告白を聞かなければならない事になつた、克己さんには隱し妻があつた慕はしい未來の夫の意中には外に女の姿があつたのだ私がそれを聞いた時の驚き、夢ならば疾くさめて嬉しい現にかへれよと身悶して泣いた、此世で一番幸福者だと思つてゐた自分は、急に不幸な者になつてしまつた、克己さんは何も云はず昔の人の優曇花よりも珍しい物に云つた男の涙を、目に一杯ためて私の胸の邊りを見詰めてゐると云ふ、此上もないいぢらしい姿も私の心を常の樣に安くは動かさなかつた、其時克己さんは今更言譯がましいが、自分は決してその人がよくてその樣になつたのではない、その人の憐れな境遇に同情して美くしく救つてやつたが人間の悲しさ、つひ思ひかけぬ道に入つて、心ならずも年月を重ねた、あなたには面目ない、然し愛してゐるものならば身分の高下に構つてゐる私ではない最早疾くに宿の妻にしてゐ

る筈、決して〳〵そんな譯でない事は、人は兎に角千良さんだけは信じて呉れ樣、深く頼んでの告白、心弱い私はつひ動かされて、それ程の大事を親しい母樣にも打ち明けず、胸の底に秘めてゐた、今思へば何故あの時にキッパリと取消さなかつたらう、此處へ嫁る時も其方のきまりがついた後でなくては斷じて式はあげないと云ひ出してはみたものゝ、克己さんの言を頼みに忍ばれぬ思ひを忍んで來てみれば、物思はざりし昔は昨日！　たゞそればかりが悲しくて、樂しかるべき蜜月の旅にも忘られぬ妬まし人の俤を夢みて京は圓山そゞろあるきの夕べにも、遠い彼方に燈が一ツ見えるのが、私の魂を招く樣で、いつそ死なうと覺悟さだめた事もある、書いては破いたかきおきも幾通か數しれぬ、流石夫も私の心を察してか、此頃は月に一二度、私に斷つて行く位、とは云ふものゝもしや又今日行つたのではあるまいか、此苦しみを今宵一夜續けたなら私は死んで終ふ。

『未だ克己は歸らないね、キット外で御飯をたべて來るのだらう、どうだね私たちですまして終つては』と母樣のお聲。

『どうぞ召上つて下さい私だけ今少しお待ちしてみようと思ひます』『左樣かえ、では私達はたべてしまうかね』と母樣はあちらへ御出になる、最早四圍は暗くなつて程近い稻荷の社に夕のつとめの太鼓が聞える、急に心細くなつて泣きたくなる、妙な小說的な感じが起る、しかし人々の手前もあれば迎ひにも行かれずと漸く落ついて御飯のすんだ頃お母樣のお居間へ行く『お肩を少しもみませう』といへば『いゝよ芳子が遊んでゐるから』『いゝえ私も遊んで居りますから』と强ひて揉みながら、外を通る車の音に心をつけてゐるけれど、四臺まで徒らに通り過ぎて終つた、五臺目の車は最早遠くから其音が心の底に響いて、此度こそと思つて待つと、勢よく馳けて來てハタと止つた、けれど、それはお隣りの仁村さん。

若い美くしいハイカラな、常に紫の被布を着てゐる仁村さんの主婦は正妻ではないのだと政やが云つた事

がある、罪の深い妾！　相當の敎育もある人ださうなのに何を好んで日蔭の身でゐるのだらう、人の夫を借りてゐる樣な氣の利かない事をしてそれで滿足なのだらうか、と思つたのは未だ〳〵私の考へが淺かつたので、此頃は自分ながら驚く程考へが變つて來た、妻が何、正妻が何、それは戸籍上の問題ではないか、妻と云ふ一字はそれ程名譽ある事なのだらうか、うとまれても戸籍から除かれぬ限りは夫を自分の物だと思つてゐる心の中は眞に憐れなものである、妾と云ふと其名こそおとしめられてゐる樣にも聞えるが、男の心を專有して戀の戰に勝ち傲つた榮ある女性である、うとまるゝ妻よりは、愛せらるる妾の方が眞の妻だと私は思ふ種々とこんなやくざな事を考へると、つひ手の方がお留守になる『有難う最早よいから』と母樣は仰有る、さうですかと直よすのも何だか待かねてたやうで惡いから矢張つゞけてゐると『もう本當に澤山』と炭取をおひきよせなさるので、それを機會に休めて火鉢へ炭をつぐ、玄關の戸があいた、御客樣かと思ひながら、廊下を來る人影は取次の木村とおもひの外、待ちに待つた夫『御歸り』と出向くと『寒かつたでせう』と母樣が内から仰有る『いやさうでもないです』と答へたばかりでつと書齋へ入つて終ふ、私もその後から入る『あなた御飯は？』『最早食べて來た』『千良さんは未だゞつたの？』其聲を聞くともう悲しくなつて『はい、私待つてたんですの、ねあなた今日は八重洲町だつたのでせう？本當の事云つて頂戴、決して何とも思ひませんから』とこわ〳〵訊くと、

『あゝ急に、用事が出來て迎ひが來たものだから千良さんにいふ暇もなくつて……御飯などたべて來る氣はなかつたのだが、少し晩くなつたしすゝめられた物だから又お前が待つてゝ呉れるとは知らずにつひ食べて來て終つた』妬ましや仇し人とさしつ押へつ酌み交したか、濃くはないが酒の香がする、私は最早堪えられなくなつてわつといつて泣きふしてしまつた。

天下を罵りちらす

歳暮日記

千鶴子

今年も早や僅かとなつた取るものは齢ばかり、それと正比例に心はだん〳〵退歩してしまふ、丁度私たちが古い頭の人を見ては天保だ天保だと嘲笑した樣に、後に私たちも明治人間だもの頭が古いやなんて言はれる時が來るだらう。誠にこんな片田舍見たやうな處に引込んで、子供が出來てからは洗湯より外めつたに外出しないんだもの、たまに市中に用たしに出かけると宛然田舍者見たいに、まご〳〵してしまつて、ほんとにきまりがわるい樣だ、だけれど吾々は矢張り出ない方がよい、出ると、とかく色々の流行が目にとまる、見れば女だものほしくなる思ふやうに買へなければじれつたくもなる。煩悶もする、いくらわたしが無頓着でもお隣りの奥樣見たいに、頭を廂にして黒繻子の半襟のかゝつた茶と紺との市松縞のきものなんか着ては出られないんだもの、私なんか平常はかまはないけれど外出の時には少し位氣取つた服裝がして見たいわ、指輪も澤山はいらないけれど二つ位はほしいと思ふ、ア、矢張り出ないがいゝ、出かけ樣と思ふと遂こんな事を考へたくなる家にさへ居れば用事も缺けないし子供たちもどんなに喜ぶか知れない。

ア、さう〳〵、初子の友禪の被布をお正月迄に是非仕立てやらなくてはならないんだつたつけ、柱ごよみを見ると、おう最早廿日だ。

いくら出無精の私でも今日あたりは是非とも大川樣へお歳暮に伺はなくちやならないがさて何を差上ようかしら、何でも澤山おありになるんだから別によい思ひ付もないけれどやつぱり松魚節にしておこう、だが大川樣の奥樣は何を差上ても決しておよろこび下すつたことがない、上役の奥樣だからそんなに安つぽくお世辭を仰しやると價値が下る位に思召してかはしらぬがたとへいさゝかの物にせよ好意に對して嬉しくう

けて頂かなくちや何だか張合がないわ。

さう言ふ譯でも無いが、わたしは何だか大川樣に伺ふのが億劫でしかたが無い、上るといつもお話は御自分のお召の自慢ばかり。よいお齢を遊ばし乍らあんなにも着たいものかしら、お召物さへお賞め申しておけばいつでも御機嫌のよいこと、それだからお出入りの呉服屋でも上ると、どんなにお忙しい時でもすぐと御自分のお居間に通していつかも伺つた折なんか、番頭に餅菓子の御馳走が出ていたつけ隨分馬鹿々々しいわ

又今日あたり上るとキツト新調の春衣の御自慢だらうだけれど着たい着たいと思召す外何の慾もないんだから思へば罪が無いわ、わたしなんかでも、出來ないもんだから仕方なしあきらめの、負惜しみを言つてるけれど、ほしいものがずん〳〵出來れば誰だつて心もちのわるいものはありやしない、だが大川樣の奥樣あれでも少し學問が出來たら申分がないに、惜しいことにはあたらよい奥樣が臺なしだ。いつかも品川沖に大觀艦式が擧行されると云ふ話の出た時、

「かん〳〵式て何ですの、鐘でもたゝくんですか」

なんて、眞面目になつておきゝなすつたつけ、それでもこの節は旦那樣が方々の畫の會などにいらつしやるものだから御自分も見樣見眞似にあちこちと御出席遊ばしては誰かの批評のおきゝかぢりか、やれ寛畝さんはどうの玉章さんがこうのと一かどおわかりになるかの樣盛んにうけ賣りを遊ばす、

「失禮だが何が奥樣にお分り遊ばしてよくまあそんな聞いた風の事が云へますね」

そんなに早く誰にでも分るやうなら畫家なんてちつとでも苦勞をする事はありませんのですよ、と心ではをかしくてしかたがない。

「雜誌が來てますよ」と仰しやるからどんなのかと思つて拜見すると、マア驚いた、東京パツクだの道樂世界だのと來ては却々振つてるこれが雜誌ですつて、ほんとに呆れたものだ、坊ちやんは坊ちやんで、梅ケ枝の手洗鉢なんて平氣でうたつてゐらつしやる。

世の中が何事も黄金萬能主義で通せるものなら富澤

の子に馬鹿は無い筈だが、さうもゆかないこんな家庭に育てられる坊ちやんの行末こそ思ひやられていたましい樣だ。

その點になると、家や位地はとても大川樣には及ばないけれど吾々の子の方がいくら幸福だかしれやしない、だか或程度迄今の世の中はこれだ。現に私だつて一つはこのためにあんな奥樣の御機嫌をとつて一寸伺ふにしろ玄關からは遠慮してわざと臺所口からこそこそ大きな音も立てられやしない。

成程泣く子と、地頭には勝たれない道理これだから階級制度の勤人なんかイヤになつてしまふ、さうかと言つて自分ばかりが光風霽月ですましこんで居る譯には猶更ら行かない。

ア、わたしも下らない着物なんかに費す金があつたら少しでも貯金して、どうか商賣でも始めたい、そして早くこんな束縛を逃がれようアラもう十一時だ早くおひるの仕度でもして大變今日はあつたかくなつた樣だから子供たちも連れておひるからイヤでも出かける事にしよう。



卒業後小商人に嫁ぎたる妻の日記

榮子

お母さんは例のやうに店のかざりつけをお手傳ひ下すつて、靜さんお前松屋町へ行つては。と被仰るから一人ですか。と尋ねると、厭かい。と笑つて居なさる。松屋町へは二三度お母さんのお供したことがあるので、お母さんのお掛合のお上手なのに、かね〱感心して居る、うちの人とも一度行つたけれどなか〱及びさうでも無い、うちの人のは餘りあつさり仕過ぎて、かへる道すがらあのダルマは最う一厘くらゐ引いたかも知れませんよ。と云つてもそんなことはあるまい。と笑つて居たほどですが、お母さんとなると、番頭が「うむ」と云ふまで容易に腰を上げません、それで何卒何誰樣へも内所に願ひます。と荷づくりに掛ると、うまいことを云つて番頭をあやなして居らるゝかと思へば問屋泣かせですな。と云つて居る店の若い者の相手に成つて笑はせなさいます、ようまああんなにと思はれますが一寸もわざつとらしい風が見えません、一つは愛嬌あるあのお面の徳でもあらうが、妾などは何年經つたつて眞似も出來ないでせう。

妾も學校に居た時は成績の惡い方では無かつたので同時に卒業なさつた中には軍人や官吏に嫁いた方も多く、また色々な空想やらお事情のために、未だに獨身で學校の先生や其の外の勤に出て居なさる方もあるが、心から敬服して居たお方は二三に過ぎません。

だからあんな玩具店などに嫁いで何うするつもりでせう。とお友達のお噂に上つて居るさうですが、妾はあの一葉女史が毎日店番を仕て居なさつたと云ふお話に感動されたばかりでなく、うちの人もお母さんも妾に同化するだらうと、隨分高く止つて來たものです、ところが間もなく何につけ彼につけ案外にも自分は平凡なものであつたと悟つたので、今更ながら自分の小さいに呆れたやうな次第です。

併し、うちの人は親切な方で、お母さんも確に「腕の人」とでも云ひませうか、嫁いぢりなどするお方でありませんから仕合に思つて居ます。

　が初めて店に坐つた時は何だかきまりが惡くつて、可笑しい話ですが子供のお客ばかり來て欲しいと思ひました、それでも妙なもので、だん〳〵馴れて愛想の一つも云ふことが出來るやうに成つたものですから、獨で仕込にも出掛けて見たいものだと思はぬものでもありませんかつたが、いざと成つては自ら危まるゝので、すぐ返事も出ないのでした。

　お母さんは妾の樣子を見て取つて行つてお出で。と店の品物を見廻はしさあ品書の初まり〳〵。と如何にも愉快らしう、硯と紙とを妾の前に置かれたので、たよりないものですが。と妾も笑ひながら、お母さんのお差圖どほりに書き附けた品數は三十あまりも有りましたが、みな一つの問屋で揃ふものばかりで、お母さんの思ひやりが身に泌むやうでした。

　品物は問屋の小僧が配達して呉れることに成つて居りますが、急に欲しいものは自分に背負つて歸ることに成つて居るので、四布の風呂敷に行李を包んで背負ふは背負つたものゝ、例もお母さんが背負つて居なさるやうに、きつちりと背に喰ひついて居ない氣が仕て何だか變に馭せらるゝので、家を出ると走るやうに近所を通り拔け、道々も知つた人に逢はねば宜いがとはらはらしつゝ、やつと問屋へついて安心すると何うでせう、店の人達は最う妾を見知つて居て、お出でやすと挨拶するものもあれば今日はお一人ですか。と訊くものもあるぢやありませんか、妾は何だか皆がからかうやうに思はれて、恥かしさにもぢ〳〵して居ますと、番頭さんは流石に馴れたもので、澁い〳〵面を仕て妾の側に坐つて呉れたのでやつと口がきけるやうに成りました、後に成つて妙なものだと思ひましたが、その時はホッと仕ました。

　あれこれと番頭さんに品物を見せて貰つて居る中に二品ほど卸直段の上がつて居るものがありました、前にお母さんと來たときも直段の上がつて居たものが有

つたと思ひますが、今日この儘買つて歸つては濟まない氣が仕たので、やつとの事で番頭さんへ今日だけは、もとの直段で下さい。と云ひますと、何うも恐れ入りますな。と暫く頭を掻いて居たが、それでも云ふとほりに負けて呉れたので、金に仕たら僅の事ですが、非常な成功でも仕たやうに嬉しう、いそ〳〵と堀江の北通りまで歸りますと、から〳〵と俥の音が仕て、高臺橋を渡つた俥が横合から出て來たので、避けようと仕ますと『やあ。』と車上から聲をお掛けに成つたのは實家の父で『豪いな。』とお褒め下さつてニコ〳〵と俥を急がせなさいました、會社へ御出勤の途中なのでせう、妾は最う恥かしいと云ふことも忘れて家へ歸りましたけふは妾が一人前の商人に成つた紀念日です。



小學教師の妻の日記

野菊女

十三日　くもり

△△樣御秘藏の坊ちやま、「インフルエンザ」のこじれとやらで、此頃永くお臥つてゐらしやるとのこと、何も權門に媚びるなどいふ譯ではないが、一度お見舞に上つた方がよからうと、昨夜、旦那樣の仰せにより

けふは時雨空の、寒いけれど午後から出かけた。

裏通りから田圃へ出ると、もう、稻も大概收穫を終へて、あちこちに立つてゐる案山子殿の威嚴も、氣の毒な程衰へて、群雀は、自由に落穗を漁つて居る、道の傍の田に何所の老人か、しきりに、刈後れた稻の始末をして居る、默つて通るのも、變だから、「大そう稻がよく出來ましたこと」と、お愛想をいふと、ふりむいて、頬被りをとりながら、「これは先生樣の……」と頭を下げて、「毎度ハヤ、孫共が御厄介になりますことで」と丁寧に辭儀する、「どう致しまして誠に行屆きませんで」と、挨拶して過ぎる。聲をもかけないで行かうものなら、それこそ、校長の嬶が大きな面して……なんて、言はれたかもしれぬと微笑まれる。

嚴めしい黒板塀の、ずつと一町も續いてる屋敷の、裏へ出る。これは當地の富豪○○といふ家、主人は、町長にも、議員にも、出てやしないけれど、何事でも町に關したことは、大ならば町會にかける前、小なるは、言つぎのふれの出る前、一度は、こゝの主人の意見をきかねばならぬ、いはゞまあ、よく新聞などに見る元老……といふた樣なもの。此地方の元老である。

それも卓越した智識でもあることか、たかゞ一商人の只金貨本位で、我儘な振舞が多い、と、陰口いふ人はあるけれど、面と向つては、唯々諾々。どうして、こんなに意氣地のない人ばかり、揃つてるのかと、思ふと、女の私でも齒がゆいやうに、けれども、實際、學校の事でも何でも、いざといふては、金がさきだから……。

角について、曲らうとすると、南の隅の塀に、眞白

く、「〇〇の大バカヤロー」と、落書がしてある、ハッと思つて、足が止まつた。字の格好、高さの工合、學校なら尋常四學年位の子が、したとも見える。良人が赴任した當時は、實に、兒童の風儀が惡くて、落書などは、到る處といふ有様であつたが、心を傾けた訓練の結果か、近頃は、殆ど惡風も消えてきたと、日頃喜んで居らるゝに……。例へ、これが、そこらのお店の小僧さん達の惡戯としても、見る人は、先學校の子供を聯想するであらう。

幸ひ近所に人影がないから、袂の手巾を出して、大急ぎに拭ひとる、少し白くはなつたが、「大バカヤロー」は消えたから、急いで△△様にゆく。

坊ちやまの、お熱もけふは大へん下つて、一般の御容體が、よろしいとのことなれど、只、發病以來、牛乳や、卵の、滋養品を嫌つて、少しも召上らぬと、奥様が心配相にお咄しなさるから、私が、いろ〳〵にすかしたり、だましたり、とう〳〵、甘くした牛乳を、氷で冷してあげたら、美味さうに、ゴク〳〵と、一合皆召上る。奥様は、大喜びで、幾度も、お禮を仰有るこれからは、いつもかうして呉れゝば、呑むといふお約束が、坊ちやんと、お母様とで出來る、大層長座したから、又伺ふことゝして、お暇する。あたりはもう薄暗くなりかけて、今にも一時雨落さうかと様に、灰色の雲が低く重つてる、「大寒小寒冬の風」と、子供の一群が遊戯の唱歌、細い聲が、ショールもない襟元に、ぞつとしみる。

家に歸つたらもう五時になる、旦那様はまだお歸りがない、大急ぎで、晩食の仕度をしてると、靴音がきこえる。晝はいつでも、一人ぼつねんと、暮すのだから、毎日此夕暮の、靴音をきゝつけた時程、嬉しい思ひはない、質素な晩食を濟まして、其日學校にあつた事など伺ひながら、裁縫するのも樂しく時には添削物のお手傳する事もあり、埋火の白くなるのも知らないで讀書に耽る時もある、戸外には、秋雨がしきらふとも、凩が荒れようとも、内には絶えず、春の風が香つて居る。

けれども先月から、地方の、青年夜學會を、開催してるので、良人も、毎夜それへ教へにいらつしやる。毎日の授業がすめば、又明日の教案とか、教具の集收とか、添削物とか、さては又、種々雜多な校務の整理やら、何やらで、いつもお歸りは五時過になる、七時からは又夜學の時間となるが、よくもかう、腦が續くものだと思ふ、それにしても、お壯健なのが何より嬉しい。七時前お出かけのあとへ、私の所へも、近所の娘達が二三人くる、今夜は織方と、算術とを、裁縫しながら見てやる。皆が九時頃に歸つたから日記をかく今日は大層長文句を、かきつけてしまつた、もう旦那樣も、お歸なさるでせう、いやに寒い晩だこと、鷄卵酒でもこしらへて、差上げませう……。

十四日　晴

　頼んで置いた漬菜を、持つてきてくれたから、井戸端で洗ふ、大束五把は少し多いけれども、二種のお鹽加減に漬けておく。此頃は貧しい世帶にも慣れたが、始めのうちは、よく漬物などで失敗した。料理のノートなど、力にしたのではとてもだめ、殊にこんな田舍住では、尙更活きた經驗の賜物でなくてはいけない。小さい家庭ながら、其折々、何やかと、事のある時、誰一人相談相手のないのは、實に心細い物だ、そんな時は、つく〴〵、姑の傍に居たならと思ふ、實家といふは名ばかりの、孤兒の私には、いつも懷しいのは舅姑、かうして別れて、住まねばならぬ身を、悲しい事と思ふ。私のお友達などには、新夫婦別居論を唱へたり、又は已に實行しつゝある方もあるが、どんな御樣子かしら、私など、隨分注意はして居るつもりでもとかく我儘が首を出して困る、つまり誰にも遠慮といふものがないから、不知不識、謹愼を缺く傾があつていけない、稀に上京した時など、よく見かけるが、若い當世風の、所謂振つて居る夫婦連の、いかにも睦まじげに、外見嫉ましとばかりの、それよりは、母親らしい切髮の老人を、手をひかぬばかりに、いたはつて連立つた、御夫婦の方が、遙に奥床しく、家庭の樣もさこそと、思はるゝ。どうしても子供と、老人とは、

家になくてならぬものだ、子供が家庭の花ならば、老人は實である、私達もやがては實になるのだ、が、なぜ私には未だに、其花なる一人の子をも生し得ぬのだらう、嫁てからもう四年になる、普通ならば、二人位の母と呼ばれてもよいのに。どうしたのだらう、別に身體に異りもない様だが、それとも病氣でもあるのかしら、此間も其様なこと、旦那様にお咄したら、例の無頓着なお顔で「イヽサ内には居らなくとも、全校九百の兒童は皆私の子供だもの……」と仰しやつた。けれども私には何だか淋しい様な、つまらない様な氣がした。今夜は久し振に、夜學は休みだといふし、あすは日曜でもあるから、私の方も娘達に休んでもらつてキャベツ卷、茶碗蒸など、二三品お料理をして、ゆるゆる夜食をいたゞく。食後、某様お出にて、謡が始まる「岩根の上の苔莚、かたしく袖も紅葉衣の、紅深き……」と紅葉狩をお謡ひなさるのを、きいてゐると何だかボーッと好い心持ちになつてくる、「維茂少しも騒ぎ給はず、南無や八幡大菩薩」とびつくりして頭を上げて見たら、私は机の上に俯伏して居た。

十五日　日曜日　晴、風ふく、

けふは七五三のお祝ひ日、東京ではさぞ華やかな事であらう、たしか美代子さんの、孃ちやんはことし三ツ。綺麗に、お人形さんのやうにおつくりなされて、お祖母様が目を細くしてゐらつしやるだらう。

ゆつくりお臥みなさるだらうと、思つて居た旦那様が、早くお目覺めになつたから、どう遊して、と伺つたら、けふは敎員講習會があるのだつて……、一日位緩々お休みになつても、よささうなもの、とは思ふても、これも止むを得ぬことだ。御出かけ後配達してきた新聞を見ると、まあ驚いた、同級であつたT子さんが、とう〳〵御結婚、陸軍少佐の某様と、けふ日比谷の大神宮で式を擧げるとある、虛榮心の權化なんて、陰口されたT子さんのことだから、きつと立派な事を遊ばすだらうと御容子など想像して見る、クラス一の美人と、御自分にもゆるして居らしつた方で、服裝なども無論際立つてゐらしつた。私がこゝへ嫁した時に

も、同級茶話會の席上で、しきりに擯斥の語を、お漏しになつて、夫の位置が低いから、自然、私の品性まで墮落したかのやうに、仰有たと、あとでK子さんのお話しであつた。T子さんの御氣性では、御尤のお言葉だ。華やかなる友よ、咲きいでゝは、萬朶爛熳の花王と、理想のホームを、おつくりなさいよと、心に友の未來を祝福する。

　頼まれた羽織の仕立にかゝる、旦那樣。いつぞやからフロックコートの新調を、思立つてゐらつしやれど薄給の身分では、フロック一着造れば一ヶ月半の俸給がなくなる、毎月少しづゝ、心がけては居れど、不意の出費などがあつて、却々思ふ樣にはゆかぬ。こんな賃仕事の塵も積れば、いくらかの足前ともならうかと……。オ痛い……、指の「アカギレ」から血が出る、何といふ酷い手なんだらう、このまあ荒れ方は――。

　こんな手して、賃仕事などしてるのを、T子さんでも御覽だつたら、何と仰有るかしら、それこそ、死んだ方がました、なんて仰有るでせう。けれども私は思ふそれは物質上にこそ、あはれに佗しく、貧しい家ではあるけれど、まだ〳〵心ばかりは、淸く豊かなつもりである、人と生れて、殊に心弱い女の身には、ダイヤの燦然たるブローチも、芦手模樣とやらの衣裳も、そんな物欲しくないとは申さぬ、欲しい……、ほしいけれどもしかたがない、境遇上出來ぬ事は、あきらめるより外はない、何も運命だもの――。九重の御園の内雲か雪かと匂ひ出たる花も、紅塵千丈の隅田堤のそれも、賤が垣根のわびしき色も、櫻は櫻の、花にかはりはないので、只、所柄、觀る人の、心々の價値であると思ふ。露を力に、やつと開いた樣な、草間がくれの野菊の花にも似たる私などは、人にしられで、淋しくしぼみ果てようとも、自らの分相應の色に、ほゝゑんで、淸い終りを遂げればそれでよい、うつし世の榮華を一身に集めて、萬人の賛美をうける、ことなどは、夢にも見られさうにもないからたとへ小學校教師であらうと、何であらうと、高潔な品性を具へた夫を得たとを感謝して、忠實な妻賢良な母となるのが、心の誇りである、人は負惜しみとでもいふであらう。

　さあ〳〵精だして、フロックのたし前でも働ませう。

同窓會の日記

水香

廿三日朝の中は一片二片の雪さへ交へて、風はげしく、あやしげなるお天氣であつたが、午後からは漸く晴れてぐづ／＼して居る中に寄宿舍の妹が來たので朝食もそこ／＼、髪をなでつけて學校に行く、開會には一時間あるが、せめて幹事位ゐはと思つて來て見れば、幹事長の先生がお一人、自分が世話やきに出なければならぬ事となつて見ればぶら／＼しても居られず、他の幹事の人と出來る丈けの用意をしてまつて居ると、十時の開會は何時の事やら、一人二人縮緬のお羽織重さうに着てそろそろ集まられたが凡そ五十名計り。

自分の組の方は一人も見えないので、心細さ一通りではなかつたが、十一時頃になつて、古賀さんがお兄さん連れていらつしやつたので自分は嬉しかつた、十一時少し過ぎ漸く開會して見ると、一回の卒業生は一人もなし、二回は幹事が唯一人、三回は吾々二人、去る三月で九回の卒業總員四百餘名を出して居る女學校の同窓會と思はれようか、しかも市内に居て欠席する人が隨分あるとの話し、その欠席の理由はと聞て見れば、おきまりの虚榮心の不滿足が第一で、次は餘興が面白くないからとの話し、抑も同窓會の目的は何だらう、流行着物の展覧會だらうか、餘興見物だらうか。

今日も一寸皆がぬいだ下駄の價額を調べて見ると、平均一足一圓として六十足で六十圓、この大金を若しも自分が働いて儲けようとしたら小學校敎員の經驗から割り出して確かに五ケ月働かねばならぬ、しかも飲まず食はずで其通りである、それが衣服の段になると一人平均三十圓として六十人、千八百圓、中には小紋縮緬二枚重繻珍の丸帯と云ふ扮裝の人さへ見えた、自分も家を出る時には母上の御注意もあつたが、どこまでも秩父の着物に同じ被布着て甘んじて來たのでさへ、たしかに二十圓以上のものは身について居るのだ、若しも之れを木綿の着物にメリンスの帯位で出るとしたら、此處に千圓の金子は立ちどころに涌いて來る、千圓あれば……

新會長の紹介に次で講話などがすんで、晝食、幹事だけは別の室で食べ始める、今日は大好物のおすし。

誰れも不平と見えてあつちでもこつちでも箸を持ちながらブツ／＼。

午後は客員の談話、餘興の琵琶、會員の經驗談などは藥にしたくもない、自分は不經驗ながら折があつたらと思つて居たが思ひかけぬ役が涌いたので、遂になりを見出すことができなかつた。



農家の嫁の日記

しづ子

ふと目が覺めて幾時たらうかと思つてゐると丁度神宮寺の鐘の音が聞え初めた、長く餘韻を引いて微かに消えて行く。あの行衛はどこであらうか、彼の可愛らしい小坊の寒さうな力が籠て居るのかと思ふと身に沁々と哀に聞かれる。●

・今から眠る譯にも行かず、餘り早く起きると下の者が嫌がるしどう仕様かしらん歌でもと思つても臺處で下男達が下らぬ事を云ふて居る聲が騒しいので何だか思想が亂れて出來さうにもない、ぢれつたいやうな氣持がする。オーソウ／＼昨日旦那様に御話したらすぐ御宿下すつた彼事今から手紙でも書かうと思つてそつと旦那様の御目の覺めぬ様、氣を付ながら灯を點て起ろ。美枝子様に「裏山の楓が今が見頃だから御暇の時入らつしやい」と云ふこれ丈を書くのに此頃は筆を持ちつけぬ故であらうまつぱり書けやしない。●

何時も美枝子様の御見事な事つたら、ほんとうに恥しい位、けれども仕方がないわ、私が四分や五分の褄の試驗に出來が惡いと云て困つて居る時分には彼の方なんか御髮の寄宿舎に起臥して居らしつたのだものなんて自分勝手な理屈ばつかりつけて堪へて置く、いつもの通り御湯も取つたし火も入れたもう旦那様の御目覺を待つばかり其間にと花畑へ行つて見る、今にも時雨でも來さうな雲が西から東へ走つてゐる冷い風が顔と顔をなでた、爺やに「御天氣はどうだらうか」つて問ふたら「雲行がいゝから後には晴れませう」と云ふ百姓にはどうしてわかるのか知らん、菊も大分色があせたし此頃は何にもよい花がない石竹の遅れ咲を一二輪御机の上へと摘取る「姉さーん」と國雄さんが大きな聲で呼びながら馳て來て「此間姉さんと二人で植ゑかへた胡瓜が實つてゐるつて爺やが云ふたよ」つていゝながら先へ行くので私も後からついて行て見る、マー何て可愛らしいのだらうか小指ほどもないのがたつた一つ此寒いのによく／＼實つて呉れたものだ國雄さんも大そう悦でゐる、私もうれしくつて／＼子供の手でもさする様になでまはしながら、つく／＼さう思つた、此胡瓜なんか掃溜の隅に只一本細々と生えて居たのを私が見つけて國雄と二人で「もう餘り遅いから實るまいけれども」と、云ながら移し植たのに、小さいながらも私達の心を無にしなかつたのが何よりうれしい何でも手をかけた丈の事はあるものだ、此夏も「ジヤガ芋」の小さな殘りを畑の隅へ四ツ五ツいけて置いたのが、此間掘つて見た時に大きなが、ころ／＼ところげ出した時のうれしさ思はず手を打つて悦だつけ、が又此胡瓜も……一切づゝでもいゝから珍らしい物が御好な御舅様と旦那様等に上度ものだ。國雄さん骨折つた一人だから……これではどうして分けて喰たらよからうか此小さな物をと一人で可笑かつた。

何でも早く皆様に御知らせしてと、二人で大急に飛で歸る、ともう御起きになつて居らしつて下男と何か御話最中なので私等はどんな鬼の首でも取た様な氣になつて皆も切々其事を御話しすると「なんだ其顔

はあれは私が油かすを置いてやつたからさ」と笑つて居らつしやる下男も傍から私も肥をやりましたといふ、アラマア國雄さんは氣ぬけのしたやうな顔をして私を見てゐる。私も今迄の意氣組はどこへやら丹精して下さつたのはうれしいけれども、何だか自分の手柄を人に取られた樣な氣がして只ぼんやり「それでも植ゑかへたのは僕等だから」と、國雄さんはまだ敗けぬ氣を張つて居る、「オイ早く行つて形づけぬか」との御催促に氣がついてやう〳〵家へ入る、婢やが大方形づけといて呉れた。御飯すんで　御父も御出になつてさつきは大そう賑がたつたが、どうしたのかと仰しやる又一しきり其話で大笑されたが國雄さんの學校へ「行つて參ります」と云ふて來たので「一寸これを長岡先生(みえ子樣の事)へ」とさつきの手紙を渡す、九時頃から旦那樣はどこへやら御出ましになつた臺所の御菜を云ひつけといて御奧樣の御羽織を仕立にかゝる、御晝頃になつても御歸りがない大方大澤さんへでも碁を打ちに行らしつたのだらうと思つて御奧樣に御飯をあげる。マア今日の暖かな事つたら小春日和の長閑で縁へ日があたり出してからはのぼせる位、裏の杉の木の蔭で百舌鳥が頻りに鳴き立る、藤の實がばら〳〵と音をさして落ちる婢やが「御嫁さん御豆腐屋がきましたがどう致ませうか」つて問ひに來たから二ツ三ツ買つといて御呉れつて云ふたら返事をして下つたきり、外に何にも音もしないいかにも靜かである、といろ〳〵の事を思ひ出す、私が此家へ來立には「御嫁さん」と云はれるのが、いやで〳〵仕方がなかつたつけ、云はないでもよさゝうな處へでも「これは〳〵御嫁さん」とかまたは「今日は御嫁さん」などゝくツつけるのだもの、何だか人格を落された樣な氣がしてつく〳〵嫌になつてしまつた。たまに奧樣とでも云ふ人があると其人が有難いやうな氣がしてうれしかつたつけ、が此頃ではなんと云はれても平氣になつてしまつた馴れたのだらう。

ほんとに縁といふものはどう云ふものなのかしらん、いつも御友達が二三人寄ると其話の出たものだが、私が此家へきてからは猶其聲が高かつたとやら、それも其筈東京の眞中に生れながらこんな島國へ來るさへ不思議たのにしかも家柄として再びどこへ移るといふ事もない、田舎やへ嫁入らうとは自分だつてほんとうに夢の樣に思ふ、其夢の樣なと思ふ間に早二年もすぎてしまつた、御友達などは私が大そう變つたといふ、どんなに變つたのかと思つて聞へば「御嫁さん氣取になつた」といふ何だか情ない樣な氣がする、同じに學校を卒業した御友達の方々は大方帝都へ志して行かれたのに私は……、私は決して此上の學問を仕樣とは思はなかつた早く自分の身の治まりをつけて、御齡よられた御兩親に御安心おさせ申さなければならないと、深く心に刻みつけられて居た故であらう、けれども誰しも故郷は戀しいものましてや人々のあこがれる都は私のなつかしい故郷であるものを、あちらには伯母さんもあるし姉さんも嫁つてゐる御兩親は此方に居らつしやるからいゝやうなもの、アア今頃はどうして居らつしやるかしらん。

此間御奧樣が秋の收穫でも濟むだら、二三月遊んで來るがよいと、御許が出たつけア、やつぱり此齡になつても御兩親は戀しいものである

あの稻がすつかり俵へ入つて御藏へ積めるのは何時だらうか、早く／＼其時がくればよい「只今」ッと大きな國雄さんの聲にやう／＼夢から覺めた樣な氣がする、旦那樣はどう遊ばしたのだらう御舅樣も今日は日向ぼつこにも御出がなかつた私から御茶盃と御菓子を持つて行く、種々御話してゐたら早三時になつたどれ晩の御支度にと立あがる。

今日は御魚屋がこなかつたので御菜に困る面倒だけれども御茶碗むしにでもしませう。

中へ入れる實を人に頼むでもわかるまいと思つて自分で畑へ取りに行く、水田の慈姑も大分大きくなつてゐるいろ／＼のものを集め提籠へ入れて歸る自分の處の畑へ出來たものだと思ふとうれしくつて田園生活の趣味とはこの樣な樂さを云ふのだらうとしみ／＼感じた御舅樣に御湯の御加減も見てあげればならず、旦那樣は御かへりになる、婆やは大勢の御飯ごしらへでなか／＼こちらの事手傳うて貰ふ譯にもゆかず、忙しい事一通りでない、やう／＼自分も御風呂へ入つて御膳の前へ坐つた時はほつとして氣が緩かになつた、今夜は何事もなく九時頃まで雜誌など見て寢に就く。



二度夫に別かれし私の心

美奈和子

一昨年の春、私は前の夫に死に別れまして暫く郷家に歸つて。老いたる兩親の許に居ました。

私に落度があつて離縁れたと云ふでなし、夫の死といふ餘儀ない運命のために戻つて來たのですから、もとより兩親も私の身に同情してくれましたけれど、私には何となく。肩身のせまいやうな。氣兼が致されました。

とり分け母などは。私を劬はつて呉れまして、私が力を落さないやう悲しい思をさせぬやうにと、絶えず慰めて呉れましたが、私は昔に變らぬ親身の情を浸染々々有難く思ひますと共に。却つて、心苦しくうら悲しくて。よく母に隱れては泣いて居ました。

「いくら泣いたとて、死んだ人が生き還る譯でもなし、由ない嘆きに體を害はぬやうに」と子を思ふ心の母親は、しみ〲云つて呉れます。物の道理に逆はうようもなく「もう泣きませぬ」と涙拭ふ下から又泣いては。老いたる母までも泣かせるのでした。

あゝ併し、人は冷やかな理屈や分別で心から出るこの涙が堰き止められませうか。

人に嫁いで、身の運命の定まるのが女ですたゞ此世一人の君と定めた夫に別れて、昨日に變る今日の孤獨を、女の身一つで感じたとき、どうして重い世の壓迫な覺えずに居られませうか、泣くが誠よ、私は泣きますとも。

涙の中に三月が程は經ちました。

裏の川堰の櫻はもう疾くに散つて了まつて、世は青葉に風薫る頃となりました。

櫻の青葉が、生温い風に互に葉擦れの音を洩す下に立つて、小川の心に落ちた夕日の影を暫くぢつと見て居ました。

私の心の悲しみは春頃程にもなくなりました、時々は思出しては、胸の中が掻きむしられるやうな氣もしますが、また時としては、昔覺えた唱歌など唱つて、外に氣を移す程心に餘裕も出來ました。

それと共に、今後の身の上が浸染々々思はれてなりませんのでした。

心が鎭まるとともに、私も矢張人の世のさまに洩れず、もう一度嫁にといふ氣も起りかけました、と云つても外から申込みもされなかつたなら元より私の方から持出すわけの話でもなく――尤も兩親は豫々思つてゐましたらうけれど――少くも二三年は、その儘に過したでせうが、折よく（と私は申ます）二方から結婚の申込を受けました。

斯うなりますと流石に心迷はずには居れません、一人は何處とかの會社員で年は三十四五、收入は四五十圓ありまして人物も至極手堅く然も初婚の人、今一人は財産も小萬はあらうといふ商家の後妻の口、たゞ主人がチト齢を取り過ぎてゐるといふ。

何れと申しても私には寧ろ過ぎた口。どうも私も再婚であるし、子供

こそなけれ齢も二十七と申せば、我世の春も過ぎてゐるのですもの、選擇などは申さず、たゞお兩親の御心任せとのみお答しましたのです。

私は遂々商家の方へ嫁ぐ事に話が出來ました、多少齢は取つて居られても、親切な手堅い人であれば私の身に取つては却つて幸福であらうと思ひましたからです。

愈々再縁と定まりまして、新らしい喜びが湧き出でゝ胸も躍る氣がしましたが、又一方には初めの夫の死を今更に思出でゝ何となくれ濟めたとへば何か罪でも犯すやうな心地がないでもありませんでした。

然し偉大な自然の力に、支配さるゝ人の運命は如何ともすることが出來ませんでした。



私は再び老いたる父母の家を去るに臨むで、寂しい人の身の運命を嘆つては、老いさらばへたまひし母の手に縋つて只泣きましたのです。

嫁いで見てから私の初めの考へは誤まりませんでした。

十三四も年上の人に嫁いて、それで私の心は幸福でありました？。夫は小肥りの稍優しい氣立の人で、多少齢も違ふ故か、私に口小言一つ云はず、物を言ふにも始終ニコニコして、私の氣色を氣遣ふ程氣の優しい人でした。二年餘り、さうして經つてゐましたが、どういふものか私に子が出來ません、夫も始終欲しいく\と申しますし、里家の兩親も一人はあつてもいゝと申しますのですが、一向出來て呉れませんのです。

四十になつて、子種なき夫の心の寂しさは無理ならぬことゝ思つて、私はそれ許り苦勞に思ひました。

で、いつとはなしに私等夫婦の間に何となく打解けぬ隔てが出來て來まして、嫁いでから丁度二年目の冬、私は亦其夫に分れてしまいました。何とした不幸の身の上なのでせう。

私は再び兩親の許に歸りました。歸つて見ましても、兩親は別に驚き悲む風もなく、私にしましても只云ひしれぬ、寂寥を覺える丈けで、以前先きの夫に別れた折のやうな悲しみもありませず、涙一滴澪すぢやありませんでした。たゞ氣抜けをしたやうになつて、私は行末はどうしたらいゝのだらう——と冷かな世の樣を思ひしめました。

此時はもう今後亦緣付くといふ考へもなしもう此齡をして、寧ろ氣恥かしうなりまして、私はつくゞ獨身生活を思ひ立ちました。

幸ひ私は田舎ながら高等女學校も出てゐましたので、何處か相當の家庭へ家庭教師にでもと思ひ掛けてゐましたが、どうも急には口もありません。

さう斯うしてゐる内に又結婚談が持ち上りました、然しもう私は耳も假しません、獨身の决心が深ふくございましたもの。此荒い浮世に、繊弱い女の身一人、堅く孤獨を持して行かうと思ひ定めましたとき、自分ながら男々しい心よと胸も躍りました。

あゝ然し今にしてそれを思へば、この决心もたゞ、空しくさうした男男しい决心そのものを戀ふ一時の熱に過ぎなかつたことを思ふて、私は淺染々自らの身を嘆いてゐます。

第一の夫に死別れて、あれ程泣き悲しむだ私が暫くして、他に嫁ぐ氣になつたのも運命ですし、再び嫁いで子が出來ず、寂寥を感じてつひ別れる氣になつたのも運命でせう、あゝ人は到底運命の力に抗する事の出來ぬ弱いくものであると思ふては、私はしみゞ情なく、悲しく思ひます。

私は今では三たび嫁いだ夫に册いて、その夫の先妻の忘れ片身の子を擁して侘しい日を送つてゐます。



初奉公日記

花子

△御目見得

それでは奥様、何分よろしくお願ひ申上ます、年も行かず行屆きませんでせうが、どうぞお叱り遊ばしてと伯母さんは歸つてしまつた。アア今道子も晝寢して居るから、ま、ゆつくりやすむだらよいと奥様は出て行かれた。

廣い部屋にぽつねんと一人坐つて居ると、今更のやうに淋しさが身にしみて來る、伯母さんの居る間はいくらか心丈夫であつたが、頼みに思ふ其人も歸られたので、いよ〳〵心淋しい、もうどちらを向いても知らぬ他人計り、懐しい人は一人もない、今迄のやうに唱歌など歌つて、のんきで居られない、辛い事も悲しい事も、皆一人で忍む計り、あゝ私はなぜ御奉公せねばならぬのだらうと、胸が一杯になつて、何も見えなくなつて、頭がぼうとする。

お姫様がお目覺めよ早くいつて、御機嫌をおとりよと、言ひ捨てゝ、四十格好の仲働らしい人は、忙しさうに、臺所の方へ行つてしまつた。はいと立ち上つたものゝ、どこへ行くのか分らない、うろ〳〵して居ると、何をぐづ〳〵してるの、お目覺めだと云ふに、ハツと顔は紅くなる、胸はどき〳〵する、足は宙を浮くやう、漸く敎へられて、お座敷へ出た。恐る〳〵伺ふと、花お這入りよ道が起きましたと、おつしやる、美しい友禪の、暖かさうな布團の中から、姫様は可愛らしい、笑顔を向けて居らつしやる。

おゝ、お嬢様お目覺めでゐらつしやいますか、あの私が花どうぞこれから、と云へば奥様も、ね道これから、花と遊ぶのですよ、無理を云ふと、花が困りますよと、おつしやると、姫様は怜悧らしく、うなづいてゐらつしやる。

姫様抱つこして、外へ出る、柔かい芝生をふんで、四五間も行くと、砂地になつて、海水がじやぶ〳〵して居る、遠く水と空との境目に、紀州の山々が、淡く霞んでる、ひき船が五六艘も、船をひいて通つた、白帆が夕日に光つて、白い鴎が水に休んでる。

弓形にまがつた、濱づたひの遠くには、我十四年間住みなれた、懐しい、故郷があるかと思ふと、歩いて行きたい。遠くの寺で夕暮の鐘が、ぼーんとなつた、ハツと氣がつくと、姫様は餘念もなく、小石を拾つてゐらつしやる、夕飯は臺所の板の間で、女中さん方と一緒に頂いた、胸が一杯になつて、何もたべられぬ、宅では今頃、いつもの通り、一家揃つて賑かに、食事してゐらつしやるだらう、それとも私が、一人かけたので淋しいだらうか、姫様がお寢みになつてからは、ます〳〵淋しくなつて、氣が滅入りさうになる、ランプが薄暗く光つて、時々障子の隙間から　風が這入つて、ぼつと音をたてゝ消えかゝる、あゝ宅では今頃、末の弟が、いゝ、いゝ、だいもんじやお這入り顛大きて這入られんと、まはらぬ

言で歌つて、皆を笑はして居るだらう、それから皆寄つて來ぞく合せ、わい、楽しい事だらう、手には雑巾をさしながら、思ひは遠く七八里も離れた、我家へ飛んで居る。

旦那様がどこからか、歸つていらつした、「お、お前か、よく道を可愛がつてくれよ」とおつしやる「お前もうお寝みよ」と奥様も、旦那様も、御親切なる。

お床へ這入つても、却々眠られぬ、母様も今頃は、矢張私の事を思つて、、下さるだらう、昨夜しみ／＼と、御奉公は、辛いものよ、けれどもね、人は修業せねばなりませぬ、御奉公は修業だからね、よく辛抱せねばなりませぬよと、何度もおつしやつた、がお目には露が、光つて居た、どう／＼と波の音が耳につく、後から寝た、女中さんの、大きな鼾が、羨ましい明朝何時に起きるのだらう、早くねようと思へば思ふ程眠られぬ、たま／＼とろ／＼すると、恐しい夢、ハツと目が覚めると汗びつしより。

△奉公のつらさ

頭の上で昨夜かけて置いた、目覚がけたゝましう、鳴つた、そつと起きる、日中は暑いが朝は涼しい、早いものだ私が來た時分は、桜の花が咲きれんげ草が咲いて居つたが、もう今は夏の盛りになつた。

意地悪のお琴どんが來た、知らぬ顔で障子の陰に居ると、お花どんいつまで寝てるのと、大きな聲で奥へ聞えよがしに云ふ、お早う、起きてますよと横から不意に云ふたらびつくりして居つた。

お琴どん、又床も上げてない、仕方がないから私が上げて、お掃除すまして、私の役目の鏡臺や火鉢や針さしを拭きにかゝると、お琴どんは奥様のお花折つて來てくれと云ふ。

朝露が朝日にキラ／＼光つて、歩く度にはら／＼こぼれる、花壇に立つと、何とも云へぬよい香が朝もやの中からかほつて來る、氣がすうとした、夏菊を少し折つて歸る、鏡臺を拭きにかゝる、又呼ぶあれのこれのといくらでも用事云ひ付ける、お鏡臺拭いてからでいけませんかと、云へば、お鏡臺や火鉢五分もあれば拭けますと云ふ、でも清拭かけると三十分はかゝる。

お嬢様お目覚め、奥様も帯を、むすんでゐらつしやる、ほんとにいつ見てもお美しい、どうしても二人の嬢様の、母様とは見えない、お召替して、奥様に御手水を使はすのをお願ひして、牛乳暖める。

花今日は未だお鏡臺拭きませんね、毎日の事だから云はれぬやうにおしと、奥様は優しくおつしやるから、お琴どんの事も云はれない。奥様は嬢様とお濱散歩、旦那様お目覚め、お床上げてお掃除して、お膳立てしてから嬢様お迎ひに行く、引綱今上つた所、新しい鰯がぴん／＼はねて居る。

御飯がおすみになると、お膳をざつと仕舞つて、嬢様を乳母車に乘せて、出る嬢様どうも運動がお嫌ひで困る、だからお弱い、私の弟なんか同じ三つだがぴん／＼とび歩いてるから、丈夫な者だ、車を押してお

地藏様へ參つて、お孃様のお丈夫におなり遊ばすやうお願ひする、歸途女學生にあつた、何となう悲しかつた。

歸つたら、奧様相變らず御習字してゐらつしやる、ほんとに、お上手なのに、いつまでお稽古遊ばすのだらう、あゝ羨しい、私は習字處かしう御本さへも、讀む事を止められて居る、二三日前嚴しい、兄様から心こめての贈り物、「女學世界」も取上げられてしまうた、折角私が好きだと思つて、わざ／＼送つて下さつた物をと情なうて悲しくつて、なぜ、奉公人はこんなに違ふのだらう、それも、奧様だと未だよいが、出しやばりの、お琴どん御奉公して、御本とは何事です學校とは違ひますよ、其んな物があると孃様が粗末になりますと自分の箱へ入れて、錠をびしやん、私は腹が立つてもうひつたくりたかつた、あゝ、御奉公はつらいもの。

昨日本家のお時どんが、御奉公なんかなんにもなりませんよ、只おしやべりになる計よと、云つて居た、ほんとにさうだと思ふ。

午後花壇で、鬼灯を取つて、來て揉つた、孃様お口へ入れて、妙なお顔遊ばしたので、なめて見たら、にがい事、鹽水に浸けて置く、お好なお伽噺をしてゐると、お眠りになつた、此間にと肌着を洗ふ、花あーとお呼びになる、はいと手を拭きながら、坐る道にれ蠅がたかると目を覺すから、附いてお出でよ、はいと雑巾のさしかけ持つて、別座敷へ行く、又今日も洗濯出來ぬ、お琴どんやお久どんお松どんは朝洗ふからいいけれど私には洗ふひまがない、宅に居る時は姉が洗つてくれたから、こんな事はなかつたけれど此頃汗のまんま入れて置くので、星とかゞ出ていけない。

お目覺めの頃御風呂がわいた、旦那様がお留守だから、奧様一番にお召し。皆様の御浴衣出して置く、ポン／＼とお手が鳴る「はーい」とタオルを持つて、御湯殿の戸を開ける、鏡が湯氣でボーとくもる、湯氣の中から孃様出て來られる。

森の芝生へ涼臺を出して、孃様と一つ下の少殿抱いて出る、東の海からだん／＼暮れて、全く暮れると空には金色の星がキラ／＼と輝く。

奧様もいらつしやつて「お前も行水しておいで」とおつしやる、薄化粧遊ばした奧様、美しい。

一日中の一番樂しい風呂をざつと、頂いて上る、少しゆつくりするとお琴どんの嫌味、すぐ着物きて急いで御飯いたゞいたから、折角流した汗が又びつしより。

お琴どんは御飯の長い者は、ぼんやりだと云ふ。

外へ出ると涼しい、晝の暑さは、海へ流されたのだらう、東の海から美しいお月様が、しづ／＼と出る、銀色の波がゆら／＼、沖の方で帆前船が淡く見え出した。遠く大阪の築港の電燈がキラ／＼光る。

孃様お寢み遊ばしてから、晝の洗濯見に行くと、ちやんと洗つて、月あかりに白く見える、あ、又親切なお松どんが洗つてくれたのだらうと、思はず嬉し涙が出る。

内へはいると「お花どん肩がこつて、什方がない、ちつともんで下さ

いな」と言はれて不性々々にお琴どんの後へまはる「宅に居るとお嬢様がたに、すみませんね」と口ではうまい事許り、ほんとにさうだ、母様に毎晩こうしてもむであげたら、どんなに御喜びだらう。

今日、お波どんと云ふ、美しい女中さん(裁針だそうな)が、御目見得した、又これから、お琴どんにいぢめられるのだらう、可哀さうに。

△寒い日

美しいはぜの紅葉も皆落ちて、南天の實が紅くなつた、今年は毎年より、寒いやうに思ふ、足のさきが千切れさう、足袋は洗ふのも、ひまがないから遂に辛抱してはかぬ、御飯頂く時、板の間で座布團なしだから、折角暖かい物頂いても、下からさめてしまう。

私はお波どんが羨しい、いつも火鉢の側でお裁縫、けれど、此頃美しいお波どんが、どうも奥様のお氣にいらぬ。けれどお琴どんは「お波どんは幸福だ旦那様の御氣に入りで」と云つて居た、でも始終家にお居での奥様の御氣にいらぬぢやつまらぬと私は思ふ。

夜の寒さは又一しほ身にしむ、床へ入つても、冷たくつて、却々寐つかれぬ、奥様は少さいからと、年寄のお琴どんと二階で炬燵後るしにして寐よとおつしやるけれど、「お花どん私後さしは寒いからいや、一寸入れて暖まつたらかへして頂戴」と云ふ「私暖まつたら寝てしまうから、よろしいわ」冷めたいのを辛抱して寐る、けれども矢張寒いから、そつとフランネルで足を包むで寐る。それでも、晝のつかれでいつか眠つてしまう。

△お供

樂しい事や悲しい事もあつた、お正月も半になつた。今日は奥様のお供、朝から、私と二人だけ風呂に入る、十時頃に家を出る、奥様がお背が低いのに、お供の私が高いから、何んだか氣兼だ、手の節切れが、人に見られるやうで恥かしい。松田様の御門が見えた。

「まあようういらつしやいました事、道様いらつしやらないの、女中様呼んでいらつしやいな」と松田の奥様が飛んで出ておつしやる。「ではれ午後迎に來る時、道を連れてお出で」と、内の奥様もおつしやる、奥様の下駄揃へて置いて歸る。

道様連れてお迎ひに行く、御座敷に上る、六疊の間に暖たかさうな掘炬燵に此家の奥様と、内の奥様と女中様二三人と樂しさうにトランプして居らつしやる。私にも寄れとおつしやつたが、「道が邪魔になるからお庭を拝見してお出で」とおつしやつたので、奥様がうらめしかつた。

夕暮歸る。樂しさうな松田様の女中を羨しく思つて歩いて居ると、四十五六の女の二人連れ「ほんとにれ折角奉公さしましたのにれ、よい事は覚えませんでれ奉公人根性になりましてれ」と、話しながら行き過ぎた。何だか私の事を云はれた様に思つて、ハツとする顔が紅くなつた、あゝ私も奉公人、宅にまつて居らつしやる母様に失望させぬ様心を入れかへて辛抱しませう。

女學校を出て商家に嫁せし私の日記

美登利

五年前

・御新造様旦那様がお召で御座い升と、松が障子を啓けた。

お嫁に行たら奥様と呼ばれる者と覺悟して居た耳には、何だか可笑しい、夫は商人の家内を奥様と云ふのも變だと思はぬでも無いが。……昨日八百屋に、御内儀さんといはれたのが、何だか輕蔑された樣で厭な氣持が仕た。

おや御目醒めと、煙草盆と新聞を枕元へ持て行く、一服召上ると直ぐ、新聞の相場付を御覧なさる。生家に居た頃這麼物誰が讀むのかしら、羅典語か梵字でゝも有る樣に、見ても分らず、又不必用だから、とんと見た事も無く、母樣が新聞を讀むなら附錄だつて御片付と仰つた位、家中誰も手に取る者も無かつたのに、こゝでは一番先に御覧なさる。

朝飯後上州屋さんが御出で御座い升と、小僧が取次ぐ、御座敷へ御通し申すのかと思つたら、店へお出となる、大抵のお客は店で御話なさる。

茶の間で新聞を讀む、商況や、經濟が委しいとて朝日と實業新聞だか、讀つけたせいもあらうが、國民や讀賣の方が、趣味があつて、面白い樣だ。

庭で小鳥が囀づる、障子を明ると、暑からぬ秋の日が梧桐を洩れて斜に部屋へ射込む、楓樹がやゝ色付き花壇の菊が今を盛りと匂ひ溢れる。

今夜は寄席へ行かうと仰る、御風呂から上つて、鏡臺の前で念入りにお化粧をして着替へる。

少し根が下つて、たぼの澤山出た佐土屋形の丸髷と翡翠の八分玉の簪を挿して、着物は、昨日、小川屋から仕立て來た、やたら縞のお召に唐繻子の襟の出つたのを着た帶が奈何も之に相應しいのが無い、夫も其筈母樣が上品なのがお好きで、品のよい柄を御撰になつ

たのだから、まあ之ならばと、黑地に大形の牡丹と蝶の模様の羽二重と、白繻子の晝夜帶を締め、襦袢は洗朱の友禪に意氣好きの姉様に頂た桔梗色に、寫生風の草花を絞た半襟が掛てゐる、櫛を挿さうと姿見の前へ立た。

一月前迄マガレツトに、三吋の白のリボンを結び、矢飛白の着物に、緋縮緬の襟を恁う頸に巻付た様に、着て板締と勝色繻子の帶を締めて居た自分が、何と替つたものと、嬉しい様な乙女氣の失ない昔戀しい様な一種の感が胸に迫る。

仕度はいゝかねと仰有る、はあお伴致しませうと、外へ出る。

家並の街燈が灯つて、風も無く靜かな夕ぐれだ、今日は水天宮様で蠣殼町の方は空がポーツと赤い人形町通りは却々の人出であらう。

浪花橋を渡り、電話交換所の少し先へ來ると、葭町の方からつぶし島田に、御納戸色のお座敷着の褄を取つた藝者と、褪紅色の友禪の振袖を着た雛妓が、縞の羽織を着た、箱屋とでもいふのかしら、若い男を連れて來た。

ふと主の顏を見た藝者は、何か小聲に雛妓に囁き乍ら、きざみ足に向ふの路次へ這入つた。

御存じなのかしらまあ氣がゝりな。

川竹や立花亭へ時々行た事もあるが、學生と廂髮で埋た様であつたのに、今日は其様人一人も見えない、中折帽と前掛がけの商人風の人や意氣な銀杏返しや島田が多い、殆で人種が違てる様だ。後から「濱町の大將」と呼ぶ人が有る、之迄姉様の處で乃木大將閣下とか大山大將閣下とか兄様の仰る外餘り聞た事が無いので變に思ふ、「何處の方と」訊つたら、「蠣殼町の人」さと仰有る。

出帆前

けふは朝から植木屋が來て茶室の庭に松葉を敷て五葉の松や下草に霜除をしたので、庭が俄に冬めいた、水を替た蹲踞へ、銀杏の黄葉が、一葉散つて淋しい、

定期船の出帆前で、店は忙がしさう、久吉も政吉も肌脱になつて土間で、菰包の荷造をして居る、傍で嘉助は、箱へ雜貨の詰合せする。主は帳簿へペンを忙がしげに走らして被居る。

何ぞ私に出來さうな事、御手傳ひ致しませう、と申すと、夫では仕切書を賴もうかと仰る、何圓何拾錢と云ふ字餘り書た事が無いので、書難くて困る、之で宜しう御座い升かと御目に懸ると、之は奇麗に書けた、恁んな仕切書が行たら南洋の人が讀めなくつて困るだらうとお笑ひ成さる、皆書て仕舞と、判箱と仰る、店から生家父の印材箱の樣なものを持て來た此處へ恁う押して夫から此處へ割印をするのだと、敎へて下さる。

天高く馬肥ゆといつた秋日和だ、此度の航海に御持に成もの丶不足を買物に行かうと店迄來ると、政吉が、嘉助どん御新造樣のお伴をおしと云ふ、松坂縞に角帶めくら縞の前掛を締めた小僧が跡から付いて來る、束髮の仲働を伴に連れて歩た癖が失せないので、何だか自分の伴の樣な氣が仕ない、もう大分馴れたが嫁入た四五日は外から歸つて格子を明ると、正面に金庫が見え其横手に帳場格子と簿記臺が有つて眞中の電燈の下の大きな火鉢に縞の羽織に巾の狹い羅紗の前掛を締めた番頭が坐つて居ると、何だか他所へ行た樣な氣持がした。

荷爲替

今朝は西風でひどく寒い、お向ふの家根に霜が眞白で雪の樣だ、けふは大阪の鈴木へ荷爲替を組ねばならぬ政吉は歸國するし、久吉は未だ馴れないから例なら航海は出來無いがお前が居るので安心して行れる、日も經ないで淋しからうが此航海は自分で行た方が非常に好都合だから行て來ると、仰有たのに對しても自分に出來ないから本町へ賴むだといふのも殘念だから、奮發して第三銀行へ荷爲替を組みに行事に定めた。

銀行へ行く迄の車の內、心配な樣な嬉しい樣な丁度學校の試驗の時、敎室へ行廊下を歩るく時這麼心持が仕た。

人形町通りは歳暮賣出しで、提灯や各國の國旗が朝風に翻がへつて、商店の店先は何れも飾付で忙がしさうで有る。

車が止まつた、さあ之からだと胸がドキ／＼する、豫て聞つて居た通りの手續をして爲替取組試驗も無事及第して、ドアを閉た時の嬉しさ。

歸つて海上保險會社へ電話を掛け社員の來店を頼み久吉に鈴木へ書面を認めさせる。

麹町の姉樣から留守見舞の御使に馬丁が來た兄樣を隊へ御送り申た歸りだと云ふ、御返事を書く。



御立に成つてから最早十日になる、海上御無事御着に成つたかしら、昨日今日電報が來さうなものと、人の聲も電報かと思ひ門が明くと其れかと耳をすます。

彼方の店といふのは奈麼家だらう南洋と云へば油繪等でよく見る椰子の木の下に土人が立てゐる、あんな所かしら、十二月でも單衣一枚だと仰有つたから、氣候の激變で御病氣等お起りになりは仕舞か、だが此度始めて被行たのではなし其樣事もあるまい。

橫濱へ御歸港の電報が來た時は奈麼に嬉しからう、新橋迄御迎ひに行かうかしら、だが御仲間の御新造等が來て居て女學生上りだなんて、ぢろ〳〵見られるのも恥しいから夫より一層家で御待申さう、早く其日が來ればいゝあゝ待遠な。

楓樹や銀杏や蔦の紅葉が散つて、庭は「吹寄せ」の友禪の樣だ、昨日手紙を出したら、土曜日だからつて宿りがけに歌ちやんが來た（仲よしの從妹）相變らず元氣がいゝ、久吉が小僧をカードンと呼ぶのをカイドつて案内者の樣で可笑しいつて笑ふ羅馬字のビスケットをコーヒーに浮して食べながら、御友達の噂をする、糸子さん牧畜家へ嫁らつしやつたつてねえ、あら牧畜家つて云ふといゝけれど、牛乳屋の事よ、まあさうお仲間が出來て嬉しいわ歌ちやんも實業家へ嫁らつしやいよ、だけれどあなた海軍黨だつたわね海軍も派手で宜いわ、エポレットに短劍の旦那樣と黑の袖模樣の御振袖で御披露會の時の御樣子見える樣だわ、私も招で頂戴よ、いやなみいさんそんな何日だか知れないわと云ひながら嬉し相な而して理想を云ひ當てられたと云ふ樣な顏をする、さう〳〵文學好きの芳子さんねえ、とう〳〵文學士の方へ嫁らつしつたよ何でも今に旦那樣と合作でも御出しになるだらうつて評判よ、まさか。

竹中から使が參りましたと文箱を出す、先月便積入品代金請求書だ、三百五十圓帝商小切手にて遣す。

夜歌がるたを取る、店の者も松も濟も下手で殆で歌ちやんと二人で取てる樣で、つまらないから、止めた二階へ上らうと梯子の處まで來ると、花札なら勝てるがなあ、と嘉助の聲がする。

新刊の「女學世界」を見て居たが、十一時打つたから床に入る。

新道を流して行く新内の三味線がいゝ音だ、夜廻りの拍子木が霜にさえて淋しい、遠くに火事が有かして一つばんが聞える、知合の方で無ければよいが。

仕切金

千五百圓御座い升御改め下さいましと、久吉が商品

代金と入金傳票を持て來た千圓が銀行小切手五百圓が正金である、御立前に金を請取つたら改める樣と御云ひ付ゆゑ數へる、這麼お金を數へるのは今日始めてゝ一枚づゝ數へる手つきの無覺束さ、自分乍ら可笑しい夫を思ふと日家當家へ約束の定つた後母樣が商人の家内が銀行へ行た事も無い樣ではと仰つて、兄樣の代りに日本銀行へ行た時、隣の正金拂渡し口で、十五六の氣のきいた小僧が、紙幣の束をパラ〳〵パッと帳面でも開く樣に、數へて居た、どうしてあんなに早く數めるかと思つたが、今ふつと夫を思ひ出す、出金傳票を渡し第三銀行へ入れさせる。

二階の戸棚に本箱が有つた、何か入て居るかと思つて見たらつれ〴〵草や太平記等の所々主の筆の跡が見える、這麼事御好きかと嬉しい、御歸りになつたら伺つて見やう。

生家の母樣が御來になつた、皆樣の御樣子を伺つたり、此方の御話をして主が御歸りになつて御召になる樣にと、結城の羽織とお召を昨日綿入る樣にしたのを入れて頂く、これも仕て頂戴と二三枚裁物もして頂くもう何でも獨でする氣で有ながら、母樣の御顏を見ると願ひ度なる。

宿つて行くとよいが、明日から父樣が避寒にお出かけになるから、又春に成たら來ようと夕方お歸りになる。

折角被來たのに半日お來からお歸りになる迄お遣ひ立して濟なかつた、眞實に親といふものは難有いものである。

老女の化粧に喩へた、冬の月がものすごい程冱えて圓窓へ梅の影が映る、今宵は裏の待合の騒唄も聞えず珍らしく物靜な晩だ、窓を閉して讀かけの玉鬘の卷をよむ。

夜が更けて寒さが身に染む、雪催ひの木枯がざわざわと窓をうつ、最早あちらを出帆なさる筈だが何卒海が荒れなければよいが、此次髮を結ふ頃お歸りと思ふお留守中は丸髷計りで有つたが、銀杏返しの方が意氣で宜いと仰つたから銀杏返しに仕樣、時計が十二時を

打つ、大川端を辻占賣のさえた聲が細く長く。

五年後の昨日今日

這麽事思つて居たのもほんの當座、此頃では、奥様と呼ばれるとまあ野暮なつて笑ひ、湖月抄や四書五經等どこへやつたやら置處も忘れて仕舞つた其替り帶封の相場付も見る樣になつて、「ねえ郎君前場の寄付より後場で仕舞つた方が宜う御座いましたわねえ」と云ふ樣になり橫濱へでも行て皆不在の時は、算盤片手に商業の懸引する樣になつた。之も時の賜であらうか？。



受賞目録

▲（慨しきことの多き）事務員日記　（壹等金參拾圓）うたかた

▲（女學校を出て）商家に嫁せし私の日記　（貳等金貳拾圓）美登利

▲初奉公日記　（參等金拾圓）花子

▲お正、月日記　（參等金拾圓）千代子

▲年末年頭の日記　（參等金拾圓）若葉

▲小間使の書いた奥樣の日記　（參等金拾圓）こほろぎ

▲學校敎師の妻の日記　（參等金拾圓）野菊女

▲許婚の嫁の日記　（參等金拾圓）直子

四等‖▲趣味に逐はれて無趣味に暮せし妻の日記（玉蕊女）▲天下を罵り散す歲暮日記（千鶴子）▲敏腕を揮はるゝ若き奥樣日記（節子）▲嫂の書いた小姑の日記（露子）▲卒業後商人に嫁ぎし妻の日記（象子）▲嫁の我儘を苦勞する姑の日記（渓子）▲榮耀にかゞやく令孃日記（野の花）▲賑はしき一家の日記（美穂のまつ）初子の日記（若き母）▲感せし儘記せし女の日記（きよ子）▲ふところ寒き妻の日記（美竹）▲子のない妻の悲しい日記（ちどり）▲妾を持ちし人の妻の日記（千眞子）▲女敎員の日記（ゆき子）▲妻の胸に秘めたる三年間（苔の花）▲大滿足に滿足せし妻の日記（美江子）以上十六名五圓宛

五等‖▲待つ三日の記（櫻子）▲氣味の惡かつた看護婦日記（蝶子）▲農家の嫁の日記（しづ子）▲二度夫に別れし私の日記（美奈和子）▲同窓會の日記（水香）以上五名貳圓宛

注意!!!　左の諸氏の現住所を至急報知あれ

△直子△美穂のまつ△若き母△野の花△うたかた△渓子△ゆき子△千鶴子△水香



棚引くかすみ

（宮中女官の日常生活）

△三百名の女官

大内に使へ奉る女官と云ふものを詳しく言へば、典侍、權典侍、掌侍、權掌侍、命婦、權命婦等に分れて其の中に御服掛、御膳部掛、御道具掛などを含み、又其の外に仲居とか雜仕とか云ふものがあつて、此頃宮中に奉仕する女官の數は彼是三百名に上ると云ふ事で御座います。宮内省では此等の人々を呼ぶのに、すけさん、ごんすけさん、ないし、ごんないし、など唱へるけれ共、夫れでは何人を指すのか解しにくい所から其の上に本姓を冠らするとか、又は源氏名を冠らするとかして、假へば、早蕨のすけさん、梢のないしさんなど唱へ合ふと漏れ聞きますが、昔の俤も偲び出でられて却々床しく思はれます。然れ共、これは上級の女官同志の唱へ方で、夫れ以下の人々は上官に對して旦那さんと唱へ、旦那さんが以下の部屋子を呼ぶには誰れそれ針女といふが常なさうで御座います。

△局五人の一家族

旦那さんとか針女とか云ふのは江戸大奥時代の言葉を其儘用ゐてあるので、所謂旦那さんとなれば、一つの局に居を構へて、針女四人を使用する事が能きます四人の針女の一人は老女で、それが他の三人を監督し又其等の落度を一切自分で負ふので御座います。各女官の住つてゐる各局は、一側、二側、三側と稱つて、其の側々は壁又は廊下を以つて仕切つてあります。一側の部屋は大概間數八つか、或は五つで、旦那さん方の居る間は大概八間あります。そして旦那さんと針女四人と都合五人が一家族の樣になつて居るのです。

△各女官の勤勉

扨說旦那さんと云はるゝ人々は、每日每夜の交替で今日の午前八時に出仕して午後十時迄大奥に勤むる者と、午後十時より翌日の午前十時迄勤むる者との二つあります。宮内省では前の者をお早番、後の者をおゆゝゝゝるりさんと唱へて居ますが、其の人々の大奥より退がる時は、其の御附々々の針女等は、時間を見計ふて其の御歸りを出迎へ、出迎へられた旦那さんは、御服を召替へ、御湯を召し、化粧を直して翌日の午前八時か日によつては十時迄も休息します。

兩陛下の御側に奉仕する女官の謹嚴なる事は、到底想像にも及ばぬ程で旦那さんが大奥より退がつて後は五時間なり六時間なり自由勝手に休めるわけですが、久しく宮仕へして逐習ひが性となつてか、夜床に入つて如何に熟睡するとても上向になつて寢たり、手足を大の字にしたりする事は無く、必ず兩足を絢ひし緖の如うに固めて寢るものなさうで御座います。

旦那さんに對する針女等の勤めは、之れ又我々の想像外で、先づ朝は五時に起きて旦那さんのお目醒までに部屋中一切の掃除は愚か、化粧道具の排列等每日順序を違へず整然と整へて置きます。其の道具の排列方の一端を申せば、先づ疊紙の上には櫛道具を鏡臺の側にはお白粉にお白粉刷毛、黛、紅を、又其の側には盥やら、湯桶やらを置いて、萬事の用意少しも懈りなく軈て旦那さんが起きて出られると、之を待ち迎へて縮緬の座布團の上に坐られるを待ちて一禮をする。之れより約一時間以上にて旦那樣の化粧が濟めば、食膳になります。

△數寄を凝せる食膳

此の食膳は、何事も凝りに凝る女官の事とて、食ふと云ふよりは樂しむと云ふ程に數奇を凝らしたもので膳一杯に小やかなる器を並べて、之れは奈良漬、彼れは淺漬、此の方は昆布、燒鹽、彼の方は梅干など取りどりに飾り立てゝ此上もなく喜ぶのです。箸は象牙、銀製などで、精進箸、なまぐさ箸、お退箸の三樣に分れ、お上より退れる膳部に附く時はお退箸にて頂くの

で御座います、女官の食物は其の人々の嗜好に依つて各人の好むがまゝなれど葱だけは固く禁じてあつて、若し隠してゞも喰べる者があれば、直ぐ穢れたとして厳しく嫌はれ、女官の列に加はる事が能きなくなるさうで御座います。

△清浄の御一例

總て一般宮内省に亘つての事ですが、殊に女官生活に就て最も困難なのは、身心共に清浄であるべき事で御座います。若し之れの缺くる様な事あれば如何に高家の娘方でも到底宮仕へは能きません、之れも畢竟至尊に對し奉つて不敬になるのを恐るゝからの沙汰でありませう。去れば針女をお附いさん、お次さんとの區別を立てゝ、腰より上のものに手を觸るゝものと、下のものに手を觸るゝものとの二つにしてあります。そして假へば足袋を持つた手で袴の紐などに觸るれば、忽ちに御叱を蒙り、誰それの針女さんが穢れたに依つて清めよと云はるゝから、旦那さんの御服替に出る時の針女の苦心は一方でないと申します。殊に 皇后陛下の行啓の折などは四五人の女官が同室で一緒になつて召替へらるゝ事なれば、遉がの大廣間も狹隘を告げ不圖した紛れに御次さんの手が他の女官の服に觸るゝ事が無いとも限りません。さう云ふ折には大勢の中の疳癖高き老女官などに白き目を呉れられるので、恐しさ恥かしさに穴にも入りたき心地がするさうです。それにお召替に携はれる針女の御用を勤むる折は、總て膝で歩行くが法なれば、袴の紐を締むるにも、長い紐を五廻りも六廻りもくる〳〵と膝で廻はる事の辛さに初めて御殿に上つた者は、叱られる事のみ多いさうで御座います。今日此頃は知らず、盛夏の折などは、滿面滿身の玉なす汗を人知れず拭ふ事はありませうが、若しも之れが上官の目に止りもしようものなら、忽ち穢の罰を蒙りますから、旦那さんの出仕を見送る眞似して頭を下げた折にハンケチにて手早く拭ひ去るさうですが、若しや見付かりはせぬかと氣が置かれて、ますます汗ばむさうで御座います。

△御苑の逍遥

斯くて女官の午前八時に出仕するを送り、翌午前十時に退がるを迎ふるは、其の日〳〵の勤だけれど、其間には膳部の準備其他細々しい用事もあつて却々多忙ですが、一日の中午後二時より四時迄の間は少しく閑暇がありますから、其の隙を利用して運動を許されるので、時に吹上御苑あたりに大勢手を連ねて二三時間の逍遥を試みる事があるさうです。

△本官になる迄の見習

されど畏こき邊りに宮仕へする身は、萬事に身の慎みが肝腎で、これさへ能く出來る女性ならば、身許は少々悪しくとも假親を立てゝ出仕する事が能きるけれど、年々上る中に、色々に試験されて、殘るのは僅か二三人づゝ位だとか漏れ聞きます。女官を希望して御殿には上つたもの〻、郵便切手を甜めたが爲めに落第したと云ふ話もあります。此の試験は別に學科が何うの恁うのと云ふのではなけれど、行儀見習作法は何よりも六づかしくて、殊に忍耐力に乏しい者は何時となく現はれ、晝となく夜となく上官が足許を見て居るととて、兎もすれば見離さるゝ事となるさうです。試みに夜の巡視を記せば、十時に一度、十二時に一度、午前二時に一度、都合三度各女官の寢室を見廻はる者があつて、枕を外づし口を開き上仰きになり鼾などを洩らす者があれば、翌日は直に永久宿下りの命を蒙むるとか。去れば新參者などは安い夢も結ばれぬ始末ですが、一二年の中には、習ひ性となつて身嗜み萬事整ひ、茲に初めて本官になつて俸給月に三十圓以上の權命婦となるのです。序ながら、二百五十圓の女官は最上のもので、勅任官待遇ですが、此の待遇を得る者は目下柳原高倉の兩典侍のみで、次は二百圓の者、次は百五十圓、百圓、命婦、權命婦は五十圓以上七十圓の格ださうで御座います。

△思ひ〳〵の勉強

夜に入つて暇があれば、思ひ〳〵の勉強に忙はしくて、裁縫する者もあり、雜誌新聞を讀む者もあり、料理生花などの教科書を繙く者もあり、實家に書狀を認むる者もあるさうで御座います。

世の荒波を空吹く風と聞き流す婦人の生活狀態

蝸　象　生

亞米利加の敎育家ロバート、ヘリツク氏は、近頃「一心同體」と題する約六百頁の書籍を著し、六人の代表的貴婦人を想像して實地錯綜せる六個の悲劇を描き、巧みに米國の上流婦人達の敗德を諷刺した。所が女尊男卑の國柄丈に、斯かる侮辱を受けては却々默つては居らぬ、忽ち巢をつゝかれた蜂の樣にヘリツク氏の周圍に集つて攻擊の毒刺を向けた、之れは偶ゝ氏の銳き筆鋒が能く富豪社會婦人の病所を穿つた事を證明するもので、實に近來の一大快著であると到る處で好評を博して居ると云ふ事である。

○苦しき事は夢にも知らず

一體亞米利加の財產家社會に於ける婦人の狀態は、何れの國に往つても見る事が能きない、否想像だにする事が能きない樣な事が隨分ある。男は大金滿家とは言つても、一層其の財產を殖さんが爲に、或は自分の貯へたる財產を保護するが爲に、矢張り周圍に於ける經濟上の變動に十分なる注意を拂はねばならず、或は競爭もしなければならぬ所から、或點までは普通社會の生活をしてゐるので、幾千萬の士女の中に交つて居ても、之れが大金持であると云ふ際立つた所は無いが、其の夫人令孃達になると大に異つて居る。夫人令孃達は業務上何等の心配も無く、其の日常考へて居る事は、何うかして金を風變りな、面白い事に費したいと云ふ事が唯一の目的である。何時も超然として大財產家の夫人令孃を以て高く自ら持し、自ら一の小社會を形造つて、其の社會以外には一歩も足を出さないと云ふ有樣で、從つて此の社會以外の消息になると、是等の婦人は全くお先眞暗だと言つてもいゝ。そして冬は宮殿の樣な邸宅に籠城し、夏はニユーポートの海濱から足

を踏み出す事なく、恰も宗教上の慣例から押籠められて居る印度婦人の如く、世の風波辛酸の味などは夢にも知らず、只だ如何にして樂しく金を費すべきかをのみ考へて居るのである。全體此くの如き風俗習慣を維持して居るのは、畢竟此の婦人等に特に與へられた教育の力で、他の社會に見出し難い現象である。

○豪華の生活に慣れる學問

花の如き若き令孃達は如何に教育されつゝあるかと云ふに、實に我々の想像だも及ばないのである。ヴァンダービルトとか何とか云ふ富豪の令孃達となると、流石に行く〳〵は交際社會の女王と認められて萬人の視線を集むる程あつて、其の性質の溫和なる、容貌の優美なる、千萬億萬の財產を有して居る大富豪の家に生れ乍ら少しも高慢らしい風はなく、而も何所かに嚴然として侵すべからざる氣高き所があつて、其の言語は明斷で、起居動作もしとやかに、自然と交際場裡の花となるべき資格が具はつて居るのである。斯かる令孃達は如何なる教育を受けるかと云ふと、亞米利加なり歐羅巴なりの交際場裡に現はれて毫も臆する事の無きやう、所謂豪華の生活に馴れる樣な學問をさせられるのである。恁う云ふ令孃を育てるには、成るべくこまやかな事に目をつけず、極々鷹揚に、無暗に人の談話に喙を容るゝなどの事無きやう、又輕躁浮薄なる習慣に染まぬやう、話と云へば美術、文學、音樂等の事位に止まり、其れも深くはなく、たゞ晩餐或は談話會等の席上に於て他人と交際の能きる位に教へて置く。故に恁う云ふ令孃達は、少しはピヤノも彈く、繪畫の心得もある、起居も閑雅に、應接間に這入る樣子も知つて居る。又如何にして腰を掛けるか、衣服の襞は何う云ふ工合に疊むか、席を立つ時は何うするかなど云ふ禮儀作法は間然する所なく總て會得して居るし、殊に舞踏には頗る上達して居る。此の舞踏と云ふ事は彼等が全力を盡し莫大なる金錢を抛つて熱中する所で、交際社會に於ては談論會話以上に貴重なるものと見做されて居るのである。

○驕奢を極めし令孃の居室

彼等の家へ往つて見ると、其の令孃達には言ふ迄も無く特に住居を供せられてある。其の住居は書齋、音樂室、客間、下婢部室、寢室、浴室、其他應接室とか何とか、色々のものが附屬して居る。そして令孃の朋友とか從姉妹等も皆同じ樣に居室を定められて居て、此等の部屋へは如何なる男子と雖も這入る事が能きない。纔に家附の醫者丈が別扱ひで、家僕の如きも、假令如何なる用事があるにしても、此の部屋の戸一つ叩く事さへ許されないので、宛然一小城郭を成してゐる。少しく模樣を記して見ると、まづ莊嚴なる玄關を通つて客間へ入る。次ぎは音樂室で一の大なるピアノがある。繻子や綾絹の華美な色の帛を以て裝飾され、樂譜の函が幾つとなく重ねられて、如何にも立派な音樂家の部屋らしい。次が書齋、殊に立派な書齋で、書架の上には婦女子の讀むべき書物が美裝されて飾られてあり、机の傍には美麗な文具や地球儀などが順序能く置かれてある。次に注意すべきは小憩室とも謂ふべき一室であつて、驕奢を極めて居る點から見ても、亦優美なる點から見ても、實に見る者をして驚嘆せしめる外はない。令孃達は一日の中殆んど大半は斯かる室の中で過ごすので、訪問の友人も此室で迎へ、三度の食事も此室でする。時々家族の催す大宴會の儀式ばつた堅苦しい處から遁れて來る時の休息所ともなれば、また時としては寢室にも供されるのである。此の外浴室、化粧部屋等が其の傍にあつて、其の化粧部屋には種々樣々の化粧道具が悉く備はつて居る。其の整頓して居る事は決して藝人などの化粧室に劣らないのである。

○身邊の飾りを司どる侍女の多忙

此等の令孃達には素より幾人かの侍女が附いて居る。其の一人は總て令孃の身邊の事を擔任して居て、日に幾度となく髮を結ひ、衣服を着せ、衣服を脱がせ、又夜會の供もすれば、衣服や髮の亂れを直し、裝飾品

の掛更もする、凡そ何事に限らず總て女主人を美しく飾り、衆人の視線を孃の一身に集める爲めに有らゆる力を盡す役目を帶びて居る。そして一寸馬車に乘るにも必ず供をすると云ふ風で、交際の頻繁な時期などに際しては、此の憐れなる侍女は夜も碌々寢る事が能きないで、甚しい時は三更四更の頃でなければ床に就く事が能きず、朝は早朝より起きて働かなければならないと云ふ其の忙しい事、まるで目が廻はる樣である。他の一人は之れと全く異なる職掌を有してゐるが、併し其の忙しい點は甲乙は無い。其の職分は、總ての衣服物品等の維持供給を擔任するので、手袋、手巾、各種の靴、化粧品等有ゆるものに注意し、古きもの破れたるものを捨て新らしき物を調べる事に氣を配つて居る。勿論決して繕つたものなどは用ゐない。殊に舞踏の衣服、夜會の衣服などに至つては、一度着たものを再び着る樣な事は全くないと云ふ位である。

○娘の爲なら金は塵芥の如し

侍女の外に下婢が居る。部屋の掃除番に二三人位、厩の馭者、副馭者、小馭者などゝ云ふものに三人位使つてある。又此の中の一人は令嬢の馬に乘つて出掛ける時は常に供をし、又は手紙の往復等の使をするのである。小馭者は毎朝部屋の外から用を聽き、副馭者は令嬢が日々の出來事を手帳に書き記したのを母親の許へ送る役目である。娘は毎朝馬に乘るか、左も無くば母親と共に散歩する。若しも他から晝餐の招待などがあれば馬の準備を命じなければならぬ。又夜會に行く時にも化粧に應じて馬車の準備もしなければならぬ。

事情斯くの如くであるから、是等の令嬢達が初めて交際社會に現はれる迄に、其の父母の要する費用は、幾十萬圓の巨額に上るのである。或は斯くの如き金を使ふ事を難ずる者があるかも知れぬが、併し其の父母は其の娘を見る事實に人形の如く、若し又人形ならざれば、之をして人形たらしむる手段方法を講ずる爲に尙ほ多額の金を抛つて吝まないのである。

○斯くて仕立上つた婦人

勿論總ての富豪が皆斯かる教育を受けて居るものとは言はぬが、併し適當な教育を受けて居る者は甚だ稀である。斯くして教育せられた夫人令孃達は、女子としての職分は如何なるものであるか、何うして一家を整へて行かうかなどいふ樣な事は素より十分辨へて居やう筈は無い。此等の婦人達の頭を惱ます問題は寶石の飾り、衣服、乘馬、華美を競ふた器具などで、其れ以外には無いと言つても可い程である。そして少しく厭きが來れば直ちに其の物を捨てゝ他の新らしきものに移ると云ふ風である。此等の婦人達が物品の可否を言ふのは其の物の眞價に依らず、單に其の偏性に依つて決めて仕舞ふのである。此の風習が延いて全國の經濟狀態を攪亂しつゝあることは一方でない。例へば此等富豪の婦人達が、此の品は目下の流行物だと賞賛するならば、見る〳〵其の價格は非常な程度に騰貴する。若し此等の婦人達が流行以外のものであると宣言するならば、其の品が如何に價値のある物であつても忽ち暴落して誰れ一人拾ふ者も無いと云ふ樣な悲境に陷るのである。此等の夫人令孃達には音樂會や演劇場へ行くにしても、自分は金滿家の娘である、夫人である、自分が此の場所を買ふた爲めに他の場所が何れ程騰貴したとか、自分が此の芝居を見たから其の芝居に入りがあつて何れ丈け儲をする樣になつたとか云ふ樣な事を得意がり、劇場の座主なり音樂會の會長なりが、今回の興行は何某夫人の爲めにするとかいふ樣な事に虛榮心を滿足させて居る者が少くはない。此くの如き風習が當時亞米利加富豪の婦人達の心を一般に支配して居るので、同年配の他國婦人の思想とは全く其の趣を異にして居る。夫の最も溫かい神聖なる愛情などゝいふものは心底から枯れ果てゝ居て、一たび自分の心で未來の良人と定めた人に對してすら、若しも他に多くの財産でも有つて居る者があれば、直ちにそれを振り棄てゝ顧みないといふ風である。

富豪社會婦人の生活は以上述べて來た樣な生活であ

るから、自然精神は衰へる、體質も贏弱になつて來る。其の結果子供を產まなくなる。彼の夫人達は舞踏とか宴會とか晩餐會とか接待とか云ふ事に日を送つて居て、身體を休める暇が無い。加之懷姙でもした日には數月間交際社會に顏を出す事もならず、競爭者は此の間に乘じて盛に翼を伸張して其の權力を大にする事を力めるのであるから、自づと此等の夫人は懷姙を避けるので、宮殿の樣な邸宅に住む夫人には子供を有する者は甚だ稀である。ヘリック氏が六個の悲劇を描いたのは、畢竟斯る婦人を救濟する爲めで、實に無理からぬ次第であるかも知れぬ。

○共力を基礎とする結婚

氏の著書には卷末に一の說明を附してあるが、其れには米國に於ける結婚の發達を四期に分ちて恁う云ふ事を言つて居る。第一期は開拓時代で、祖先が大西洋を渡り、米大陸に上陸して、秩序を見出さうとして、野獸と戰ひ、蠻人等と前途遼遠なる戰爭をするが爲に、男と女が自由に平等に身體と精神を結合したもので、甚だ原始的ではあるけれ共而かも完全な結婚である。第二期は內亂時代で、夫は人道博愛の爲に戰場に出で、妻は空閨を守つて夫の武運を祈つて居つた。けれ共其の犧牲とか眞理とか悲哀とかに對する精神は男も女も共通で、夫は妻の優しい愛の接吻によつて熱烈なる理想を吹き込まれ、戰場に出づる能はざる妻の武器となつて之を實行したのである。されば矢張り男女平等で、一心同體で、而かも一層精神的なれば、前者よりも更に高尙な結婚である。第三期は產業時代で、妻は生存競爭の爲めに外に出でゝ働らく夫を內より助けて後顧の憂ひなからしめ、又夫が儲ける金を貯へたのである。以上三期は何れも結婚の要義たる一心同體と云ふ事を失はず、一は自然に對し、二は理想に對し、三は經濟的戰爭に對し、夫婦肩を並べて戰つたので、此の時代の結婚は全く一緒になつて働らくと云ふ基礎の上に成立ち、決して情緒、感情、情慾或は自己的精神などを基としたものでは無い。夫妻はどこ〳〵迄も共同

生活の伴侶であつた。然るに今や經濟事情の變化に伴ふて全く一心同體の要義を失ふた第四期の結婚が現はれて來た。と言ひ、其の第四期の結婚に就て下の樣な事を言つてゐる。

○妻で無くして妾なり

第四期に於ては、妻は最早開拓者でも、家庭の守護者でも、又は節儉家でも無い。只だ金錢の浪費者で、夫が金力を持てば、妻は其の身體と魔力を持ち、茲に賣買的の關係が出來て、夫は疲れ汚れて市場から歸つて來て、其の儲けた金を妻の足下に投げ出し、妻は絹布寶玉に纏はれた其の容姿即ち美と肉體とを其の報酬として與へる。妻は昔の女王の樣なもので、夫を樂ませ、迷はせて、再び翌日の戰爭に突き出し、更に多額の金を持ち歸らせて飽くなきの慾を滿たさうとする。そして自分は婢僕に侍かれて翠帳紅閨裡に安臥し、時あつては其の夫の持物たる女王の艷と美を誇る爲めに外に出る。要之手業の煩勞と出產の苦痛を嫌ふて更に完全なる男子制馭の秘訣即ち奴隷が主人を支配する妙用を覺つたので、斯くて寶玉に飾られ、美酒珍羞を供せられ寵幸を一身に集めて宮殿の裏に生活する專制國王の妃となつたので、憐んな婦人は妻で無くて妾である。夫の留守に竊に其の內心の聲を聞くならば、夫は自分を養ふて飽かせ、自分の欲するものは一として與へぬものは無いのだが、自分の心は既に夫を離れてしまつた、這は畢竟夫に自分を引き着ける力が無いからで、憐んな人と一緒に住み其の子を養ふて奴隷の樣な生涯を送る事は如何思つても出來ない、早く離婚して他の愛する人を慕て一層偉くならう、一度自分の愛を得たからつて駄目だ、結婚の當時は兎も角今は夫に對して微塵の愛もない、愛の無い結婚は禽獸的であると勝手な事を囁いて居るに違ひ無い。斯うして男女共に自由平等を重んずる米國の尊い結婚は墮落して了つた。

○言はゞ肉慾の一團塊

更に同氏は言ふ。內心の醜い事は斯の通りであるが、



而かも巧に男子の心を捕へて交際社會の花であると自稱して、美食に飽き、美服を纏ふて、用も無いのに出歩く、恁んな婦人は到る處の大旅館、大汽船、汽車の上等室で澤山目に觸れる。云はゞ肉慾の一團塊で、其の原始的能力さへも失つて、子女も產まねば、家事も執らず、全く夫の財布と精神の厄介者で、露骨に斯かる婦人の理想を言ひ現はして見ると、金を持つてお出でなさい、そしたら接吻して上げます、金の無い人は隅の方に引込んで居らつしやい、私を壯麗な邸宅に住はせて、私の姉妹よりも身分を高くして御覽なさい、私の着てゐる此の衣服も此の優美な姿もつまりあなたの名譽になるのです。と恁んな工合で、婦人は不知不識肉慾と愉樂を滿たすための男子の持物となつた。婦人が身體で以て男子に與ふる報酬とする樣になつては、其の精神は既に死したも同然である。米國の貴婦人は自由の女王であると云ふが、併し自分と貴を分つべき男子と共に何をしたか。如何にも敏捷で怜悧で目も眩ゆい程美しくはあるが、抑も夫の精神の上に幾許の影響を及ぼしたか、婦人は最早男子と相並んで人生の戰場に出で立つ苦戰の友でない。自分の淺墓な心から墮落して人間畜生になつたのである。若し婦人が、生存競爭に於ける男子の伴侶とならなかつたら何等の價値も無いものである。と恁う言つてゐる。

思ふに氏が著作の標的となるものは獨り米國婦人ばかりでは無いかも知れぬ。何れにしても彼國上流婦人の狀態は我が婦人問題の研究者及び未婚の青年男女には好個の參考であると思ふ。

家庭衞生

冬の子供衞生

食傷の手當子供が餅や蜜柑の過食から食傷を起した時にまづ第一急に發熱する其次は嘔吐がつゞき、下痢をする、斯る一時的の食傷には寢かして置いて頭を冷やしてやれば大抵は一兩日で癒るものであるが嘔吐がつゞいて熱があれば決して物を食はせてはならぬ、殆んど絶食する位にして置いてよろしい、世間の親達は物を食はないと直ぐに心配していろ〱と氣を揉むものであるが、一日や二日物を食はずに居たからとて決して害のあるものではない扨てかゝる時に如何なるものを食はせてよいかといふにまづ葛湯位を少しづゝ飲ませて置けばよい、少し癒り口になれば稀湯か牛乳位がよろしい、もし哺乳兒であつたらば、牛乳を更に稀めてやらねばならぬ若し又渇きを催はせば砂糖水か又は清凉の飲料即ちレモン水位を與ふればよい、尤もこれは醫者を招くほどでない輕症の時の心得であるが、それがもし重くつて下痢が續いて止まない場合は醫者の手を借らねばならぬが、それでも毒物がうまく排泄されて仕まへばよいけれども、出ない時には下劑でも間に合はない。

　この下痢が止まない間は熱も下らず痙攣も止まない此の塲合にはまづ灌腸を施すのであるが、更に一層烈しいのになると、食物が腸の中に毒作用を起し遂に腦を侵して心臟が弱つて危篤になるものもあるから三四歳の子兒を持つた親達は充分氣をつけねばならぬ。

　夜更は子供に取つて甚だ不衞生である、日が暮れたらば直ぐ寢かす習慣をつけねばならぬ、隨つて夜分戸外へ遊びに出すなどは甚だよろしくない、子供が夜更をすると乾度朝寢をして食事が進まなくなる、故になるべく夜更かしの惡習慣をつけぬ樣にせねばならぬ。

　次に子供に厚衣の習慣をつけてはならぬ、殊に襟卷や、頭巾を深く冠らせる習慣は甚だよろしくない、寒風の激しい時は三四歳以下の子供の外出はよろしく

ないが、さればとて、內に居ながら寒いからとて包み過ぎるのもよろしくない、但し身體や手足を冷やしてはならぬ子供は熱が足りないから極寒の夜は一番に手足が冷へる、これは湯たんぽなどで溫めてやるがよい足さへ溫めてあれば自然と身體は溫まつて來る、十分に溫まれば湯たんぽの類は除いて仕舞ふがよい尤も母親が抱寢するのは獨立心を減ずるといふけれども日本の如き家屋の構造では三四歲の子供を冬母親が抱寢するのは至當の事である、此時代では心理上の害よりも肉體的の害が餘程大きいのである、況んや哺乳兒の如きに於てをや。

又寒いからとてあまり包み過ぎても困る、小さい身體の動きもつかぬ樣に肩掛や半纏や、寢卷で幾枚もくるむことは甚だよくない、こういふ風になると子供は蒸されて、身體中が汗になつて蒸氣が立つやうになる、これは第一皮膚を弱くし、寒冒を引く基となるものであるからあまり包み過ぎるのはよろしくない、又股引や腹掛の數は成可く用ゐさせない方がよろしい、いくら寒いからとて健康上子供にこんなものは不必要である。

泣き癖のある子供に對する心得

子供の泣くには種々の動機があるもので、これを賺すにはよく其の動機を考へ、それに因つて同情し、又力を添へて勵まさねばならぬ、泣くからといつて只叱り懲らし或は甘やかしたりしては聽くものでない機會があるから其の機會を捉らへるのが秘訣である、子供の泣き方には大略左の種類がある。

△病氣泣――これは身體に何か病氣の起る前、平常ならばそれほどでもない事を激しく感じてちよつとした事に泣くのである、斯る場合には附添の者が餘程其身體に注意して遣らねばならぬ、斯る時に泣くのは、恰も大人がムシヤクシヤして氣持の惡い時妻女に當り散らすと同樣なもので、子供は何故泣いて居るのか其動

横を考へて見れば分ることである。

△脅し泣＝これはいふまでもなく悲しい事があつて泣くのでなく、泣いて嚇して遣らうといふのであるから此方もこれに對して相當の手段を取らねばならぬ、此の泣聲はいつも割れる様な大きな聲であるがまづ泣く子の兩手をしつかり握つて居ると子供は切りに手を放さうとして藻掻くけれども、手は堅く握られて居るので、今度は足を盛んに蹴る、そして唾を吐きかける斯る際には裏長屋の細君のする様に頻に青筋を出して子供を折檻なぞしてはならぬ、幾ら蹴つても唾を吐きかけても凝と堪へて默つて居れば、其中に子供の方で反應のないのを見て、次第に威嚇の鋒先を緩めて來るものである、そしていふ事はそれから後にいふのがよい、子供が盛んに突撃して來る時に何も云はぬが秘訣である。

△疳癪泣＝これは脅し泣と違ひ、其聲にも疳走つた聲が這入つて居る、これは多く肉體的及び精神的異狀から來るので大抵は頭痛がするといつて泣き出す、此場合には床の上なりベッドの上なりへ寢かせて頭などを冷して遣り出來るだけ親切にしてやれば子供も親切に感じて少し位頭が痛くても次第に其まゝ止むものである。

△拗ね泣＝これは多くすゝり泣で、それほど泣き度はなけれど、時を得て賺さなければ止めぬものである此場合には知らん顔をして少時棄て置くがよい、然し時に注意して賺すに最も好い時機を捉へるのが大切である。

日頃の擧動に依つて子供の健康を見分る法

△機嫌＝小兒は健康である以上は機嫌がよく、活潑によく遊ぶけれども少し身體に異狀のある時は機嫌がわるくて、物事に感動し易く、遊戯を嫌つて、獨りつくねんとして何か氣むつかしい様である、もしこれを慰めようとすれば却つて焦れることがある。

△外貌＝子供が健康である時は、顔の血色がよく冴えて莞爾してゐる、もし異常あれば顔色が一變して血色惡しく、爽快ならず、笑ひもせず。

△睡眠＝子供が健康であればよく安眠するものである、故に寢苦しいとか又は寢惚けて床の上へ起きあがるやうな事があれば、身體に異常ある時である、殊に腦に異狀ある時は神經過敏になつて睡眠中は僅かな物音にもびく／＼して穩やかに安眠することが出來ない又食ひ過ぎをしたり、飢い目をしたり、又は寢床が暖か過ぎたり、寒過ぎたりすると安眠が出來ぬものである。

△呼吸＝身體が健康であれば呼吸は安靜であるが、熱が高かつたり、ヂフテリヤなどに罹つた時は呼吸が迫つて困難になるものである。

△下痢＝子供が消化不良症又は腸胃の疾病に罹つた時は下痢するものであるが、其の下痢が頻回でそして液狀をなしてゐるのは大腸加太兒の症徴である。

△小便＝健康な子供の小便は淡黄色で、通じがよいものである、けれども尿が減ずるか、又は異常のある時は身體を損じてゐる證據である。又むかしから哺乳兒や幼稚な子供に機嫌あしく神經過敏となる時は疳が起つたとか、虫が起つたとかいふが、何も子供の身體に疳の虫といふ様なものはない、素人が疳の虫と唱へてゐるのは、一種の惡癖である子供が哺乳時期を過ぎると兎角惡い癖がつき易いものでいろ／＼自分の慾を滿さうとして自烈る俗にいふ疳の虫といふのはつまり子供の惡癖に外ならぬのである。

子供の皮膚を強くする法

身體を強くしようとするにはまづ皮膚からして丈夫にしてかゝらねばならぬ、元來皮膚が弱いと感冒に犯され易い、ところが感冒から種々と病を惹き起すものであるが、病氣豫防の根本は皮膚の强壯法である、それにはどうすればよいか。

第一厚衣させてはならぬ

子供にあまり厚衣をさせると、自然汗が出る、さうすると感冒を引き易いばりでなく、皮膚が漸次に弱くなる、故に子供は夏の頃から薄着の習慣をつけて皮膚を段々と強くさせねばならぬ、併し冬の寒い時に急に薄衣にさせるのはよろしくない、殊に虚弱な子供には猶更である。

第二冷水摩擦

子供の皮膚を强壯にするには夏の頃から毎朝規則正しく手拭に水を浸し輕くしぼりて始めは頸のまはり、肩、胸、脊、それから腹部と段々下の方を赤くなるほどにこすり、次に乾いた手拭でよく拭き終りて着物をきせる。

食事の際に用ふべき飲料水

渇を醫するには水を飲まねばならぬ、けれども一度に多くの水を飲むのはよろしくない、胃の腑はそれが爲めに著るしく擴張して同時に吸收作用を盛んならしめん爲めに過度に働らく結果として疲勞を來す憂があるのみならず胃の溫度が冷へてしまつて、それが爲めに血液の循環を惡しくする樣になる、彼の夏季など一時に多量の水を飲んだ爲めに胃カタルを惹き起すのは即ちそれである、さればたとへ炎熱烈しき日といへども氷の如きものを多量に飲めば必らず胃は壞れるのである、されば食事の際に湯や水を無暗に飲むのは、食物が唾液に混和しなくなつて來るから遂には胃弱に陷いるものである、彼のお茶漬をのべつに食ふた爲めに消化不良に陷つたものは澤山ある、故によく消化させんとおもへば水は少量に採らねばならぬ一人前の健康なる人間が一日の中に排泄する尿水は大約一リートル（約五合半）である、その外肺臟からも又皮膚の表面からも凡そ一リートルの水を排出するものであるから我々が健康の身體を維持するに就ては毎日二リートル即ち一升一合の水を採らねばならぬわけである、然るに平素何人も一日に一升からの水を飲んだと自覺するものはあるまいが、其水は米飯や、野菜や、肉類の中

に十分含まれてる、即ち飯は七割、豆腐は九割、牛肉は七割、大根は九割五分の水を含んでゐるから、是等のものを多量に食へば、以上の水量は人々の心づかぬ間に自然採つてゐる事になるのである、石灰や、マグネシヤなどを多量に含んだ井戸水は所謂硬水なるものであるから、腹に這入つては胃腸を犯し、下痢を惹起す事がある、この硬水で食物を煮ると豆類などは却々煮へない、これは石灰と豆の蛋白質と化合して内部に浸入するを防ぐからである、又茶や珈琲などもこの水には浸出しないから、日常の料理には大いに水を撰ばねばならぬ、それからアンモニヤだのクロールなどを含んだ水は間接に健康を害するものであるから、不斷に飲んではならぬ、一體水にこんなものが含んでゐるのは附近の土地が不潔な證據である、便所や下水に接近して掘られた井戸は概して不潔であるとしなければならぬが、海濱などの水も決して清潔なものではない。

子宮の衛生

△子宮と感情

男女の生理機關の相違は今更めて説明する必要はないが、兎に角女子には男子にない子宮といふものがあつて、婦人の衛生はこの子宮を中心として説明してもよい位に重大なものである。故に婦人は腹部の機關即ち生殖器に支配さるゝ事が男子よりも大で、而かも感情とは餘程關係があり、隨つて身體の全部に影響するものである。

試に男女を比較するとどうしても女子は感動性が強い、即ち精神的の刺激を受ける度合が男子よりも甚だしい、例へば氣候の變り目が、身體に響く事も多ければ、日々の天候に依つて氣分に相違する度合も女子の方が激しいのである。又人に對して赤面したり、吃驚りしたりする事も、女の方が容易である。此の赤面や吃驚が婦人に容易に起るのは刺激に對する反應の容易なる事を示すものである、また女のよく笑ひ、よく泣

き、よく後悔するなどもそれが爲めである、一寸の刺激で動悸が高ぶつたり、物に感じて直ぐ病氣を起したりするのもそれが爲である、尤もこの感應の鋭敏といふ事は一面に於ては物事に對して早く警戒する事になるのであるから生存上、境遇に適應して行く上に於て都合のよい事である。

△子宮の大切な譯

女子特有の機關中重なるものは子宮である、女子が母となる時には小兒が此中に胚胎し、出産の時まで養はるゝものであるが、併し子宮の完全に發育することの重要なる所以は、單に是れだけの理由ではない、凡そ婦人の生命中三十年間は實に其の母たると否とを問はず、此子宮の健康はあらゆる婦人の身體と精神との健康の上に非常に大きな影響を及ぼすものである、舅姑に奉侍し、良人を慰藉し、愛兒を保育し、健全に愉快に、且つ快活に家事を治めて行く婦人は、生殖器即ち子宮に故障のある人には到底出來難い事である。

△月經と氣分

月經は通常四週間、即ち二十八日目毎に起るのが統計上最も多い、そして毎回の月經日數は二日乃至八日間で、平均四五日間である、故に十日も二十日もあるのは必らず何か病氣のあるものと思はねばならぬ。

月經時の徴候は人によつて相違がある、其第一は局所の徴候である、是は重に下腹又は腰節・兩方の太腿に亘る痛みである、第二は全身の徴候で、色々の器官に影響を及ぼすが、殊に身體及び精神が鋭敏になり、一寸した事にも刺戟を受け易くなり、直ぐに風をひいたり、つまらぬ事で怒つたり、泣いたりするやうになる、それから注意すべきは、初めて月經の現はれる時の事である、此時の狀は全身の抵抗力が甚しく衰へるものであるから、つひ病氣に冒されるやうになる、其證據は、此間に於ける少女の死亡數が、同期の男子よりも餘程多いので分る、故に年頃の少女に對しては母親は出來るだけ氣をつけねばならぬ。

看護の心得

病人に對しては親切が第一なり、恰も母が子に對する如くせざるべからず。次には滿腔の同情をよせて、患者の心を察し、これを慰め、樂しませて、病苦を忘れしむるやうにせざるべからず。而して總てに用意周到綿密ならざるべからず。

病人を收むる室は靜かにして、日當りよく且つ空氣の流通する處を撰ふべし。而して病室は殊更に淸潔に洒掃し、臥床は室の中央に設け、藥瓶又はこれに用ふべき茶碗は盆にのせて、病褥の枕もと近くにおき、其他の必要品は順序を正しく其場所に排べ置き、其他病人に不要な品は一切室內に置かざるがよし。

病人の睡眠するに當りてはよく安眠せしむべし、看護人は常に淸潔なる衣類を着し、最も靜肅を保ち、決して耳語するが如き事あるべからず。而して絕えず病人の呼吸其他寢言等に注意し、少しにても異狀ある時は速かに醫師を迎へ委しく其容體を述ぶべし。又看護人は病室內にて飮食、喫煙等を爲すべからず、患者の性質が常に話し好なるか又は退屈らしき時には程よく話しを爲すはよし、されど患者の神經に障るが如きことを禁じ、話す音聲は平靜にして疳走るべからず、又病人にうるさき樣子の見ゆる時は直に話を止め、靜になすべし、すべて好まざる話を持ちかけ又は感觸を害する等の行爲あるべからず褥の材料は柔かくして輕く且つ新しき綿の入たるを重ね、枕も柔かき括り枕を用ふべし、布團は白き木綿又は金巾の幅廣き敷布にて被ひ一週間毎に他の洗ひたるものと交換すべし、又布團も時々取替へて日光に晒し乾かすべし。

病人が若し重病で、身動の出來ぬ場合には三人掛りで臥さしむべし、其時は一人は病人の肩をかゝへ、後ろ首に其手をかけさせ、他の一人は腰の下に兩手を遣り他の一人は兩足と臀部をかゝへて三人調子をそろへ徐かに一緒に立ち後ち床に移り下す時も又一緒になすべし。

病人の着物は柔かにして輕きをよしとす、肌着は殊

に汚れ易きもの故白きしなやかなる木綿にて數枚をぬひ置き洗ひて屢々取かふべし、重症者にありては着物の着替は困難なる事もあるべければ、其上下左右を半分づゝ別々に着かへしむる如くなさば可ならん、斯る場合には殊に其着物は寛やかなる物を便利とす。

　病室内の温度は醫師の命令によりて種々變せざるべからず、されど通常は華氏の七十度位を適當とす。而して其の温度に激變あらしむべからず、人の住む所には呼吸によりて、或はランプ火鉢等よりたえず炭酸瓦斯の發生して室内の空氣を汚すものなれば病室内は殊に注意して換氣法を行ふべし。其法は冬ならば寒氣の直接に病人に觸れざる樣に明け放つべき障子の入口の所に小さき二枚折の屛風か又は衝立をたておかば冷かなる空氣は一度その障害物につき當り後ち迂回して室内に入りて腐敗せる瓦斯と交換すべし、看護人は期を見計らひて此の如くして換氣法を怠るべからず。

　又夏ならば風向に反對する方の障子を開きて冷氣を入るべし、風の吹き來る方の障子を開くときは過分の風の入り來りて病人の爲に害を爲すの恐あり、又呼吸器病等にて室内の乾燥を厭ふ場合には鉢に温湯を注ぎて室の一隅におき水蒸氣を作りて室内を濕すべし、又患者の食事を了り食膳を病室外に運び出したる後にも亦繃帶等を取かへたる後にも、必ず五分間位換氣法を行ふべし、又病室内に用なき人を立入らしむべからず、これ患者を驚かすのみならず、室内の空氣を汚すを以てなり。

　重病者にして入浴し能はざるものあり、此時は天候の温暖なる日を見計らひ、病室内にて手拭を温湯に濕したるものにて病人の體の一部分づゝを手柔かに、しかも手廻しよく拭ふべし。其終りたる部は冷へざる樣に輕き衣類にて被ひ而して全身を拭ひ了らば乾きたる着物をつけしむべし、又下半身の温浴を爲し、或は脚湯を行ふ等は身體を寛ぐるに効あり、されどもこれを行ふには必らず醫師の指圖によるべし。

處女の心得べき攝生法

妙齢の處女に過度に刺激する食料、又過度の强壯的食料を用ふるは不可なり、例せば、過度に肉類を供給し、酒、コーヒー、などを飲用せしむるときは色情を誘發するものなり。

日々筋肉の運動を盛んにし、體內の鬱結力を放散せしむべし、若し然らずして終日坐して受働的なる時は其鬱結力は遂に情慾の方面に發せんとするは自然の勢力なり、故に若し終日戶外にて活潑なる運動を行はゞ右樣の雜念情念は自然に消散すべし。

思慮、感情の力を幼少より强ゆるは不可なり、若し然る時は神經過敏となり隨つて生殖機關の感覺力を早熟せしむるものなればなり。

最も嚴禁すべきは色情を誘引するが如き談話を聞かしめ、記事を讀ましめ、又其等の機會に接近せしむるなどの事なり、是れ處女の衞生上大いに不可なり、嚴にこれを避けしむべし。

色情を誘致するがごとき演劇、歌謠、小說の類は妙齡婦人に最も嚴禁すべし、槪して想像を激勵するものは不可なり、此點より考ふれば、妙齡處女者に向ひては無邪氣なる談話、植物動物等の自然物に對する事柄、乃至は家政、經濟等の智識を與ふるに若くはなし、是等自然的智識は不自然なる動念を誘はずして純潔なる自然の性情を涵養するものなり。

上流社會にありては、家庭の風習に於て甚だ忌むべき傾向あり、例へば濫れたる家庭の間には侍女若しくは家僕、或は友人等の不知不識の間に其家の子女に對して情事を諭ゆることあるものなり、殊に品性なき侍女等が其兒童に對する動作の如き時としては人をして輦蹙せしむるに至る、是等は單に攝生上より禁ずべきのみならず、又大いに品性陶冶の上より嚴禁すべき事なりとす。

手を奇麗にする法

人相よりも手相といつて一寸顔を見たゞけで知れぬものも手を見て其の人の平常が分る位なものであるから手はいつも奇麗にして置かねばならものだ、殊に爪の汚らしいのは無性を顯はして疎ましく、爪垢の溜りたるは、如何にも嗜みのわるい女とおもはれる、現に角老少に拘はらず手はいつも人前に出すものですからこれが衛生を怠つてはなりませぬ、又實際手は顔よりも年をとるものですから、顔や頸首を見て判らないのでも手を見れば直ぐに其人の年齢を占ふ事が出來ます、若い人の手は艶があつて滑かで膨くりして居ります、年寄つた人の手は肉理が荒くて節々に蛇の皮のやうな皺が出來ますからいくら若作りしても判る、年波は爭はれぬものである。

俗に水使ひの荒い人は手が荒れると申しますが、これは必らずしも水を亂暴に使ふ人が手が荒れるといふ譯ではなく、平素水を粗末に扱ふやうな性質の人は自然手を濡らし勝ですから肉理が荒れてゆくわけです。

故に手はなるべく湯水に浸けず、火に當てぬ樣にしなければなりませぬ、湯水に度々浸けたり火に當てると手の光澤を害ふものですから、洗ふ時には微温湯を用ゐ手拭もなるべく布理の細かい柔かなものを用ゐべきである。

又仕事をすると手が汚くなるといひますが、普通に使つたからとて決して手の美観を損ずるものではありませぬ、寧しろ血の循環をよくして光澤を増すわけです、唯泥いぢりの樣な事、乃至は田畑の草取りなどをすれば自然荒ける道理であります又力に餘る重い物を持上げたり運んだりするのはよろしくない。

若し手が汚れたらば極く少量の硼砂とアンモニアに水を加へて洗ふべし、リスリンは皮膚を硬くし肉理を荒くするから成るべく用ゐぬがよろしい。

粗製な石鹸は不可、なるべくは從來の洗ひ粉、純粋の糠を使ふ樣にし、皹の切れる手には湯上りの時酒を塗りてよし、又凍えし時は火に暖さず、肌に入れて暖むべし、又時々牛乳の糟など塗りつけて洗へばよし。

履物の變遷

下駄の種類は近來著るしく數が殖えた、昔じの下駄は實用的で丈夫で履きのよいのを撰んだものだが、現今では實用といふよりも寧ろ裝飾品として使用せられて居る、隨つて臺の如きも却々凝つたものが多く、鼻緒の如きに至つては、種々なる花卉模樣を施すとか、又は刺繍などを用ゐて居る、昔の下駄の種類といつては、駒下駄、足駄、日和下駄、吾妻下駄、重ね草履、雪踏の五種ぐらゐであつたが今は凡そ三十種もあるやうである。

◎駒下駄　これは今の堂島形で、後ろが圓繰で、前は央ばから斜めに削つてあるもの、これが上下の差別なく又男女の區別なく用ゐられた、たゞ上流社會は表をつけ、下流では直履と限つて居た、そして專ら實用を主としたものであるから、高さは二寸以上、巾二寸八分もあつて、細長い臺で、丈は今と變らない、只鼻緒のすげどころが今と違つてゐる、今から見ると不格好であつたが、足にぴたりと附いて、履きよい事は此上もない、それから塗といつても黑と溜塗の二種で、鼻緒は女子ならば本横と稱して綿入らずの天鵞絨で、色は黑が大部分、他は鼠とお納戸位に過ぎなかつた。又男ならば、本鹿、八幡黑、白鞣、黑棧など、男女通じての鼻緒は小倉である、鼻緒の太さは、今のと比べると約三倍で、二寸に裁つて、それを手ぐけにするのだから、一寸八分位は慥かにあつたかとおもはれる。

◎足駄　これも駒下駄同樣、鼻緒のすげ塲所が下つて居たから後鼻緒は今とは違つて、齒の後に出て居た、又齒もずつと厚く、甲良のごときも、今は三分位であるが、其頃は五分もあつた、鼻緒は切地や、護謨などがなかつたので、丈夫一方に皮だの白皮などを用ゐた、爪皮も帛製や、護謨ではなく、皮製のもので、後に皮紐がついて居た、婦人の上流向には表附きで、眞鍮の鋲など打つたものであつた。

◎日和下駄　男女共にこれは直履で、鼻緒は駒下駄に用ふるものと大差なく、尤も其頃のものは齒も厚く高

さも今の一寸五分から二寸などゝいふに較べて、約一寸位は高かつたやうである。

◎吾妻下駄　婦人の多く使用したもので、恰も日和下駄に表を付た樣なもので、表は籐表、鯨表、南部表、鼻緒も別段變つたものはなかつた。

◎重ね草履　此の草履は隨分古くから用ゐられたもので、明治十四五年頃にも盛んに用ゐられてゐたが、何人でも使用したかといふに却々さうでなく、多くは奥勤めの女中に限られてゐたもので、大抵五枚から七枚重ね、鼻緒は黑白の天鵞絨であつた、尤も維新頃には此の草履の鼻緒に花卉や定紋を現はしたのを使用したものがあるといふ表は矢張、南部、鯨、籐などであつた。

◎雪駄　これも普通の人の履物ではなく、多くは粹人などの使用したもので表は南部が大部分で、裏皮は今の樣に象皮や護謨はなかつた、牛皮一方で鼻緒は白鹿だの、白鞣なども用ゐたが、又粹なのは、ばら緒であつた、これは竹の皮を十分捻つて心に卷つけたものである。

誰にも出來る輕便な押繪細工

押繪は羽子板や守袋や、小函などに貼り附けて裝飾とするものですが、これをするにはまづ左の道具が必要です。

（箆）大小二本あれば澤山です、角又は骨製のものにて裁縫に用ふる箆と同もの又竹製にてもよし。

（鏝）これは先の尖つた小形の物がよろしい。

（鋏）これも又通常の花鋏と呉服鋏と各一挺づゝ具へれば十分です。

（串）これは薄き箆形のものと稍や厚きものとが要ります。

（締竹）これは手製でするも容易ですが出來合のものを求めた方が却て價は安し。

△模形　さてこれをつくるにはまづ模形を作らねばならぬ。これには古帳面の表紙、又は西洋紙のボールに、造らんと欲する押繪の下畫を描き、細き竹箆又は串の如きもので其畫に從ひて壓線をつけ、其線に從ひてこ

れを切り拔くのです、かくて切拔き終れば表裏左右の紛れざる樣に之に記をつけ置き其恰好の善惡を見て、何度も切り直すべし、但し綿を含ませざるものは其形紙の色を被せる帛の色と同一に塗らねばならぬ、然しなければ帛の糸目の透から地紙の糸が現はれて甚だ見惡いものとなります。

△截帛　帛地を截つには其一端を模形の裏に貼り、更に之を返して一面に被せ、搖かさぬ樣になし置きて裏より之を截るのです、之を截るに大抵模形紙から一二分ほど外に出るほどの大さにするのがよろしい。然でないと綿を含ませたり、又は裏に糊貼をするに都合が惡いからです、又所々に襞の出來るものでは豫め其所を大略にきり、更に鋏を以て少しづゝはさみて切り込むやうにするのです。

△綿詰　綿を含まするには上等の小袖綿を形の大小に應じて取り上に置き他の掌を以て薄く延ばし形に合せて緣を鋏で截り取り、裏へ曲げ、糊で附けるのです、かくて高く膨れさすべき處へは又別に綿を入れる、之を入るには指もて少しづゝつまみ重ね入る又形紙の裏に糊を附るには箆を用ゐなるべく少し糊をつけるやうにし、又糊は姫のりの堅く煮たものを糊板で煉つて用ふ。糊で帛を張りたる後ち、これを掌に置き押へ箆で其上を能く押へ、又兩手の拇指と食指とで緣を少し押へ、裏へ曲げ置きて乾すべし。

△注意　縮緬又は地薄の帛は左程細工に困難ではなけれど、毛織や天鵞絨などは、前のやうな順序では細工は一寸困難です、又金襴、博多、琥珀のやうな物はひだの折込だ上に火鏝をあて、糊をつける時は帛の端を少しくうるほして附け、押箆でよく押へ、火鏝で上を撫で置くべし、又呉絽、羅紗の類は極めて糊付の惡いもの故、糊を附ると其まゝ、しめ竹をあて挾んで乾かすのがよろしい。

玩具を撰ぶに就ての心得

とみ子

子供を遊ばせるには玩具が最も宜いものですが、之れには種類が却々澤山あつて、其の中には害こそあれ少しも益の無いものがあります。のみならず、小兒時代に於ける玩具の如何は、其の子の成長後に大なる影響を及ぼしますから、玩具の撰擇に就ては親達は餘程注意しなければなりません。

△玩具は少なきが宜し

一體玩具と云ふものは、子供の無聊を慰むるもの、即ち子供の精神刺激の缺乏を補ふもので、子供の泣く時に之を與へると直ぐ其の泣きが止まるのは、恰度我我が空腹の時に飯を食つて滿足すると同じ樣なものです。併し如何に無聊を慰むるからと言つて、多くの玩具を取替へ引替へ與へると云ふ事は、餘りに劇しく子供の精神を刺激する上に、第一に子供の心を種々のものに移り易くさせ、第二に自づと外觀を飾る事を好ましめ、第三に有るが上にも欲しいと云ふ慾望の念を高めさせますから、玩具は成るべく數を少なくして、而かも子供の目や耳に飽の來ない樣なものを撰ばなければなりませぬ。

△太鼓と笛の價値

そして子供は年の長ずるに從つて其の好尚も段々移り替つて行くものですから、又其の年に準じた品を與へなければなりません。先づ餘程小さい子供ならば、單に自然の運動を助けるものか、或は耳覺を養ふに適した品などが宜いでせう。兒童教育の實際に於ては、第一の嬰兒期（滿一年内外）は感覺、直覺の時代とし第二の幼兒期（二歳から八歳まで）は知覺及び觀念の時代としてあつて、子供の教育は、只目とか、耳とか手とか、凡て直接に感覺を與へるものから初める樣にして居りますが、玩具を與へるのも、矢張り其の順序に從つて、最初は成る丈け感じ易い太鼓の樣なものが適當です。殊に太鼓は他の鳴物に比して音が單調で、重々しくて、能く柔かい子供の聽神經には極めて良く

響く上に、他の器具に比べては堅牢ですから、使用にも長く堪へると云ふ長所があります。

笛類等も有益ですが、之れは四五歳位になつて稍々物心の付いた子に吹かせたり、吹て聞かせたりして音色の高低を知らせ、其の幼ない脳裏に趣味を加へるのに適當です。

△天然物を象つた玩具

耳覺を練ると同時に必要なのは子供の視覺を練る事ですが、之れには土などで鯛とか猫とか其他いろ／＼の物を象つて造つてあるものが宜い樣です。斯く色々のものを象つて造つたものを代る／＼見せるのは、子供の智識を開發する上に尠なからぬ利益があります。殊に海に遠くて魚を見る事の能きぬ山國の子供に、魚類に模した玩具を見せ、山に遠き海邊に住んで居る子供に、深山に棲息する動物の玩具を見せると云ふ事は簡易にして、而かも効果の多い敎育の一手段です。此等の玩具の中には鐵葉製の、振ると音がする樣に出來てゐるものがあります。之れは視覺と聽覺とを同時に開發する事が能きて實に好都合ですが、たゞ兎角壞れ易くて、一度壞れたら最う修覆の能きないのが遺憾です。元來子供には玩具が壞れたら又修覆して元々通りにして見せる事が非常に爲めになりますが、鐵葉製などでは其れが出來ません。

△繪草紙などは害あり

總て子供時代に玩具其他から養はれた知覺は、たとへ成年に及んでも却々忘れぬものですから、此の時代の知覺を養ふに眞に適當なものといへば實物に越したものはありませんが、之れはなか／＼出來難いから、せめて實物の模型でも用ゐたいと思ひます。此點から云ふと彼の繪草紙の如きものは成るべく與へぬ樣にしたいものです。繪草紙などで敎へられると、兎が黒く書いてあれば眞に黒いものと思ひ、烏が白く書いてあれば眞に白いものと思ひ込んで仕舞つて、其の感覺は永く脳裏を脱けぬ虞れがあります。人間一生の中で小兒時代程感覺の鋭い時代はありません。此の時代の修養如何で賢愚智鈍は分れるのですから、親は能く／＼

注意して玩具を撰ばねばなりません。

△物理思想を養ふもの

手の運動を助ける玩具としても、前に言つた太鼓などが宜いでせうが、之れは餘り幼さくては打つ事が出來ぬから、先づ三歳以上位の子供向です。それ以下の小兒には例の「おしやぶり」と云ふのが適當です。此の「おしやぶり」には護謨製と木製との兩様あるが、中でも護謨製のものには振ると音のするのがあつて、視聴の兩感を養ふ益があります。又女の兒の弄ぶ毬は手の運動を助ける上に、尚ほ多くの智識を子供に與へます。例へば之を突いて其の彈ね返るのを見ては、物體に彈力性のある事を覺るし、火にあぶると膨脹するのを見ては、又色々物理上の考を浮べます。其他「起上り小法師」など云ふ玩具も面白いもので、小兒に知らず識らずの間に重力の理を教へる事が能きます。又玩具にする假面には恐い面だの可笑い面だの、偉人の面だのと色々種類があるが、其の中で恐しい相を現はして居る鬼の面とか、般若の面とかと云ふものは、徒らに子供に恐怖の念を起させるばかりで、精神の發達には少しも益する所が無いから、此等は成るべく與へぬ様にしたいものです。

△最も子供の歡ぶ玩具

稍ゝ長じた子供には砂や水を宛てがつて置くのも妙で、子供は我儘勝手が利くから非常に之を歡びます。それに其れを弄ぶ道具として杓子や小箱の様なものを與へて置けば、子供は喜んで其の杓子で砂を盛つては箱に入れ、其の中に一杯になれば元へ戻して又遣り初め、其他山を造つたり色々な事を遣ります。恁うして置けば一日でも二日でも倦きずに遣つてゐますが、偶に砂を振撒いて眼に入る様な事があります。其の時には脱脂綿に水を濕して眼を開けて溜つて居る砂を拭ひ取れば、別に充血する虞がなく、又三歳以上位の子供になれば何でも口へ入れる事も無いから、思ふ程に危險が無い様です。又粘土なども子供は好くもので又爲にもなります。之れも我儘が利くからでせう。汽車だ電車だ人形だと言つて、好きな細工をして嬉しがり、

夫れから夫れへと變つた物を造ります。之れは子供の工夫力を養ふ上に一方ならぬ効果があらうと思はれます。

△子供に禁ずべきもの

世の中には玩具を餘り好まずして畫などを好む子供がありますが、恁んな子供に限つて身體が惰弱に成り易いから、衞生上から見ても、もそつと活動的の玩具を弄ぶ様に仕向けねばなりません。少しは無理と思ふても外へ出して凧を揚げさせるとか何とかさせて、成るべく繪畫などを避ける様にしなければ飛んだ失敗を招く事があります。又勝負事の意味の加はる玩具なども成るべく與へぬ様にしたいものです。勝負事をするのは競爭心が強くなるから、絶對に惡いとは言ひませんが、併し子供の内は餘り遣らせぬ方が安全です。

△繪の具に付ての注意

小兒の嬰兒期即ち一歳前後から、幼時期の二三歳頃迄は、手に觸るゝものを何でも口に入れる習慣がありますが、其れに就て注意すべきは玩具に塗つてある繪の具であります。其の繪の具の中には有毒性の色素があるから、知らずに口に入れて往々中毒を惹起す事があります。何時ぞやも或る博士が調査した所に據ると五十四種の玩具の中で、それに用ゐてある色素は二十六種で、其の中で十八種は皆な有毒のものであつたさうですから、此れなども親たるものが、十分吟味しなければなりません。

◎凡そ何事にてもあれ人と約束したる時は、違ふべからず、もし止むを得ざる事ありて變約する時は、其事のよしを細かにのべて言わけし、その人の感情を破らぬ様にすべし。

◎人の前にて故なく笑ふべからず、若き女には、とかくかゝる事有勝のものなれば、つゝしむべし若し堪へ難きほどの事あらば其事がらを述べて、笑ふ時は人の感情をやぶらすして却つて一座の興ともなるべし。

季節料理

山海經

松廼屋

◎敲き鷄

先づ牛蒡の上皮をこそげ、一寸三分程の長さに切り之を短冊形に打ち、水に放ちおきてアクをとり、目笊にあげおく次に蒟蒻を小さく斷り、之を沸騰湯の中へ投じ、茹でゝ目笊にあげ湯を切りおき別に胡麻油を少しく鍋に煮立て、前の牛蒡と蒟蒻とを入れ、ザット油煎り爲し、之に湯を注け、其湯を切りて油を捨て、之に煮出汁と少量の白砂糖とを加へて煮、牛蒡が柔らかになりしとき、生醤油を加へ一寸と煮て淡味をつけおくべし。

次にカシハ又はシャモの皮と肉（胸肉の如き上肉は他に用ゆ）とを能く敲き混せ、之を一口に食し得べき大さに圓め、別に鍋へ清酒と味醂とを四分と六分との割に合せた汁を入れ、猶ほ之に控へめに生醤油を加へて之を煮立て、前の圓め肉を入れ、金杓子にて二三回掻きませ、直ちに掬ひ出し、又殘る汁の煮立を待ちて前の半熟肉を入れ煮込み、上りに控へし丈けの生醤油を加へ一寸と煮て掬ひ出しそして前の牛蒡と蒟蒻と共に數個の皿に盛り分け之に掛汁かけてすゝむべし。

又掛汁の製方は鍋に殘る所の汁に少しく煮出汁を加へ一回煮立て之に白味噌を擂りて裏漉せしものを少しく加へ、ドロ〳〵の液汁となせしものなり。

◎綣珍卷

まづ豆腐を篩の裏にのせて水を切り、それを掴み潰して鍋へ移し、豆腐を蓋ふだけの水を加へて周圍がフツフツ涌くまで煮て、布を敷いた目笊へあけ、冷水を澤山かけて布を四方から折かけて置き、水の切れた頃鍋へ移し、玉子一個を砕き入れてよくかきませて空煎をなし、味醂と醤油を加へカラ〳〵に爲つた頃皿へあげて冷して置く。

次に繊打胡蘿蔔を水洗して目笊へ揚げ、味醂、醤油煮出汁で下煮をなす、次に椎茸を水で洗ひ目笊へあげ

水を切つて繊に打ち、煎出汁、味醂、醤油で下煮をする扨鳥けんちんなれば鳥の精肉を叩きて煎豆腐と等分に交せ合せ、胡蘿蔔、椎茸をも程よく交せもて行きて湯皮へ巻く、太さは大概直径二寸五分がよろし、そしてそれが巻けたらば裂いた筍皮に包み、麻糸で三ケ所程括つて鍋へ入れ、鳥スープ、味醂、醤油を味よく合せてけんちん巻を掩ふ程注して能く煮込み、後取出して木口切にする。

◎鮟鱇の味噌汁

まづ鮟鱇を水洗して顋の邊へ麻縄を通して宙に吊し先づ口の周圍へ庖刀を入れて全體の皮を剝き、腹を開けて、ぬの、膽、水袋等を取り出し、大名を放していづれも沸湯へ投じ、さつと湯引ひて水で冷し（此内膽だけは生のまゝ強く鹽を振り蒸籠で蒸して用ゆるがよろしい）骨は細小に切つて水から煮てスープを取る、これは鮟鱇鍋にも味噌汁にも使ふのだが、味噌汁にするには白味噌と並味噌を等分に合せて能く擂り、裏漉にかけて前のスープを鍋へ取り分けて程よく混和し豆腐を入れて浮上るまで煎る、鮟鱇はざつと下煮をして椀へ岡盛し前の豆腐汁の上から注す。

◎鯡の罌粟あえ

鯡を三枚におろし小骨をぬき、皮を去つて細小く庖丁して鹽をふりかけ、十分間程經て水洗をして酢へ浸し根芋の皮を剝き七八分の管に切つて沸湯で茹で、水へ取つて、いごをぬき搾つて酢へ浸し置く、それから罌粟を茶炮器で能く炒つて、擂鉢で能く擂り煮切味醂（砂糖でもよい）と醤油を加へて再び能く擂り交せ、前の鯡と根芋を酢から引揚げ、程よく搾つて罌粟に和え交せ器へ盛る、尤も罌粟の量は十人前に付一合と見ればよろしい。

◎蒲燒豆腐

先づ豆腐をさつと茹て布へあげ、程よく絞つて裏漉にかけて少量の饂飩粉（饂飩粉に代へるに生玉子を用うれば更に妙）を混じ、廣湯皮を四寸四方程に切り、五分位の巾に切つた乾海苔を中央へ二本並き並べて、其上へ豆腐を押均し、左右から湯皮の端を折りかへし

て玉子の白身で繼ぎ合せ、竹の皮を敷いた蒸籠の中へ並べて三分間程蒸し、更に玉子燒鍋へ胡麻油を引ひて前の豆腐を入れ兩面に焦目が附く程に燒き、昆布煮出汁三醬油一、砂糖少々の煮返汁の中へ投じ、一時間程經て器へ盛るなり。

◎煎り鴨

鴨の毛拔きをなし新聞紙に火を附けて鴨全體の殘り毛を燒き水にて洗ひ骨內臟を取去り通常鍋に用ゐる牛肉位の大きさに切り俎の上に平らに並べ鹽と胡椒とを振り懸け置きフライ鍋にバタを大匙一杯位入れ火に掛け鍋熱しバタ溶たれば前の鴨の肉を鍋一面に並べ兩面共色附く迄煎燒とし、一人前七切として皿に盛り西洋靑豆の罐詰を笊に入れ水氣を去り醬油にて軟く溶たる西洋芥子の中に入れて韲へ鴨の煎燒に添へて盛る。

◎服紗玉子

牛肉百匁を細く切り醬油五勺、砂糖大匙一杯を合せ火に掛けて沸騰したる處に牛肉を入れ汁の煮詰まりて無くなるまで煎煮を爲し大玉子（一人前一個の割合にて宜し）に少しの鹽を加へて攪拌し玉子燒鍋に流し入れ（鍋は先づ火に掛けて熱し胡麻油若しくはヘットを紙に附けて全面に塗るなり）弱火にて燒き玉子が下の方より半ば燒け來たれる頃眞中に前の牛肉の煎煮せるものを大匙一杯だけ入れ玉子の四隅より服紗包のやうに折り疊み皿に取り入れ燒火箸にて包みたる上に燒模樣を附け其上に紅薑の纖を配ふ。

◎親子吸物

まづ一羽の鳥の骨を水にて好く洗ひ深鍋に入れて水五合にて火上に沸騰せしめ上面に浮びたる灰汁を掬ひ取り更に弱火に掛けて一時間程煮たるを水篩にて漉し鳥肉を賽の目に細かく切りたると玉葱の細かく切りたるとをスープの中に入れ一度沸騰せしめたる上鹽、胡椒にて味を付け吸物茶碗の中に注ぎ入れ置き更に玉子を一個宛黃身の壞れざるやう注意して小皿に割り入れフライ鍋に七分目程沸騰湯を入れ其中に鹽を少し入れて前の玉子を靜かに鍋の中に移し入れ半熟となりたる時孔のある金杓子にて掬ひ出しスープ茶碗の中に入れ

吸口には木の芽若くは柚子を用ふ。

◎牛肉のつぺい煮

先づフライ鍋に牛の脂を少し塗り其熱したる處に普通に切りたる牛肉百匁を入れ極く强き火にて暫時煎りたる後別に深き鍋に移して其肉の隠れるまで沸騰湯を注ぎ入れ上面に浮ぶ泡を掬ひ取りながら煮、人參馬鈴薯を四五分の賽の目に切りたるを其中に入れ煮汁の半分位に詰りたる時玉葱若くは千住葱を適宜に切り二十分間煮たる後砂糖大匙二杯醤油二三勺を加へて味を付け次に米利堅粉大匙山盛一杯位を水にて平らに溶したるを鍋の中一面に流し入れ杓子にてムラの出來ぬやう混せ煮汁のドロ／＼になりたるとき火上より取りおろし皿に盛る（但し百目の牛肉なれば五人前となす可し）

◎蕪おろし餡かけ

先づ蕪の皮を剝き、水にて洗ひ、水を切り、卸金にておろしおき、別にほぐし鷄卵と煮出汁とを一杯と二杯半との割に合せ之に前のおろし蕪を布巾に包み、極く輕く搾りて加へ、猶ほ之に生醤油をほぐし鷄卵の量の五分の一程を加へ味を付け之を數個の茶碗へ盛り分け、茶碗に蓋をせずして、蒸籠の中へ入れてむし、蒸上りしとき、蒸籠より茶碗を取出し、薄あんを掛けおろし山葵を添へ、蓋をなして皿の中へ紙を敷き其上に茶碗を載せて出すなり。

◎蛤の酒むし

まづ大なる蛤を撰び之を擂鉢又は桶の中へ入れ、水を加へてかきまぜ、水を取換へおきて能く砂を吐せ、そして蛤を鍋に入れ、之に蛤が被る程の水と酒（水一升に付き酒を並盃二杯位）とを加へ、火に掛け、煮立れば暫時にして蛤が口を開くべし、此時に少しく食鹽を加へ、鍋を火よりおろし、直ちに汁と共に蛤を二個づゝ椀に盛り、燒たる蕗の薹を吸口として侑むべし、蕗の薹の製方は薹の上皮を除き、金串の尖端にさして焦すなり。

◎のつぺい汁

材料は里いも五合、胡蘿蔔大四本、燒どうふ二丁、椎茸一合、油揚三枚。

里芋は皮をむき、沸騰湯の中へ投じ、ゆでゝ目笊にあげ、水を注ぎかけ、水を切りて適宜に庖丁をなす。

胡蘿蔔は皮をむき、木口切（大なれば竪に二つに割りて）庖丁をなして沸騰湯の中へ投じ、茹でゝ目笊にあげ、湯を切りおくべし。

燒豆腐は二枚にへぎ竪に三つに庖丁をなして之を木口より二分程の厚さに切り之を目の細かき笊に入れ、靜かに水の中にて笊を振り動かし、折屑と濁りを除き水を切りおくべし。

椎茸は生乾椎茸を暫らく水に浸けおきて後ち沸騰湯の中へ投じ、茹でゝ繊に打おくべし。

油揚は竪に二つに割り、木口より二三分の厚さに庖丁を爲して目笊に入れ、沸騰湯を注ぎ掛け油拔きをなしおくべし、さてそれより鍋へ醤油茶碗一杯と白砂糖猪口一杯を入れ、一度煮立て之に濃き煮出汁を加へ、其味を試み、淡味の加減となし、又一度煮立て前に用意せし四品を入れ、文火に掛け、諸品に味がつくまでゆる／＼と煮込み、鍋を火よりおろして薄く葛をひき一寸と火に掛け、葛を燮し而して椀に盛り侑むべし。

◎鰡の胡麻あげ

鰡を三枚におろし、卸肉を算木形に庖丁をなして、兩面に程好く食鹽をあて二十分間おきて、水にてザツト洗ひ、乾きたる布巾にて水氣を拭ひおき扨て別に胡麻油を揚鍋に入れ火に掛け、油より靑き煙の出るを待ちて鍋を半分、火よりはづし、手早く前の魚肉を鍋の縁よりすべらし入れ、一度裏返し狐色となるを待ちて笊へ新聞紙を敷き上へあげ、油を切りて皿へ盛り、其上へ蘿蔔の搾り汁を少しく掛べし又玉葱ふくめ煮は、玉葱の上皮を剝き捨て竪に二つに割り、木口より一分程の厚さに切りおき、別に味醂半杯と煮出汁一杯との割り合せたる汁を煮立て前の玉葱を入れ、落蓋をなして暫らく煮て、生醤油を注し、一寸と煮て鍋を火よりおろし、皿に盛るべし。

◎烏賊の甘煮

まづ烏賊の足をぬき取り、墨腸等を除き、開きて水にて洗ひ布目に庖丁をなし（布の目の如く縦横十文字に

深く切目をつけるとなり）適宜の大さに切り離し足は四本づゝに離し一寸程の長さに切り、共に目笊に入れ之を沸騰湯の中へさし入れ、霜降となし（湯煮をなすにあらず肉の色が白く變るを度とし引上げるとなり）そして別に生醤油と三盆砂糖と少量の煮出汁とを加へたる汁を煮立て、此中へ前の烏賊を入れ網杓子にて、掻き交ぜ、直ちに掬ひ出し、鍋に殘れる汁を十分に煮詰め、薄く削りたる鰹節と生醤油とで再び煮しものなり。

◎野菜入りしめ卵

先づみつばを水に洗ひ、根元の方を揃て小束と爲して沸騰湯の中へ投じ、煮上るを待ちて之を裏返し更に煮上るを待ちて直ちに冷水に取り、兩三回冷水を取換へて能くひやし、輕く搾りて水に切り、一寸程の長さに庖丁を爲し、別に鍋へ煮出汁と少量の食鹽とを合せたる汁を煮立て、前のみつばを入れ、ザッと煮て淡味を付けおき又生乾椎茸を水に放ちおきて柔らかにもどし軸を切り捨て、薄く纎に打ち、別に鍋へ煮出汁と生醤油とを入れ、煮立つを待ちて前の椎茸を入れ淡味を付けおくべし。扨て鷄卵をほぐし鍋に入れ、之に其量の三分の一程の煮出汁と生醤油とを加へ、其味を試み、淡味加減に仕立て、鍋を火に掛け、箸四五本を以て絶ず攪拌せながら半熟に煎り上げ、手早く前に煮上げおきしみつばと椎茸とをむらなく混合せて之を篩の裏面へ布巾（布巾は水に浸しかたく搾りたるものを用ゆ）を展べたる上に移し同じ厚さにならしおきて、布巾を四方よりたゝみ折りかけ、四角なる形狀と爲し其上に鍋蓋の如きものをおしと爲しおきて鷄卵をかため之を適宜に庖丁をなすべしこのしめ卵は煮染、皿物、又は椀等の種に用ふ。

◎薄葛豆腐

先づ豆腐を小なる賽の目に庖丁をなし、之を澤山に水をはりたる器に入れおく。別に二個の鍋を用意し其一つの鍋に湯を煮立て、又他の鍋に薄葛汁を仕立て網杓子にて前の豆腐を掬ひ第一の鍋に入れ、一寸火を通し、又網杓子にて第二の鍋へ掬ひ入れ、豆腐の浮上る

を待ちて汁と共に豆腐を椀に盛り、おろし山葵を添へ蓋をして侑むべし、又薄葛汁の製方は鍋へ生醬油とあく引砂糖とを入れ、火に掛けて一回煮立て、之に濃き煮出汁を加へ其味を試み、葛を加ふれば辛くなるものゆゑ少しく醬油が不足する位の加減となしおくべし鍋を火よりおろし水に溶せし葛を徐々に注ぎ入れ、更に鍋を火に掛け葛を變して薄きどろ〳〵の汁をつくるべし。

◎豚の三品料理

（一）吸物　豚の股肉を細に叩いて、泡立てた玉子の白味と混交せ（玉子の白味は豚肉百匁に付中玉一個のものを取る）て胡麻油で揚げ、目笊へあげて油をぬく、（熱湯を注ぎかける）別に小松菜を茹で揃へて一寸五分程の長に切り、前の揚豚と共に椀へ岡盛して清汁を注し胡椒なり卸山葵なりを添へる。

（二）刺身　豚の三枚肉を丸のまゝ三時間程茹で（湯の沸騰した時投る）厚さ二分程の刺身に作つて酢味噌で食べる。（湯引葱など添へるもよろしい。）

（三）山椒燒　豚の脊肉をそぎ切りにして、一合を五勺に煮詰めた味醂へ並盃に一盃の醬油と、山椒の實を加へた汁の中へからみ置き、暫時して肉の兩面を能く燒いて、煮出汁と醬油等分の汁で洗ひ、再び燒いて、器へ盛り、粉ふき薯を添へる（粉ふき薯とは皮を剝ひだ馬鈴薯を水へ放し置いて鹽茹にし、柔になつた時湯を切つて弱火にかけて水氣を去つたもの。）

◎かやく飯

かやく飯は黄枯茶飯を炊ぎそして釜の中にて次の如き加藥を斑なく混せしものなり、又加藥の味付方は次の如くなすべし。

糸蒟蒻は蒟蒻を茹でゝ之を煮出汁と生醬油と極く少量の砂糖とを以て淡味をつける。

細引油揚は油揚を竪に二つにわたし、木口より細く庖丁をなして糸ごんにやくと同樣に淡味をつける。

繊椎茸　は生乾椎茸を暫らく水に放ちおきて後ち之を沸騰湯の中へ投じゆでゝ繊に打ち、煮出汁と生醬油と少量の砂糖とを以て淡味を付る。

さゝがき牛蒡　は牛蒡の上皮をこそげそして笹の葉の形状に削り、之を暫らく水に放ちアクをぬきし後沸騰湯の中へ投じ茹でゝ糸蒟蒻と同様に淡味をつける。一體黄枯茶飯又は加藥飯の如きは温かき中に食するものゆゑ、可成は釜より直ちに茶碗に盛り、其上に揉み海苔を振り掛け、蓋をなして侑むべし。

◎五目鮨

五分切干瓢、もみ海苔、あられ椎茸、細引隱元、煎豆腐、せん生姜、小町蓮根あま酢などを材料として飯は普通より少々强目に炊き、木鉢なり盤臺なりへ取つて鹽を加へた酢をふりかけ、下から上へ杓子でかき交せながら團扇で煽ひで光澤を出す、それから干瓢と椎茸は水に浸し、茹でゝ笊へ上げ味醂、砂糖、醬油で煮て庖丁す、煎豆腐は梔子を水にひたし、その汁でさつと茹でゝ布へあげて程よく搾り、鍋へ投れて味醂と鹽で煎上げ、蓮根は一寸位の管に切つて皮を剝き、水へひたして鍋の湯の沸騰つた時少々の酢を加へてその中で茹で笊へ上げ(酢を加へれば白色に茹だる)更に紅を溶いてその汁で煮上げ、再三水で洗つて適宜に薄く庖丁して鹽酢にひたし引上げて砂糖をふりかける、海苔は片面より靑くなる程燒き盆の上へ揉んで置き、細引隱元は莢隱元を湯鍋へ投じ蓋をせずに茹で、椎茸煮汁に味醂醬油を加へて是れ亦蓋をせずに靑く煮て竪に細く庖丁す、生姜はせんに打ち、水にひたして灰汁をぬき、取上げて酢にひたし置く、斯くの如くして第一に干瓢椎茸を飯にかき交せ、器へ盛つて煎豆腐、小町蓮根細引隱元、せん生姜等を程よく上へ並べ揉海苔をかける。

◎玉子とじ

沸湯(煮出汁なら尚宜しい)に食鹽少々加へ(沸湯は小深い鍋に入れて烈火へかける、その湯の深さは一寸以上を要す)玉子を割落して直ぐ其中で溶いて芹三葉の類を加へて綴るなり、程よく固つたれば網杓子で椀へ掬ひ込み、別の鍋へ仕立てた清汁を注し、燒海苔など加へる。初めに玉子を綴る湯へ醬油を加へると濁るものなれば注意すべし。

新式鹽鱈料理

歐米諸國では鱈を上等の魚として珍重するのに日本では兎角安物扱ひにするやうであるがつまりこれ料理法を知らないからである先づ鱈を調理するには鹽抜きが最も肝要で、其方法は暫時水に浸し置きて後、藁束で能く外を擦り淨め、適宜の大さに切りて清水の中に浸し置くこと十時間乃至十五時間を經て料理するので、其料理法を一寸記すと。

◎旨煮　鹽分を充分に拔いたのを細に切り、醬油と砂糖と鰹節とで煮るのであるが、若し皮を剝き纖維を傳へて百合の樣に離して調理すると殊に美味である。

◎照燒　皮を剝ぎ、薄目の四角に切り一時間餘り水に浸し、夫れから日光で乾かし、夫を燒て味醂を掛ける。又鹽せるを充分に水氣を去り、半面交々燒きて醬油を引き、次で砂糖醬油を注け、遠火で炙るもよし。

◎昆布卷　幅廣き肉薄昆布の水に浸したのを、布片でよく／＼拭ひて粘り氣を去り、長さ五六寸に切り、夫れから鱈の摺身を中央六七分、兩端二寸位の厚さに蒲鉾形に塗り、その上に少し幅の狹い昆布を載せ箸で三五の筋を着け、又其上に摺身を塗つて溝を隱し斯くてそろ／＼捲き、白紙を以て之を掩ひ、竹の皮か紙捻で縛り（蒸籠御飯蒸でもよし）て蒸し、後五六分の厚さに切る若し茹人參などを捲き込めば美事に見える。

◎薄揚　脫鹽した鱈の水を切り、砂糖を塗りつけ、胡麻油で揚げ煮出汁即ち昆布をゆで砂糖と味醂を適宜に加へこれに醬油を注したのをつけて食す。

◎鱈すり　脫鹽しないのを能く洗ひ四五分位の四角に切り、庖刀を格子に入れ、同大の豆腐と一緒に煮三杯酢にする、これは却々美味なり。

◎叩き膾　脫鹽した鱈片身を充分に叩き之に卵の白身一つ分と少量の味噌と砂糖を加へ、再び能く叩き、之を皿の大小に應じ五分厚位に盛り、三杯酢を九分目位浸し、それに柚子か生姜を散らす、あつさりしてよし。

◎吸物　切身を水に浸して鹽を拔き、松葉昆布、三つ葉、芹など加へて潮煮にする又た摺身を銀杏大に圓め

栗、大根、芋などを淡鹽煮にし、暫し水に浸したのを對手とし、之に柚子、卸し生姜、茗荷等を落して吸物とするもよし但し鹽加減に注意すべし此外雁もどき、白あえ、酢ぬた、おぼろ、田麩等もあり。

◎フライ　皮や骨を取り去り、約十六七時間水に浸し後水を切り、斯くて普通の方法を施すなり。

◎ボイルス　水を入れた鍋へ、細に裂いた肉を、三合位はいる皿一杯と生の馬鈴薯を同じ大さの皿に二杯とを一緒に入れて煮立て、芋の煮へたを度として鍋を卸し両方共よく搗き混ぜ、卵大のバターと攪拌せ夫れに卵一個とクリーム或は牛乳三匙を加へて又能く攪き混ぜる。

◎シチユー　白肉を細に裂ける迄水に浸し、後之を細にし、水と共に火に掛けて沸騰させ、次で徐かに水を切り、牛乳二三合を加へ三分間位煮、バターを加へ胡椒を撒り掛け、牛乳と饂飩粉を溶かしたのを入れ、更に蒸すと五分間して、卵二個を入れて攪拌する。

◎膾　鹽出しゝたる鱈を二分ほどの厚さの作り身にしてゆでゝ皿に盛り獨活の千切を暫時水に浸し置き之をあしらへになし辛子酢をかけて出す。

◎酢のもの　能く鹽出しゝたる鱈を茹でこぼし細かに切り生酢に浸し三十分程して能くほぐし針生姜又は茗荷を添へ甘酢をかけて出す、又た鱈を二分位の厚さに切り十時間鹽出して酢に浸け置くこと三十分間更に酢をしぼり前記の甘酢をかけて出す。

◎燒き物　皮を剝ぎ並の切身となし凡一時間計り水に浸し鹽氣をぬき串に刺して日に乾したる後燒きて味醂をかけて用ふ。

◎鱈田麩　鱈の皮を剝ぎ水に浸して鹽氣をぬき之をゆでゝ能く骨を去り細く裂き擂鉢にて擂り纖維の如くなし味醂と砂糖とにていりあげる。

◎バターソース掛け　皮を剝ぎ骨を去りたる鱈を水に浸すこと前のフライの時の如くし之を細く裂きて豫め煮立て置ける湯の中に投じ沸騰するを待ちて火より卸し水を切り、更に火に掛けて殘餘の水分を蒸散せしめ之を溫めたる皿に盛とかしたるバターをかけて食す。

薪炭を經濟的に用ふる工夫

温　亭

△最も拙な不利益な方法

今日本家屋の室を暖める狀態を見ると、十中の八九迄は暖爐の設備が無いから、多くは火鉢を用ゐて居るが、此れは最も拙な、最も不健康な且つ不經濟な方法である。多くの燃料を費して得る所の温量は少く、そして人體に大害を及ぼす恐るべき炭酸瓦斯を遠慮なく吸入させられなければならぬのであるから、何とか改良すべき必要があらうと思はれる。歐洲中でも伊太利、西班牙、佛蘭西の南方等では矢張り此の方法を用ゐてゐるが、西班牙の或る王樣の如きは、其の毒氣の爲に命を失ふた事さへあると聞いてゐる。

それでも日本の家屋は如何に閉籠て置いても、外氣が漏れて入り、內氣が漏れ出る樣に出來てゐるから、火鉢から發する炭酸瓦斯の爲に死んだと云ふ話は未だ聞かぬが、逆上て頭痛がしたり、身體がだるくなつて何事をするのも厭になつたりする例は冬季に於て誰でも覺えのある事である。確に衞生上有害である。之を急に廢すと云ふわけにも行くまいが、兎に角漸々遠ざける樣にして、他に暖室の方法を考へなければならぬ。併し乍ら改良と云ふ事は種々の點に關聯するもので、鳥渡腰掛を備へて暖爐を設けると云ふ事になつても、障子を閉てゝ置いては、障子の紙又は隙間から熱は悉く逃げ去り、何程火を焚いても部屋は暖るものでは無い去りとて障子の代りに硝子戸を閉てれば、今度は又空氣を取り換へると云ふ必要が起つて來る。

△西洋諸國に行はるゝもの

素より西洋で遣つて居る方法が悉く良いかと云ふに、決して其樣ではない。獨逸の如き學術國に於ても、石炭の炭團を四五個暖爐の中に投げ込み、室內の戶窓を閉切つて部屋を暖めると云ふ樣な事を遣つて居る

が、是切りの燃料で一日室が溫かいと云ふ事は、取りも直さず室内の空氣が少しも換らないと云ふ事を證明するもので、經濟的ではあらうけれど、甚だ非衞生的だと謂はねばならぬのである。要するに西洋に於ても室を暖めると云ふ事は却々容易の業で無いので、經濟と衞生とは暖室法に於ては到底一致し難いのである。英國などでは我國にも有る樣な塗込暖爐を多く用ゐて居る。之れは暖爐から生ずる炭酸瓦斯は皆通風から拔け出て仕舞ふから、衞生上には最も宜いが、併し此の暖爐を以てしては、大きな室を暖めると云ふ事は到底不可能である。普通の暖爐ならば熱の殆んど全量を利用し得られるけれども、塗込暖爐にては熱の百分中九十以上は炭酸瓦斯と共に戸外へ逃げて仕舞ふのである。或は鐵管を通じて蒸氣を送るのも、衞生的には殆んど完全に近いけれど、普通の住家には用ゐ難いのみならず、體裁も好いとは言へぬ。

△近頃行はるゝ改良裝置

理想的の室の暖め方を言へば、屋外の空氣を室内に導き入れて暖め、汚れた空氣を更に屋外へ排出するに在るが、普通の暖爐は室内の空氣を取り込むのみならず、八方より空氣を導き來り、甚きは臺所又は便所から來るものをも誘ひ込む。日本家屋の如くに各室孤立して居らぬものに在つては殊に不都合である。又近來の暖爐には煙突の無いものを往々見受ける。之れは石油又は木炭を燃料として熱の全量を利用する事が能きる樣になつてゐるけれど、暖爐から生じた炭酸瓦斯と、人間の呼出する瓦斯とが悉く室内に籠つて逃げないから、大に非衞生的である。併し近來西洋諸國に行はるる改良裝置には却つて良いものがある。それは暖爐を裝置しある下の部分に孔を穿ち、戸外より空氣を取り入るゝ樣にしたもので、下の部分であるから室内の人は直接に外氣を觸るゝ事無く、隨て寒さを感ずる事が無い。そして排氣口は必ず煙筒を用ゐるが、簡單な家に在つては、或は天井に近い所に排氣口を設ける事もある。斯くすれば熱せられたる空氣は上騰して外へ出

る事になるのである此の裝置にては熱を損する恐れがあるから、之を防ぐ爲に又暖爐の上に湯を盛つた器を置く。之れは一には水蒸氣となつて室内空氣の乾燥を防ぎ、又一には部屋を暖むる作用を爲すので、若し之れが無ければ暖爐の火が消ゆると直に寒冷を感ずるが、斯く湯を置いてあれば、其の熱を以て暫時は溫度を保つのである。

△物を煮炊きするに就て

一體火熱を經濟的に使用すると云ふ事は、却々六づかしい事で、物を煮炊きするのに就ても、色々注意したい事がある。彼の物を煮る際に、一旦沸騰すると、其の上に幾ら火を強くしたとて熱度は增すものでは無い。即ち水は攝氏百度の熱に達すれば沸騰するけれども、百度以上に水の溫度が上ると云ふ事は無いから、物を煮るには、一旦沸騰したら其の溫度を保つて行き得る丈の薪炭をさへ用ゐれば宜いので、其れ以上に薪炭を用ゐるのは、只だ不經濟と云ふ丈で、何にもなるものでは無い。些細な事ではあるが、往々それを氣附かずにゐる人がある、又市中に賣つてゐる物で、櫃入と言つて、飯を冷さぬ爲に藁で飯櫃の形のものを作つて飯櫃を入れて置くものがある。之れと同じ樣なものを鍋にも應用したならば、必ず結果は宜からうと思ふ、「フエルト」と言つて毛を固めて毛氈の如くに厚く作つたもので拵へたら宜からうと言ふ人がある。未だ試みては見ぬけれ共、其れで鍋の形と蓋とを作り、鍋が沸騰つたならば直ぐに此の中へ入れて確く蓋をし置けば鍋の中の物は其儘尚ほ煮へて居るべき理屈である。未だ膳立が整はない前に汁が煮へたと云ふ樣な場合には、多くは更に文火を焚いて溫めると云ふ風にしてゐるが、それでは第一不經濟でもあり、且つ汁の風味を害する事一方でないから、其樣云ふ際に右の樣な物を作つて入れて置いたら、大層便利であらうと思ふ。今日用ゐてゐる釜なども其の形の上に多少改良の餘地がある樣である。第一彼の鍔を今少しく高く上の方へ上げたならば、熱を受ける部分が廣くなつて早く物が煮

へ、随て餘程經濟に行かうと思ふ。彼の長州風呂などのが其の例で、普通の据風呂は形が惡い爲に非常に熱を損してゐるが、長州風呂の方は充分に熱を利用して甚だ經濟的に出來てゐる。斯う擧げて見ると、熱の用ゐ方一つに就ても我々が今日遣つてゐる方法の中に澤山改良すべき點があらうと思ふ。

衣服保存法の心得

着物に垢のつくといふ事は何人も注意してゐるやうでありますが、その垢の附いたまゝに仕舞ひ置くために可惜高價な衣服の肝要な部分に汚點をこしらへるのみならず、其地質までも損じて再び着用の出來ぬやうに至るのは甚だ遺憾な事である、これに就て少しの注意と工風とを用ゐたならば、傷にも汚點にもならずに濟むのである、その方法の一斑をいへばまづ洋服でも和服でも、すべて脂や汗や其外種々の垢がついて居て、其儘仕舞ひ置けば、黴が出來たり、又地質を損じたりするが、是れは鹽分を含んでゐるからである。それ故その汚點の箇所へは、氷醋酸一匁を、水三合ほどの中へ入れて溶かしたものを、汚染のところへ霧吹をして其上を手拭で輕く拭き室内にて乾かして仕舞ひ置けばよろしい、若し一度の霧吹で鹽氣が去らなければ二回三回つゞけてもよい併しこれは主として藍染のものに適するので、鐵染の黒紋付などには向かない、尤も酸類を衣物に吹き掛ければ地質を損ずるかの疑ひもあるが、他の酸類ならば兎も角この氷醋酸は元と煙より製造されたもの故乾かす時は煙となりて放散するので全く無くなつて仕舞ふのである、併しこの氷醋酸はアルカリ、鐵、鹽分を取り去る効力があるから、黒紋附の羽織などにこの方法を用ふれば、忽ち赤色を帶びて臺なしになる、又鹽基性の染物にも適さない、是等の物はアンモニヤを霧吹でもすれば幾分効力があるけれども一ケ年以上も汚染抜せざる時は必ず地質の變色を呈するに至るものである。

和歌

折にふれて　米澤　町田秀子
天人やいま渡るらんあま雲のはれ行くあとの虹のかけはし

夜讀書　仙臺　千里子
あすもまた學びの友ときそはましいさふみよまん小夜ふけぬ間に

田家新年　靜岡　疋田伸子
よれ俵つみてしめはへとよとしのさかえも見ゆる賤が家むら

雪中の松　千葉　吉田梅子
益荒雄の雄々しきさまと見ゆるかな雪に粧し嶺の大松

雪　三河　神谷しげ子
天つ神のみ園にさける梅の花みだれちるかも今朝の白雪

待春　三河　山内經子
やむ母のさむさになやむきのふけふ花さく春の戀しかりけり

庭鶴　尾張　みさ尾
松か枝の千代のしらべに聲そへて萬代うたふ庭のまな鶴

○　下野　高山青雲子
元旦の富士の高嶺に初日さしてゆきの冠いとゞ新らし

みぞれ　丹後　旭のりゑ
ふるさとを遠くはなれし旅衣やれしたもとにみぞれふるなり

○　須磨　有村かよ子
かせましりあめもふる夜の淋しさをひとりしてきく山本のさと

「伏屋の曙」を讀みて　肥前　嬉野登子
とくるめて御ぎみよとやみめぐみの光をしめす曙の空

雪中松　尼ヶ崎　平林ふさ子
とかへりの花にまかひて仰ぎみん松につもれる今朝のしらゆき

○　長崎　竹野華子
草屋根に白き鶴なく初空を遠き神代の昔偲びぬ

名所鶴　名古屋　淸水みさを
萬代と雲井によばふあしたづの聲高さごの松の音の葉

○　淸國　福田つる
吹おろす峯の松風音たへぬ今宵や又も雪となるらむ

山家曉　靜岡　牧野芳子
あかつきの鐘のひゞきに露ふかきゆめよりさめぬ柴の戸の家

折にふれて　播磨　きぬ子
はくもをしはかぬもうしともみち散る庭にたゝすみ時はうつりぬ

鶴　四日市　水谷靜子
あしたつの千年をうたふ聲すなり波風たゝぬ和歌の浦わに

雪中の松　大阪　木村花子
さら〳〵と雪の降り積む老松の梢に仰ぐ初日影かな

○　村上梅子
友もなくひとりふみよむわか部屋ににほひみたせよ白菊の花

雪中松　神戸　輝山谷代
たつとしの初日むかふるうぶすなのやしろの松にゆきそつもれる

雪中竹　大垣　牧村そう子
ふるまゝに女々しくたはむ吳竹にこゝろつよくもつもるしらゆき

雪中松　備中　藤舎ゑみ
ふり積る雪に梢は埋もれてひときはまさる松の一もと

ゆき　大阪　好子

いくちよもかはらぬ色の若まつのかくれぬ程にふれるしら雪

雪中松　遠江　天野すみ子

白妙のゆきに梢をうつむとも松は常磐のいろかへすして

霰　青森　三浦和歌子

村雲のたえ間に星は見えなから夜袖にまろぶ玉あられかな

○　安藝　日下八重子

小夜更けて雪見燈籠のかけ淡く仄かにかをる白梅の花

友情　筑紫　寒月清子

わが身にも光のそふるこゝちして友のさかえぞうれしかりける

親しき友にあひて　紀伊　佐田柳子

四とせぶりわきて親しき友見えぬかたみにしぐるうれしさのそで

吹雪　飛騨　川上志春子

熊とりしうはさ聞えて冬かれの深山おろしは吹雪そめけり

初雪　京都　佐藤清子

都にはまた見も知らぬはつ雪をわかふる里のたよりにそきく

秋晩鐘　越後　中曾根棠子

身にしみて鐘の響もあはれなりしも冴えわたる暁のそら

○　神戸　輝山たに

笛の音のすみゆくまゝに夜はふけて袖ふくかぜも身にしみにける

雪中松　大分　桂木文子

ふる雪にうもれなからも若松の姿やつれぬ色ぞ床しき

雪中の松　千葉　高梨くに子

母と共にゆいて見まほし大宮の雪のあしたの松の景色を

村の初春　樺太　藤田篤子

大路小路さゝめき祝ふはつ春の都にかはる鄙の靜けさ

千鳥　宮城　山形さち子

わたどのに千鳥群立つ音のして吹雪に暮るゝ嚴島山

雪中松　大阪　梅村愛子

よせかへる白浪清き明石がた磯馴の松にゆきはふりつゝ

新年　下野　齋藤さつ子

富士筑波五色の雲につながれて靜けく明けぬ新なる年

○　牛込　平塚いと子

ほろ／＼とかけひの水に梅散りてをさの音ひゞく乳母の家かな

○　栃木　中田ふで子

白帆一つ五色の雲のかなたよりかすかに見えて年明けんとす

初雪　大阪　前淨初芽

うつしおかむとおもひし松の初ゆきをはれうつ袖につひくつしけり

別れ路　芝區　鈴木峰子

幸くませさらばよ君と笑みつゝも止めあへぬは涙なりけり

雪中の松　羽前　てい子

白妙のかつぎつくれば姫松が裸はしろくあらはれにけり

○　長野　小林なほ子

幾年の花とこそしれ門々の軒端の松にかゝる白雪

雪中松　筑前　木村こま

ふる雪はいほへつむとも山松のときはのいろはいかでかはらむ

冬の山　臺灣　黑田その

馬賣りてひとりさひしく歸りくる男にあひぬ冬の山道

羽子突　神戸　足立ゑい子

つく羽子の音もいそがし夕日影かへす袂に明日を誓ひぬ



短文

野末の花

伊賀　もと子

女學世界を愛讀し初めてから玆に一年、かたみにちぎりし日こそ淺けれ、其間に私が誠心こめた短文の原稿は幾度編輯室を訪れたでせう、けれども未だ肥料が足らぬ爲か一度も此の美はしい文の園に、ぱらと咲いたこともなければ、莟と匂つた事もない、今度の心の日記とても必ずと力みし甲斐もなや、例に依つて例の如しとは、ほんとに自分ながら情けない、之でも嘗ては學校で、ヤレ才媛だ、秀才だと、人にうたはれ、はやされた身、百人の前では天晴清紫と氣取れる身も、萬人の中ではやはり名もなき野末の花、このまゝ人にも知られないで枯れてしまふのだと思へば、悲しい、あゝ私は何故紫式部の血を受けて來なかつたらう、いつそ投稿は之かぎりに……。(入賞)

物思ひ

大阪　淺田たつ

根からがつくりくづれた丸髷の、鬢のほつれ毛が哀れに二筋三筋色の褪めた横顔にふりかゝつた、どことなく暗い影のまとふた嫁様らしい若い女の方の電車の隅にぽつれんと物思ひに沈まれた痛ましいお姿、丁度學校戻りの午後の三時過、弱い冬日が斜に腰掛のビロードを淡う射して居る、電車が西へ方向を變へる時、其の横顔に日が射すと、まぶしげに此方を見られたが、すぐ俯向いてしまひなさつた、あの美しう優し相なお顔なのに、寂しい影が仄めいて居るのは、何の心配だらう、出來るならお慰めして上げたい、と妾は思ひましたが、ふとやがて來る妾の影だらうかと氣附くと、心は早深い〳〵悲哀に沈むのであつた。(入賞)

紀念園

肥後　村井ますゑ子

私共の教室の前に一つの花圃があります、その廣さは僅かに一坪にすぎません、自然のまゝに生ひたつた花は見るに足りますまい、けれども級の中途退學者のおもかげはこの内にこもつてゐるのです、眞白の寒菊、これは今小學校に教へて居らるゝ花田君子姉の紀念でゆかしうかほり、中央に愛らしく三つ四つ黄金の玉をつけてゐる一尺位のキンカンは、五人の弟妹に母としての勢を取つて居られる堅野幸子姉の心の滴である、その根本に只一枝さしのぞく紫すみれ、これはなやめる人の力となりてなぐさめを與へらるゝ深山愛子姉のおもかげである。

日中

東京　清香

南向の縁の障子に、日影あか／＼と映りていと目映し、端近く置かれし文机に寄り添ふ身の、顔の熱りも、あながちに、文作り煩ふ故とのみは思はれず、一句思ひ、一章書きては置く筆の、ともすれば穗先乾きて、噛みしむる唇の端や黑うなりつらん、そは厭はじ、されど此文記しもあへず、硯の海の干潟とならば、如何ばかり口惜しからん、暖き冬の日影もなか／＼に心にくしや。（入賞）

親友

大分　葛原玉子

君暇時だつた子、相變らずお健でと口を切つたのは、金縁眼鏡を掛け大島紬ぎの重ねを着た二十八九歲のハイカラ紳士、有難うどうかこうか呼吸丈はしてたよと應答したのは三十二三歲計りの美髯の好男子、時に淡島君、細君を貰らつたつて云ふぢやないか、嘸美人だらうな、フム非常な美人だよ、恐らく天下に無い子、ホイ又お出でなさつた、何卒お手やはらかに願ひますよ、まだかう見えても僕は獨身だから子、ダガ戲談は拔にして奧さんに一つ拜顏したいな、今にお目通りを願ふ奴さ、と云ふ時しも後の襖がスート開たと思ふと、現はれたのは新月の眉匂やかな十九歲計の美人。（入賞）

島より

京都　加藤ちう

昔て語り合ひしもかゝる寒き夜に候ひき、病み勞れたる生命を暫し島影に養ふ今の身を哀れと思召せ、絕ゆる間もなき浪の音を聞きつゝ火なけ擁へてあまりに室の廣きを喞ちつゝ、識りし人一人／＼思浮べて坐らせ見れば、昔を偲ぶよすがならぬぞなき、男、女とり／＼に趣はあれど、とても君のみは思去りがたくて胸にせまりて抱かんとすれば虛空なり、果敢なく我に返りて淚迸るにて候。（入賞）

元旦

牛込　平塚白百合

昨夜はいた門に、松葉が二三本チラついて、のどかな元旦の朝はとりのこゑと共にはなれた。

ゆふべ羽子板とれた智ゑさんも、今朝ばかりは早起して、友禪の春着を着てもうお座敷で羽子の音をさせてゐる、用意も出來たので奧の大廣間に何やかとはこぶと、蓬萊の掛物の床を後に、一張羅の紋付羽織召した父樣は、そろ／＼よいがまはつたのであらう、色の出たお顏をふきながらここゑに謠曲を。

外は羽子の音がにぎやかにして、三河萬歲のつゞみの音もきこえてくる。

姉の初產

大阪　東貴久枝

或夜の十一時頃姉樣に陣痛が烈しくをこつてきた、義兄樣に產婆のところへ行つて來て下さいとたのまれました、外は冷たい風が音烈しく吹い

てゐる、行く道で姉樣が初産で有るからと色々心配して步てゐると、どこかで嬰兒の泣く聲がきこえた、ハツと思つた、今頃は姉樣がさぞかし苦しんで居られるだらうと思て急いで產婆の家へ行つた。

許嫁

楓子

日は山の後に落ちた、あたりは小暗くなつたのに春枝さんは緣先で、せつせと白い指を動かしてゐらつしやる、シヤツを編むのらしい、銀鼠色の毛糸の玉はコロリ〳〵り滑りさうな緣の上を走つてる、そつとしのびよつて「誰方樣の？」と訊くと、春枝さんはびつくりした眼をあそばす、そして美しい頰に紅葉を散して、「東京へ送るのよ」とおつしやる、私は悟つたがわざと氣が付かぬ振りで、「誰方樣の」と問ひを重ねる、春枝さんは「オホヽヽ」と紫矢絣の長い袖を顏におあてなすつた、うつくしい耳は赤くなつてゐる。

田舍の新年

牛込　平塚いと子

門松が二本、ひくい家根にとゞきさうに立つて、國旗は朝風にヒラ〳〵元旦の朝は鷄のこゑにあけて靜である、米つぶやわらごみも今日は箒の目あたらしくあたつて、波のやうこぼれ松葉が二三本散つてゐる、やがて鎭守の森から晴かにきらめき出すと、三河萬歲がつゞみの音をかろくひゞかせて白かべのかどを入つた。

お正月

京都　京子

最幾つ寢たらお正月が來るのと、毎夜お祖母樣に尋れた時代は、疾くに過ぎて今は生活に齷齪とする世帶持に成つた、だけれど正月になると、羽根もつきたくなるし、歌留多もとりたくなる、正月は妙に人を若返らせる寬力を持つて居る。

冬月影

東京　生田千枝子

眼のしよぼ〳〵した婆さんは、洗ひたての襦袢を竿へ乾さうとして、漸と腰の弓を伸さうとした所へ、お隣りの雪ちやんは、大きな下駄を引摺りながら小さな人形を抱へて遣つて來た、婆さんは又雪ちやんはお手傳に來たれと云ふ、雪ちやん得意氣になつてヒーツと笑ふ。やがて雪ちやんは、婆さんの頭を二つ三つ叩いて、ちよこ〳〵と走つたが齒の減つた下駄に泥が粘つて、もう足が運ばれない、雪ちやんは泣き出した、人形は落ちた、日光は寒さうに照つて居る。

東都の姉君へ

越後　田村縫子

越路はもう雪が降りました、母上樣は姉君の身の上を案じて、今日わたしが姉君の冬着を縫ふて居りますと、「成るべく綿を厚く厚く入れなさい」と仰つしやるのです、わたしは「東京は雪が降りませんから厚く入れると見つともないでせう」と申しますと、「冬は體裁など構つては居

られん」と強ひて厚く入れさせられました。此着物は不恰好でせうから常着にして頂戴、餘所行は母上に隠して絹をうすく入れて後から送りますから、範一は雪を見て、非常に喜んで、幼稚園でをそはつた「雪ふれ〳〵」を元氣よく歌つて居ります、しかし時々滑稽をやつて皆を笑はせますよ、何よりもおからだを大切にして頂戴ね。

朝の河

姫路　鈴木ふじ子

障子を開くと、冷い風がスーツと吹き込む、すぐ河上の長い橋には初霜が降りて、人つ子一人通らない、水は美しく澄んで、橋の影がはつきりと寫つてゐる、ギー〳〵と櫓の音がする、若い漁夫が黒い着物に白い鉢巻をして、心地よささうに櫓をこぎ乍ら、橋の下をくゞつてくる、つと櫓を漕ぎ離して、兩手を口にあてた、白い湯氣が手のあたりから、洩れる、と又櫓を握つて、一心に漕いで行く舟歌が聞える。

向ふ岸を見渡すと、橋はづれの家の下に、小さな舟がつないである。蕎麥の花で白く斑々になつた後の小山から朝日がサツと射した、河の水がキラ〳〵と光る、河下を見ると、先の舟は小さくなつて、漁夫は金色の日光を面に浴び乍ら、猶も下つて行く、峯につと影が隠れたと思ふと、又もかすかに舟歌が聞える。

沖の島は紫に、白帆が只一つポツとして見える。（入賞）

夕のけしき

美濃　楠くに子

日は山影に落ちた、ほんのりとした西の空はだん〳〵夕榮して、紫や紅色の雲が美しく輝いて居る、名にし負ふ養老の山は峨々として聳え、峯子の面影を目のあたり見るやうである。

塒へかへる鳥の一列がゴーと一聲ないて、錦のやうな雲の中へ飛んで行く、何だか淋しい樣な氣がする。

私は獨り此の美しい自然の景を愛づるのである、嗚呼今他鄕に在す兄上が居らつしたらばと思を五十路の天外に馳せた。

聞かぬ琴の音

日本橋　三井陽子

今朝外へ出て見ると、隣の家の貸家札が剝がれてゐた、どんな人が越して來るだらうと思つて私は待つてゐた、夕方から〳〵と荷車の音がしたので私は窓の障子を少し開けて覗いて見た、格子の前に荷車が置いてあつて、印絆纏を着た男が荷を運んでゐる、長い袋に包んである物に私は目が付いた、直ぐ其れは琴だと云ふ事を知つた、やがて人夫はカラカラと空車を寒い空に響かせて歸つた、其晩大きな丸髷に結つた若い奥さんが蕎麥の切手を持つて來て「どうぞ宜しくお願ひ申します」と言つて歸つた、移つて來てから一週間程經つても、未だ一度も琴の音を聞かぬ、貰つた蕎麥の切手は未だ使はずに、火鉢の抽斗にしまつてある。

いたづら

東京　吉田さだ子

いつも私のそばにばかり居る三毛が居ないから、何處へ行つたのか知らんと思ふて方々をさがしたが見えないから、もしやと思つて緣側づたひに御座敷へ行つて見たら、まあお父樣が大切にして被居しやる掛物にじやれ付て居る、私はハツとして抱き上げたが遲かつた、それを二寸程引さいて仕舞た、まあ如何したらいゝだらう、三毛に困まるぢやないか、こ

んな事をしてと云ふたら、三毛も悪いと思たのか、私の顔を見てニャンと鳴く、之れを見るとしかる氣も出ない、如何してお父様におわびを仕様かと考へて居たら、お母様がお呼びになる、仕様が無いからお母様にお話しておわびをして貰かうと思つて奥へ行く。

君子様へ

上總　川上梅子

御なつかしさのあまり、一筆さゝげ参らせ候、未だ御目にかゝらず候へ共、御許様とはまがふ方なき從姉同志、妾が母と君が母上とは眞の姉妹にて候、御許様は今春目出度く高等女學校に御入學遊ばされ候由、蔭乍ら、嬉しく存じ上候、亡き母君がおはしたらんには、さぞかし御喜び遊ばされしならんにと御許様の御いたはしく御同情申上候、春の花秋の月を見るにつけ思ひ出ださるゝは御許様の事のみにて候、何卒御近況御知らせ下され度候かしこ。

おつやさん

靜岡　松龍子

「紙を頂戴」と此度新たに出來た本道の荒物屋へは入ると、四十餘の小意氣なお神さんが今しも外の客に應對して居る所なので、「アノ一寸おつや」と奥へ向つて呼ぶ、どんな可愛らしいのが出るだらうと思つて居ると、やがて「ハイ」と優しくこたへて出て來た人は、これはまた案外のとんだきたない田舍娘、まあ可愛い名をつけたものだと思つた。

愛犬

牛込　園のしらゆり

エフが何かしきりにねらつて居るので、見ると庭の梅の木の下の土があげられてゐる、もぐらであらう、エフは、可愛きからだを平たくして、足音を忍ばせながら、一歩一歩又一歩と進む、もぐらは相變らず土を動かして居る、土の動くたびにからだをぴくつぴくつと動かして居たエフは、たまらなくなつたと見えて身を起しざま飛びかゝつて、いきなり土の中へ鼻をおしこみ、今度は掘るは掘るは、一生懸命だ、だがもぐらが居ないので失望した樣に頭をどろだらけにして歸つて來た。

にくきもの

美濃　三輪芳子

本を讀む所へ蠅の集り來て逐へば去り少時の間に集まるこそにくけれ、雨降る時、用ありて急ぐ途中にて、下駄の緒のきれたる、腹たゝしくもにくし、物へ参る日乞食のすがりて一町も二町もつきくるいとにくし、やさしく斷ればつけあがりて袂をひき、叉きつくいへば怒りて口惡しくのゝしる、心晴々しからずうらかなしげなる事どもある日、鳥の軒近く來りて、濁聲になき立つるいとにくし、まして病者などある折は心元なく身の毛もよだちぬべし。

養老行の前夜

名古屋　齋藤松子

明朝五時四十分發の汽車にて、紅葉には少々早きやうなれど、四五人の連もあれば、養老の瀧にお連れ下さるとの仰、名高き孝子の出處は如何なる處ならん、思ひやるだに嬉し、急の思立なれば萬事有合にて、お辨當は海苔卷とサンドウイッチ、水物は今日八百屋より取りたての林檎に蜜柑、着物はこれ、帶はあれ、小間々々物は信玄袋、草履は紅緒など、す

つかりと用意を整へ、女中に留守中の事など何にかと申含め、良人の見開き置きし地圖など調べて寝に就く、今宵の夢は何。

寒き夜

山形　今野定子

椽の木のかげが、ハッキリ障子に寫つた、一寸開ひて見ると、月は黒雲にかくれようとしてゐる、やがて雨がふる、風がふく、恐しい大風雨になつた、桐の葉が障子にガサリとさはつた、母さんは後ろに來て火鉢の火をかき立て乍らナカ／＼寒い夜だれと仰有る。

春暖

巣鴨　貞子

今日は日曜なので、めづらしく六疊の座敷の日のあたりよいえんへ裁縫をもち出してはじめは一心にぬふてゐたが、やゝあきてきたので、見るともなしにうつとりと池の面を見ると丈の高い、松はさも自分の姿をほこるかの如くに影を水にうつしてゐる、時々さむい風が池の面をなでると、水は波紋をゑがいて其姿をゆら／＼とうがかす。

雪の朝

岩代　華香子

一晩で、随分積つたものだ、石燈籠や圓く刈り込んださかきがまつ白でいつもよりは、五六寸、せが高い、小さな植木鉢にひよつこり、高く積つたのが一寸何だかわからなかつた、取りそこなつた柿が白い枝の下から、まつ赤なかほを出して居るのが滑稽だ、突然鳥が中分喰いのこした熟柿を上から落して平らな雪に穴をあけた、健ちやんはそれとも知らず喜んで走つてきたが、拾つて見てがつかりし遠くへぽんと投げ出した。どこかの犬が又それを目かけて走つて行く、もう降るのはすつかり止んで青い空から日がてか／＼と照つてきて、夕べ下したばかりの雪を又せつせと運んで行く、殘り惜い。

運動會

香川　岡坂靜江

正面に、青と白とのだんだらの幕を張つて机を控へた賞品係、南側の校舎の窓から我子のはたらきぶりや如何にと、首長くして手に汗にぎつて見て居るのは父兄の方、……ドンと銃聲一發、我劣らじとかけ出した赤きはかまを高くからげてはぎりをかんで走る子がある、ちよい／＼横を見ながらかけてる子もある、つきとばされてころげる子もある拍手の音歡呼のこゑの中に、敎師の持つてる白に太く一の字を染め出した旗にすがりついた時の心地はどんなだらう、私も今一度あんな時代にかへつて、袴を高く、髮ふりみだして、黑のくつしたはだしのまゝでかけつこが出來るならあの一の字のはたにとびついたまゝで、すぐ死んでしまつてもよいと思つた。

嫂様

東京　友子

もう御客様も大方濟んだので、嫂様は今日小石川の御里へ御年始に行らつしやるといふ、御めしかへや御つくりや私も御手傳ひ申上げて、もうすつかり出來上つた、縫紋のある霞御召の塗り裾の二枚重ねに、緋紋縮緬の長襦袢の艶なるをふりに匂はせ茶がゝつた厚板の帶はいつもより胸高に大きく締め、浮き出た様なその御頸すぢのつやゝかさ、靜に立つてスーッと離れの母様に御挨拶にいらつしやる、御隣の庭からは追羽根の音が長閑に聞ゆる。（入賞）

讀者文藝 **投書歡迎**（締切二月十五日）

▲和歌（一人一首）

▲短文（三百字以内）

▲小說（二十枚以内）

▲日記文（十枚以内）

◎和歌、短文は必ず罫書を用ゆる事◎字體は楷書にて鮮明なるべき事但し鉛筆にて認めたるものは採用せず◎住所姓名は必らず原稿に記しおく事◎投稿は博文館女學世界宛の事……

◎**賞品**

▲一等一圓▲二等五拾錢
▲三等參拾錢（圖書切符）
▲小說と日記文は銓考の上相當の謝禮を呈す

每月一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……十二册 增刊四回…一、五、九、十一月價格同一）

郵稅 一册 二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
廿四字詰一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●前金拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治四十二年一月十五日發行　第九卷第貳號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局
三百三番　二千六百二十番
千十八番　三千二百二十九番

家庭整理の指導

當代第一流の女子教育家編著



家庭百科全書

全部五十册

每月一回發行

和裝頗美本 ◉紙數各三百頁 ◉石版彩色口繪一葉 挿畫十數箇

▲定價一册金四拾五錢——郵稅八錢

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、動もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概ね理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過るか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

第一編 **新家庭訓** 三輪田高等女學校長 三輪田眞佐子女史著

第二編 **四季料理** 宮中臣民兩流料理師範 大日本割烹學會々長 石井泰次郎君著

第三編 **裁縫指南** 女子高等師範學校教授 喜多見佐喜子女史著

第四編 **和洋菓子製法** 東京治庖會講師 龜井まき子女史著

第七編 **育兒の務** 醫學士 田村貞策君 朝夷孤舟君 共著

第八編 **簡易治療法** 新潟縣高田高等女學校教諭 藤井靜子女史著

第九編 **禮式と作法** 女子高等師範學校教授 佐方鎭子女史著

第十編 **惣菜料理** 赤堀吉松君 赤堀峰吉君 赤堀菊子女史 共著

東京日本橋區 發兌元 ▶ ◀ 販賣用電話 本局二六二〇 ▶

女(後付の二)

婦女必讀の大全書

第五編 茶道と香道 水原翠香女史著

第六編 諸流生花指南 琴松[illegible]文雅君 松[illegible]齋理常君 共著

第十一編 編物指南 女子技藝實踐學校編物科主任 三木とみ子女史著

第十二編 婦人の生理と衛生 青山學院教授 牧野清子女史著

第十三編 教育お伽噺 少年世界記者 木村小舟君著

●總論●お伽噺の紀元●お伽噺の種類●お伽噺の効用●お伽噺の教育的價値●お伽噺に對する非難及辯解●お伽噺の選擇●お伽噺教授の實例●お伽噺教授の場合◎お伽教材(西洋の部)●狼と七匹の子山羊●紅帽子●[illegible]鳥●ホルレー夫人●ならず者●牝雞の最後●藁と石炭と粟豆の旅行●穀物の穗●狼と狐との話●市街音樂者●粥の海になつた話●星娘●漁夫の妻●雲姫物語●牛助の御褒美●桃太郎物語●裸の王樣●お姫樣と蛙◎お伽教材(日本の部)●海幸彦山幸彦●羽衣●瘤取り●一寸法師●玉取り●出世息子●姨捨山●養老の瀧◎教訓お伽噺●蛙手池●土龍塚●木笠草笠●坊主山●僞ミイラ●身震物語●蝸コロ〳〵●蟬の帷子●風將軍●笛の魂●月夜の蛙●蜃氣樓●寶珠取り●草刈●シャボン玉●めくら蛇

第十四編 女德の養成 前田長太君著

【上】女德編 德性の涵養●知識の養成○知識を啓發すべきこと‖學問○知識を戒防すべきこと‖用心○知識を豫防すべきこと‖自警●意志の鍛錬○意志を端正にすべきこと‖正意○意志を强健にすべきこと‖義勇○意志を順良ならしむべきこと‖和順●心の修養○心を保全すべきこと‖純德○心を警護すべきこと‖戒愼○心の惡念と戰ふべきこと‖心神●感性の矯正○感性が女子の氣質に及ぼす影響○感性が女子の言動に與ふる勢力○感性が女子の德操に及ぼす影響【中】婦德編 新婦の德操●良人に對する心得○夫婦相愛の心得○夫婦貞操の心得○夫婦尊敬の心得○夫婦信賴の心得○夫婦扶助の心得●出入に關する心得○新婦家居の心得○夫婦外出の心得●一生に亘る心得○平時の心得○病時の心得○難事の心得○老後の心得●舅姑に對する心得○【下】母德編 母親の責務●母親としての心得●子供の幼年期に於ける母親の心得○子供の乳育に就ての心得○子供の知育に就ての心得○子供の德育に就ての心得●子供の少年期に於ける母親の心得○子供の教員選定に於ける母親の權利○子供の家庭教育法に就ての母親の心得○學校教育を受けつゝある子供に及ぼす母親の影響●子供の丁年期に於ける母親の心得○子供の嫁娶問題に對する母親の心得○子供の嫁娶後に於ける母親の心得○嫁聟に對する姑としての心得●主婦としての心得○家庭整理に對する主婦の心得○家政に從事する主婦の心得○婢僕の取扱に關する主婦の心得○家計費用に關する主婦の心得○良人の事業を助くる主婦の心得○訪問及談話に關する主婦の心得●寡婦としての心得○喪中に於ける寡婦の悲嘆○家事整理問題に關する寡婦の心得○獨身生活に關する寡婦の心得○再婚問題に對する寡婦の心得

第十五編 家屋と庭園 内山正如君著

◎第一章 緒論‖●家屋の意義、●家屋の目的、家屋の種類、外六項◎第二章 各論‖●住宅、別莊、數寄屋(茶室)、外二項◎第三章 間取‖●玄關 居間、座敷(客間)、外六項◎第四章 門墻‖●門墻及塀、湯殿と便所、臺所◎第五章 庭園‖●庭園築造の目的、大なる庭園と小なる庭園、庭園の趣味、日本式の庭園と歐洲式の庭園、外十四項◎附錄‖●名園見聞記

本町三丁目 ◀博文館▶ ◀振替貯金口座第二百四十番▶



博文館發行新刊圖書案內

◉大日本地誌 第七卷 四國
理學士山崎直方君 理學士佐藤傳藏君 共著
正價貳圓五拾錢 小包料拾貳錢

●帝國百科全書
▲洋布特製 正價各五拾五錢
正價各四拾錢 郵稅八錢宛 小包料八錢宛

●改訂增補 水產學 農學士塚本道遠君 同 井上正賀君 共著
●都市經營論 法學士矢田七太郎君著
●會計法論 法學士工藤重義君著
●海上保險法 法學士秋野沆君著
●法制經濟概論 法學士大原彌一郎君著
●文藝論 文學士田中伊藤次君著
●近世幾何學 理學士藤田外次郎君著
●純正哲學 文學博士井上圓了君著
●現代支那語學 文學士後藤朝太郎君著
●殖民政策汎論 法學士山內顯君著
●海損法 法學士秋野沆君著
●日本語學史 上下二冊 文學士長連恒君著
●應用生理學 ドクトル・オヴ・エルトン君著 醫學士酒井谷平君譯

◉工業叢書

◉電氣化學 理學士秋原擧吉君著 正價壹圓五拾錢 小包料八錢
◉架空索道運搬法 工學士中村元吉君著 正價壹圓 郵稅八錢

◉訂正 日露戰史 正價各壹圓 小包料拾貳錢宛
⊙第二卷 熊谷直亮君 半井桃水君 坪谷水哉君 合著
⊙第三卷 半井桃水君 黑田甲子郎君 熊谷直亮君 合著
⊙第四卷 平田勝馬君 島谷部銑太郎君 合著 岸上操君 梅田又次郎君 合著

△日本外史新釋
文學士久保天隨君註釋 ▲全部十二卷發行
正價一冊參拾錢 郵稅一冊六錢 全部十二卷 和裝大判

●實驗應用 通俗產業叢書

●乳用山羊の飼養 農學士山下脇人君著 正價貳拾八錢 郵稅四錢
●實用捺染法 三條染織講習所講師 長津愛染君著 正價六拾錢 郵稅八錢
●食料品保存法 工學士田中宗一郎君著 正價七拾錢 小包料八錢

●家庭衞生講話
正價各卅五錢 郵稅六錢宛

●花柳病講話 醫學博士筒井八百珠君述
●傳染病大意 醫學博士井上善次郎君述
●婦人病講話 醫學博士佐藤勤也君述
●耳之衞生 醫學士賀古鶴所君述
●外科講話 醫學士桂秀馬君講述

△家庭百科全書
正價各四拾五錢 郵稅八錢宛

△簡易治療法 藤井靜子女史著
△育兒の務 醫學士田村貞策君 朝夷孤舟君 共著
△禮式と作法 佐方鎭子女史著
△惣菜料理 赤堀吉松君 同峰松君 同菊子女史 共著
△編物指南 三本とみ子女史著
△諸流生花指南 琴松閑文雅君 松幸齋理參君 共著
△茶道と香道 水原翠香女史著
△婦人の生理と衞生 牧野清子女史著
△敎育お伽噺 木村小舟君著
△女德の養成 前田越嶺君著
△家屋と庭園 內山正如君著

●學藝叢書
正價各四拾錢 郵稅六錢

●地理學叢話 理學博士神保小虎君編
●國語學叢話 文學博士上田萬年君著
●物理學叢話 理學博士鶴田賢次君述
●天文學叢話 理學博士横山又次郎君述
●地文鑛物學叢話 今村理學博士 神保理學博士 述

●通俗作文全書
正價各卅五錢 郵稅六錢宛

●古今名家文選 武田櫻桃四郎君著
●古今名家尺牘文 太田淳軒君著
●新體詩作法 河井醉茗君著
●新體漢文軌範 久保天隨君著
●古今才媛文集 近藤正一君編



製本符號
●洋裝並製符號
⊙洋裝上製符號
△和製並製符號
▲和製上製符號

△謠曲評釋（全部出來）全九册　大和田建樹君著　正價各卅五錢　郵税六錢宛

◉英語世界叢書　正價各卅五錢　郵税四錢宛
◉戀と戰　小日向定次郎君註釋
◉クリスマス奇譚　旅の恥　佐川春水君譯

●世界お伽噺　巖谷小波君著　第百編◉南犬北犬……完成　正價各八錢　郵税貳錢宛

●お伽畫帖　巖谷小波君著　毎編中判石版彩色畫　正價一册六錢　郵税貳錢

編	書名	畫
第一編	●桃太郎	宮川春汀君畫
第二編	●牛若丸	富田秋香君畫
第三編	●イソップ話	太田三郎君畫
第四編	●花咲爺	吉本月莊君畫
第五編	●猿蟹合戰	片山春帆君畫
第六編	●かち〳〵山	田代古涯君畫
第七編	●日吉丸	桐谷洗鱗君畫
第八編	●浦島太郎	久保田金僊君畫
第九編	●文福茶釜	名和永年君畫
第十編	●日本武尊	河合英忠君畫
第十一編	●舌切雀	大竹竹舟君畫
第十二編	●瘤取り	鰭崎一郎君畫
第十三編	●白うさぎ	田中春岱君畫
第十四編	●武藏坊	濱田如洗君畫
第十五編	●孫悟空	山中古洞君畫
第十六編	●鼠の嫁入	渦田美穂君畫
第十七編	●曽我兄弟	大野静方君畫
第十八編	●猫の草紙	久保田金僊君畫
第十九編	●うかれ胡弓	岡野榮君畫
第二十編	●大江山	長讃折堂君畫
第廿一編	●大人國	橋本邦助君畫
第廿二編	●八幡太郎	宮川安信君畫

◉五大洲探檢記　五大洲探檢旅行者中村直吉君・冒險世界主筆押川春浪君共著　正價各五拾錢　郵税六錢宛
◉第一編　亞細亞大陸横行
◉第二編　南洋印度奇觀

●少年世界讀本　巖谷小波君・金子紫草君共著　正價各貳拾錢　郵税四錢宛
●伊太利、希臘
●露西亞
●南亞米利加各國
●丁抹、和蘭、白耳義、瑞典、諾威
●土耳古、東部歐羅巴各國
●北米合衆國

●世界お伽文庫　巖谷小波君著　正價各拾參錢　郵税貳錢宛
第一篇●大勇士　第二篇●魔法鶴　第三篇●半分物語　第四篇●善玉悪玉
第五篇●王取王子　第六篇●二人天使　第七篇●强力太郎

書名	著者	正價	郵税
◉最近印度事情	外務省通商局御編纂	一三〇	八
◉北京誌	清國駐屯軍司令部御編纂	二、五〇	一二
◉實業學校日本地理教科書	農學博士稻垣乙丙君・矢津昌永君共著	七〇	八
◉實業學校外國地理教科書	農學博士稻垣乙丙君・矢津昌永君共著	六五	八
◉地理統計要覽	石渡延世君著	五八	六
◉地文學要解	田倉紋藏君著	二二	二

書名	著者	正價	郵税
◉京畿地方修學旅行案内	八木奘三郎君著	六〇	六
◉旅行者寶鑑	伊藤銀月君著	四八	八
●函根紀行	田山花袋君著	三五	四
◉大日本歷史下卷	法學博士有賀長雄君著	二、五〇	一二
◉增訂大日本建國史	木村鷹太郎君著	一、五〇	八
◉中等國史教科書	文學博士原秀四郎君著	文部省檢定濟	
▲第一學年用		四〇	六
▲第二學年用		五〇	八
▲第五學年用		六五	八
●日本外史字解	文學士久保天隨君編	二五	六
◉重訂日本外史	賴山陽著・文學士久保天隨君校訂	七五	八
●佛蘭西革命史	大使官書記官奥田竹松君著	七〇	八
◉日本外交の先覺堀田閣老傳	佐藤顯理君著	一、五〇	八
◉賴杏坪先生傳	重田定一君著	一、五〇	一二
●明治元勳井上侯實傳	伊藤痴遊君著	三五	六
◉自助論の著者スマイルス翁の自傳	理學博士蜷田賢次君著	四五	六
●偉人の母	前田越嶺君譯	三八	六
●活動せる實業界の婦人	中央新聞記者田村江東君著	三八	八

女（後付の五）

著者	書名	正價	郵税
小野田翠雨君著	● 現代名士の演説振	四五	八
文學士 土井晩翠君著	◉ 那拿翁性格論	五五	八
農學博士 稻垣乙丙君著	△ 新撰農學入門	全部三冊	
	▲第一卷	一八	四
	▲第二卷	一八	四
	▲第三卷	二〇	六
農學士 難波五百麿君著	◉ 農學校用肥料學教科書	五〇	六
農學士 鈴木敬策君著	◉ 農産製造學教科書	七〇	八
宮内省内苑局長 福羽逸人君著	◉ 果樹蔬菜高等栽培論	一,三〇	八
農學士 西垣恒矩君著	● 園藝業と産業組合	四〇	六
農學士 横山春平君著	◉ 最近實驗養鶏法	八〇	八
農學博士 高橋貞造君著	● 馬鈴薯貯藏法	六〇	六
石川縣農會技師 藤高亨留君著	● 罌粟栽培手引	一八	四
蠶業講習所技師 石居一郎君著	◉ 實驗製絲論	一,〇〇	一二
松下憲三郎君 小熊正男君共著	● 絹絲の處理及染色	五五	六
稻垣農學博士 山下與之助君 三宅千秋君共著	◉ 農學校用算術教科書	六〇	六
林學士 中牟田五郎君著	● 測樹學	六〇	六
工學士 米國理學士 前澤初治君著	◉ 實用木橋架設便覽	七〇	四
龜田吉郎平君著	◉ 和洋建築軒隅絓法圖解	三,〇〇	一二

著者	書名	正價	郵税
遠藤辨二君 濱田四郎君共著	◉ 實用英和商業文指針	四二	六
神戸高等商業學校教授 中川靜君著	◉ 現代商業文指鍼	七〇	八
ラット博士講述	◉ 英文商業道德	三〇	六
伊東祐穀君著	◉ 明治四十年世界年鑑	五、〇〇	一六
同君著	◉ 明治四十一年袖珍世界年鑑	八〇	八
土田政次郎君著	● 政論	一二	二
日米新聞社編輯局編	◉ 在米日本人年鑑	一,〇〇	八
大隈伯爵編	◉ 開國五十年史 下卷 ▲上下二冊 全部	三,〇〇	二八
法學博士 有賀長雄君著	◉ 增訂日本古代法釋義	一,八〇	一二
法學博士 小野塚喜平次君著	◉ 歐洲現代立憲政況一斑	一,〇〇	八
法學博士 有賀長雄君著	◉ 中等法制教科書	六〇	八
永井荷風君著	● あめりか物語	六五	八
第二高等學校教授 岡澤鉦次郎君著	◉ 教科參考日本文典要義	一,三〇	八
幸田露伴君著	◉ 普通文章論	七五	八
文學士 片山孤村君著	● 最近獨逸文學の研究	一,〇〇	一〇
土居香國君著	◉ 作文活法	六〇	六

著者	書名	正價	郵税
松村翠堂君著	● 作文獨習書	二八	六
故佐々木弘綱君編 佐々木信綱君校	● 和歌世々のあと	二八	四
佐々木信綱君著	● 歌學論叢	一,〇〇	八
今井柏浦君編	◉ 俳諧例句新撰歳事記	七五	八
有田風蕩之君編	● 月分新派句選	五〇	六
角田竹冷君編	● 芭蕉句集講義 春の巻	三八	六
土居香國君編	◉ 初學作詩活法續編	五〇	六
文學士 久保天隨君釋義	△ 唐詩選新釋 全五冊	三〇	六
伊藤松宇君著	△ 新編蕪村几董附合集	三〇	六
河井道子女史 辻村靖子女史共譯	◉ 家庭小説ひとりぼっち	六五	八
江見水蔭君著	◉ 冒險小説大蠻勇	五〇	八
文學士 小山内薫君著	● 演劇新潮	五五	八
醫學士 石原喜久太郎君著	◉ 新編家庭衞生	一,七〇	一二
須田勝三郎君著	◉ 新撰衞生試驗法	一,五〇	一二
中島義式君著	△ 女子禮法教科書	三八	六
奧村繁次郎君著	● 家庭における吉凶百談	四〇	八
白井規矩郎解說	● 內外遊戲二百番	二五	四

著者	書名	正價 錢	郵稅 錢
白井規矩郎君著	⊙センチュリー式歩調と行進遊戲	六五	八
五段 井上保申君著 / 農學士 河村精八君著	△明治棋形俗解石立集	六〇	六
	●理科世界士の研究	二五	六
巖谷小波君著 全部十巻十編宛を收む	⊙世界お伽噺 合本	一、〇〇	一二
巖谷小波君著 全部（十巻毎巻十編宛ヲ收ム）	⊙改訂袖珍日本昔噺	八〇	八
現代お伽十作家共著	⊙お伽花籠	七〇	八
巖谷小波君著	●お伽祭	一〇	四
農學博士 稻垣乙丙君著 / 青葉理學士 岡工學士共著	⊙農學校用物理學教科書	七〇	八
田中貫一君著	⊙中等物理學講義	一、五〇	一二
竹貫登代多君著	⊙花物語	一、五〇	八
	●算術獨習書 ▲上巻	四五	八
	▲下巻	三五	八
同君著	●代數學獨習書 ▲上巻	五〇	八
	▲下巻	三五	八
同君著	●幾何學獨習書 ▲上巻	三五	八
	▲下巻	五〇	八
松村定次郎君著	●平面幾何學難問解義	七五	八
文學士 小西重直君著	⊙學校教育	一、五〇	八

著者	書名	正價	郵稅
高崎正風君監修 秦政次郎君謹撰	●教育勅語奉釋	二五	六
	●現代思潮二十一家講話	三五	六
文學士 有馬祐政君著	⊙孔子言行錄	六五	八
同君著	⊙孟子言行錄	九五	八
西田敬止君著	⊙益軒樂觀	六五	八
足立栗園君著	●立志處世先哲教訓集	三〇	四
如山 千葉長作君著	⊙日本武道教範	七五	八
田村逆水君著	●人生と健鬪	三〇	六
文學士 下田次郎君著	●女子の修養	二五	四
福田琴月君著	●當世奥樣氣質	三〇	六
前田越嶺君譯	●品性論	三八	六
秦政治郎君著	●世道人心	六〇	八
森恒太郎君著	●一粒米	四五	八
長谷川天溪君著	●自然主義	五〇	六
澤田順次郎君著	●自然界に於ける兩性の秘密 一名人類性別學	六五	八
故小室屈山遺著	●文藝自然と社會	五五	八
秋吉無聲君譯	●醫學上の戀愛觀	三〇	六

著者	書名	正價 錢	郵稅 錢
森田彌吉君編	●四十一年度判檢事辯護士高等文官試驗及第者答案集	三五	六
英語世界編輯部編	●四十一年度入學試驗英語問題詳解	四〇	六
松田利七君著	●英語發音綴字學	三〇	四
前田越嶺君 前田雪子女史共著	●新式初等佛語獨修	四〇	四
宮川益次君著	⊙LIFE OF JAPAN.	四、〇〇	一二
博文館編輯局編纂	⊙明治四十二年當用日記 大中小四種 ▲大形（上製）	五〇	一二
	▲中形（特製）	五〇	一〇
	▲中形（上製）	三八	一〇
	▲小形（上製）	三〇	八
同局編纂	⊙明治四十二年懷中日記 三種 ▲新形	二〇	二
	▲上製	一八	二
	▲並製	一二	二
同局編纂	⊙明治四十二年ポケット日記	五五	四
同局編纂	⊙明治四十二年家庭日記	三八	一〇
同局編纂	●四十一年度夏期休暇女學生日誌	一二	二
同局編纂	●明治四十一年度小學生日誌 ▲尋常科第三學年用	五	二
	▲同第四學年用	五	二
	▲同第五學年用	七	二
	▲同第六學年用	七	二
	▲高等科第一學年用	七	二
	▲同第二學年用	七	二

女（後付の七）

◎肺病 肺尖加答兒 肺膜結核 肋膜新藥發見せられたり



説明書申込め無代進呈

◎失望する勿れ世の進歩は肺病にも良藥出づ女學世界第八卷拾參號七十頁に左の記事ありしを記憶するならん紐育醫學博士ラツセル氏が野菜液汁より製造の肺病靈藥は患者十一名服用根治せりと云可驚實驗談にて此靈藥新聞見は歎米醫學社會の大問題となり是非の論喧喧たりと喜ばれよ斯く肺病良藥は日に月に發見せられ又肺活散の新發明あり全治者續出す◎肺活散發明發表僅々百餘日なるに全治著効者非常に多く患者百人に對し九十人の全治著効あり且つ從來の醫藥賣藥の如く長く服藥せず全治する新藥故發熱血を吐き發汗動悸せきたん身體瘦せる如き人は至急服藥あれ本主藥は内外大醫の賞讃證明多く病院或は患者申込多數一時品切と成りしが今回輸入を得（賞牌金賞牌）の安價に廣く分藥す本藥入用者は東京神田竪大工町療養院製藥所 **村尾明治堂** へ送金せば至急送藥す又代理店は山崎帝國堂大木會社



博文館

全一冊洋裝四六判
紙數三百八十頁
正價四十錢
郵稅四錢

奥村繁次郎君著

家庭に於ける吉凶百談

この書は平素家庭に於けるあらゆる禍福吉凶の原因を詳述したるものにて、文意は何人にも分り易く、一目にして半信半疑の妄説を破り、如何なる迷信家と雖も忽ち迷信の愚なることを感じ教育學及び風俗研究の參考書ともなり、教育家は固よりいづれの家庭に論なく、必ず一讀すべき實用的要書也

女（後付の八）


顔に上々
なるは舶來石鹼
に優る大流行の
クラブ洗粉

女學世界
（毎月一回一日發行）
（明治四十二年一月十五日發行）第九巻（増刊こゝろの秘密）第貳號（明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可）



定價金貳拾錢●郵税貳錢

VOL. IX.　（東京市日本橋區本町三丁目博文館發行）　No. 2.

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㊿
明治42年1月（第9巻第1号、第9巻第2号）

2009年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3730-5　C3321